STUDIA TIBETICA No. 51

古代チベット仏教伝道文学と葬儀の変容

中央アジア出土チベット語文献研究　第３巻

今　枝　由　郎
西　田　　愛　　著
岩　尾　一　史

公益財団法人　東　洋　文　庫
2024

STUDIA TIBETICA No. 51

Literature of the Early Buddhist Propagation in Old Tibetan Manuscripts and Transformation of the Funeral Rites

Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia vol. 3

Yoshiro IMAEDA
Ai NISHIDA
Kazushi IWAO

Toyo Bunko
Tokyo 2024

序　言

本書は、古代のチベットにおける仏教の伝道初期を伝える古チベット語文書の翻訳である。現在において、チベットと仏教文化が不可分の関係であることは説明するまでもないが、しかしチベットがはじめて統一政権をもった古代のチベット（吐蕃、7 ～ 9 世紀）では、国家理念と深く結びついた土着の宗教が存在しており、仏教はあくまでも外来宗教の一つに過ぎなかった。

後にボン教へと発展するこの土着の宗教と、外来宗教である仏教との間には激しい相剋があった。それは 12 世紀以降に成立したチベット仏教史にて詳細に記述されているが、その記述は仏教的史観にて大幅に上書きされており、全てを信じるのは難しい。ところが、20 世紀初頭に敦煌で発見された古チベット語文書には、古代チベットにおける初期の仏教伝道のためのテキスト（以下、仏教伝道文学と呼ぶ）がそのまま残存していたのである。

これら仏教伝道文学は、古代チベットにおける仏教の実像を示すとともに、仏教側にとって説得すべき相手であった、チベット土着の宗教についての豊富な情報も含まれる。そこでこの仏教伝道文学はチベット学や仏教学の研究者たちにより注目されてきた。

ただし、仏教伝道文学には多数の未知の語彙や表現が頻出することがよく知られ、場合によっては文脈を辿ることさえ困難なほどである。そこで今枝由郎氏と西田愛氏はこの問題を解決するため、文学群全体を一体のものとして捉えることによってパラレルな表現や思想の存在を次々と明らかにしている。また、オンラインデータベース（Old Tibetan Documents Online）の積極的活用や近年の古チベット語俗語文書の成果が取り入れられているところも、本研究の特徴である。

なお、本書は Studia Tibetica 叢書中の Studies in Old Tibetan Texts from Central Asia シリーズの第 3 巻にあたる。本シリーズは、生前東洋文庫研究員であった武内紹人氏（1952–2021）が創始し、最初の 2 巻は同氏自身が主に刊行に関わった。第 1 巻は *Old Tibetan Texts in the Stein Collection Or.8210* (Studia Tibetica No. 45, Tokyo, The Toyo Bunko, 2012, by Kazushi Iwao, Sam van Schaik, Tsuguhito Takeuchi)、第 2 巻は *Tibetan Texts from Khara-khoto in the Stein Collection of the British Library* (Studiea Tibetica No. 48, Tokyo, The Toyo Bunko, 2016, by Tsuguhito Takeuchi, Maho Iuchi) として出版された。

シリーズエディターを務めていた武内氏は、長年古チベット語文書を実物に基づき研究しており、特に大英図書館所蔵の古チベット語文書については同図書館の司書よりも知悉しておられた。そのような事情もあり、当初本シリーズは同氏が蒐集してきた古チベット語文書のデータをカタログ化し、出版することを主たる目的としていた。武内氏は、シリーズの今後の展開として大英図書館所蔵古チベット語木簡のカタログを計画していたのだが、編集作業が未完のまま、闘病の末、2021 年春に逝去された。

武内氏の遺志を継ぐべく、古チベット語木簡のカタログデータは西田愛氏（京都大学・白眉センター）に引き継がれ、現在も編集作業が続いている。その一方で、シリーズの方向性が議論された際に、研究の目的を拡大し、カタログに限らず、古チベット語文書の註釈・翻訳なども含むことになった。そして、武内氏と生前親しく関わった今枝由郎氏（元フランス国立科学研究センター（CNRS）主任研究員）、西田愛氏、そして筆者との間で本書の企画が持ち上がり、刊行へと至ったのである。

日本における古代チベットの研究は、佐藤長（1913–2008）、山口瑞鳳（1926–2023）、上山大峻（1934–2022）の諸氏などによる長く分厚い歴史がある。本書、さらには本シリーズがその歴史に少しでも寄与できるとすれば、大変喜ばしいことである。

岩尾一史
龍谷大学文学部准教授

目　次

序言 …… i
目次 …… iii

【本論】　今枝由郎・西田愛

一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―

0. はじめに …… 3
1. 『神変比丘後世教示経』 …… 7
2. 『御高説宝樹』 …… 13
3. 『輪廻形態説示』 …… 19
4. 『三毒調伏』 …… 25
5. 『生死法物語』 …… 33
6. 『葬儀置換』 …… 61
7. 『死者神国道説示』 …… 71
8. 総括 ―作品の要点、特徴、意図― …… 77
9. 葬儀における動物利用に関する土着宗教と仏教の対立 …… 97
10. ティソン・デツェンの仏教採用の理由 …… 101
11. 後伝期ボン教文献中の『生死法物語』三部作の残影 …… 105
12. 『生死法物語』のモンゴル語訳 …… 107

二部　古代チベットの葬送儀礼とその変容

第一章　古代チベットにおける仏教葬送儀礼の導入 …… 111
第二章　『バルド・トェドル』（14 世紀） …… 117
第三章　古代土着葬送儀礼における動物利用の由来譚と成功先例譚 …… 125
結論 …… 129

むすび …… 131

資料　校訂テキスト

0. はじめに …… 135
1. 『神変比丘後世教示経』 …… 137
2. 『御高説宝樹』 …… 151
3. 『輪廻形態説示』 …… 157
4. 『三毒調伏』 …… 165
5. 『生死法物語』（部分） …… 179
6. 『葬儀置換』 …… 191
7. 『死者神国道説示』 …… 197

【附論】　岩尾一史 …… 205

略号 …… 213

参考文献 …… 215

索引 …… 235

【本論】

一部

古代チベット仏教伝道文学
―訳注と論考―

0. はじめに

7 世紀にチベット史上初の統一国家として中央ユーラシア史の舞台に登場した古代チベット帝国（吐蕃）では、インド、中国、中央アジアなど様々な地域より伝わった仏教が 8 世紀後半には国教となった[1]。9 世紀中頃の帝国の崩壊とともに、仏教は国教としての地位を失ったが、その後もチベットから消えることはなく、様々な紆余屈曲を経ながらも定着した。いくつもの宗派に分かれたが、17 世紀中頃にはゲルク派の法主であるダライ・ラマが国家元首的存在となり、仏教は再び国教となった。その後のチベットは、古代の軍事力ではなく、仏教的権威の影響力により、東アジアにおける特異な存在となった。それが終焉を迎えたのは 1959 年のいわゆるチベット動乱によってであり、中国の侵攻を前にダライ・ラマ十四世テンジン・ギャツォ（1935 年生）はインドに亡命し、現在に到っている。

7 世紀から 8 世紀にかけて軍事帝国吐蕃は中央チベットから四方にその版図を広めるに従い、各地に伝播していた仏教と接触を持つようになり、8 世紀後半には仏教が国教として採用されることになった。その後数十年の間に、当時入手可能であった数百の仏典が主としてサンスクリット語からチベット語に国家主導のもと組織的に訳出された。これは世界史的にも他に類を見ない一大翻訳事業といえるものである。

この翻訳事業と並行して、外来宗教であり、チベット人にとっては馴染みのなかった仏教の高度に体系化された難解な教義を、チベット人向けにわかりやすく説明した「伝道作品」も著作された。これらは、中世以後のチベット仏教文献中に伝承されることはなかったが、幸いに 20 世紀初頭になり敦煌の一石窟（整理番号は第 17 窟で、一般には蔵経洞として知られている）から発見されたチベット語文書中に相当数見い出された。石窟が封鎖されたのは 11 世紀初頭であることから[2]、これらの作品の成立の下限は西暦 1000 年過ぎと確定できる。これはチベット仏教史の時代区分で言えば、仏教が伝来し国教として定着したいわゆる前伝期（snga dar）の下限とほぼ一致する。当然のことながら、チベットには仏教伝来以前の土着宗教があり、それを信奉、実践していたチベット人にとって、仏教は異質なものであり、すんなり理解できるものではなかった。こうした状況の中で、初期の仏教伝道者たちは、膨大な仏典をチベット語に翻訳すると同時に、仏教の基本的な教えを説明し、土着宗教 ―なかんずく羊、馬などの殺生を伴なう葬制[3]― を批判するための著作活動にも従事した。これらは、「仏教伝道文学」[4] と呼ぶことができるものであり、チベッ

---

1 ユーラシア大陸の広大な範囲に勢力を伸ばし、様々な民族、宗教と接した古代チベットの宗教事情は極めて複雑で、仏教以外にもマニ教など様々な宗教が伝わったことが知られている。Stein 1980 参照。

2 Imaeda 2008, pp. 97–98.

3 西田・今枝・熊谷 2019, pp. 87–88.

4 Schaik 2013（p. 235, n. 13）が、「初期仏教宣教作品（early Buddhist missionizing text）」と呼んでいるものに当たる。本書で取り上げた 7 作品以外にも、Schaik が紹介する ITJ 990、ITJ 1746 など数点あるが、いずれも断片的であり、作品としての全体像が掴めないものなので、収録しなかった。この先の論考において、適宜引用することにする。

トに仏教を定着させるのに大きく貢献した。本書ではそのうちの 7 作品を取り上げることにする。

このうち『御高説宝樹』（Karmay 1983、御牧 2014）、『輪廻形態説示』（西田・今枝・熊谷 2020）、『生死法物語』（今枝 2006）、『葬儀置換』（Stein 1970、御牧 2014[5]、西田・今枝・熊谷 2019）、『死者神国道説示』（Lalou 1949、Kapstein 2008、西田・今枝・熊谷 2019）の 5 作品に関しては、すでに全訳注が発表されており、本書で初出となる全訳注は『神変比丘後世教示経』と『三毒調伏』の 2 作品である。

しかし、すでに発表されている訳注は単行本や異なる定期刊行物に掲載された論文であるため、総括的に閲覧するのに不便で、作品群の全体像が掴みにくかった。本書で論考を進めていくに際しては、全作品を考察する必要があり、さらには従来の研究には訂正・改善すべき点もいくつかあるがゆえに、従来の訳注の改めるべき点はできるだけ改め（ことに『葬儀置換』）、全点をまとめて収録した。

敦煌出土チベット語文献は、その研究に従事した誰もが認めるように、この上なく難解である。その最大の理由は、敦煌文書特有の古チベット語の語彙、用法、構文にはいまだに不明な点が多いことにある。また、本書に訳出する作品に関しては、完本で体裁が整っている『御高説宝樹』を除いては、

1）冒頭あるいは末尾が散逸して現存しない、あるいは首尾は現存するものも部分的に破損されていて、非常に断片的である。

2）複数の異本があり、それらの間の字句、綴字などにかなりの異同がある。

その結果、校訂テキストの作成すらも容易ではなく、解釈、翻訳は一層難しい。それゆえに、本書の訳には現時点では不明な点、訳出できていない箇所も少なからずある。訳出されていても決して満足のいくものではなく、誤訳すらも免れていない箇所がありうることは著者自身十二分に認識している。それでもなお、現段階で全 7 点の訳注を公表するのは、これら作品群の全体像を掴むためである。本書は、こうした仏教伝道作品そのものの文献学的、文学的研究ではない。本書の主目的は、こうした作品群を介して、チベット宗教史という大きな枠の中で葬送儀礼の通時的変容に関する作業仮説を立てることである。そのためにはこうした作品群の理解は現時点でのそれで十分であり、不明な点が致命的障害とはならないと考えている。本書が意図していることは、何よりも全体像の素描、すなわち 1 つの鳥瞰的視野、視点を持つことである。本書は完成研究の発表という性格のものではなく、現在進行中の研究プロジェクトの 1 つの段階をなすもので、作業仮説的な側面が強い。作業仮説は、今後のさらなる検証を経て、確定、修正、あるいは否定されていくものである。あえて現時点でそれを立てることは、現状を明確にし、それを基盤として、さらに研究を進めていくために、有益で不可欠な作業であると認識する。

---

[5] 全訳ではなく、IV 節の訳注のみ。

「一部」では、まずは7作品を通読して、その全体像を把握することを主眼とした。それゆえに、現時点ではあまり明確になっていない古代チベットの葬制の事柄、用語などに関しては、最小限の説明を注記するに留めた。

原文には、例外を除いて段落分け、小見出しはない。しかし作品の構成を明らかにするために、適宜設け、［　］内に記した。同様に、訳文の理解を助けるために［　］内に文言を補った。

原文のチベット語、訳文中の用語の同定・置き換えは、（　）内に示した。ただし訳文中にチベット語原文を記す場合には、綴りは原文のままではなく、可能な限り古典綴りに改めた。

また、原文との対照の便を考慮して、訳文の小段落ごとに原文テキストまたは校訂テキストの行番号を〔　〕内に示した。

1. 『神変比丘後世教示経』[6]

『神変（'phrul）[7] 比丘[8] の御言葉　後世の人々に教示された経[9]』〔1–2 行〕

[I] 無常（mi rtag pa）説示

人身といえども無常で、ある時には存在し、ある時には存在しない。神の法（lha'i chos）[10] と御教えによれば、人身を得るのは大変に難しく、国の中央に生まれることは稀である。

---

[6] 唯一の完本である PT 992 を底本としつつ、適宜他の写本も参照した。詳しくは、資料を参照されたい。

[7] 'phrul（1 行）：古代チベットの王権論および宗教では、魔力の総体、なかんづく天と地の間を行き来する能力を指していた（今枝 2022a, pp. 9–16）。サンスクリット語からの翻訳仏典では rdzu 'phrul あるいは cho 'phrul といった複合語の形で、サンスクリット語 ṛddhi（*Mvp* 966–970 etc.）、vikurvṇa（*Mvp* 767 etc.）あるいは prātihārya（*Mvp* 72, 231–234 etc.）を訳すのに用いられ、人間の能力を超えた神変力、神通力を意味している。

[8] byig bshu（1 行）：サンスクリット語 bhikṣu のチベット文字による音写である。ただし例外的に、PT 640 のみは dge slong と意訳する。これは、仏教伝来初期のチベットにおいて、bhikṣu が外来語として音写されていたことの証であるが、同時に、意訳の dge slong もまた、チベット語として早くから定着していたことが知られる。漢訳仏典では、乞士（こつし）という意訳の使用が極めて例外的で、比丘という bhikṣu の音写が定着したことと対照的である。この理由としては、チベットでは翻訳事業初期から、*Mvp* などによって訳語が制定されたことが大きいであろう。

[9] mdo（2 行）：チベット語原来の意味としては「要点」であるが、サンスクリット語 sūtra（経）の訳として定着した。1–2 行は他の写本では、以下のように記されている。

PT 37: 'phrul gyi byig bshus // phyi ma myi la bstan pa' mdo //「神変比丘が後世の人に説いた経」

PT 107: 'phrul gyi byIg bshus // phyi ma 'I myi la bstan pa 'I mdo //「神変比丘が後世の人に説いた経」

PT 640: 'phrul gyI dge slong gis bshad pa' // cI la yang mkhas zhIng snang [bas] / [---]dag pa'I phyI ma rnams [la] stsal pa'I mdo //「神変比丘による説示。全てに通暁し、…［されたお方が］後世の人々に説かれた経」

PT 1284: 'phrul gI byIg shus myI phyI ma la bs[t]an ba'I md[o] //「神変比丘が後世の人に説いた経」

[10] lha'i chos（6 行）:「神の法」は、敦煌文書では一般的に仏教を指している。しかし一方では、「［土着の］神々の法」の意味で用いられている場合もあるので、注意する必要がある。ちなみにチェ（chos）という言葉の用法の歴史的変遷に関しては、Kvaerne and Martin 2023（pp. 4–5）が以下のような興味深い示唆に富んだ意見を述べている：「仏教に対立する概念を指すのに最初に選ばれた言葉は、一般にはボン（bon）と予想されがちだが、そうではなく、儀礼、法律などを指す古くからの言葉であるチェ（chos）であった。しかしながら、チェは早くから ‘善い（legs pa）チェ’、‘正しい（yang dag pa）チェ’、‘偉大な（chen po）チェ’ として仏教教義を指す言葉として用いられるようになった。言い換えれば、チェは早くから仏教を指す言葉として理解された」（“The name initially chosen for this conceptualized adversary of Buddhism was not, as one might have thought, *bön*, but *ch'ö*, ‘customs’, an ancient term which was used to refer to rituals, laws, and so on. However, the term *ch'ö* was soon appropriated by the Buddhists, who referred to their own doctrine as the ‘good’ (*legs pa*), ‘correct’ (*yang dag pa*), or ‘great’ (*chen po*). In other words, *ch'ö* was soon understood to refer to Buddhism”）。

本書で扱う文書でも、ほとんどの場合チェ（chos）は仏教の意味で用いられており、時としては「白い法（dkar po'i chos）」（『三毒調伏』本書 26 頁）や「世間を超えた（＝出世間）法（'jig rten las 'das pa'i chos）」（本書 101 頁、注 301 参照）と形容されている場合もある。これに対して、土着の儀礼などは「誤った法（log pa'i chos）」（『生死法物語』本書 58 頁）として言及されている。また PT 1194 では、仏教は「新しい法（chos gsar ma）」（ll. 19, 67）とされ、「古い流儀（rnying gi lugs）」（l. 19）、「古いツク（rnying gi gtsug）」（l. 67）と対比されていると思われる。

人身を得た時に、神（lha）[11] を信じて［その］法を実践すれば、善い神［国］道（lha lam bzang po）[12] を速やかに得る。〔4–11 行〕

誤った悪い考え（log pa'i ngan shes）を捨てなければ、三罪道（sdig lam gsum＝三悪趣）から逃れることはない。南閻浮州の大罪国（sdig yul che ba）であるこの地域では、生［者］から死［者］へ流転する（gson gshin 'khor ba）のに長くはかからず、力や富、名誉は何の役に立とう（phan）[13] か。［それらは］苦悩…など[14] 寿命や身体にとっての敵、ドン（gdon）魔[15] や、悪なる寿命や身体に対する執着から犯す幾多の悪罪を追い払ってはくれない。一生、力と富を最上のものとみなして、よい神の教え（lha chos bzang po）はひとつも実践せず、気付かないうちにデュ（bdud）魔に連れさられる。〔12–24 行〕

昔の賢く偉大な人々で、長寿で今なお［生きている人は］一人もいない。誰もが死に、［今では］土塊となっている。人間が生きている時間は長くは続かず、一瞬ほどもない。〔25–29 行〕

恥［ずべきこと］と実のない誓いを口にし、いつまでたっても[16] 善い行いをしない。［しかし］寿命（tshe srog）は短く、稲妻のようにすばやく、［誰もが］生者と別れて墓に運ばれる。罪を犯せば、［その結果として］道連れとなるのは、デ（'dre）魔とスィン（srin）魔という必定の悪友であり、幸せ（skyid）は味わえない。善業と罪業（dge sdig）［の区別］を知らなければ苦悩する。朝な夕なに金持ちになることを望み、ゆとりがあるのに、足ることを知らない。〔30–37 行〕

死は全ての人に訪れる。［あなたたちは］死後について何も知らない。［生前］蓄えたすべてを手放し、［死］後には［自分が生前］どんな身体だったのかさえ覚えていない。〔38–41 行〕

---

[11] チベット土着の文脈では、この言葉は天上界に住む尊格一般を指すものである。しかし仏教導入当初は、「仏」を指すのにも、この言葉が用いられた。どちらの意味で用いられているのかは、「神の法」と同じく文脈によって決定される。

[12] 本書で紹介する最後の作品『死者神国道説示』のテーマである。

[13] phan（17 行）：仏教の文脈では、サンスクリット語 hita（*Mvp* 821, 2870, etc）にあてられ、「利、利益」を意味する。しかし古代土着葬儀の文脈においては、葬儀の成功を意味する極めて重要な動詞である。

[14] bsogs（18 行）：la sogs の意と解した。

[15] gdon（19 行）：先行研究では、「悪魔、鬼神、魑魅魍魎（ちみもうりょう）」などと訳すことが多いが、続くデュ（bdud）、デ（'dre）、スィン（srin）、ル（klu）、メン（sman）、ゲク（bgegs）などはすべて、チベット土着の鬼神のカテゴリーで、各々がその居住する空間、具えている能力、人間に対する影響力などを異にし、各自固有のアイデンティティを持っている。それゆえに、例えばル（klu）をインドのナーガ（nāga）、中国の「龍」に置き換えてしまうのは、チベット土着のルの独自性を消滅させてしまうことになる。それゆえに本書では、こうした尊格のチベット土着性を残し、各々を区別するために、すべてカタカナ表記し、その後に「魔」を付けた。チベット土着の鬼神全般に関しては、Nebesky-Wojkowitz 1956 に詳しい。ただし、改めて言うまでもないが、サンスクリット語からの翻訳仏典の場合はまったく事情が異なり、チベット語の klu はインド世界の nāga に該当している。

[16] mtha' ma yun du（31 行）：文字通りには「最後まで永遠に」。

［死後には生前に行った］善［業］のみが道連れとなる。［生きている間の］よい顔容は、［死ねば］ル（klu）魔とメン（sman）魔［のように］醜く、最後には干上がってなくなる。よい衣食、…[17]、緞子も何ひとつふさわしくなく、塵となる。死者によい衣装を着せても[18]役には立たない（myi phan）。よい食事を墓（dur）に入れ、1000 年分の食料があろうとも、［死者に］食べる力はなく、［供えた食事はそこに］永遠に残る。［死者を］愛する善良な［人々が］墓を築こうとも、［墓は］暴かれ、［死者は］乾いて、喜びを感じない（？）。愛する家族が枕もとで泣きながら、［死者の名を］一万回、一千回呼ぼうとも［死者には］聞こえない[19]。〔42–54 行〕

生者と死者は、それぞれ 2 つの道（lam＝境遇）に分かれる[20]。〔55 行〕

死は苦しいものであると誰もが語る。［死］後に求め［ても、］家族や道連れ、よい家は存在しない[21]。100 年の寿命も旅人の一昼夜［ほどの短さで］、シンジェ（gshin rje）[22] の使いがやって来れば、［死者は］一人一人別々に連れ去られる。東［も］西も、死ねば[23] わからない。肉を得［るために殺生をし］たことも全て見逃されず、気付かないうちにデュ魔にさらわれる。〔56–63 行〕

善［業］のみが［死後の］道連れとなる。生きている間には力と富を競［うが］、死んだ後には［行いの］善悪が競われる。［身分の］高低にかかわらず、罪［を犯した者の赴く］国は 1 つである。神国（lha yul）の入り口では［生前の富や力、身分の高低の］大小は同じである（＝意味がなくなる）。多くの善業をなせば、恵まれた境遇（dpal）に生まれ、多くの悪業をなせば、不遇になる。この 2 つがどういうことか仔細に理解せよ。〔64–71 行〕

死ねば完全に解放されるということではない。デュ魔に襲われ、病にかかり、今まさに怯え、身体と生命がどこへ隠されるのかわからない。［しかし、死ねばシンジェに］呼び出されて［シンジェのもとへ］直行する。シンジェの前でいかに懺悔し［ようとも、シンジェが死者の事績の］一覧を見れば、善業を行っていない［とわかる］。スィン魔に囚われ、釜で茹でられる。［死後の］罪［人の］国であちこち連れまわされ、禍の時期（キンタン、

---

17 za bog（45 行）：意味未詳。

18 bgor（47 行）：意味はわからないが、ここでは文脈上「（衣装を）置く（＝着せる）」と解した。

19 khri 'bod stong 'bod rnas myi thos（54 行）：『御高説宝樹』の 95 行と同一である。

20 gson gshin lam gnyis so sor gyes（55 行）：生者は今まで通りこの世に残り、死者は死後の旅路に向かうことを意味する。

21 58 行と 59 行の間に、他の写本には 2 行が挿入されているが、ここには訳出しなかった。

22 gshin rje（60 行）：仏教的文脈ではサンスクリット語 yama（閻魔、死者を裁く尊格）の訳語として用いられる。しかしこの文脈では、必ずしもそう断定できず、死に関与する土着の尊格である可能性も排除できないので、「シンジェ」とカタカナ表記した。Kvaerne らも同様の見解を示している (Kvaerne and Martin 2023, p. 271, n. 934: “we believe the reference here is to a class of demoniac beings, not to a figure similar to the Buddhist gShin-rje, Skt. Yama, the judge of the dead”)

23 'drul（61 行）：「腐る」という意味だが、ここでは死んで体が腐ることを指すと解する。

skyin dang)[24] が訪れても、罪は浄化されない。臨終には、力も家族もない。何度生まれてこようとも、一度も解放されない。生きている間に善業を行わなければ、死んだ後に剃髪してもふさわしくない。これらがどういうことか仔細に理解せよ。〔72–85 行〕

［II］善悪（legs nyes）を知らず、殺生（srog gcod）、肉［食］、飲酒をする有り様の説示

自身の妻は大切にせず、他人の妻は大切にする（？）。正しい教えを理解せず、中傷、誹謗を最上のものとみなす。肉や酒がなくなれば（？）、自分の偉大さ［をかせに］言い争い、理不尽な戯言を大声で叫ぶ。いかなる神の中にあろうとも、懺悔しない。安らかでいる時（bde ba'i tshe）には神を思わず、病になれば神を拝む。罪深い者には神は必要ではない（／神は味方をしない）。神の法（lha chos）を目にすれば誤ったものと捉え、肉と酒を目にすれば命をかける。神の法を目にしても聞く耳を持たず、無意味なまやかしを断ち切らない。［街を］ぶらついて邪淫をすること［については］疲れを知らない。［そのような者は］人の数には入らず、家畜と同じである[25]。三罪道（＝三悪趣）からは逃れられない。〔88–104 行〕

黒い羊を皆殺しにして釜で茹で、…[26]。［羊の］皮を剥ぎ、肉を捌いて各々が食べるのは、飢えた狼やデ魔と同じである。神の法を実践せず、狂って［悪業に］駆り立てられている。［そのような者は］人の数には入らず、デ魔と同じである。［そのような者は］罪［人の］国であちこち連れまわされる。〔105–112 行〕

身体を持ったすべての有情は、生きたがっている。殺される痛みは、誰しも好まない。見捨てられる命に大小［の差］はない。自分が他人に殺され、肉を［食べられるのを］好むか好まないか。それを考えて、神の法（lha chos）を実践せよ。〔113–119 行〕

酒を飲んで寝るのは毒［を飲むの］と同じである。何ひとつ覚えておらず、狂人の如くであり、ふらふらした足取りで、話すことは真ではない。…[27]。

朝に目覚めても気分はすぐれず、仕事の責任に苦悩し、食事の浪費が嵩み（？）、功徳はなく、いつまでも罪は尽きない。最後にどんなよいことがあろうか、仔細に理解せよ。〔120–129 行〕

---

[24] Macdonald, *ET*, pp. 357–366（今枝 2022a, pp. 40–47）; 石川 2007 参照。

[25] 103 行は、PT 126、PT 640、PT 1284 では、異なっており、「人には人の法が、［家畜には］家畜」といった意味になるが、文脈に沿わない。

[26] 106–107 行：意味未詳。

[27] 123–124 行：意味未詳。

[III] 悪態説示

肉を喰らい酒を飲み、喧嘩をし、昼も夜も悪事をはたらいていることに自分では気が付かない。頬髯を生やす［ための手入れは怠らないのに、］教えは実践しない。［その］美しい顔も［やがては］皺となり、…[28]、目を塞ぎ、聞く耳を持たず、よいことを理解しない。〔131–136 行〕

［年老いれば］頭はぬかるみ（？）、手は震え、［どこへも］行けず、頭は禿げて、話しても［人には］通じない。肉は痩け、皮膚や歯茎は乾くようになり、立ち上がって［も］座っている［のと同じ程に］腰が曲がっている。子供は、内心では［年寄りを］醜いと思っているが、老人になることは避けられない。自身の生死を他人が経験することはできない（＝他人に代わってはもらえない）。［この世に］存在する年数が尽きれば、［やがては］いなくなる。今、悪事を働いたことに自身では気がつかず、善い行いも足りない。善い行いを放棄することなく、一層学べ。〔137–147 行〕

[IV] 孝行（sri zhu）[29] 経説示

父母を見れば怒り、女性を見れば喜ぶ。父母は探しても［自分の父母の］他には見つからないが、女性は探せば容易に見つかる。母親が子を育てるのは大変難しい。最初は、身篭っているために気分が悪く、生まれてくるまでは苦しい。臨月になって［子と］分かれ［る様子は］、羊を殺した傷口［から流れ出す血の］水路[30] のように左右（＝あたり）一面に血が溢れて、痛みに耐えられず死に到る。母親自身は濡れて冷えた寝床で眠り、愛しい子は乾いた暖かい寝床で眠る。母親の気持ちはいつも子を思い、一時も忘れることができず、苦しい。生きている間に妻の言葉を聞［こうとも］、死ねばこのようになる。このように［親不孝な］子［が行く］罪［人］の国へ向かい、永遠に解放されることはない。そのことを考慮して、孝行をせよ。〔149–168 行〕

[V] 善悪（legs nyes）経説示

善業を知らずに［生きものを］殺すことを好み、すべてに悪事をなす［者］はデ魔と同じであり、慈悲によって一切を養う者は神と同じである。邪淫や罪過をなす者は皆、悪業を多く行い、不遇になる。神を汚し、デ魔と同じである。邪淫をせず、清らかで高貴な者

---

[28] 135–136 行：意味未詳。

[29] この言葉は、一般的には尊敬、敬愛を指すが、敦煌文書中の『書経』のチベット語訳（PT 986）などでは「孝」に当てられている（Stein 2010, pp. 21, 64–67, 127）ことから、こう訳した。『生死法物語』（64 行）にも用いられている。

[30] 'ol（157 行）：'ol ka と解する。

は、友としてはいつも神を友とする（＝仏の教えに従う）。盗みをする者は誰でも獣[31]である。盗もうと思わなければ、心は安らかになり、口論をしようと思わなければ、誰からも褒められる。怒り（khro gtum）[32]や瞋恚（zhe sdang）[33]は悪意の巣である。…[34]慈悲［に満ちた（？）］この教えに常に耳を傾けよ。誰であろうとも、この教えを守って実践すれば、神［国］道（lha lam）を得て、幸せ（skyid）である。〔170–185 行〕

『神変比丘説示』完。〔186 行〕

---

[31] gcan（178 行）：gcan zan と解する。

[32] 『三毒調伏』（211 行）にも現れる。続く瞋恚（zhe sdang）の同義語。

[33] 貪瞋痴（とんじんち）、すなわち「貪（欲）」・「瞋（怒り）」・「癡（愚かさ）」の三毒の 1 つで、『三毒調伏』のテーマである。

[34] 182 行およびそれに続いて PT 126 に挿入されている 3 行は意味未詳。

2. 『御高説宝樹』[35]

[I. 人生の儚さ]

あたかも夏の美しい宝樹の枝、果実、花や葉も[36]、寒風、旱魃、時ならぬ風が生じると、一瞬にしてなくなってしまうように、この生は無常で、［人は］速やかに逝ってしまわねばならない。何をもってしても［死を］退けることはできず、［人の命とは］幻の本質である。死主（'chi bdag）[37] の大軍と背中合わせとなっているようなのに、衆生は老いも若きも未だそれに気づかず、［今のままで］生き続けられることを願っている[38]。〔1–9 行〕

無始以来、努力することなく[39]、輪廻の耐え難い溪谷を彷徨っているようなもので、そのすべては苦しみと病い…[40]。未だそれに気づかないのは愚者の本質である。〔10–14 行〕

棒で打たれても努力する心がないならば、畜生動物の子供と何ら変わらない。何も考えずに臥して眠るなら、今世の福徳は戸口から消え去り、前世にどれだけ福徳を積んでいてもほとんど尽きてしまう。自分で自分を鼓舞しなければ、誰が鼓舞してくれるのか。〔15–21 行〕

[II. 善業・悪業と善趣・悪趣]

善業はおおむね、よい畑に撒く種のようなもので、春には何も見えないが、秋には穀物が実る。

悪業はおおむね、刃物のようにすぐに身体を切ることはないが、どこに行こうとも残っている（＝その報いがついてくる）。

それゆえに、［仏］法（chos）を実践する機会のある時に、最高に有意義な甘露の行い

---

35 訳文は、現在までに知られている唯一の写本 PT 972 に基づいている。

36 御牧は、「枝や葉や果実や花や花弁」と訳す。すなわち、lo 'bras を lo ma（葉）と 'bras bu（果実）に分けて解するが、lo 'bras は「年の実り」という熟語で、果実と穀物の双方をを指す（御牧 2014, p.109, n. 1）。ことに「果実」に限定する場合には、「木の実り」の意味で shing 'bras が用いられる。この行では、文脈上果実であるが、25 行では穀物を指している。また御牧は、続く 'dab を「花弁」と解して、「花と花弁」を区別するが、'dab（ma）は一般には「葉」である上、文脈上もこう解した方がふさわしいであろう。

37 『神変比丘後世教示経』のシンジェ（gshin rje）（本書 注 22）と同一か類似した死に関与する土着の尊格であろう。

38 写本には明らかに rung du re と書かれている。Karmay 1993 はこのままで、Karmay 1998 では rung を 'dug と訂正して、いずれの場合も「生き続けられることを願っている」と解釈している。御牧 2014（p. 109, n. 3）は、これを受けた上で、原文通り rung としたままで、「［このままで］大丈夫と希望している」と訳している。こうした先行研究を踏まえて、さらには『生死法物語』の類似した状況には、de bzhin rtag du 'dug du re（8 行）、de bzhin rtag du re（22 行）、sngun/sngon bzhin yod du re（35 行）といった表現がみられることから、こう訳した。

39 'bad thag chad pa na（10 行）：意味不詳であるが、文脈から暫定的にこう解釈した。

40 13 行：意味未詳。

をなせ。心して善業を行え。〔22–31 行〕

天や人の善趣、あるいは餓鬼、畜生、地獄の三［悪趣］、［それらのどこに生まれるかは］自分次第なのだから、どうして自分に害をなすのか（＝悪趣に生まれるような行いをするのか）。どちらが毒でどちらが甘露かは、一目瞭然ではないか。愚者は安易に考え、デュ魔の投げ縄（zhags＝羂索（けんさく））[41] によって捕らえられ、三悪趣に連れられる。それから後悔しても、役には立たない。〔32–41 行〕

［III. 死期の孤独（1）］

いかに権力が大きく、親族が多くても、死ぬ時には大小もなく、勇猛も臆病もない。多くの友人や親族がベッドに臥す自分を取り囲んでいたとしても、死の耐え難い苦しみは、自分一人で味わうことになる。それゆえに、親族や友人が何の役に立とうか。〔42–49 行〕

［IV. 実践の重要性］

賢者でありながら正法を実践しなければ、彼は言行不一致な猿[42] であって、無意味である。学者でありながら戒律を守らなければ、彼は金鉱を掘れども手にするものは何もない。〔50–53 行〕

金持ちでありながら施しをしないなら、彼は他人の宝の管理人である。過度に蓄えようとするな。過度に蓄えようとすれば、蓄えたものは他人の財産になる。蜜蜂が努力して蜜を蓄えても、蜜は他人が享受するようなものである。〔54–60 行〕

どこに生まれようとも、節度を弁えた人は[43]、自ら努力をすることを放棄すべきではない。努力せずに、胡麻粒から胡麻油が採れることはない。例えば、蕎麦や豆の種子から、その実りとして大麦がどうして生まれようか[44]。行いが善ければ誉が大きく、行いが悪ければ不遇になる。〔61–68 行〕

---

[41] 96 行、および『輪廻形態説示』（124 行）にも現れる。

[42] Karmay は、“a canny monkey, without sense”（利口だが分別のない猿）と訳し、御牧は「卑屈で意味のない猿」と訳す（Karmay 1998, p. 162; 御牧 2014, p. 113）。チベット語 gcam (bu) は、話などが事実に即しておらず、偽りであることを指す形容詞で、この場合、具体的には、賢者であれば、正法が優れているのがわかっているはずなのに、それを実践しないというという言行不一致、あるいは正法が優れていると口では言いつつも、実際にはそうは思っておらず、それがゆえに実践しないという言行不一致かのどちらかについて言及しているのであろう。

[43] za shes（61 行）：chog shes と解する。

[44] 次の『輪廻形態説示』（121-122 行）にも同じ比喩がある。御牧が指摘するように、この譬喩は内容とうまく噛み合っていない（御牧 2014, p. 115, n. 9）。種子があっても、それだけでは足りず、努力しなければ実りは得られない、ということが意図されているのであろう。

[V. ボン・邪見批判と仏教奨励]

愚か者は外道のボン（mu stegs bon）[45] を信じ、諸事において［占いの］兆し（mtshan ma）[46] を検証する。それは例えば、虫が羊毛の糸の中に入り込み、6 本の足を動かして、ますます絡まるようなものである。占いのボン（mo bon）を敬うな。デ魔やスィン魔を祀るな。デュ魔とゲク（bgegs）魔[47] に救いを求めるな。〔69–77 行〕

苦しみに対する救いとしては神の法（lha chos＝仏教）がよく、生死に対する守護［者］としては仏（sangs rgyas）が偉大である。聖者たちの集い（＝僧伽）は有益なことを教えてくれるもの（phan ston）である。

おお、良家の子息たちよ、よく考えよ。最高の甘露たる薬が給されたなら、邪見の毒は飲むな。〔78–83 行〕

[VI. 死の予見不能性と死後の苦しみ]

一人の人間として生まれたのは、［前世］に行った善業（bzang byas）、悪業（ngan byas）の結果である。

［今世での］蓄えは、多くとも少なくとも、この世に残り［、死後には役立たない］。

若者は自分がいつまでも［若くいられると］思うだろうが、若者がいつまでも若くいられるはずなどない。処刑場に連れていかれる囚人のように、人は一歩一歩死に近づきつつ

---

45 bon という用語は非常に重要なので、ここで Kvearne and Martin による的確な用法・意味の 4 区分を紹介する（Kvaerne and Martin 2023, pp. 5–6）。

1）チベット帝国時代（7 世紀から 9 世紀）およびその直後に、チベット高原において行われていた、必ずしも規範化され、首尾一貫性のある宗教「体系」を構築しているとはいえない非仏教的宗教信仰および実践。

2）10 世紀から 11 世紀における地域レベルでの宗教信仰および実践。

3）上記 1）、2）からの諸要素を取り入れながらも、仏教から宇宙論、瞑想技術、哲学概念を借用し、おそらく中央チベットで 11 世紀から 12 世紀にかけて融合生成され、僧院制度も整え、自らを「ユンドゥン・ボン（G.yung drung Bon）」と称するようになった宗教。

4）現在でもヒマラヤ山脈の辺境地域で行われている「ボン」と称される宗教信仰および実践。

Karmay は、『御高説宝珠』での bon を根拠に、“a set of beliefs designated as Bon and described as *mu stegs*”, “the Bon religion that existed during the royal period” と述べ、帝国時代（7–9 世紀）に既にボン教（Bon）として存在していたと主張しているが、無理であろう（Karmay 1998, p. 160–161）。ここでの bon は、仏教に対する宗教体系としてのボン教（Bon）を指しているのではなく、個々の「外道的な信仰、実践」を意味しており、上述の Kvaerne らの分類の 1）に該当する。それゆえに、「外道の宗教であるボン」という御牧の訳も適切とは言えない（御牧 2014, p. 115）。

46 御牧は、三解脱門（空、無相、無願）の無相の反対の相と解するが、本書ではこの案を採らず、続く 75 行の mo bon「占いのボン」を考慮に入れてこう解釈した（御牧 2014, p. 115, n. 10）。*Mvp* 4388 でも、mtshan ma は ltas と並んで用いられ、サンスクリット語 nimitta の訳語であり、漢訳では「兆相」という言葉があてられている（Blezer 2008, p. 426, n. 9; Schaik 2013, p. 228, n. 3）。

47 bgags（77 行）：Karmay（1998, p. 167）に従って、bgegs と訂正する。

ある。［自分が］明日にも死ぬかどうかは誰にも分からない。漫然としていることは理にかなわず、まさに今日［という日に死ぬかもしれない］と考えるべきである[48]。［自分が］明日死ぬのか、明後日死ぬのかは誰にも分からない。［死んでしまえば、後に残った者が死者の名前を］一万回、一千回呼ぼうとも［死者には］聞こえない[49]。デュ魔の投げ縄によって捕らえられたら[50]、どうして容赦されることがあるだろうか。ゲク魔[51]は至るところに入り込み、ドン魔は何に対しても悪戯をなす。〔84–99 行〕

［VII. 死期の孤独（2）］

生涯をかけて蓄えた財、食糧、子供、妻、家畜[52]や土地を捨て、［死後の旅路は］自分［一人で］行かなければならない。物事をありのままに如実に理解すれば[53]、［次のようである。］生きるためにどれだけ財産を蓄えたところで、死期にはひとつとして現れない。生きるためにどれだけ食糧を蓄えたところで、死期には空腹で行かねばならない。生きるためにどれだけ衣類を蓄えたところで、死期には裸で行かねばならない。多くの親族や友人に取り囲まれていても[54]、死期には一人として現れない。所有する家屋は、目の前で持ち去られてしまう。〔100–112 行〕

---

[48] bde bar 'dug par myi rigs ste // dI ring kho na bdud de bya（92–93 行）：次の『輪廻形態説示』の dI ring kho nar (⇒ na) myI 'chI zhes // bde bar 'dug pa'I myi rigs par //（69–70 行）と類似している。93 行後半の bdud de bya は意味未詳だが、ここでは『輪廻形態説示』の文に即して解した。

[49] 95 行は、『神変比丘未来説示経』の 54 行と同一である。

[50] この表現は、39 行に既出。

[51] bgrags（98 行）：77 行と同じく、bgegs と訂正する。

[52] bu dang chung ma 'khor yul rnams（101 行）：Karmay は “sons, wives, servants and property” と訳し、御牧は「富と食べ物と子供と妻と召使いと領地」と訳す（Karmay 1998, p. 167; 御牧 2014, p. 119）。'khor は確かに「召使い（servant）」の意味もあるが、ここではむしろ「家畜」の方がふさわしいであろう。

[53] rtogs pa'I chos la srid yod na'（103 行）：Karmay は “if the religion (of the gods), which has an intended object”（1983 年のフランス語版では、“S'il y a une fin dans la compréhension de la religion (?)”）と訳しているが、御牧は、この行は難解として「覚った法に存在［意義］があるとすれば」と訳し、「正しいかどうか不明」と注記している（Karmay 1998, p. 167; 御牧 2014, p. 119, n. 18）。

[54] 110 行は 46 行と同一。

［VIII. 十善・十不善］

聡明な者も、勇敢な者も、賢い者も誰であれ、十善（dge bcu）[55]［の実践］が難しかろうと放棄するな。それは天･人［の善趣］に生まれる種子である。十不善（myi dge bcu）［の実践］は易しかろうと、耐え難い三悪趣［に生まれる種子である］。それゆえに努めて十善を行え。〔113–118 行〕

『御高説宝樹』完。〔119 行〕

[55] 身口意による十の善い行い。具体的には五戒のうち不飲酒を除いた不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語を守り、貪瞋痴の三毒（続く『三毒調伏』の主題）に侵されないこと（無貪、無瞋、正見＝不邪見）。このうち不妄語が、不妄語、不悪口、不両舌、不綺語に四分されているので、合計十となる。不十善（＝十悪）は、その逆の十の悪い行為を指す。善因楽果・悪因苦果の法則により、十善は善趣、不十善は悪趣に赴く種子（＝原因）となる。十善は、一万語ほどの仏教用語を収録する *Mvp* でも個別の項目として 1685–1698 に列挙されているが、*Mvp* 中の重要語彙を説明する『二巻本訳語釈（*Sgra sbyor bam po gnyis pa*）』においても取り上げられている（第 33 節, 279）。こうしたことからも、古代チベットにおける仏教普及に際して、十善が非常に強調されたことが知られている（石川 1993, p. 102; Stein 2010 p. 128, n. 23; p. 213, n. 35）。

3. 『輪廻形態説示』[56]

『輪廻形態説示』〔1 行〕

[I. 輪廻]

無常なる輪廻のこの世に生きる無数の衆生は、すべて突如として自ら生まれ、この［世で］寿命が尽きる（zad）［と考えられているが、］そうではない[57]。［実際には、］際限のない原始の時から、心の本質[58]［というもの］があり、［人が川を渡る時に］船に乗って対岸に渡るのと同様に、身体は心［を乗せる］船であって、［心は］はるか昔からの旅人として到来するのである。〔2–11 行〕

[II. 輪廻の原因]

［人は］昔［から］留まることなく［生まれ変わり］、［悪］業や煩悩、［特に三］大毒[59]によって、輪廻の牢獄である三界[60]の苦悩の監獄など苦しい生死の境遇［に］割り当てられているのである[61]。そのように、この蒙昧な識[62]は絶えず不変であって、自ら［行う］善・悪の行為によって貴・賤、楽・苦の境遇に到る。そのような生死の諸々の［善悪の］境遇で得てきた無数の［身体の］構成要素［の量を合計すると］、肉と骨は、須弥山ほどに［高く積み重なるくらい多く］、血と膿は、海ほどに［多く］ある。〔12–24 行〕

[III. 人間に生まれることの難しさ]

けれども、人間に生まれるのは難しい。［さらに仏法のある］国の中央に生まれること

---

[56] 訳文は、唯一の完本である PT 24 を底本としている。

[57] 輪廻の概念を持たない、非仏教徒の考えを否定している。本作品のこの箇所（5–6 行）では、tshe dang dus とあって tshe（寿命）と dus（時、時間）が別個のものとも考えうる。しかし他の箇所での用法（tshe 単独：46、130 行、tshe dus という熟語：32、42、44、90 行）から鑑みて、tshe dang dus の dang は音節数調整上の必要から挿入されたものであって、tshe dang dus は意味上は tshe dus と同義と解釈し、「寿命」と訳した。

[58] sems kyI rang bzhIn（7 行）：sems は、ここでは輪廻の主体となる識（rnam shes）の意味で用いられているものと考えられる。

[59] 三毒を指す。後続作品『三毒調伏』の主題である。

[60] 欲界・色界・無色界の三世界を指す。我々が住む欲界に限らず、色界・無色界に住む神々にさえも死は訪れるので、輪廻の牢獄と述べている。

[61] kha brIms pa（16 行）：kha を khar と考えて、“on, upon, above”（Jäschke pp. 34–35）の意味を採用した。

[62] rnam shes（17 行）：ここでは、7 行目の sem kyI rang bzhIn と同義と考えられる。すなわち、蒙昧な識というのは、煩悩の滅していない心の状態を言ったものであろう。

は［なおさら］稀で、［それは］大海に彷徨っている閂（かんぬき）の穴に亀が首を入れるようなものである[63]。今生で、人間として生まれたのも前世に福徳を積んだ果報である。〔25–30 行〕

［IV. 長寿を求めることの無益さ］

そのまま［人として］長い［寿命の］境遇を求めても、寿命が［永遠に］留まることは理にかなわない。［余命は］昼夜、常に減少することはあっても、増加することはないのだから、我々［も、長寿を誇る］神［さえも］死ぬという事実は明らかである。昼に大地を見下ろしてみると、日陰に降った雨さえも［やがて］霧散してしまう［とわかる］。夜に天を見上げてみると、月や星［が満ち欠けし］移り変わる［のがわかる］。昼夜は入れ替りつつ、［すべてがやがては］霧散するのである[64]。四季は巡るもので、滞ることはない。年月、寿命は［移り変わり、］留まり［続ける］ことはない。それを考慮すれば、すべては無常である［とわかる］。〔31–43 行〕

［V. 死期について考える必要性］

人の一生も長くは続かず、僅か［な期間］である。若い時は一瞬で、すべては夏の花のように、一時は良くとも長くは続かない[65]。生の果てには死が訪れ、集まった（＝出会った）果てには別れが訪れる。100 歳を全うする者であっても夜は眠るため、100［年の］半分は眠りの支配下にある。そして、［眠りの間は］記憶はないため、死んでいるのと同じであり、［生きている期間は］残り 50［年］があるに過ぎない。さらに、［酒に］酔って日中に眠ったり、苦しみや煩悩などに苛まれ[66]、［結局は］その 50［年の］半分は尽きてしまうため、結果として［実質的な寿命は］25［年］に［しか］ならない。よく記憶に残

---

[63] この話は、難値難遇を説明する際に仏典にしばしば引用される盲亀浮木の比喩であろう。人に生まれることは難しく、仏法に出会うことはさらに難しい。その難しさを、無量劫の寿命を持つ 1 匹の盲亀（あるいは一眼の亀）が、100 年に一度、海上に頭を出した際に、大海を漂う浮木に偶然に首を差し込むほどの難しさであると例えたものである（森 1987, pp. 337–338）。

[64] 36–40 行は、形あるもので不変なものなどないことを述べる例。

[65] rI myI thogs（45 行）：rIng myI thogs の誤りと解釈し、45 行の rIng por myI thog と同様に解した。

[66] bskal（57 行）：ITJ 316 では bskald となっているので、動詞と捉えるべきであろう。実際に、敦煌出土の契約文書中には、以下のような動詞としての用例が見られる（Takeuchi 1995, pp. 151–152, 275–276）：

・phyi shi brgya' la rje blas gyis bskalde ma mchis par gyur na (PT 1297, l. 4): “Phyi shi (the employee) should *be called for* an official duty and become absent”

・mdo rtsang gis bskal par gyur na' (ITJ 857B, l. 5): “[If he] *is made to perform* the service of an envoy (mdo-rtsang)”

これらの例では、公務に「駆り出される（be called for）」、「使役される（be made to perform）」が bskal の訳語にあたるが、どちらも望まない事態に従事させられるといった意味を含むと考え、ここでは「苛まれる」と訳した。

るのはそれ（＝25 年）だけしかない。50［年］を全うしないとは誰が思おうか。100［年］を全うする人は 10 万人に 1 人もいない。今生で、人間として生まれた時に、自身は原初どこからやって来て、遂にはどこへ行ってしまうのか［を考えるべきである］。［すべては］無常であって、［自身が］なくなってしまう時が確実にやってくるならば、どうして自身の心を［他事で］紛らわせていられようか［いや、いられない］。まさに今日［という日に］死ぬことはない、と漫然としていることは理にかなっていない、と考えるのがふさわしい。〔44–71 行〕

［VI. 死期の助け］

死が訪れ、他の世界へ赴くに際して、［この世に］ともに生まれたこの身体すらも失ってしまい、助けとして役に立たないとすれば、両親、兄弟、親類や友人、故郷、財産などが助けとして役に立たないことは言うまでもない。善業のみが助けとなるのである。生まれるのも、はじめは 1 人で生まれ、死ぬのもまた、同じく 1 人で死ぬ。大きな権力や財産を持つ地位を得ても、それが死期に助けになることはない。［権力や財産は］古い衣服と同様に後に残る［だけである］。死期の助けとなるのは、善悪（legs nyes）［の行為の結果］だけである。〔72–86 行〕

［VII. 悪業をなす者たち］

どこから［来て、］どこへ行こうとも、［過去の行為の影響は］影のようについてくる。愚痴の陰りで自身が曇り、来世を見通せなかった、と［後から言い訳をするようなことにならないように］、目先の欲望［に駆られて］罪を犯すな。他人の徳と罪は自分自身には関係ない。自身の行為［の影響が結果として］現れるに過ぎない。蒙昧な有情たちは、無常の法を恒常であると［誤って捉え］、安寧ではない境遇を安寧だと捉える。不浄な身体を清浄だと［誤］解し、4 つの倒錯した間違い[67] によって惑わされて、為すべき行為の目的と［勘違いを］して罪を犯す。三界［に］生死［する］五趣［の境遇］では、自身の行なった［悪］業の毒によって［身を］滅ぼすのである。そのような教えを理解し、現世で教えを聴聞して実践する［時間がある］間に、至高の目的である甘露の業（＝善業）をなせ。善業をしっかりと監視せよ。最高の仏、神と人、畜生、餓鬼、地獄［の境遇のうちで］どこを［選ぶかは］自分次第なのだから、どうして自身に害をなす［ような悪業］を行おうか［、いや行わない］。毒と甘露のどちらを選ぶかは、見渡せば明白ではないか。愚か

[67] 4 つの倒錯した間違いとは、凡夫による 4 つの道理に背く見解、すなわち四顛倒を指すと考えられる。ここでは、無常を恒常と考える、安寧ではない心を安寧と考える、不浄を清浄と考えるという「無常」・「苦」・「不浄」に関する 3 つの顛倒が述べられており、4 番目の「無我（無我を有我と捉える）」の記述が漏れている。

者や子供［ほど］の知恵しかない者たちは、目先の欲望によって惑わされ、行為の目的として罪を犯す。［死を］自分のこととして捉えないので、彼方（＝死後）の煩悩の苦しみを実感しない。人間として生まれていながら、思考は餓鬼や畜生と似たようなものである。罪業を犯しながら善趣の境遇にどうして生まれることができようか［、いやできない］。例えば、蕎麦や豆の種子から大麦の実ができないように[68]、愚か者の心には善い［行為］に見えても［それによってよい結果は得られず］、デュ魔の投げ縄に捕らえられ、三悪趣へと連れて行かれた後で後悔しても無駄である。〔87–126 行〕

［VIII. 死期の助けとしての仏教］

どんなに権力があり親族が多くとも、死［期］の助けとしてはひとつも役に立たない。死に際しては［この世での］優劣は［関係］ない。寿命が尽きる（tshe zad）時には、英雄も怯えるのと同じである。至高の善法［たる仏教］の他には何も利益とならないのだから、身命を惜しまず、尊い善法［たる仏教］の教えの目的を達成せよ。無益な行為に励むことなく、自身に役立つことを自ら実践せよ。いかなる行為によって輪廻するのか、生死のなくなる因とは何なのか、知恵と知性によって正しく理解せよ。〔127–139 行〕

［IX. 善き師（善知識）の必要性］

全ての教えがどんなものであるか知りたければ、善き師（＝善知識）を探せ。あらゆる善を教えてくださるので、善き師は父のごときものである。全ての悪から守ってくださるので、善き師は母のごときものである。正しい道を示してくださるので、善き師は道案内（lam mkhan）のごときものである。あらゆる善を生み出してくださるので、善き師は夏のようなものである。煩悩の沼から［救い］出してくださるので、善き師は英雄のごときものである。それゆえに、善き師から尊い正法を聴け。〔140–153 行〕

［X. 正法の必要性］

煩悩から皆を癒してくださるので、正法（dam pa'i chos）は薬のごときものである。無明の暗闇を晴らしてくださるので、正法は灯火のごときものである。生死（＝輪廻）の苦しみを取り除いてくださるので、正法は甘露のごときものである。〔154–159 行〕

---

[68] 『御高説宝樹』65–66 行にも同じ喩えがある。

［XI. 仏教の教えの実践］

人として生を受け、［仏教の］教えと出会った今生で、［仏］法の道（chos lam）を成し遂げなかったならば、来世で人間として生まれることは難しい。［仏教の］教えを耳にできることは、それ（＝人間として生まれること）よりも稀である。輪廻の沼に沈むことなく、知恵という太陽によって障害を追い払え。戒律という衣で身を包み、至高の仏となるように。〔160–167 行〕

『輪廻形態説示』完〔168 行〕

4. 『三毒調伏』[69]

三毒の調伏とは［三毒の］清浄と清め［である］。〔1 行〕

[I. 序論]

天界[70]、人間界に蓮華の若い身体に生まれ、［人はそれが］永続するもの[71]と思い、貴いものだと[72]驕る。［しかし］年月が過ぎると、若い身体は美しい色鮮やかな花［と同じで］、かりそめの五つの集合体（＝五蘊）は［やがて］崩れる。〔2–9 行〕

ああ、［すべては］無常［であるのに、そうではないかの様に人を］欺くものである。虹はかりそめの存在で、在ったかと思えば無くなり、数多の雲や霧は、湧いては消える。［人は］幻想に覆われ（＝惑わされ）、真実よりも偽の［姿］に負かされる[73]。〔10–14 行〕

このツクラ（gtsug lag）[74]は誰の流儀（lugs）か。この有様（chos tshul）は何の規定（srang）か。この権威は誰の力か。心にそう疑問を抱くであろうが、識者[75]がこれを吟味してみると、次のように説かれることには間違いがない。［これは、］世間の人間たちの中には存在しない、神の中の最高神である全知の仏世尊が、偈頌（mgur）によってよくお説きになったことである。それは生死の有様であり、生死物語（skye shi'i lo rgyus）は非常に深遠である。〔15–26 行〕

天［界］の全ての神祇[76]と阿修羅（lha ma yin）と夜叉（gnod byin）とル魔（klu）と人間、すべて生きものは例外なく生死法（skye shi'i chos）を気にかけて生きているが、それ（＝死の不安）に打ち勝つ方法はある。生死の根本を完全に断ち切り[77]、永遠なる神の境遇（g.yung drung lha'i srid）を得て、法王たる仏に加護を求めて道を確固とし、一切智者の仏の住まい[78]、［すなわち］大菩提（byang chub chen po）の境地に到る。〔27–38 行〕

---

[69] 訳文は ITJ 421 を底本とし、適宜他の写本を参照した。詳しくは、資料を参照されたい。

[70] mtho ris（2 行）：*Mvp* 5369, 5371 では、サンスクリット語の svarga の訳語として、lha yul と並んで挙げられている。文字通りには「高い種」で、恵まれた境遇にある存在を意味する。

[71] gzha['] gsang（4 行）：g.yung drung と同義に解する。

[72] dag rgyu drags pa（5 行）：意味未詳だが、文脈よりこう訳した。

[73] [sdun/sdan] byang ba'（14 行）：ITJ 420 の sun byung ba を採り、sun 'byin pa の完了形と解する。

[74] gtsug lag（15 行）：古代チベットにおいては、ツェンポ（賛普）が神にして地上の支配者であることを前提とした「世界秩序」のようなものを指していた。Macdonald, *ET* に詳しく論じられている。ただし、彼女がこれを古代チベットの宗教名としたのは誤りである（今枝 2022a）。

[75] gnyen shes byI ma（19 行）：意味未詳。dge ba'i bshes gnyen（skt.：kalyāṇamitra、善知識）に類する意味かもしれない。

[76] lha bran（27 行）：lha 'dre と同義に解する。lha 'dre は、神（lha）とデ（'dre）魔とを指す場合もあるが、一般には 2 音節の熟語として、人間を超える能力を持ち、人間に悪影響を及ぼしかねない魑魅魍魎的な神祇全体を指す。

[77] gtan bcad（32 行）：gtan nas bcad と解した。

[78] dpag yas（37 行）：zhal yas と同義と解した。

愛しい親族は、寿命が［ほかに］移って（tshe phos）、身体を替える（lus rjes）[79]。生きている者（＝遺族）は誤ったことをするな。死者のために罪（sdig）を振り向ける（sngo）な。［死者に］有益であれ（phan）と願って害（gnod）を為すな。［それは］闇の上に暗闇を重ね、無力な上に重荷を背負うことになる。誤った行為［である］殺生を行うことによって（srog gcod pas）、［死んだ］親族を奈落（na rag）[80] に送り届けるな。白い法（dkar po'i chos＝仏教）によって、［死んだ］親族を（？）[81] 神国、すなわち安らかで幸せな国（lha yul bde ba'i skyid yul）[82] に遣れ。〔39–48 行〕

［II. 三毒各論（1）：愚痴］

悪趣の境遇に落ちる誤った道案内は三毒である。貪欲（とんよく）、瞋恚（しんい）［、愚痴］の三毒[83] の深い毒の根によって罪国の裂け目へ入っていく。毒の源[84] たるこの大海によって、苦しみの雨が降るのと同様である。迷い［をもたらす］夜叉の力が、無常なる生死という大波を起こし[85]、［毒に侵された者］は、愚痴、不注意、蒙昧という深い闇に沈む[86]。苦しみの理の道を実践して、悪なる輪廻があらゆる［毒に侵された］人々の境遇となる。これが毒の源であって深い蒙昧という盲目に近づき、どんどん沈んで泥沼に深く沈む。〔49–64 行〕

---

[79] tshe phos lus rjes（39 行）：『生死法物語』（本書 35 頁、注 138）、『死者神国道説示』（本書 71 頁、注 225）にも同様な表現がみられる。tshe（寿命）に続く動詞としては、zad、das（「尽きた」、「過ぎた」という意味だが、本書ではどちらも「尽きた」という訳語を当てている）の方が一般的であり、phos（移った）というのは珍しい。この動詞は輪廻という仏教的文脈で死者の臨終に際して、葬儀の導師が死者のナムシェ（rnam shes、魂、意識）を体から取り出して次の生へと移す儀式に用いられる。この動詞がこの箇所で、チベット土着の死生観の文脈で用いられているのか、あるいは仏教的文脈で用いられているのかは興味深い問題であるが、ここでは細部に立ち入らず、こう訳しておくに留めた。いずれにせよ「寿命が［ほかに］移る」も「体を替える」も共に「死ぬ」ことを意味していることは間違いない。

[80] サンスクリット語 naraka の音写。*Mvp* 2299, 4749, 4944 などでは、dmyal ba と意訳されているが、ここでは音写が用いられている。

[81] gnyen long la（47 行）：意味未詳。

[82] 一見普通の表現に見えるが、特定の国、すなわち「安らかで幸せな国（bde ba'i skyid yul）」というのは、古代チベット人の死後の世界観における死者の赴くべき国を指している。また「神国（lha yul）」も普通の意味での「神々の国」、あるいは輪廻の五（六）趣のうちの天（lha）趣ではなく、「神すなわち仏の国」を指している。続く『生死法物語』で、主人公リンチェンが亡くなった父オバル王を送り届けたいと願う「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」（本書 35 頁）や「天上の安らかなところ（mtho ris bde ba'i gnas）」（本書 59 頁）、『葬儀置換』の「永遠の安らかさと幸せの地（bde skyid g.yung drung gnas）」（本書 69 頁）、さらには最後の『死者神国道説示』に現れる「安らかさと幸せに満ちた正しい神国（bde skyid phun gsum tshogs pa'i lha yul dam pa）」（本書 74 頁）もすべて、死者が向かうべき国を指している。

[83] 根本的な心的汚れを毒に喩えたもので、貪瞋痴（とんじんち）と総称される。具体的には貪欲（skt.: rāga; tib.: 'dod chags）、瞋恚（skt.: dveṣa: tib.: zhe sdang）、愚痴（skt.: moha; tib.: gti mug; ＝無明 skt: aviduya; tib.: ma rig pa）。

[84] phyi mo（54 行）：gzhi ma と同義と解した。

[85] ITJ 420 の bdab chen btang を採る。

[86] bag la yal（59 行）：bag la nyal と同義に解する。

大毒に侵され永遠に苦しむ者は、知恵の大いなる光を［放つ］月によって愚痴、蒙昧という盲目が晴らされる。深い闇が陽が昇る[87]［と消える］ように、迷いや病などは真実たるこの最上の言葉（＝ダラニ）によって鎮まり、この対処法によって完全に[88]鎮まり、仏法によって完全に霧散し、愚痴、不注意、蒙昧が晴れる。［しかし、］完全なる善業の道から離れると、輪廻の三界の深みにおいて愚痴という盲目に近づく[89]。悪趣の大きな裂け目［で］愚痴［な者は、］愚か者の如く困惑する。〔65–78 行〕

深い闇のなんと…[90]か！病と蒙昧の…[91]はなんと大きいことか！深く大きな毒に侵された者に対してさえ、縁起の法（rten 'brel chos）の灯火は、指を一度弾く程の間に[92]、深い闇を根本から消し去り、愚痴、蒙昧を完全に晴らす[93]。神変（'phrul）の知恵[94]の天鉄（＝隕石）は[95]、愚痴という大きな果実を根本から断ち切る。〔79–86, 107 行〕

［三毒は］対処法によって完全に破壊され、［仏］法によって[96]［その］名前すらなくなる。［仏法は］方便に巧みで、知恵の光は眩しく、デュ魔などの障碍（しょうげ）の闇を晴らす。聖なる真実の言葉は、愚痴の流れを断ち切り、障碍の闇を永遠に晴らす。一切智者たる究竟の仏の無限の知恵の大光は、愚痴、蒙昧な暗闇を晴らす。〔108–118 行〕

［仏法は］寿命が［ほかに］移って、死者道（gshin gyi lam srol）に旅立った者を、光り輝く法の道（chos gi lam）に導き、正しい解脱の境地（yang dag thar pa'i gnas）へと送り届ける。善逝［の］法の加持と、信仰と所縁の強力な力と、多くの善法は、一瞬にして［愚痴の］根を抜きとる。愚痴、蒙昧の深い［根］を立ち切り、余すところなく永遠に完全に捕える。知恵の真実の力は、愚痴、蒙昧を制圧する。〔119–129 行〕

---

87 gnyi bzhin（68 行）：ITJ 720 の gnyi shar bzhin を採り、gnyi は、nyi ma と解する。

88 zha zha（71 行）：末尾の動詞 zhi に合わせたオノマトペ（擬音語）であり、次の 72 行の thim thim も末尾の動詞 thim と対応している。こうしたオノマトペ（他には、chem chem、khrum khrum、lam lam、ljib ljib、yal yal、mug mug などがある）の用法はこの作品に特徴的であるが、オノマトペと動詞との対応関係は不明で、理解できないことが多い。

89 mdoms su（76 行）：ITJ 420 の mdongs su nye を採る。63 行に類似表現あり。

90 ya re nga（79 行）：意味未詳。

91 tshabs（80 行）：意味未詳（ITJ 420 では tshams ced ste）。

92 rtabs pas nI（83 行）：ITJ 420 の gthogs tsam la を採る。

93 gdan nIs（85 行）：gtan nas と解する（ITJ 420 では gtad nas）。153 行の同様な表現を参考に、文脈上こう訳した。

94 'phrul gyI ye shes という表現は珍しく、『神変比丘後世教示経』の神変比丘（'phrul gyI byig shu）の場合と同じく、人間の能力を超えた神変力、神通力を伴った知恵という意味で用いられているのであろう。

95 ITJ 421 の 86 行には 5 音節しかなく、書写に欠落があるので、7 音節で完結している ITJ 420 を採る。さらに、ITJ 421 のこの箇所には書写の順序に誤りがあり、86 行と 87 行は文脈からして連続していないため、87–106 行と 107–141 行の前後を逆転した。それゆえに、テキストとしては、86 行は 107 行に繋がる。

96 chos gyI（109 行）：72 行を参考に、chos gyIs と解する。

知恵流星[97]の加持：〔130 行〕

オ［ー］ム　［ジュ］ニャ［ー］ナ　アバローキテ［ー］　サマンタ　スパラナ　ラスミ　ババサヤ　マハ［ー］マニ　ドゥルドゥルヒドタヤ　ザルニフム　スヴァ［ー］ハー[98]〔131 行〕

［III. 三毒各論（2）：貪欲］

膿や血などの集合体であるこの［身体］は、汚れが集まった集合体であり、執着と欲望の存在である。三毒の只中にある［身体には、三毒が］蛇のように絡みつき[99]、不浄なもの…[100]本性に対しては、瞋恚を生み出す悪い境遇を受ける。無数の病の苦しみもまた、この生死の法の理から生じる。その根を断ち切らなければ[101]、永遠の[102]生死を享受する（＝輪廻を繰り返す）。［そうならないように］解脱安寧の道（bde ba'i lam）へ［死者を］送り届けよ[103]。〔132–141, 87–88 行〕

誤った過度な貪欲や強欲な行為によって、…口論するようになるが（？）[104]、強力な慈悲の禅定によって誤った執着の根を断ち切り、「乾道（skam lam）」[105]［により］解脱の境地に到る。これが善い法の道［であり］、迷い、貪欲[106]という毒を調伏するのである。蒙昧な貪欲は海のように波［立ち］、ぐるぐると吹き出し流れ出す。渇望という強い力が波のようにうねり、ふらふらして、今まさに船に［乗るあなた方は］流されようとしている。〔89–100 行〕

貪欲という…[107]、渇望という川のなんと不憫なことか！正しい真実の［教えという］船によって深い欲の大海を渡り、真実の解脱という平原に到る。これが善法[108]であり、［こ

---

97 *Ye shes skar mda'i snying po*（北京 353 番 , rgyud 部 , ba 帙 , 235b1–235b5. 影印版 : 7 巻 , p. 298）。サンスクリット語表題なし。漢訳には相当するものなし。

98 このダラニは、北京版では以下の通りである。
^oM dznya na bi lo ki te sa man ta spha ra na ra shmi bha ba sa ma ya ma ha' ma nI du ru hri da ya dza' la ni hu'M //
氏家昭夫氏の教示によれば、サンスクリット語原文は、次のように復元できる。
Oṁ jñāna avalokite samanta spharaṇa rasmi bhavasamaya mahāmaṇi duruduru hṛdaya jvalani hūṁ svāhā
アバローキテー、マハーマニという言葉から、観音菩薩との関連が考えられる。

99 zang zIng gnas su chal bar khrId（133 行）：ITJ 420 の tshang zhing gnas su sbrul ltar 'khri を採る。

100 dul pa（133 行）：意味未詳。

101 de 'I rtsa ba ma bcad na lugs bzang po yin（141 行）：後半の lugs bzang po yin は、誤って挿入されたものであり、本来は 106 行の最初の三音節 'di ni chos に続いて、'di ni chos lugs bzang po yin という 7 音節句を成すものである。また、続く注 109 でも述べるように、文脈から判断して 141 行と 142 行は連続していないので、この間に 87–106 行を挿入した。

102 gzha['] phyIr yun（87 行）：4 行の gzha['] gsang yun と同義と解す。

103 lam du skyal（88 行）：ITJ 420 の lam la skyol を採る。また、既に説明したように、テキストは 141 行から 87 行に続いている。

104 ITJ 421 の 91 行の後に、ITJ 420 では 2 行（校訂テキスト参照）があるが、文脈から外れていると思われるので訳出しない。

105 skam lam（94 行）：「乾道（skam lam）」の「乾」というのは、この先紹介する ITJ 990 に現れる「乾法（skam chos）」（本書 98 頁）の「乾」と同じ意味で、動物の殺生（＝血）を伴わないことを指している。

106 chags ba（96 行）：'dod chags と解する。

107 dmu dug 'pab bar [-e]（101 行）：意味未詳。

108 'dI ni chos lcags gyIs（106 行）：lcags gyIs は明らかに誤写であり、本来は 'dI ni chos の後に 141 行後半の lugs bzang po yin が続く。141 行の次注参照。

れに］よって貪欲の諸毒が鎮まるように[109]。〔101–106, 142 行〕

…[110]。三界の悪なる境遇は大きく、迷いの世界を…[111] するか、知恵の鋭い刀は迷いを引き寄せる鉤（かぎ）を切断して、［死者は］自由で安寧たる広大なところに至る。これが善い法の流儀である。寿命が［ほかに］移った者の貪欲を根本から抜き取り、身体を替えた者[112] の煩悩を完全に晴らす。〔143–153 行〕

迷いは大病であり、苦しみは重荷である。仏陀世尊は知恵という偉大な加持によって、［それらを］洗ったように清め、払ったように清浄にする。完全なる仏の御体は八［十］種好を具え、その加持には果てがないので、迷いと苦しみという病を癒す［力を］具えている。苦しみの世界の荷をおろして、一切智者の無量［宮］たる[113] 最上の領域へ到りますように。正しい真実の加持によって、梵天のようなこの［意味］深い御教えの調べは、迦陵頻伽（かりょうびんが）の声の［ごとき］声色である。正しい御教えの加持によって渇望の川が干上がり、貪欲のうねりが鎮まりますように。〔154–173 行〕

すべての聖者は、一人残らず金剛の如き三昧によって迷いを根本から抜き去るように、あらゆる苦しみを調伏する。悪病、貪欲、際限のない幻想を加持し、対処法により根本から抜き去る。この法王たるダラニは、貪欲という大いなる毒を消し去る[114]。〔174–183 行〕

ナマ　サルバ　ドゥルガティ　パリショ［ー］ダナ　ラツァヤ　タダタ［ー］ガタヤオ［ー］ムバリテ　サルバ　ヤガシャ［ー］ブドゥヤ　アバラナヤビシュドゥテ　スヴァ［ー］ハー[115]〔184 行〕

---

[109] ITJ 421 の 141 行と 142 行は文脈的に繋がらない。それ故に、ITJ 420 に従って、141 行と 142 行の間に 87–106 行を挿入したので、テキストとしては 106 行から 142 行に続く。

[110] 143–145 の 3 行には、thang thang、zIng zing、klag klag などのオノマトペがあるが、意味未詳。

[111] bdud ste（147 行）：意味未詳

[112] 152 行の 'tshe phos と 153 行の lus rjes は、39 行では tshe phos lus rjes と連続して用いられている。ここでは、おそらく修辞上、分割されてはいるが、意味としてはどちらも「死ぬ」ことを意味している。

[113] thams shad khyen pa'I dpag yas su（166 行）：後半部の dpag yas を gzhal yas と解す。

[114] phyogs（183 行）：ITJ 420 の byungs を採る。

[115] これは『一切悪趣清浄タントラ』（北京 116 番, 略題：*Ngan song sbyong ba*）の根本ダラニ（skt.: mūlavidya; tib.: rtsa ba'i rig pa）を縮めたものが幾分変形したものである。そのサンスクリット語全文は以下の通りである。

Oṁ namo bhagavati sarvadurgti pariśodhana rājaya tathāgatāya arhate samyaksambuddhaya tadyathā oṁ śodhane sodhane sarvapāpam viśoshani śuddhe viśuddhe sarvakarma āvarana viśodhani svaha（今枝 2006, p. 146, n. 148 参照）。

『死者神国道説示』［IV-3. 畜生道］にもこれと類似したダラニが用いられている。

『一切悪趣清浄タントラ』のサンスクリット語略題は *Sarvadurgatipariśodhana-tantra* と復元できるが、原本は現在まで発見されておらず、漢訳も存在しない。Skorupski 1983、中島 2012 に詳しい訳注と研究がある。従来は、9 世紀前半に編纂された『デンカルマ目録』（Lalou 1953, n° 323）にも記載されている北京 116 番が前伝期の旧訳で、北京 117 番は後伝期になって新たに訳出された新訳であって、同一タントラの異訳と考えられてきた（例えば、田中 1987, p. 171）。しかし近年の研究で、両者は異なるタントラであることが明らかになってきた（乾 1989; 中島 2012, p. 2）。北京 117 番は、『九仏頂タントラ』と通称され、サンスクリット語原本も存在し、漢訳では大正 939 番『大乗観想漫拏羅浄諸悪趣経』に相当する（乾 1991, p. 191–196）。しかしこの経典はインド成立かどうかが疑わしく、今後の研究によって明らかにされることが待たれる（Kuijp 1992 参照）。

［IV. 三毒各論（3）：瞋恚］

永遠の大病、千の毒という永遠の大敵（？）、地獄の…（？）[116]、あらゆる人と畜生[117]にとっての（？）デュ魔と同じである。大［敵たる］千の毒を打ち砕かなければ、頂たる善趣･天界に［行こうと］もがいて［も］、下界（＝人間界）の地上に運ばれる。…[118]、果実は悪趣の境遇に落ちる。〔185–193 行〕

その対処法がこれ（＝ダラニ）であって、知恵の鋭い刀は大［敵の］千の毒を根本から断ち切る。…[119]、鎮めなけらばならない。〔194–207 行〕

これこそが善法の理（chos lugs bzang po）であって、熱い瞋恚の病[120]を晴らし、争いの害意の根を押さえ込み、憤怒という凶器、瞋恚という争いの道具を…（？）[121]。…[122]。慈悲の金剛の棍棒は、瞋恚、怒りという凶器を破壊し、空虚を円満に満たして掴み取り、慈悲の力で［瞋恚を］断つ。その善法の理によって燃えさかる瞋恚という凶器を破壊する。憤怒という…[123]は敵へと向かい、貪りという愚痴の病に近づく。…[124]。〔208–224 行〕

その対処法が以下であり、医王たる仏に帰依し、善心を積み上げ、［仏］法の甘露の力が生じる時[125]、ダラニを具えたこの薬（＝仏法）を知る者は、有害な瞋恚という毒が晴れ、憤怒、怒りの病は破壊され、…[126]。〔225–233 行〕

この善法の理は瞋恚、怒りの毒を調伏する。すべての聖者が、一人残らず慈悲の強大な力によって瞋恚を根本から抜き取るように、真実のその加持は、寿命が［ほかに］移った者（tshe phos）の瞋恚を根本から抜き取り、身体を替えた者の…根本から晴らす[127]。〔234–241 行〕

観音はその救済において（？）最高の智者であり、［仏］法の王たる…[128]が、害意を…[129]によって制圧する。〔242–245 行〕

---

[116] bshal dag ste（187 行）：意味未詳。

[117] 'greng dud（188 行）：'greng dang dud 'gro と解する。

[118] 192 行は写本間の異同が大きく、テキストが確定できない。

[119] 197–206 行には、瞋恚を形容していると思われるオノマトペが続くが、意味未詳。

[120] zha sang sdug ba'I nad（209 行）：ITJ 420 の zhe stang 'tsha ba'i nad を採る。

[121] gtugs（212 行）：意味未詳。

[122] dmyal myal、shag shag というオノマトペを含む 213–214 行は、意味未詳。

[123] mad dugs（221 行）：意味未詳。

[124] myos myos、thum thum というオノマトペを含む 223–224 行は、意味未詳。

[125] chos gyI dud rtshi phun sum skyed（228 行）：ITJ 420、PT 37 を参考に、chos gi bdud rtsis mthu skyed tshe と解する。

[126] lam lam、sems sems というオノマトペを含む 232–233 行は、意味未詳。

[127] 241 行は写本間の異同が多く、テキストが確定できない。152–153 行の対句に準じたものであろう。

[128] don cen（244 行）：意味未詳。

[129] khu zugs zIl（245 行）：意味未詳。

オーム　マニペメ　フーム　ミトラ　スヴァーハ［ー］[130]〔246 行〕

［V. むすび］

一切［衆生］を慈しみ、［彼らの］望みを願い通り叶えるために、無上なる三宝の強大な加護により、千の大毒は根本から抜き取られ、［この世界は］無上の仏国土として成就する。〔247–252 行〕

『三毒調伏』完。〔253 行〕

[130] このダラニは、最後の「ミトラ スヴァーハ［ー］」を除けば、*Za ma tog bkod pa*（*Kāraṇḍavyūha*）（北京 784 番 ; Lalou 1953, n° 114; 漢訳は大正 1050 番『大乗荘厳寶王経』）中に説かれる観音菩薩の六字真言（Oṁ maṇipadme hūṁ）である（Imaeda 1979 参照）。なお、この経典については、Peter Alan Roberts による英訳が 84000 上に公表されている。

5. 『生死法物語』[131]

[表題]

［一］サンスクリット語で、『サングラ・ダルマデ[132]』〔1 行〕

［二］チベット語で、『神子リンチェン所問生死輪廻経品[133]』〔2–3 行〕

[一章　神国の様子とオバル王の急逝]

[I. オバル王とその国土の素晴らしさ]

無数劫の昔から、すべての有体神[134] は寿命が長く、生死法（skye shi chos）を目にしたことがなく、永久にそうあること（＝）を願っていた。

---

[131] 訳文は、唯一の完本である PT 218 に基づき、適宜、他写本も参照した。また、本書資料に校訂テキストを掲載した箇所に関しては、著者による行の通し番号を訳文の段落ごとに〔　〕内に示した。紙幅の都合上テキストを掲載しなかった箇所については、PT 218 の原文テキストの行番号を提示した。なお、本作品の第二章に登場する各師および地名などの名称は、『入法界品』（梶山 2021）を適宜参照したため、チベット語の逐語訳とはなっていない箇所もある。

[132] チベット文字で sang gra dar ma de と記してあるが、サンスクリット原典からの翻訳と見せかけるために捏造された擬題であり、元来のサンスクリット語表題の転写ではない。本作品は、中国仏教でいうところの「偽経」であり、サンスクリット原典は存在せず、チベット語で創作されたものである。この中「ダルマ（dar ma）」は明らかにサンスクリット語 dharma の音写である。sang gra に関しては、Stein は、“it ought to render Skt. saṁgraha (Tib. bsdus pa), ‘collection, summary’ (e.g. ITJ 26.2)” と記すが、確証はない（Stein 2010, p. 40. n. 54）。次注参照。

[133] 原文 5 行（PT 220, l. 1）には skye shi 'khor ba chos kyi yi ge le'u とある。この内、skye shi は字義通りには「生死」であり、'khor ba は「輪」であるが、両者で輪廻（skt.: saṃsāra）を指している（Stein 2010, p. 36, Vocaburary 1, № 13, *skye shi* 参照）。
また chos kyi yi ge は、サンスクリット語 sūtra の訳語として mdo が定着する以前に用いられていた表現で、敦煌文書中にかなりの例があるほか、現行のチベット大蔵経中にも見られる（Stein 2010, p. 37–50, Vocaburary 1, № 15, *chos kyi yi ge, gzhung*, *dar ma* に詳しい）。
最後の le'u に関して、Stein は、“PT 220 (l. 1): *le'u pa grangs myed pha snga nas*, ‘the first of innumerable chapters’” すなわち、「［『生死法物語』は］無数の章の最初」と記しているが、これは完全な誤認である（Stein 2010, p. 49, n. 68）。第一に、PT 220 は右側半分が欠損した写本で、1 行目は le'u までしかなく、2 行目冒頭の pa grangs myed pha との間に数音節の空白があるので、*le'u pa grangs myed pha* と連続しては読めない。そして他の写本との比較から、欠損している 1 行目の最後の音節は skal であったと推測でき、1 行目から 2 行目にかけての文章は skal pa grangs myed pha「無数劫」である。何よりも *le'u pa grangs myed pha* と続けて読むことは物理的に写本に則しておらず不可能であるし、le'u pa という言葉は存在しない。また snga を「最初（the first）」とするのには無理がある。総合的にみれば、「無数劫の昔（snga）から」としか読みようがない。
le'u「章」という言葉が記してあることから、『生死法物語』が 1 つの章である可能性が考えられるが、これに関しては、この先詳しく検討することにする。

[134] gzugs yod lha（5 行）：原文の文字通りに訳したが、このような神の範疇は他に例がない。仏教の三界の 1 つである色界（gzugs khams）の神の意味であろうと思われる。

彼らの世界の長は、オバル（光炎）王という名で、その住まいは、天地の…[135] 光だけからできており、その素晴らしい光の輝きは目を奪うばかりであった。その上下にあるものすべてが、そこに鏡のように映し出されており、日月が天高くの星孔を飾っていた。この国の素晴らしさと快適さは筆舌に尽くし難かった。食べ物と財宝とは、欲するがままに出現した。すべてのものは神変（'phrul）の材質で作られていた。［オバル王の］身体は、金のように輝いていた。彼の千といる子供、万という親族、そして付き人たちもすべて、［その］神変力（'phrul stobs）と光（snang ba）は彼のようであった。誰もが永久にそうあるように願っていた。〔4–22 行〕

［II. オバル王の急逝と側近たちの当惑と悲嘆］

ある時、この世界のオバル王の寿命が尽き（tshe zad）、［神の境遇から］落ちる時が来た。彼の神変力と徳は言うまでもなく、身体の美しい光の輝きも消え失せた。話すことも、動くことも、息を吸うことも、何もできなくなり、誰もが奇異に思った。何の災いなのか、どういう理なのか、誰もが互いに尋ね合った。しかし誰一人として、この理の意味を理解できなかった。千といる子供、万という親族、そして付き人たちはすべて、苦しみの海に沈み、身体を叩き、手を打ちながら、苦悩した。［オバル王が生き］かえり、以前のようになることを願った。〔23–35 行〕

［III. 大神変者ドゥタラと神子リンチェンの問答］

神々の中に、［ことさら］長寿な大神変者（'phrul chen）ドゥタラという神がいた。彼がオバル王の住まいに到り、［全員の対応が］誤りで、間違っていることを告げた。

「あなた方は全員、無明迷妄である。この世界に存在するものは、7 万劫を経るとすべてこのようになる。これが生死法というものである。［それに対して］何が有益（phan）なのか、私は知らない。有益な術（phan ba）はない」〔36–46 行〕

オバル王の優れた子供リンチェンは、ドゥタラの言うことを恭しく聴き、吟味して、

「それは究極の真理だと思います。生死の時（skye shi'I dus）が至れば、どうすれば［死者が生き］かえり、［死者に再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば安らかで幸せになる（bde zhing skyid par 'gyur）でしょうか」と、大神変者に恭しく尋ねた。〔47–54 行〕

ドゥタラが答えた。

「私は生死が存在するのは知っているが、何が有益なのかは知らない。生死の理を尋ねたければ、彼方に神々の主である三界神変者（khams gsum 'phrul pa）という名

[135] gnas pa'i khang [---] / gnam sa'i [---]（10 行）：末尾の 1–2 音節が不鮮明なため不明。

の大神変力尊者が座すので、彼に質して、考え、理解せよ」〔55–61 行〕

ドゥタラの答えは非常に説得力があったので、神子リンチェンは父王の苦しみ［を前にして、父王への］孝[136]の念から動揺し、［父王が］安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）に辿り着くとは思えなかった。そこで彼は、生死法を求め、その意味を理解しようと思い立った。神変力に優れた付き人たちを従えて、帰路を顧みず、故郷を恋慕することもなく、旅立った。〔62–69 行〕

[二章　オバル王の神子リンチェンの求法巡礼][137]

[I. 三界神変者]

リンチェンは三界神変者の住まう国に辿り着いた。最勝女国の妙音山の頂には薬草が生えていた。リンチェンは師の足下に礼拝し、その周りを巡り、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。神々の主よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。〔PT 218, kha 葉裏 2–5 行〕

すると、神々の主はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、三界神変神主は信解の力により眼の知恵を得た。法雲ダラニ光により十方世界を見わたすと、多種多様の色や形をした諸々の如来が見え、その神変は不可思議である。その光明は至るところに光り輝く。他の功徳も不可思議である。私はこれらすべてを目の当たりにし、そうした如来の神変を諸々の衆生に見せることができる。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔kha 葉裏 5 行 –ga 葉表 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が［ほかに］移って、身体を替えました[138]が、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」〔ga 葉表 3–5 行〕

そう尋ねられて、三界神変者が答えた。

「その理は、私にはわからない。それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、

---

[136] sri zhu（64 行）：この語は、『神変比丘後世教示経』（148 行）にも用いられている（本書 注 29 参照）。

[137] 後述（本書 83 頁）するように、この章全体は『入法界品』の善財童子の求法巡礼物語の翻案で、善財童子をリンチェンに置き換え、彼の質問を生死法に関するものに変えてある。リンチェンが訪ね歩く師の数は『入法界品』の半数程で、順序も適宜変更してある。各師の説法は『入法界品』のそれを極度に凝縮したもので、ほとんど意味をなさず、「生死法はわからない」という答えで終わっている。二章については、原文の校訂テキストは資料に収めなかったが、訳文に付した葉、行は、PT218 に対応している。

[138] tshe 'phos lus rjes nas（ga 葉表 4 行）：『三毒調伏』注 79 参照。

私にはその理はわからない。善者よ、ここから彼方に行け。海門という国に、地下神祇主（sa 'og lha 'dre rje）[139] がいる。彼に生死の理を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、地下神祇主を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ga 葉表 5 行 – 裏 4 行〕

［II. 地下神祇主］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、海門という国に着いた。地下神祇主の足下に頭をつけて礼拝し、その周りを巡り、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。神々の主よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、地下神祇主はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私がこの海門国で海の全ての功徳を思い、瞑想に浸った時、大海の中央に宝でできた蓮華が 1 本現われ、様々な装飾に飾られたそれを、多くの王たちがしっかりと支え、神の花を雨のように降らせた。その蓮華は非常に美しく、その上に坐す如来の［三十二］相［八十］種好は不可思議で、その功徳と神変は言葉では表現できなかった。如来が手を伸ばし、私に触れて、普門という法門、菩薩行をお説きになり、私は解脱ダラニを得た。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔ga 葉裏 4 行 –nga 葉表 1 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、地下神祇主はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない。善者よ、ここから彼方に行け。ランカ国の海岸に虚空大力（bar snang dbang chen）がいる。彼に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、虚空大力を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔nga 葉表 1 行 – 裏 7 行〕

---

[139] lha 'dre（ga 葉裏 1 行）：本書 注 76 参照。

[III. 虚空大力]

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、ランカ国の海岸に着いた。虚空大力に目見え、礼拝し、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。神々の主よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、虚空大力はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、虚空大力は、無礙（むげ）の門という菩薩の解脱を得て、十方のすべての仏国土を、この身体で動くことに何の障碍もない。実体がないという加護により、私自身は虚空に行き、地上では小鳥…[140]、川でも溺れることがない。あらゆる衆生の姿に似た変化の海を出現させる。十方世界のすべての仏がお説きになる理をすべて聴聞した。それによって力を得たので、私を目にする衆生はすべて、確実に悟りを開く。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔nga 葉裏 7 行 –ca 葉裏 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、虚空大力はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない。善者よ、ここから彼方に行け。大雲王（sprIn cen rgyal）に質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、大雲王を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ca 葉裏 2 行 –cha 葉表 2 行〕

[IV. 大雲王]

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、金剛という街に着いた。大雲王は王座に坐し、多くの衆生に説法していた。それを見て、リンチェンは師の足下に頭をつけて礼拝し、［その周りを巡り、合掌して］[141] 申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。神々の主よ、どうか私にご教示くださいませ」

---

[140] bya'u zul steng du byung（ca 葉表 5 行）：意味未詳

[141] PT 218 では写本の欠損により、テキストが確認できないが、ITJ 151 の対応箇所には、bskor nas lag sbyar（ITJ 151: 表 2 葉 3 行）とある。

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。

すると、大雲王はこう答えた。

「善者よ、[私に何を尋ねたいのか]。私は妙音ダラニを得て、口から光を発する。[その夥しい光が、三千世界を覆う][142] その光を見たり、その光に触れた衆生は、全て私の下に集まる。私は彼らに字輪荘厳［という教え］を説き、彼らに知らしめ、理解させ、無上の悟りから不退転とする。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔cha 葉表 2 行 – 裏 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。[それが叶わなければ、] どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、大雲王はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない。善者よ、ここから彼方に行け。商人頭解脱（tshong pon dbang brjod）に質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、商人頭解脱を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え]、宝のシンバルはシリリ［と鳴り]、妙なる太鼓はティリリ［と響いた]。〔cha 葉裏 2–7 行〕

[V. 商人頭解脱]

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、住林国に着いた。商人頭解脱を見つけ、リンチェンは師の足下に恭しく礼拝し、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は［筆舌に尽くせません。尊者よ、どうか私にご教示ください ませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた]。すると、[商人頭解脱の］身体には、十方の仏、バガヴァット、十方世界の塵と等しい［数の］[眷属と功徳を伴って、][143] 様々な乗［を教え]、仏の様々な変化身と行い［のすべて][144] を［現した]。[そのすべてが商人頭の身体に現れ、そこで][145]。[商人頭解脱は］三昧から覚め、リンチェンに言った。

---

[142] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 4 葉 5 行 – 表 5 葉 1 行）'od 'phro phung po de rnams kyIs // から訳文を補った。

[143] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 1–2 行）'khor dang yon tan rnams su bcas // から訳文を補った。

[144] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 2–3 行）spyod lam sna tshogs kun ston pa' // から訳文を補った。

[145] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 3 行）de kun tshong pon lus la snang から訳文を補った。

「善者よ、私に何を［尋ねたいのか。商人頭解脱である私は］[146] 無礙の荘厳により十方の仏を見る。…[147] 如来を観想しても、夢の中の影像のようである自分の心を観想しても、水面に映った月や幻のようである。…[148] すべての菩薩の集いも、自己の心の加持によって出現する。そう理解して［善根によって］自己の心を堅固にし、法雲によって自己の心を加持し、汚れた事象から自己の心を浄め、精進によって自己の心を堅固にし、忍耐によって自己の心を修養し、智と理によって自己の心を集中し、知恵により［自己の心を］浄めなければならない。そのことをよく理解した。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔cha 葉裏 7 行 –ja 葉裏 6 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、商人頭はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない。善者よ、ここから彼方に行け。［如意優婆夷に］生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく［礼拝し、］生死の理を質すために、如意優婆夷（dge bsnyen yId bzhin）を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔nya 葉表 1 行 – 裏 1 行〕

［VI. 如意優婆夷］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を［越え、…の大海］[149] に着いた。その国はよく荘厳されており、［様々な］木々、宝樹、［果樹の囲いと宝の］[150] 壁で囲まれていた。その中央の宝石で荘厳された宮殿［に如意優婆夷がいた］。天界のすべての神、人、閻魔［界（＝地獄）の衆生］、畜生が十方から集まっていた。神子リンチェンは優婆夷の足下に礼拝し、その周りを巡り、次のように申し上げた。

---

[146] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 4 行）tshong pon btang (⇒dbang) brjod bdag gis nI // から訳文を補った。

[147] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 5 行）には、de dag 'di ru byon pa myed // rang gi lus kyang 'gro ba myed // とある。

[148] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 7 葉 6 行）には、sgyu ma byas pa'i gzugs 'dra ste // とある（ITJ 151: 表 7 葉 6 行）。

[149] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 10 葉 1 行）には、rgya mtsho rnam par rlob par phyin // とある。

[150] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、ITJ 151 の対応箇所（表 10 葉 2 行）bza shing sna tshogs ra ba dang // rin cen rtsig pas kun nas bskor // から訳文を補った。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。優婆夷よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、優婆夷が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、如意優婆夷は、苦悩なき安らぎの幟という解脱を得た。その力によって、私を目にすること、私の言葉を耳にすることにも意味がある。同様に、いかなることを為そうとも、意味がある。私を目にする衆生は最上の悟りに到り、不退転である。如来が十方から到り、宝座に坐す。私は、そのすべての教えを聴聞した。私は、絶えず如来を目の当たりにし、教えを聴聞する。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔nya 葉裏 1 行 –ta 葉表 4 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父は［オバル王です］。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

［そう尋ねられて、］優婆夷はこう答えた。

「それは生死法である。生死［物語］は非常に深淵であり、その理は［私にはわからない。善者よ、ここから彼方に］行け。浄川［という場所］で威猛音仙人（drang srong 'jIgs pa mchog dbyangs）に［生死物語を質せ］」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、威猛音を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ta 葉表 4 行 – 裏 3 行〕

［VII. 威猛音仙人］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、浄川に着いた。［そこは、］様々な宝の森が茂り、［その］種々の花や果実で荘厳されたとりどりの森の中央に、威猛音仙人がいた。髻と冠は荘厳されており、［植物の］根と［樹］皮でできた衣を纏い、下着は樹皮でできていた。彼は草で編まれた座に坐し、幾千もの仙人に囲まれていた。［神子リンチェンは仙人の］前で礼拝し、その周りを巡り、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。仙人よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、威猛音が手を伸ばし、リンチェンの頭に触れた。手で頭を掴むと、神子リンチェンは十方の仏国土を目の当たりにし、自分がすべての如来のその足下にいるように加護されているのがわかった。他にも［無数の］光景、すなわち勝者（＝仏）の功徳のすべてを目の当たりにした。仙人が手を離すと、［リ

ンチェンは自分が］威猛音［の前にいるのに気付いた。威猛音は、

「今、目の当たりにしたことを］そなたは覚えているか」

とリンチェンに質した。［リンチェンは］

「聖者の加護のおかげで覚えています」

と［答えた。すると、威猛音が］答えた。

「私の功徳は以上である。善者よ、何を尋ねたいのか」〔ta 葉裏 3 行 –tha 葉裏 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、威猛音はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。バラモン王勝熱（bram mdze 'I rgyal drod skye mched）に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、バラモン王勝熱を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔tha 葉裏 2–7 行〕

［VIII. バラモン王勝熱］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、普求という国に着いた。バラモン王勝熱は、一切智を得るために、激しい苦行を行っていた。山のように大きな 4 つの火炎の中央に、非常に高く険しい山があり、道は刀の刃のようであった。そこで眷属に囲まれた［バラモン王勝熱］を見つけ、リンチェンはバラモンの足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。バラモンよ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、バラモンが答えた。

「［善者よ、何を尋ねたいのか。私、バラモン王］勝熱は、激しい苦行を行なった功徳の加護により、［天上の梵天とあらゆる神々が、それぞれの住まいから］[151] 私の元に集まってくる。龍、乾闥婆（けんだつば）、摩睺羅伽（まごらが）、阿修羅（あしゅら）、迦楼羅（かるら）、欲界の神子たちのそれぞれの世界で、シンバルが鳴り響き、大地が揺れ、神変の光が現れ、それが地獄まで照らし、すべての人の苦しみを取り除くのを、私は見た。彼らすべてがここに集

[151] PT 218 では写本の欠損により、テキストを確認できないが、PT 219 の対応箇所（表 4 葉 4–5 行）mtho rIs gtsang dang lha thams cad // so so'I gnas nas // kun bskul te // から訳文を補った。

い、私は彼らを威圧し、見解を正し、菩提に向かわせるために、各々に合った教えを説く。この火炎と山に触れる者はすべて、菩薩の三昧と静寂と安楽を得る。私の功徳は以上であり、菩薩の解脱と、無尽のマンダラを説く。善者よ、何を尋ねたいのか」〔tha 葉裏 7 行 –da 葉裏 5 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、バラモンはこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。吉祥獅子王の娘、慈女（rgya mtsho sang ge dpal kyi bu byams ma）[152] に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、慈女を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔da 葉裏 5 行 –na 葉表 3 行〕

[IX. 慈女]

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、吉祥獅子王の住む獅子威という国に着いた。そこには諸々の宝石で荘厳された素晴らしい館があり、その中の梅檀の座に慈女が坐していた。500 人の侍女［に囲まれた慈女の目は］紺青で、［肌は］光り輝いていた。［リンチェンは］その足下に頭をつけて礼拝し、周りを巡って［申し上げた］。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は［筆舌に尽くせません。聖者よ、］どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、慈女は［リンチェンに様々なものを］見せた。［リンチェンは］目にしたもの、ひとつひとつに、まずは発心し、修行し、仏となり、神変力を得て、法輪を転じ、涅槃に到った法界の如来の像が見えた。それは、大きな澄んだ湖の波に、日月、星が映るようであった。慈女は、そうした功徳をすべて見せてから、こう言った。

「私、慈女は、あらゆる般若の法門の中で、この荘厳［門］を理解し、この理を修行し、普く観相する身体を得て、その身体のマンダラにあらゆる法門が納まっている。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔na 葉表 4 行 –pa 葉表 1 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

---

[152] PT 219 の名称を採る（PT 219: 表 6 葉 2–3 行）。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、慈女はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。妙見という比丘（dge slong blta' na sdug pa）に生死の理を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔pa 葉表 1–5 行〕

［X. 妙見比丘］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、三眼という所に着いた。様々な森の中に、妙見比丘は、…[153] 荘厳され、修行の優れた功徳を具えていた。様々な衆生に囲まれ、…[154]、智慧を生起するために如来の様子を思い浮かべ、すべての衆生…[155]、一歩一歩が神の宝の蓮華に支えられていた。リンチェンは妙見比丘の足下に頭をつけて礼拝し、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。比丘よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、比丘が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、妙見比丘は、38 のガンジス川の砂の数に等しい如来の下で、一生の間、梵行を行った。如来の教えを聴き、教誡を思い起こし、かつての誓願を浄め、完璧な成就の境地に住している。修行のマンダラをよく浄め、波羅蜜を完成し、変化も知っている。さらに修行は限りなく、発心の一瞬一瞬に菩薩行を行う。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔pa 葉表 6 行–pha 葉表 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、妙見はこう答えた。

---

[153] 写本が欠損しており、テキストが確認できない。

[154] 同上。

[155] 同上。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。大力王（khye'u mchog dbang cen rgyal po）という殊勝な童子に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、殊勝な大力という童子を探し求め、付き人一行を従えて［旅立った。神の冠はプルルと震え、宝のシンバルはシリリと鳴り、妙なる太鼓はティリリと響いた］。〔pha 葉表 3 行 – 裏 1 行〕

［XI. 大力童子］

それから、神子リンチェンは［幾多の国々を越え、］妙門という街に着いた。殊勝な童子大力王が、…[156] 一万の優れた童子たちに囲まれているのが見えた。リンチェンは殊勝な大力童子の足下に頭をつけて礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。大力様、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、殊勝な童子が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、殊勝な童子大力は、マンジュシュリー（文殊師利）から世間の諸々の修行を教わり、天上界、地下界を行き来し、善・不善のすべての法をよく聴き、光明の智慧を得た。それに基づき、多くの衆生を解脱させる。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔pha 葉裏 1 行 –ba 葉表 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、殊勝な大力童子はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。海住という街にいる品行の正しい多宝優婆夷（dge bsnyen ma' rIn cen mang）に質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、多宝優婆夷を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ba 葉表 2–7 行〕

---

[156] chu lus bsIl [---] seng la // sna tshogs rgyas pa na // byis ba gzho nu mtshan ldan ba //（pha 葉裏 2 行）：意味未詳

［XII. 多宝優婆夷］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、海住という街に着いた。楼閣は宝石から成り、金の柱はトルコ石で輝き、宝石の網で荘厳されていた。その中央の高く清らかな座に多宝優婆夷［が坐していた。彼女は］若く、顔色［よく、優れた］資質を具え、髪は結わずに、装飾具も付けず、白衣しか纏っていなかった。1 万の神の娘たちが仕え、彼女を囲んでいるのが見えた。リンチェンは恭しく礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。優婆夷よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、優婆夷が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、多宝は、菩薩の無尽なる福徳の荘厳の蔵を得た。私の身体から妙なる香りが出て、それに触れるすべての衆生は、三毒が清まり、三解脱門に住する。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔ba 葉表 7 行 –ma 葉表 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、優婆夷はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。家長最上智（khyIm bdag mkhas mchog）に質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、家長最上智を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ma 葉表 2–7 行〕

［XIII. 家長最上智］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、殊勝という街に着いた。この街の四つ辻の宝樹は木陰を作り、神変の花が雨のように降っていた。宝の網が天蓋となり、神の幡、勝利旗、ラプルン（？ lhab lhun）によってよく荘厳されていた。その宝座で、家長最上智が多くの眷属に囲まれているのが見えた。リンチェンは家長の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「智者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。優婆夷よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、家長が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、家長最上智は、如意蔵から生じた福徳の宝を得て、あらゆる衆生の望むものをすべて、各人の望み通りに空から降らす。私はあらゆる人を喜ばせ、満足させる。さらに方便でもって解脱させるため、各人の資質に応じて法を説く。大乗の基礎は 1 つであり、善業の種と苗を実らせる。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔ma 葉表 7 行 –tsa 葉表 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、家長はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。若獅子という街の商人頭宝髻（tshong pon rin cen gtsug pud）に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、宝髻を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔tsa 葉表 2–7 行〕

［XIV. 商人頭宝髻（ほうきつ）］

それから、神子リンチェンは、幾多の国々を越え、若獅子という街に着くと、敬虔な商人頭宝髻が市場の中央にいるのが見えた。神子リンチェンは商人頭の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。商人頭よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、敬虔な商人頭は、自分の住まいに戻った。そこは宝でできた 7 層から成る楼閣で、必要なものが望み通りに現れた。それを神子リンチェンに見せてから、次のように言った。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、宝髻は、無数劫の昔、如来とその眷属に多大な捧げ物をした。この善根を、3 つのことに廻向した。

（一）私によって無数の衆生の苦悩と苦痛が消滅し、（二）［衆生が］正法から離れず、（三）如来を供養するように。この偉大な誓願をを立て、廻向が成就したので、すべての衆生を迎え、三廻向の恩恵を被らせた。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔tsa 葉表 7 行 –tsha 葉表 2 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生

き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、宝髻はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。普門という街の香料商人頭普眼（dri 'I tshong pon kun du myIg）に生死の理を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、香料商人頭を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔tsha 葉表 2–7 行〕

［XV. 香料商人頭普眼］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、籐根国に着いた。普門という街は一万の町からなっており、そこで香料商人頭普眼があらゆる優れた香料を扱っているのが見えた。リンチェンは商人頭の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「香料商人頭普眼よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。商人頭よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、商人頭が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、商人頭普眼は、香料によって如来を大いに供養する。すべての衆生を喜ばせる。「法基（chos kyi gzhi）」という最上の香料を見つけ、あらゆる衆生のすべての病いを治し、一切の怖れと慄きを消し、すべての傷害、災難を除き、あらゆる衆生を守る。また四無量心の教えを説く。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔tsha 葉表 7 行 –dza 葉表 1 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、普眼はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。多羅勝幟という街にいる火炎王（rgyal po mye）に生死の理を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、火炎王を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔dza 葉表 1–6 行〕

［XVI. 火炎王］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、多羅勝幟という街に着いた。すべてが荘厳された獅子座に、相好を具え荘厳された火炎王が坐し、1 万の大臣が政務を行っているのが見えた。［火炎王は］坐して、多くの衆生に説法していた。リンチェンは、王の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「王よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。王よ、あなた様がどうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、王が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、火炎王は、幻という菩薩の解脱を得た。この国の衆生が陥っている不善の道を制止し、善の道に導き入れるため、計り知れない方便の功徳でもって、衆生の苦しみを滅する思いは計り知れない。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔dza 葉表 6 行 – 裏 7 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ､］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、火炎王はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。甚明という街にいる大光王（'od cen rgyal po）に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、大光王を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔dza 葉裏 7 行 –wa 葉表 5 行〕

［XVII. 大光王］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、甚明という街に着いた。街を見渡すと、四方の城壁はダイヤモンドから成り、七宝でできた壁に囲まれ、その橋は金の棘を具えていた。栴檀の香りのする池の底には、黄金の砂が敷かれていた。あまねく多羅樹の森に囲まれており、様々な花が咲き乱れ、多くの美しい鳥が心地よい声で鳴いていた。その中央には仏塔の形をした宮殿があり、宝から成る蓮華の台に大光王が坐していた。大丈夫の三十二の相好（そうごう）に荘厳され、太陽のように輝き、忠実な眷属に囲まれ[157]、多くのものが具わっているのが見えた。そこで神子リンチェンは、大光王の足下に五体で礼拝し、合掌して申し上げた。

[157] snyIng po 'i 'khor gyis bskor nas su //（wa 葉裏 3–4 行）

「王よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。王よ、あるあなた様がどうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、大光王が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私大光王は慈悲の最勝の勝幟［という教え］を聴き、一切衆生が輪廻を断ち、法界に生まれるよう一切智を説示するために、仏法により世間を調伏し、苦悩と苦しみを滅する。まずは慈悲によって［衆生が］欲するものすべてを与え、［衆生の］能力を展開させるという三昧を得た。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔wa 葉表 5 行 –zha 葉表 4 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、大光王はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。堅固王の宮殿に不動優婆夷（myI g.yo ba'I dge bsnyen ma）がいる。彼女に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく礼拝し、生死の理を質すために、優婆夷を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔zha 葉表 4 行 – 裏 2 行〕

［XVIII. 不動優婆夷］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、堅固王の国に着いた。見渡すと、不動優婆夷は若くして非常に美しく気品があり、父母と多くの親類と付き人に囲まれていた。優婆夷が大衆に法の道理を説いているのを見て、神子リンチェンは恭しく礼拝し、合掌して申し上げた。

「優婆夷よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。優婆夷よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、優婆夷が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、不動優婆夷は過去世にプラランババーフ如来から、無数の知恵心と一万門という三昧を得た。私が三昧に入ると、十方の世間が振動し、至るところに智慧の光景が現われ、大神変が出現する。こうして私は善根の芽を植える。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔zha 葉裏 2 行 –za 葉表 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、優婆夷はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。ツェヨ・ジンパという街にいる梵行者遍行（tshangs kun tu 'gro）に質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、大火王を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔za 葉表 3 行 – 裏 1 行〕

［XIX. 梵行者偏行］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、善得という山に登った。山上には大光明が現われ、梵行者偏行の［身体の］色は最上で、日月のように輝き、吉祥と功徳に満ち、何千ものバラモン天に囲まれているのを見た。リンチェンは梵行者の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「梵行者偏行よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。梵行者偏行よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。すると、梵行者偏行が答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、梵行者偏行は、智慧の光明の門を得て、すべての衆生の信心に応じて、様々な方法でもって教えを説いている。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔za 葉裏 1–7 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、梵行者偏行はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。商人頭青蓮（yud pa'I tshong pon）に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、商人頭青蓮を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔za 葉裏 7 行 –'a 葉表 5 行〕

［XX. 商人頭青蓮］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、広大国に着いた。そして商人頭青蓮が多くの眷属に囲まれているのを見た。リンチェンは商人頭の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。商人頭よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。そう尋ねられて、商人頭はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、商人頭青蓮は無埃（むあい）という三昧を得た。私が青蓮花を雨降らせることにより、衆生は諸々の善根を得る。その香りを嗅ぐ衆生は皆、肉体的苦しみと病がなくなり、火炎によって焼かれることがない。また毒により害されることもないので、罪を戒め、誓戒を守る。すべての思いが清浄になり、菩提を離れることがない。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔'a 葉表 5 行 – 裏 6 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、商人頭青蓮はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。楼閣という街にいる船頭普明（sgrol ba rnam par snang ba）に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、船頭普明を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔'a 葉裏 6 行 –ya 葉表 5 行〕

［XXI. 船頭普照］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、海辺に[158]着いた。そして、船頭普明が幾百千という商人と様々な衆生に、海中の島の功徳を説き、［世間で］求められる様々な宝が海中に生まれるのを見た。そこでリンチェンは船頭の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「船頭よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。船頭よ、あなた様がどうか私にご

[158] 本文には rgya mtsho mching rnams 'gram du とある（PT 218, ya 葉表 6 行）。

教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。そう尋ねられて、船頭はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、船頭普明は金剛幟を得て、多くの船頭を集め、海中の島の宝で彼らを満足させる。彼らが戻ると理を説き、三界輪廻の海から救う。三毒の海を乾かし、心の海を常に乾かし、智慧の海に入らしめる。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔ya 葉表 5 行 – 裏 7 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、船頭普明はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。歓喜瓔珞という街に商人頭［最勝］（tshon pon rgyal mtshog）がいる。彼に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、商人頭最勝を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ya 葉裏 7 行 –ra 葉表 6 行〕

［XXII. 商人頭最勝］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、歓喜瓔珞という街に着いた。アショーカ樹の林の中で、商人頭最勝は幾百千という在家信者に囲まれ、彼らのために働き、法話を説いていた。神子リンチェンは商人頭の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。商人頭よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。そう尋ねられて、商人頭はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、商人頭最勝は、あらゆる場所に赴く能力を得て、あらゆる世界でその［衆生］に適した法を説き、三悪趣を断つ。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔ra 葉表 6 行 – 裏 5 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父は［オバル王です］。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、商人頭最勝はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。

善者よ、ここから彼方に行け。歓喜生という林に獅子力比丘尼（dge slong ma 'I seng ge mthu'）がいる。彼女に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、比丘尼を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔ra 葉裏 5 行 –la 葉表 6 行〕

［XXIII. 獅子力比丘尼］

それから、神子リンチェンは幾多の国々を越え、歓喜生大林という街に着いた。日光園には八功徳を具えた池、沼、水溜りがあり、七宝の壁で囲まれていた。様々な果樹園、栴檀があり、数多の神変の衣類、花、神々の品々が出現していた。宝樹一本一本の根元には獅子座があった。その中央に獅子力比丘尼が多くの眷属と一緒にいるのが見えた。そこで、リンチェンは獅子力比丘尼の足下に頭をつけて礼拝し、合掌して申し上げた。

「あなた様よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。聖者よ、あなた様がどうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。そう尋ねられて、獅子力比丘尼はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、獅子力比丘尼は、一切法から生じた三昧を聴聞したので、天上界から三［悪］趣までの輪廻世界で、［衆生各々の］器に応じて説法し、彼らに邪見を捨てさせ、菩薩行を行わせる。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔la 葉表 6 行 –sha 葉表 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、獅子力比丘尼はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。善行完成という街に座主という在家信者（khrI ba 'i khyim bdag）がいる。彼女に生死物語を質せ」

リンチェンはこの教えを聴いて、恭しく合掌し、生死の理を質すために、座主という在家信者を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔sha 葉表 4 行 – 裏 3 行〕

［XXIV. 在家信者座主］

それから神子リンチェンは、幾多の国々を越え、善行完成という街に着いた。そこで座主という在家信者が栴檀の座のある仏塔に大きな捧げ物を献じているのが見えた。リンチェンは在家信者の足下に礼拝し、合掌して申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。在家信者よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。そう尋ねられて、在家信者座主はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、在家信者座主は、如来の仏塔の栴檀座の扉を開き、善眼荘厳という三昧を得て、過去世の無数の如来を目の当たりにし、その功徳を理解した。自ら修行すると共に、他の者にも説法している。私の功徳は以上である。善者よ、何を尋ねたいのか」〔sha 葉裏 3 行 –sa 葉表 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、在家信者はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。海幢比丘（dge slong rgya mtsho 'i rgyal mtshan）に生死物語を質せ」

この教えを聴いて、リンチェンは恭しく合掌し、生死の理を質すために、海幢を探し求め、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔sa 葉表 3 行 – 裏 1 行〕

［XXV. 海幢（かいどう）比丘］

それから神子リンチェンは、幾多の国々を越え、閻浮提の先端の広満という国に着いた。海幢比丘は三昧に住し、所作も少なく不動で、その神変は計り知れず、その毛穴の、ひとつひとつから菩薩の神変を数多く出現させた。その神変力により、衆生を完全に成熟させ、すべての如来を供養し、諸々の国土を清浄にし、苦悩を除き、悪趣を断ち、［善趣への］道を開く。悲惨と苦悩を鎮め、無明という障害を除去する。身体の各肢から、商人頭、王族、バラモン、仙人、龍女、阿修羅、声聞、独覚、夜叉、羅刹、緊那羅、乾闥婆、転輪王[159]、大梵天、菩薩といった様々な衆生が出現し、それぞれ功徳と眷属を有していた。毛

[159] 続いて「多くの月（zla ba mang po）」という語句が記されているが、これは衆生のカテゴリーではなく、『入法界品』の少し先の箇所にある「阿僧祇数の仏国土の微塵の数に等しい月の群」（梶山 2021（上）, p. 199）という表現が錯綜して誤入したものであろう。

穴から出る光の網のマンダラのすべてにも、諸々の功徳があるのが見えた。6 か月と 6 昼夜、この光景が展開した。海幟比丘が三昧から出ると、リンチェンは申し上げた。

「聖者よ、私に慈悲をお垂れくださいませ。私にはわからないことがあり、尋ねに参りました。苦しみの海は筆舌に尽くせません。尊者よ、どうか私にご教示くださいませ」

と、多くの美辞麗句でもって申し上げた。海幢比丘はこう答えた。

「善者よ、私に何を尋ねたいのか。私、海幢は清浄な流れを得たので、世間における行いは無礙である。仏の諸々の功徳に入り、行ずるのに無礙である。私の功徳は以上である。善者よ、何を問いたいのか」〔sa 葉裏 1 行 –ha 葉裏 3 行〕

そこで、リンチェンは次のように申し上げた。

「私の父はオバル王です。寿命が尽き、身体を替えましたが、どうすれば［父が生き］かえり、［再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、］どうすれば［父が］安らかで幸せになるでしょうか」

そう尋ねられて、海幢比丘はこう答えた。

「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、その理は私にはわからない。善者よ、ここから彼方に行け。国の名前はマガダ、仏の名前はシャーキャ・ムニ、彼は世間の守護者であり、無数劫以来あらゆる衆生を生死から解放している。三毒[160] の病に苦しむ者すべてに、生死の教えを説いている。五趣の業の生起を観察し、八地獄を説き、悪業の対治である十善[161]、十波羅蜜、四無量を実践し、四禅定を説く。仏の功徳は説き尽くせず、仏は世間の守護者であり、生死の病の医者であり、苦悩の海の船頭であり、闇を照らす灯火であり、無明な者に教える導師である。生死法をご存じなので、彼に生死の理を質せ」〔ha 葉裏 3 行 –a 葉表 5 行〕[162]

この教えを聴いて、リンチェンは恭しく礼拝し、生死の理を質すために、マガダ国に如来、仏、薄伽梵シャーキャ・ムニを探し求めて、付き人一行を従えて旅立った。神の冠はプルル［と震え］、宝のシンバルはシリリ［と鳴り］、妙なる太鼓はティリリ［と響いた］。〔kna 葉裏 1–3 行〕

［三章　シャーキャ・ムニ］

［I. 国土］

それから神子リンチェンは、幾多の国々を越え、マガダ国についた。大菩提樹の根元にシャーキャ・ムニ仏がおられた。多羅樹 7 本分の高さに位置する宝座に坐（ましま）し、虹のような

---

[160] 『三毒調伏』の主題。

[161] 詳しくは『御高説宝樹』の注記（注 55）を参照。

[162] a 葉表 6 行から kna 葉裏 1 行までは、ha 葉表 3 行から a 葉裏 6 行までの部分の繰り返しである。今枝 2006（pp. 24–25）参照。

多くの妙なる光に囲まれ、目を見張る［八十］種好（しゅごう）と［三十二］相に荘厳されていた。その傘蓋（さんがい）は十方の 1 万の国を覆っており、宝の網が天蓋をなし、芳ばしい香りが風に漂っていた。天の花が雨と降り、多くの仙人、持明者が空を飛び交い、数々の美辞麗句で讃嘆していた。神変力を具えた菩薩たち、天地各層のすべての神々、人、非人神（myi ma yin）[163]、迦楼羅（かるら）、烏羅伽（うらが）[164]、緊那羅（きんなら）、畜生、餓鬼などのすべてが、恭しく法を聴聞していた。シャーキャ・ムニは法輪を転じておられ、その説かれる法を、多くの衆生が各々［の気根に応じて］理解していた。善子リンチェンはえもいわれず驚嘆し、恐れ慄いた。身体が震え、身の毛がよだつのを止めようがなく、［生死の］理（chos tshul）を質すこともできなかった。〔kna 葉裏 3 行 –khna 葉表 5 行〕

仏はそれをお察しになり、こう仰った。

「この大勢の中にいるリンチェンなる神の子よ、質したい理を私に質すがよい」

シャーキャ・ムニがそう仰ったので、神子は大勢の中から立ち上がり、右肩を出し、仏の足元に頭をつけて礼拝し、右遶三匝（うにょうさんぞう）した。それから合掌し、跪き、頭を垂れて、恭しく申し上げた。

「私の父は有体神で、名はオバル王と申します。［この世に］いましたが、寿命が尽き、体が替わりました。どうすれば［父が］以前のようになり、どうすれば［父に再］会することができるでしょうか。［それが叶わなければ、どうすれば父が］安らかになるでしょうか」〔khna 葉表 5 行 – 裏 4 行〕

［II. 説法］

［1. 死の不可避性］

リンチェンがそう申し上げると、シャーキャ・ムニが仰った。

「それがそなたが問う法であるか。よく考え、心して聴け。三界に生きるものはすべて生まれ死ぬ[165]。生まれるのはすべて業の力によって［生まれるの］であり、死ぬのもすべて業の結果である。生死法の時が至れば、天地各層の神々はすべて失墜する。大神変や強力な力があっても、［死に対しては］無力である。三界に存在するものはすべて、多少の早晩の違いはあっても［すべて命］尽き、地獄の衆生は刻一刻と増加する。そのように遅かれ早かれ死ぬのが、三界輪廻の法である。寿命が長い者は誰もが、いつも［その長寿を］誇るが、誰も皆、最後には死ぬ運命にある。〔khna 葉裏 4 行 –gna 葉表 2 行〕

---

[163] 鬼神の一種であるが、詳細は未詳。

[164] lto 'byed（khna 葉表 2 行）:「這って動くもの（skt.: uraga）」の意味で、ムカデなどの生き物を指す。

[165] ここから末尾までの内、主要箇所のチベット語テキストは「校訂テキスト（本書 186–189 頁）」に収録した。

[2. 神々の寿命の長さ]

地上の人間［の寿命］は 100 歳、四天王の寿命は、人間の 50 年を 1 日として、その 1 日を 1 月と数えて 1000 年、夜摩天は、人間の 200 年を 1 日として、その 1 日を 1 月と数えて 4000 年、化楽天は、人間の 800 年を 1 日として、その 1 日を 1 月と数えて 8000 年、他化自在天は、人間の 1000 年を 1 日として、その 1 日を 1 月と数えて 16000 年、梵衆天は半劫、梵輔天は 1 劫、少光天は 2 劫、無量光天は 4 劫、光音天は 8 劫、少浄天は 16 劫、無量浄天は 32 劫、遍浄天は 64 劫、無雲天は 125 劫、福生天は 250 劫、広実天は 500 劫、無煩天は 1000 劫、無熱天は 2000 劫、善見天は 4000 劫、善現天は、8000 劫、色究竟天は 16000 劫、空無辺処天は 20000 劫、識無辺処天は 40000 劫、無所有処天は 60000 劫、非想非非想天は 80000 劫である。

［いずれも］その寿命が尽きれば死に、長寿の神々もいつかは失墜する。誰もが最後には死ぬ。そなたの父も死んだ。すべての死は、業の力［によるもの］である。過去から蓄積された業の力を浄めるのは、非常に難しい。〔gna 葉表 2 行 –ngna 葉表 5 行〕

[3. 忌むべき葬送儀礼]

世間の誤った者（bslad pa）たちはすべて、［死に対して］害となること（gnod pa）を為しつつ、死に対して有益であらんと願っている（phan du re）。

一）ある者たちは、［屍を］火に焚（く）べ、水に捨てれば［死に対して］有益であると主張する。

二）無明で誤った者たちは、［屍を］三鈷戟（さんこげき）（ti shur）[166] の先端で担げば死に対して有益であると主張する。

三）ある者たちは、バラモンのダラニを唱えれば、死に対して有益であると主張する。

四）ある者たちは、外道（mur rdug）[167] の四法[168] を供養し、布施を捧げれば、死に対して有益であると主張する。

五）ある者たちは、アグルマ（？歌謡い）[169] の法を修し、成就すれば、死に対して有益であると主張する。

六）ある者たちは、火神（＝アグニ）の法を修めれば、死に対して有益であると主張する。

七）ある者たちは、生き残っている者（gson）の財産をすべて、屍のように地中に

---

[166] ti shur（ngna 葉表 6 行）：サンスクリット語 triśūla の音写。先端が 3 つの穂に分かれた槍（三叉槍（さんさそう）、三叉戟（さんさげき））で、シヴァ神の持ち物。シヴァ神を祀る行者たちの法具の 1 つ。

[167] mur rdug（026 行）：『御高説宝樹』（70 行）では mu stegs と綴られているが、同じである。Stein 2010（pp. 20, 32–34, 41, 53–54 など）参照。

[168] 具体的に何を指すのかは不明。

[169] a 'gur ma（ngna 葉裏 1 行）：詳細未詳。

埋めれば（ro dang 'dra bar sar snas na）、死に対して有益であると主張する。

八）ある誤った者たち（log par bslus pa）は、馬、水牛、山羊、羊をすべて死者のために屠（ほふ）るなら（srog bcad na）、死に対して有益であると主張する。

そうした教えは言語道断で、すべて間違っている。そなたは無数劫以来、菩提を希求しているいるので、今教えよう。十方を見わたせ」〔ngna 葉表 5 行 – 裏 5 行〕

［4. 仏頂尊勝ダラニ］

［シャーキャ･ムニが］そう言い終わると、仏頂（gtsug tor）[170] から多くの様々な光が現れ、三界を遍く照らした。［するとリンチェンには］無明で誤った者たち（ma rig log pa'i bslad pa）が、死者のために有益であれと願って（shi ba'i phyir na phan du re ba）、誤った法（log pa'i chos）を実践しているのが、すべて無益で有害である（kun kyang myi phan gnod pa）ことが見えた。そこで神子リンチェンは、身体を打ち（？）、礼拝し、合掌して、仏に次のように申し上げた。

「生死法を目の当たりにしました。その功徳は筆舌に尽くせません。死に対して何が薬（＝有益）なのか、仏よお説きください」

仏が仰った。

「すべての死は業の力［によるもの］である。業とはすべて、以前に行ったことである。業の力［によるもの］に対しては、有益なものは何ひとつない。しかし以前に為された害はすべて、諸々の善業によって浄めることができる。［以前に］犯した殺生は、［以後］殺生を行わず［生きものを］育む（gso ba）法界［に入ることにより、また以前に］為した誤った行いはすべて、法施（ほうせ）により浄めることができる。貪り（'dod chag）、怒り（zhe sdang）、煩悶（gdung ba）はすべて、偉大な施しによって凌駕される。神祇（lha 'dre）の力（dbang）は、［三］宝の力で制圧される（byin gyis brlabs）。かくの如く善業の実践は、死に対して有益であり、天上の神に生まれることも、すべての菩薩を感動させることもでき、あらゆる死からの解放も可能にする。その功徳は筆舌に尽くせない。［死に］対して有益な法は、過去世の無数の仏たちが、現に明らかに説いている。［死に］対して有益な法、すなわち大ダラニを実践すれば、望むところに生まれられる。〔ngna 葉裏 5 行 –kma 葉表 2 行〕

仏頂尊勝ダラニとその儀軌を定められた通りに死者のために行うなら［、次の通りである］。行者は白衣を纏い、ダラニを唱え、四角い曼荼羅を作り、様々な花や香りを捧げ、すべての如来を観想し、礼拝し、合掌し、人差し指の先端を親指で押さえてから弾くようにする。ダラニを 108 回唱える。それから清らかな白い芥子にこのダラニを 21 回唱え、それを死者の身体に振りかける。こうすることで、あるい

[170] gtsug stor（ngna 葉表 5 行）：サンスクリット語では uṣṇīṣa で、漢訳では烏瑟膩沙（うしつにしゃ）と音写される。仏の頭頂にある髻（まげ）状の肉の隆起（＝肉髻（にっけい））。

は地獄に落ち、あるいは畜生に生まれ、あるいは閻魔の世界に、あるいは餓鬼の世界に生まれたとしても、［やがて］死者は皆、悪趣から解放され、天上界に生まれる。このダラニの修法としては、聴聞、観想、読誦、［あるいは］小声で繰り返し唱え［たり？］、奉納、供養してもよい。また書写して仏塔の中に安置してもよい。あるいは高い山や家の屋上に立てられた幟の頂に取り付けられているのを目にしたり、その影、塵、風に触れるだけで、すべての災いの原因が浄められ、衆生地獄の飢え[171]、畜生、閻魔（界）、餓鬼の苦しみ（nyong mong sdug bsngal）が消滅し、短命と災難が回避でき、悪趣から遠のき、天上の安らかなところ（mtho ris bde ba'i gnas）[172] に生まれる。また誰であれ、このダラニを目にするや否や、8000 劫の間に行い、蓄積した悪業がひとつ残らず浄められる」〔kma 葉表 2 行 –khma 葉裏 2 行〕

神［子］リンチェン［の物語］終了。〔khma 葉裏 2 行〕

チョヤン（Chos dbyangs）書写、校訂（？）[173]。〔khma 葉裏 2–3 行〕〔完〕

[171] bskres（khma 葉表 5 行）：bkres と解した。

[172] 物語の冒頭（本書 34 頁）で、主人公リンチェンが亡き父王が到達してほしいと願った「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」であり、その願いは叶うことになる。

[173] zhus(?) b(-)on… //（khma 葉裏 2 行）：写本が磨耗しており、判読不能。

6. 『葬儀置換』[174]

[I] 遺体天幕（ring gur）[175] の［ダラニ聖別[176] による］置換〔表 1 葉 1 行〕

［従前の土着葬儀では、］悲しむ［死んだ］親族の苦しみを取り除くために、［遺族は葬儀の］由来［が書かれた］絹の幡（smrang dar）[177] を作って［立て］、［死者のために］絹製の中国の建物を模した見栄えのいい［遺体天幕］を建てる。遺体天幕は、様々な葬儀（shid）の飾り[178]

---

[174] 訳文は、PT 239 に基づいており、段落末尾等に〔 〕内に示したのも PT 239 の原文テキストの行番号である。また、原文には「葬儀」に相当する言葉はないが、内容をより明確に表すために補った。折本形式の PT 239 には、表面に『葬儀置換』、裏面に『死者神国道説示』という 2 つの作品が収録されている。Lalou はいち早くこの文書の重要性に注目し、裏面の『死者神国道説示』に関しては、2 本の先行研究論文を残している（Lalou 1938, 1949）。表面の『葬儀置換』に関しては、まとまった論考を発表しなかったが、Lalou がこの文書を通読して、全体像を極めて的確に把握していたことは確かである。それは、彼女が 1952 年に発表した、チベット古代土着葬儀に関連する最も重要な文書である PT 1042 の先駆的全訳注（Lalou 1952）の中で、そこに現れる未詳語彙の解釈のために、『葬儀置換』のいくつもの箇所（［II］dbon lob (p. 340, n. 1)、［III］'phru sangs (p. 348, n. 5)、［IV］skyibs lug (p. 357, n. 3)）を訳注し、参照していることからわかる。『葬儀置換』を初めて全訳紹介したのは Stein（1970）であるが、彼はこの文書を「ボンポの葬儀を仏教に適応させるために（p. 157: “s'efforcer d'adapter le rituel funéraire bon-po au bouddhisme”）」、「土着葬儀を仏教的意味に象徴的に解釈したもの（ibid.: “en les interprétant symboliquement dans un sens bouddhique”）とみなした。それゆえに、「置換、代替」を意味する bsngo ba という動詞を、「仏教の請願（skt.: *pariṇāma*, ibid.: pp. 158–159）」と解釈しており、作品全体の構成および趣旨を明確に理解していたとは言い難い。Macdonald（*ET*, pp. 373–376; 今枝 2022a, p. 52）は、Stein とは異なり、この文書の目的は土着葬儀の構成要素を批判し、それらを置換（“transposition”）して、仏教的要素によって代替することにあると理解した。御牧（2014, p. xviii）も「内容は、仏教の側から、先ず各分節の最初にボン教の儀式が批判的に紹介され、後にそれが批判される形になっている」と述べているので、同じ理解である。
この作品は、「*xx* を置換する（*xx* bsngo ba）」で始まる 6 節で構成されており、各節はまず置換対象の土着要素 *xx* を挙げ、次いでそれに代わる仏教要素を提案している。前半 3 節は物品の、後半の 3 節は葬儀に必要とされた動物の置換である。

[175] この語は、葬儀次第書である PT 1042 に何度も現れる。Lalou（1952）は、“le dais du mort”「死者の天蓋／天幕」、Stein（1970）は、“la tente du corps”「遺体のテント」と訳している。PT 1042 などによれば、この天幕（テント）には 2 種類あり、1 つが［I］の表題となっている「遺体天幕（リングル）」であり、もう 1 つがトゥクグル（thugs gur、魂の天幕）である。死者は死後、身体と霊魂が分離すると考えられており、物質的な遺体に用いられるのがリングルで、霊的な魂に用いられるのがトゥクグルである。Bellezza は、リングルに関して、「おそらく布製のテント、あるいは煌びやかな絹または好ましい素材でできた天蓋、天幕（“It is probably a cloth tent or canopy of billowing silk or some desirable material (*dar*)”）」と説明している（Bellezza 2013, p. 115, n. 128）。

[176] 聖別（あるいは聖化。英語の consecrate あるいは sanctify の訳語）は日本語では主としてキリスト教の文脈で用いられるが、「世俗的な存在」を儀礼によって「聖なる別格の存在」に変える行為を指す。厳密には一致しないが、日本仏教の儀礼における「落慶・加持」、神道では供物を神前にお供えすることで、それが浄化・聖化されることに類似する。いずれの場合にも、仏前・神前に捧げられた供物は、一旦「聖別」されると、今度はありがたい「お下がり（神道では「直会（なおらい）」）」として信者に配られることになる。チベット仏教ではこの儀式、供物、「お下がり」はすべてツォ（tshogs, Skt. gaṇa）と呼ばれる。

[177] smrang dar（表 1 葉 1 行）：Snellgrove が指摘するように、smrang は、ボン教の専門用語としては、儀礼が成立した経緯を述べることによって、その儀礼の効力を保証する「原型の提示」（“exposition of the archetype”）を指す語である（Snellgrove 1967, p. 256, n. 9; Stein 1970, p. 179, n. 23; 石川 2010, p. 57, n. 13）。これを受け、御牧は本文献の第 IV 節に登場する smrang に「起源神話」という訳語を当てている（御牧 2014, p. 99, n. 4）。本書でも、smrang は葬儀の起源や由来を語るものであると理解し、dar はそれが書かれた絹の幡であると考えた。

[178] shId yo lang gI rgyen（表 1 葉 2 行）：葬儀全体の一構成要素であるが、詳細はわからない。

と、セムシェン[179]という黒いフェルトの飾り、よい花飾りを備えたものである。〔表 1 葉 1–3 行〕

［今後の葬儀では、遺体天幕などを作らず、］神々の中の神[180]である三宝に依拠して、［それらを作るのに用いる］美しく高価な中国の絹を無駄にせず、布施して益するようになせ。

［葬儀用の品々を］神の清浄な香（lha spos gtsang ma）によって清め、神の強力なダラニ（lha sngags gnyen po）［を唱える］功徳によって[181]、死者某が、解脱神変無量宮（rnam par grol ba 'phrul gI gzhal yas khang）[182]を手に入れますように（＝に到りますように）。〔表 1 葉 3 行 – 表 2 葉 1 行〕

死者某が、万一[183]地獄に落ちようとも、憎しみの［満ちた］地獄の獄卒（dmyal srung）たるスィンポ（srin po）[184]に捕らえられませんように。地獄の苦しみを味わう一切の衆生が、大神変無量宮に入り、すべての地獄の衆生が守護されますように。〔表 2 葉 1–4 行〕

死者某が、餓鬼に生まれようとも、いかなる餓鬼の敵によっても捕えられませんように。飢えと渇き［に苦しむ］一切の［餓鬼道の］衆生が守護されますように。〔表 2 葉 4 行 – 表 3 葉 1 行〕

［死者］某が、愚かな畜生の世界に生まれようとも、いかなる畜生の敵によっても捕えられませんように。一切の［畜生道の］衆生が守護されますように。〔表 3 葉 1–3 行〕

死者某が、人に生まれようとも、いかなる人の敵によっても捕えられませんように。人にとってのあらゆる脅威から守護されますように。〔表 3 葉 3–4 行〕

［死者］某が、神に生まれようとも、阿修羅などの［神の］いかなる敵によっても捕えられませんように。神にとっての全ての脅威から守護されますように[185]。〔表 3 葉 4 行 – 表 4 葉 1 行〕

三界の一切の衆生が、あらゆる苦痛という敵によっても捕えられませんように。大解脱無量宮に到りますように。〔表 4 葉 1–2 行〕

親族たちも、栄え（bkra shis）、ますますよくなりますように[186]。〔表 4 葉 2–3 行〕

---

179 sem shen（表 1 葉 2 行）：意味未詳。

180 チベット土着の信仰における神々をも念頭に置いて、「全ての神々に勝る神」という意味であろう。

181 ［IV］葬儀の羊の置換にも同様の表現がある。

182 無量宮（gzhal myed (= yas) khang）は、天界にある神々や仏などの尊格が住まう宮殿である。それがここでは「解脱」という仏教用語と「神変」というおそらく土着の概念の 2 つで形容されており、仏教と土着宗教どちらにとっても魅力的な死者の目的地として提示されている。『死者神国道説示』に現れる「宝珠無量宮（rin po che'i gzhal myed khang）」（本書 74 頁）も同一の意図があると思われる。

183 brgya la（表 2 葉 1 行）：文字通りには「100 に（1 つの可能性）として」とある。

184 スィンポは、仏教文献ではサンスクリット語 rakṣasa（羅刹）の翻訳に当てられる。しかしこの文脈では土着のスィン（srin）魔に性別を明記するための po が付いただけで、同じく地獄という文脈で現れる『神変比丘後世教示経』78 行のスィン魔と同じと考えられる。

185 輪廻のどの境遇（趣、道）に生まれても守護されますようにと祈願する文面である。チベット仏教が典拠とする根本説一切有部の律では、天（神）趣とそれと敵対する存在としての阿修羅趣を区別しないため、全部で五趣（道＝'gro ba rigs lnga）となる。チベットで六趣（道＝'gro ba rigs drug）が主流になるのは、後伝期になり観音菩薩の六字真言の 1 字 1 字が六趣（道）から衆生を救うという教義が打ち立てられるのと関連してのことである。

186 rjes（表 4 葉 2 行）：je と解する。辞書によれば、je は “a particle, used for expressing the comparative degree of an adj. or adv., and especially a gradual growing or increase, often with terminative case or *la*”（Jäschke pp. 172–173）、“1) more; 2) becoming more and more, make more and more, that the more [they] did [vb.] this the more it [adj.] became; more”（RY）とあるので、ここでは「ますます」と訳した。以下、表 10 葉 3 行、表 15 葉 2 行、ITJ 504 表 1 葉 1 行も同様。

［II］母方親族からの餞別品（dbon lob）の[187]［ダラニ聖別による］置換〔表４葉３行〕

［人は］前世の業にしたがって、ある国に生まれ、肉によって繋がり、母方の親族関係によって結ばれて親族となる。そして、夏の植物と同じようにすくすくと育つが[188]、前世に犯した殺生（srog gcod pa'i las）の報いによって、霜が降り［夏の植物が］短かい命を［終えるように］、無常のスィン魔によって連れ去られ、愛しい親族（＝遺族）たちと離別す

---

[187] dbon lob（表４葉３行）：この語も、PT 1042 に何度も現れる。Lalou は、これを dbon lob ではなく、dpon lob と読み、dpon lob が遺体天蓋／天幕（ring gur）、魂天蓋／天幕（thugs gur）に続いて用いられ、遺体係（ring mkhan）によって剥ぎ取られる（PT 1042, l. 61: bshus）ことから、遺体を直接包む（覆う）物であったと考えた（Lalou 1952, p. 349, n. 1）。dpon lob と読んだことから、dbon に関しては何も述べていないが、lob は動詞 klub pa「身体を装飾品で覆う（“couvrir le corps avec des ornements”）」、あるいは rlubs pa「覆い、蓋（“couverture, couvercle”）」と関連付けている。また Lalou は、これに続いて『置換葬儀』に触れ、dpon lob は「友人たちの財産、豊かな家畜、愛情の証としての葬儀における儀礼品の１つ（“un objet rituel des funérailles qui est une preuve de la fortune, des riches troupeaux et de l'affection des amis”）」であると述べている。

一方、Stein は、Lalou とはまったく異なる見解を述べている。まずは、dbon は、母方の叔父を指す zhang に対する親族用語であり、甥あるいは孫を指すことを明らかにした。その上で、Lalou が dbon lob を［dpon lob と読んで］物品（“un objet”）であるとみなしたのに対して、この語が遺体天幕と並んで用いられているのは認めるが、同時に馬やヤクとも並んで用いられていることから、「親戚として扱われる生き物（“un être vivant qu'on traîte de <<parent par alliance>>”）」であることは明白であり、「生贄にされるものであることは間違いない（“Notre texte prouve qu'il devrait être sacrifé”）」と考えた。その上で、親戚は「母方の親戚（“la parenté par les femmes”）」であり、dbon lob は「生きもの」であることは確かだが、「人なのか動物なのか」と疑問を呈している（Stein 1970, pp. 180–181, n. 2）。それを受けて Heller は、「Stein は人身供儀であったとみなしたが、その役割は最も謎に包まれている（“the *dbon lob*, with most enigmatic roles, identified by Professor Stein as humans”）」と述べている。そして、墳墓には人身供儀の痕跡が見られるものもあるが、Stein が引用する中国文献によれば、生き埋めとあるので、どちらだったのか疑問が残るとしている（Heller 2006, pp. 264–265）。

確かに Tucci（*TPS*, p. 734）が紹介した文書の記述が正しければ、ソンツェン・ガンポの曾祖父に当たるドンニェン・デル（'Brong gnyan lde ru = PT 1286: 'Bro mnyen lde ru）の墓には、3 人の家臣が生き埋めにされている。さらには、『新唐書』「南蛮伝」貞元 16 年（西暦 800 年）の条には、ティソン・デツェンの養子となった南詔の王子が、ツェンポの死に伴って殉死する義務を逃れるために、中国に投降したという記事があり、母方の親族の誰かが殉死する立場にあったことも考えられる。

そのほか、褚は dbon lob を「温洛」と音写するが、注では「親族的供養品」としており、石川も「ウンロプ」とカタカナ表記し、褚と同様の見解を示している（褚 1990, pp. 736, 740, n.12; 石川 2008, pp. 178–179; 同 2010, p. 61, n. 32）。

いずれにせよ、古代チベットの葬儀においては、死者の母方親族が副葬品を提供するのが慣わしであった。その中には、遺体を直接包む（覆う）物も、死者を死者の国に誘導するための動物も含まれていたと推測できる。それらをすべて指す語が dbon lob だったのではないだろうか。本書では、chu gang（勇敢さを具えたもの＝葬儀の動物）と khrel ltas（旅立ちの必需品？）である甲冑と神変鎧（ya lad dang 'phrul gyI go ca）など、母方親族から死者へ贈られる家畜と宝物に代表される餞別品（gnyen sris）を指して dbon lob と呼ぶものと理解する。

[188] dbyar gyI ldum bu dang 'dra bar bkod bkod pa las：別の敦煌文書には、dbyar gyI ldum bu dang mtshungs te nor ma btsal bar gyI na rnyed /「夏の植物と同じく、財は求めずとも手に入る」（ITJ 740, ll. 7–8）などの表現もあることから、夏の植物が自然に育つ様を述べたものと解して、こう訳した。

る［定めである］。

［従前の土着葬儀では、］悲しむ親族は、勇敢さ［を具えたもの］（chu gang[189]＝葬儀の動物）と旅立ちの必需品（？ khrel ltas）を［提供することを］もって証とする。家畜の群れと宝物から選び出し［たもの］を[190]、勇敢さ［を具えたもの］と旅立ちの必需品として捧げる。［このように、これまでは］宝物[191]と家畜の群れから案配し、親族［から］の餞別品（gnyen sris）として贈っていた［のである］。〔表 4 葉 3 行 – 表 5 葉 3 行〕

［今後の葬儀では、動物や宝物を埋葬することなく、］仏教の三宝に依拠して、よい誓願［を立て］、仏教のよきダラニ［を唱える］功徳によって、寿命の尽きた（tshe 'das pa）［死者］某が慈しむ親族の［捧げる］甲冑（ya lad）と神変鎧（'phrul gyI go ca）［による護身に相当する加護］を手に入れますように[192]。

寿命の尽きた［死者］某が、たとえどこに生まれようとも、鞭を持つ[193]デ魔（'dre）やスィン魔（srin）、煩悩の凶器などによって捕らえられませんように。死主（'chi bdag）のデュ魔（bdud）をはじめとする三界のいかなる敵にも打ち勝ちますように。〔表 5 葉 3 行 – 表 6 葉 2 行〕

---

[189] chu gang（表 5 葉 2 行）：chab gang という敬語形とともに、「勇気、勇猛」を指す一般名詞であり、敦煌文書の、たとえば『古代チベットクロニクル（PT 1287）』の中でも、その意味で用いられている（ll. 122, 317）。しかし古代土着葬儀の文脈では、yang ba と並んで、動物が死者を誘導するに際して必要とされる資質、すなわち前者は峠を越える勇敢さ、後者は瀬を渡る度量という格別な意味がある。それゆえに、ここでは「勇気（chu gang）［を具えたもの］」すなわち葬儀の動物と理解した。Bellezza は、chab gang/chu gang の gang をおそらく sgang と理解して、「水の上（“above the water”）」と訳しているが、敦煌文書中の葬儀儀礼の文脈におけるこの用語をまったく理解していない（Bellezza 2013, p. 279）。Martin は、13 世紀に選述された仏教史書の翻訳への注記で「古チベット語では時として、たとえば馬が峠を越えて死者を運ぶ際に必要とされる「勇気」のような勇気あるいはスタミナ（“like courage or stamina, for example, the ‘courage’”）を指すように見える」と述べながらも、これは古代チベットおよびボンの葬送儀礼に用いられる難解な用語で、おそらく死者に捧げられる何らかの食べ物を指すと解釈している（Martin 2022, p. 718, n. 2830）。なお、西田･今枝･熊谷 2019 では、葬儀に必要とされた動物を「供儀獣」としていたが、これらの動物の捧げられる先が神や魔物といった超自然的存在ではなく死者であることを考慮すると、動物もまた死者への供物と考える方が良いかもしれない。また、馬に関しては殉葬されたと考える方が妥当な可能性もあり、殉葬が供犠に当たるかどうかを検討する必要も出てくる。そこで、本書では「供犠」という用語の使用を避け、今後の研究により、葬儀の詳細が明らかとなった状況下で、改めて定義することとした。なお、Dotson も葬儀文献に登場する馬が供犠獣ではないという見解を示している（Dotson 2018, p. 286）。

[190] phyugs du kyu nas drangs ste（表 5 葉 2 行）：phyugs kyu nas drangs ste と解した。また、続く内容の順序に応じて、先行する nor gyi dbyig las phyung と順序を入れ替えて訳した。

[191] nor phugs nas bkod（表 5 葉 2 行）：前出の nor gyi dbyIg las phyung と同義と解した。

[192] 西田・今枝・熊谷（2019, p. 93, 105）でも述べたように、土着要素と仏教要素の対応は具体的な物品同士のそれではない。土着要素の甲冑と神変兜に対して、仏教的要素としては、そうした武具そのものではなく、それらによって得られる護身に相当する加護が提示されている。

[193] lcag gshed（表 5 葉 5 行）：lcag は「鞭」や「杖」を指し、lcag shed で「馬鞭」を意味する（『蔵漢』p. 758）。ここでは、獄卒のように鞭を持つ魔物の姿を描写した表現と理解した。

[III]［親族からの餞別たる］穀物[194]の［ダラニ聖別による］置換〔表 6 葉 2 行〕

［従前の土着葬儀で贈られていた］死者を愛しむ親族から［の死者の］愛好する餞別品（dga' sris）と、［死者を］愛しむ兄弟姉妹［から］の餞別品（sris）を［今後の葬儀では］清浄な食べ物として［埋葬せずに］残し[195]、［それらに対して］神の強力なダラニ（lha

---

[194] 'phru sangs（表 6 葉 2 行）：この語は、PT 1042 に現れる phru stsang あるいは sprus sangs と関連付けて検討されてきた。土着葬儀の構成要素の 1 つであったことは疑いがないが、その詳細は不明である。
PT 1042 を最初に全訳した Lalou は、この文書に現れる phru stsang（ll. 12, 67, 74, 76, 78, 142）に関して、'bru stsang と読むべきか、すなわち phru を 'bru と訂正すべきかと自問し、訂正して 'bru stsang と読めば、stsang には 'bru と同じく穀物の意味があるので、2 つの同義語が連続した形になると考えた（Lalou 1952, p. 348, n. 1, 5）。その上で、当時まったく知られていなかった PT 239 では、'phru-sangs/phru-sangs が「清浄な穀物（“grain (*'phru/'bru*) pur”）」の意味で用いられていると指摘しつつも、PT 239 の綴りには戸惑わされることが多いので、この同定には慎重にならざるを得ないと躊躇した。それゆえに、論文中では訳語を出さず、phru stsang のままで通している。こうしてみると、Lalou は PT 239 の 'phru sangs を「清浄な穀物」と理解していたが、PT 1042 の phru stsang も同様に解していいかどうか躊躇していたことになる。
Stein（1970）は、Lalou の「清浄な穀物」という解釈を踏襲したが、PT 1042 には mkhan sprus bsangs（l. 60）「ニガヨモギで清め（“purification par l'armoise [ou l'encens?]”）」という表現があり、spru と 'phru の後にはともに sangs/bsang という動詞が続くことからも、spru と 'phru との間には何らかの関係があるかもしれないと述べている。しかし、これには大きな誤認がある。すなわち、spru は mkhan sprus bsangs（PT 1042, l. 60）の形で 1 回現れ、確かに続く動詞は bsangs である。しかし、phru は常に phru stsang の形で 6 回（PT 1042, ll. 12, 67, 74, 76, 78, 142）現れ、うち 4 回（ll. 12, 67, 78, 142）は gsol「捧げる」という動詞を伴っている。そして PT 1042 では、phru が sangs を伴って、PT 239 のように phru sangs という形で現れることはない。以上から、PT 1042 には捧げ物としての phru stsang と、清めに用いられる mkhan sprus sangs の 2 つが現れるが、PT 239 では、両者が混成した 'phru sangs という形になっており、この内のどちらに相当するのか、あるいはどちらでもない別のものなのかを確定することが難しいことがわかる。
Macdonald は、この文書の全体を扱うことはなかったが、'phru sangs が置換対象となる土着葬儀の要素と考えた上で、これらの旧習に関しては、「詳らかではない（“termes obscurs”）」と述べるにとどまっている（Macdonald *ET*, p. 373）。
褚（1989）は、何らの説明もなく「燻煙」と訳しているが、'phru sangs の sangs を、松柏などの香木を燻らせて、その煙を神々に捧げる「サン（bsangs）」と解したものと思われる。しかし、現在見られるサンが、古代の葬送儀礼においても行われていたという確証はないため、『葬儀置換』の 'phru sangs にこの訳語をあてるのには問題がある。
石川は「トゥサン」とカタカナ表記しているが、「トゥサン［への］改変」としていることから、これを置換対象となる土着葬儀の要素ではなく、仏教的要素とみなし、バラモン教の homa（Tib.: sbyin sreg）に同定している（石川 2010, p. 62, n. 42; Ishikawa 2012, p. 403）。確かに、本段落末尾には「穀物燻蒸などによってよく置き換えることにより（phru sangs las stsogs pas legs par bsngo pa）」と明記されていることから、西田・今枝・熊谷 2019 も石川の意見に従い、'phru sangs を仏教側が推奨する儀礼であると考えた。（西田・今枝・熊谷 2019, p. 94, n. 33）。
しかし本書では、先行研究の見解と問題点および作品の構成などを総合的に再検討し、'phru sangs を 'bru stsang と理解する Lalou の推測に従い、本段落末尾の las stsogs pas「などによって」を las stsogs pa「などを」と訂正して読み、土着の葬儀で餞別の品として捧げられていた「穀物」を指すものとして解釈を改めた。

[195] bu srIng brtse ba 'I sris dang（表 6 葉 3 行）：西田・今枝・熊谷では、末尾の並列の接続詞 dang の後に内容の欠落があると考えた（西田・今枝・熊谷 2019, p. 94, n. 34）。しかし本書では、dang を誤入とみなして削除し、bu srIng brtse ba 'I sris は、続く kha bzas gtsang mar bshams の動詞 bshams の直接目的語として解釈し、kha bzas gtsang mar の mar は gtsang ma に到格（同定）助辞（-r）が付いた gtsang mar とみなした。

sngags gnyan po）を唱え［て聖別し］、飢えた餓鬼やあらゆる貧窮した有情に対して布施をするという功徳によって、［死者］某が、神饌（lha'i zhal bzas）と甘露（bdud rtsi）を口にする力を手に入れますように[196]。〔表 6 葉 2–5 行〕

有情への虚空を満たすほどの布施により、［死者］某とあらゆる衆生が、三昧という食事やあらゆる神饌をはじめとした様々な恵みを得られますように。〔表 6 葉 5 行 – 表 7 葉 2 行〕

穀物などを[197] よく（＝よい目的のために）置換することにより、我々親族と、無数の一切の衆生が完全な安寧（bde legs phun gsum tshogs pa）を得られますように。〔表 7 葉 2–4 行〕

［IV］葬儀の羊（skyibs lug）[198] の［ダラニ聖別による］置換〔表 7 葉 4 行〕

［従前の土着葬儀では、］黒い（＝旧来の、悪なる）人の経典（myi nag po 'i gzhung）や、黒い（＝旧来の、悪なる）葬儀の流儀（shid nag po 'i lugs）、ボンの供物（bon yas）[199] 由来

---

[196] dbang thob cIng（表 6 葉 5 行）：cIng を cIg と解する。

[197] phru sangs las stsogs pas（表 7 葉 2 行）：「トゥサンなどによって」とあるが、最後の -s を取り除いて、phru sangs las stsogs pa「トゥサンなどを」と読んで、置換の対象となる土着要素とみなした（注 194 参照）。

[198] skyibs lug（表 7 葉 4 行）：Lalou は、「避難所あるいは地下骨堂の羊（“mouton de l'abri, ou de la crypte”）」と訳している（Lalou 1952, p. 257, n. 3）。
Stein は、skyibs に関してさらに詳細に検討し、PT 1042 では「掘削穴（？）あるいは少なくとも（se と関連した）墓の一区画で、skyibs lug はそこに導入される（“une excavation (?) ou en tout cas un endroit dans la tombe (en relation avec le *se*), et le mouton *skyibs lug* y est introduit”）」と記している（Stein 1970, p. 182, n. 35）。se は、葬儀関連の文書で多くの場合「四角セ（se gru bzhi）」の形で用いられ、その詳細は不明であるが、PT 1042（l. 118）によれば、墓の西部に設けられるものである。また、skyibs は、PT 1042 では skyibs tang という熟語として現れ（ll. 92, 116, 138）、tang khung（l. 93）が「窪み、穴」を意味することから、skyibs lugs は葬儀において（屠られ、あるいは生きたまま）skyibs tang（犠牲坑？）に埋められた羊という可能性が考えられる。しかしながら Stein は、訳文中では「避難所たる羊（“mouton de l'abri”）」という Lalou の訳語をそのまま用いている。
御牧は、「ボン教の儀礼を仏教の儀礼に置き換えるという意味での置換ではなく、羊をボン教の儀礼の文脈から仏教の儀礼の文脈へ置き換える、つまり「羊の［ボン教の儀礼からの仏教の儀礼への置換］の意味で考える方が妥当ではないかと思われる」として、「質」の転換とみなし、本来の廻向の意味で「守り神の羊の廻向」と、完全に仏教的な意味で解釈している（御牧 2014, p. 99, n. 2）。
Bellezza は、後世のボン教文献には chibs lug という表現があることから、羊も乗り物となると考えているが（Bellezza 2013, p. 39, n. 61: funerary sheep mount and guide)、誤解である。chibs は、敦煌文書に現れる skyibs とほぼ同音であることから、skyibs に代わってこう綴られるようになっただけで（Bellezza 2008, p. 459）、乗り物を指しているわけではない。
総合してみると、『葬儀置換』においての skyibs lug は土着葬儀における羊であり、土着葬儀次第書である PT 1042 に記載されている墓穴／犠牲坑に導入される羊とみなすのが妥当であろう。『葬儀置換』の作者は、そうした目的で用意された skyibs lug を屠ることなく、生かしておくことを提案しているのである。そうすることは、ただ単に殺生を犯さないというだけにとどまらず、それ自体が善業であるために、死者への廻向にもなりうるという二重の目的が込められている。

[199] bon yas（表 7 葉 5 行）：後代のボン教の「儀式における神格または鬼神に対する供物の総称」（御牧 2014, p. 11, n. 30）に繋がるものと考える。

譚（'dod smrang）[200]、デ魔への薫香供物（gsur）[201] の先例譚（'dod gyi rabs）に依拠して、羊は人よりも賢く、羊は人よりも力強いと言われるが［、そうではない。］一切の有情は［生前の］各々の行いによって［死後の道を］導かれるのである[202]。［したがって、］羊が［死者の］道を先導（lam drang）する必要はない。羊が岩を砕く（brag dral）必要はない。羊に道案内（lam mkhan）はできない。羊に考えをめぐらすことはできない。手のない者が矢を射ることが出来ない［のと同じである］。〔表 7 葉 4 行 – 表 8 葉 4 行〕

［今後の葬儀では、］理にかなったことを信じて、白い経典（＝仏典）や、白い人（＝仏教徒）の流儀、白い（＝仏式）葬儀のしきたり、白い神（＝仏）の教えに依拠して、冷たい鉄の手を［羊の］体内に突き刺さず、体内の熱い血を外へ流さず、心臓と五臓を掌で打ち付けず[203]、皮を肩に掛けず、白い骨を石皿で打ち砕かず、赤い肉を鍋で煮ず、［獣とは違う］高尚な人の流儀に従って、デ魔の道を行わず、スィン魔の行いをしないように。［そうすれば、］生きる［羊の］目は生き生きと、耳は敏捷で[204]、骨は［バラバラにならずに］揃っている[205]（＝殺されることがない）。神聖な草原[206] で、［羊］自ら牧草を食べさせてお

[200] 'dod smrang（表 7 葉 5 行）: 'dod は gdod ma「始まりの、最初の」と考え、'dod smrang は gdod (kyi) smrang、後続の 'dod kyI rabs は gdod kyi rabs であると考えた。Dotson（2016, pp. 78–79）によれば、smrang、rabs、lo rgyus は、危機解決の儀礼の起源を語るものであり、その有効性を保証する「先例譚（“antecedent tale”）」を指す。

[201] gsur（表 7 葉 5 行）: “burnt offerings”（RY）。

[202] 輪廻の転生先は、各人の生前の業（カルマ）によって決定されるという仏教の基本的教え。

[203] don snying smad lnga（表 9 葉 1 行）: 日本語で五臓といえば心臓も含むのと同様に、西田・今枝・熊谷 2019 では、心臓を含めた五臓と解した（西田・今枝・熊谷 2019: p. 96, n. 40）。しかし、PT 1068（ll. 54–57）の解体したゾモの各部位を取り分ける場面において、mgo brang smad lnga ni sring mo'i mchun (⇒mtshun) du bcug（頭部、胸部、五臓は妹の供物として［墓に］入れた）と述べられており、smad lnga は don snying を伴わず単独で出現しており、心臓はおそらく「brang（胸部）」に属すると思われる。これを参考に、ここでは心臓を「中心部（don snying）」、それ以外の臓器を smad lnga と称していると理解した。なお、チベット語には「五（lnga）」という数字がみえるため、「五臓」という訳語を用いたが、日本語の指し示す「五臓」とは異なる分類である点を注記しておく。

[204] dab dab（表 9 葉 3 行）: 石川は、'dab が「葉」、「花びら」「羽」に由来する擬態語であろうと推測し、「パタパタ」と訳す。御牧の訳語も「パタパタ」であり、山口は「タバタバした」をあてる（山口 1985, p. 549; 石川 2011, p. 65 n. 58; 御牧 2014, p. 103）。Stein、褚は「素早く動く様子」を表していると考え、“bien prompte”（Stein 1970, p. 163）、「扇動」（褚 1990, p. 57）と訳している。本書では、thab thab が、“flapping noise”（JV）を表すことから、「羊の耳がパタパタと動く」という表現によって、小さな音も「敏捷に」聞きつけることを言ったものと理解した。

[205] kyIl kyIl（表 9 葉 4 行）: Stein は、“bien au complet”、褚は「屈伸自在」と訳す（Stein 1970, p. 163; 褚 1990, p. 57）。石川は、kyil le（ぐるぐる）との関連から、「丸い状態を表す語が完全な欠けることのない様を示すために使われた」と考えて「満々」と訳している（石川 2010, p. 65, n. 59）。山口の「よくめぐる骨の状態で」という訳も同案から導かれたものと思われる（山口 1985, p. 549）。御牧は、文脈から擬態語と捉え、「パキパキ」という擬音語をあてている（御牧 2014, p. 103）。本書では、「群れる」「集まる」を表す 'khyil に由来する擬態語であると考え、「骨がビッシリと集まっている」様子を表し、羊を殺さずに生かしておけば、「骨がバラバラにならず揃っている」ことを述べたものと解した。

[206] spang snar po（表 9 葉 4 行）: spang は「草地、芝」を表し、snar は「白、薄紅色」を表すため、石川は「薄赤い原」と訳している（石川 2010, p. 65）。その他の研究では、特に訳注はつけられず、“une belle prairie”（Stein 1970, p. 164）、「肥美草地」（褚 1990, p. 57）、「草なびく原」（山口 1985, pp. 549–550）、「広々とした草原」（御牧 2014, p. 103）と訳されている。しかし、古チベット語文献中では spang snar は、「神聖な草地」を表し、動物が草を喰む場であり、狩りの場でもある（Dotson 2013, p. 63, n. 7）。

け[207]。〔表 8 葉 4 行 – 表 9 葉 4 行〕

［葬儀の羊を］神の清浄な香によって清め、神の強力なダラニを唱える功徳によって[208]、［死者］某が、たとえどこに生まれようとも、凶器など［によって被る］一切の苦しみから逃れ、生、老の苦悩がない永久不変の身体が手に入りますように。

葬儀の羊を［屠らず、］正しく［家畜として］残しておく[209]ことにより、親族たちも、ますますよくなり、栄えますように。〔表 9 葉 4 行 – 表 10 葉 3 行〕

［V］［葬儀の］馬の［聖馬王バラハによる］置換〔表 10 葉 3 行〕

［従前の土着葬儀では、葬儀の馬が必要とされていたが、それに代わるバラハとは］次のよう［な馬］である[210]。

むかし、［次のような］素晴らしいことが起こった。 シンハラの国より［出発して］、海の只中で船乗りを従えた頭領が船に乗っていたところ、恐ろしい夜叉である羅刹女たちに捕まった。［船乗りたちは］燃える鉄の城の中に入れられ、食べられるところであった。比類なき大慈悲の観音菩薩は、救いなく怯える頭領を目にして、恐れから救い、苦しみから解放するための方便として、悲心を備えた全知［の］バラハ（Pa la ho）という馬王に姿を変えた。［バラハは］天を鳥のように、［それは、］水鳥と同じように［飛んだ］。

恐れを知らず、力強く[211]、美徳の整った［バラハは］、9 層からなる鉄の城で、金の砂の上に転がり、身体を震わせて［いる船乗り達に］、声を満たして［こう言った］。

「助けなく、怯える［船乗り達よ、］解き放たれたい者はだれであろうと怯えずに、固い

---

[207] この節の前半部分（表 7 葉 4 行 – 表 9 葉 4 行に相当）にはパラレルな文書（ITJ 504）があるが、本書での論述にとっては必須ではないので、訳出・対照しなかった。御牧による訳注（2014, pp. 105–106）があるほか、Stein による PT 239 と ITJ 504 の対象訳も出版されている（Stein 1970, pp.162–163）。また、石川の PT 239 訳注論文には、PT 239、ITJ 493、ITJ 504 の 3 写本対照テキストと ITJ 504 の訳文が補遺として収録されている（石川 2010, pp. 69–74）。

[208] ［I］遺体天幕置換にも同様の表現がある。

[209] 原文には legs par stad pas とある。stad pa は「置く」といった意味なので、文脈からこう解釈した。

[210] 古代チベットの葬儀において、馬が葬儀に利用されていたことは、PT 1136 や ITJ 731 などに馬が死者の伴として登場し、死者を目的の地へ運ぶ役割を果たしていたことから証左される（Stein *ET*, pp. 485–491; 山口 1985, pp. 551–554; Dotson 2016, 2018, 2022）。その代替として、ここでは観音菩薩の化身である聖馬王バラハの説話が挿入されている。［V］のこの先の話は、観音菩薩の六字真言を説く大乗経典 *Kāraṇḍavyūha*（北京 784 番 ; Lalou 1953, n° 114; 大正 1050 番『大乗莊嚴寶王經』）に含まれる聖馬王物語の要約である。

[211] 'jIgs myed mthur ltan (=ldan)（表 11 葉 4 行）: Stein（1970, p. 164）は、mthur を「端綱」「手綱」「おもがい」を指す語と考え、“ayant pour bride l'absence de crainte” と訳し、褚、石川もそれを継承して「无畏辔头」、「恐れなく面懸を付け」と訳す（褚 1990, p. 58、石川 2010, p. 66）。本書では、mthur を mthu「力、力強さ」に到格（同定）助辞（-r）がついたものと考え、mthu dang ldan「力強さを具えた」の同義と解した。［II］の末尾（表 7 葉 4 行）にも bde legs phun gsum tshogs par ldan bar gyur cIg「完全な安寧が得られますように」と、同じ用例が見られる。

決心をもって私に乗れ」

頭領と船乗り一同は、その声を耳にして、たいそう喜び、全知の馬に乗り、海を越え、その恐れから解放された。［船乗りたちが］至高の菩提心を起こし、永久不変の安らかさと幸せ（bde skyid g.yung drung）［の地へと］解き放たれたのと同じように、［我々も馬王バラハによって救われるのである］。〔表 10 葉 3 行 – 表 12 葉 4 行〕

現状は、［この死者も］人の［善］業が尽きてしまって、自らデュ魔に捕えられ、若くして死に到ったのである。［それは］草の穂が、早くに枯れる［ようなものであって］、救いがなく、長く苦しみに喘いでいる。それを考慮して、［今後は］血統や名［のある］相棒（do ma）[212] であるこの天馬（gnam rta）[213] も［生け贄にはせず］、世々代々まで長く［生きる］家畜の福分として［残し、馬王バラハによって］置き換えるのである。〔表 12 葉 4 行 – 表 13 葉 2 行〕

三宝の慈悲と、大小を問わず［善］行を実践する力によって［得られる］最高の馬たる［バラハ、］あなたの功徳は、以上のようであった。［すなわちバラハの］御意は成就し、［人々は］あらゆる恐れから救われた。〔表 13 葉 2–4 行〕

［これからは仏教式葬儀によって、］身体に［生える］数えきれない毛と同じほど［豊かな］家畜と財産［に恵まれるという］幸せ（skyid spyod）を享受できますように。

恐れから迅速に救われ、一切の化生、畜生、悪趣から解放され、十方の仏国土に思いのままに到り、誤ることなく、遮られることもない神変の目によって、聖者の神変を数えきれないほど目にすることができますように。

［何ひとつ］聞き逃すことがない[214] 仏の神変の耳で、善なる仏法を余すことなく耳にできますように。

あなたの光り輝く明瞭な声を聞いて、亡くなった家族や友人すべてに会えますように。美しさと力が揃った［あなた］によって、永遠の安らぎと幸せの地（bde skyid g.yung drung gnas）に到れますように。

このように、大いなる祈願をたてる力によって、寿命の尽きた者（tshe 'das pa）も天界（mtho ris）たる解脱の地に到れますように。

喪主である遺族（yon bdag slad ma）たちも、ますますよくなり、栄えますように。〔表 13 葉 4 行 – 表 15 葉 2 行〕

---

[212] Lalou は do ma を葬儀に用いられる「良い種、血筋」の馬やヤクを指すと考えており、西田・今枝・熊谷 2019 ではそれに従い do ma を「名馬」と訳した（Lalou 1952: 349, n.4; 西田・今枝・熊谷 2019: p. 97）。しかし本稿では、do ma が “pair”（=do）を指し、人と馬の両者を意味する “companion” であると理解する Dotson を採り、訳を改めた（Dotson 2018: p. 275）。なお『チベット牧畜文化辞典』によれば、現在でも、情歌などでは良い馬を「'do ba」と表現する（星・海老原・南太加・別所（編）2020: p. 76）。

[213] gnam rta（表 13 葉 1 行）:「優れた馬」という意味であろう。

[214] sangs rgyas 'phrul gyI rna ba thos myed pas（表 14 葉 3 行）：先行研究に従い、thos「聞こえる、耳にする」の前に否定辞（ma/myi）を補い、rna ba myi (/ma) thos myed と解した。

［VI］親族からの餞別品（gnyen sris）たるヤクの［不殺生による］置換〔表 15 葉 2–3 行〕

［従前の土着葬儀では、］戦いでは[215]角が鋭く、［その］身体は輝きを放って美しく、下半身のずっしりした[216]野ヤクを、黒い（＝悪い、旧来の）葬儀（gshid nag po）での、デ魔［たる］先導役（'dre'i sna 'dren）［としてきた］。〔表 15 葉 3–4 行〕

［今後の葬儀では、ヤクを屠らず、］こうしたスィン魔の悪なる教えのすべてを、悪なる教えとして放棄し、身体の汚れと同様に洗い清め、白い（＝よい）仏教の経典や吉祥なるよい主に依拠して、悪に思いを馳せず、［ヤクに］矢を射ず、槍を投げず、［ヤクの］心臓の熱い血を口へ吹き出させず、［ヤクの］心臓と五臓[217]を掌で打ち付けず[218]、［ヤクの］赤い舌を顎へ抜き取るな。［その代わりに］広大な天の谷[219]で草の穂を食べさせて寛がせよ[220]。〔表 15 葉 4 行 – 表 16 葉 4 行〕

家畜にひどい扱いをしなかった報いとして、死者（gshin）某が、たとえどこに生まれようとも、戦いに長けた角[221]［を持ち］、決して恐れることのない、勇敢で（snying dpa'）福徳の大きな（bsod nams chen pa）、身体の美しいヤクと同様の［役目を果たす］武器（＝仏の加護）が手に入りますように[222]。〔表 16 葉 4 行 – 表 17 葉 3 行〕［完］

---

[215] thab nI ru rno / lus nI brjId bzang（表 15 葉 3 行）：thab と lus（身体）が対比されていて、前者は「角が鋭く」、後者は「輝きがよい」という構文であり、石川の「格好は角が鋭い、身体は威厳よし」という訳文はこの構文に沿っている（石川 2010, p. 68）。しかし thab には「格好」という意味は知られておらず、問題が残る。少し先には thabs la mkhas pa'I ru rnon po「方便に巧みな」「鋭い角」と（表 17 葉 1 行）いう表現があるので、ここでもそう解釈することもできる。しかし、この文脈でヤクに「方便に巧みな」という仏教的な意味合いを持たせるのは不自然である。それゆえに本書では、構文には沿わないが、原文の thab を 'thab「戦い」とみなした。

[216] 'brong stings chen（表 15 葉 3 行）：Stein は、“le grand yak sauvage «grande force»”、褚は「力強い」、「威厳がある」の意で捉え、「威严的野牦」と訳す（Stein 1970, p. 165; 褚 1990, p. 58, ibid. pp. 65–66, n. 33）。石川は、注で、「大きな（chen po）高台（sdings）、すなわち、大きく揺るぎない優れた」と説明するものの、翻訳では「ティンチェン」と、固有名詞のように扱っている（石川 2010, p. 69, n. 90）。しかし、rting pa には、「根底」「下部」の意味があり、ka rting「柱脚」や rkang pa'i rting pa「踵」などの熟語に用いられる。そこで本書では、'brong rting che と考え、「下半身のずっしりした」ドン（野生ヤク）を指すものと解した。

[217] 注 203 参照。

[218] ［IV］葬儀の羊置換における表現を参照。

[219] mkha' lung g.yang par（表 16 葉 3 行）：Stein は、「広い谷、あるいは mkhan lung g.yang sar と読めば、（ニガヨモギ？の）渓谷と谷（“dans les larges vallées [ou: les ravins et les vallées…(d'armoise?), mkha' lung g.yang par = mkhan lung g.yang sar?]”）」とする（Stein 1970, p. 166）。そして注を打ち、原文では mkha' lung「天の谷」とあるが、mkhan lung「ニガヨモギの谷」の単純な書き誤りであると考え、PT 1042 における mkhan sprus bsangs te「ニガヨモギによって清浄する」（［III］穀物置換を参照）と関連付けている（Stein 1970, pp. 184–185, n. 52）。本書では、g.yang pa を yangs pa「広い」と読み、mkha' lung は「天に近い高地」を指すものと考えた。

[220] これは、屠殺される運命にある生き物を解き放つこと、すなわち「放生（ほうじょう）（tshe thar）」であり、殺生を慎み、不殺生を実践する善業となる（Tucci 1980, pp. 176, 191 参照）。

[221] thabs la mkhas pa'I ru rnon po：注 215 参照。

[222] ［II］母方親族からの餞別品の置換における「甲冑と神変兜」の場合と同じく、ヤクの勇ましさと同等の加護が仏教によって得られると述べている。

7. 『死者神国道説示』[223]

[I. 序文]

次に、死者に清浄なる神国への道（gshin lha yul gtshang sar lam）を示す。〔裏 1 葉 1 行〕

無上の不可思議な智恵［と］神の清浄な目を具えるすべての仏陀世尊よ、思し召しください。一切の有情を、一人子のように均く加護する菩薩、大菩薩たちよ、思し召し下さい。

正しい智恵を持ち、三界のあらゆる煩悩を根本から断ち切り、2 つの偏り（＝二辺）[224] から解き放たれた高位に達した聖者たる阿羅漢たちよ、思し召し下さい。〔裏 1 葉 1 行 – 裏 2 葉 4 行〕

[II. 死期の心得]

寿命の尽きた（tshe 'das pa）汝よ、聞け。

寿命の尽きた汝には、全世界のあらゆるものの本質、［すなわち］突然の無常の時がおとずれ、かりそめの五つの集合体（＝五蘊）は崩れた。

この世界から彼岸へと向う大転生[225] の時が訪れ、［たった］一人で休む所もない道ゆきでは、衆生の守護者および帰依所としては、仏と、大菩薩と、聖者たる阿羅漢よりも偉大なものは他にいない。

それゆえ、寿命の尽きた汝は、心を迷わすことなく、悪い考えを起こさず、いかなる時にも三宝（dkon mchog gsum）を心に浮かべ、［三］宝に従い[226]、他のいかなるものに対しても思いを馳せず、心を寄せるな[227]。〔裏 2 葉 4 行 – 裏 4 葉 4 行〕

---

[223] 訳文は、PT 239 裏面に基づく。訳文の各段落末尾等の〔　〕内には、PT 239 写本上の行番号を示した。また、原文には明確な表題は記されていないが、PT 239 冒頭に「次に、死者［に対する／が辿るべき］道の説示（de nas gshin lam bstan ba'）」、末尾に「神国への道の説示 完（lha yul du lam bstan ba rdzogs so）」と記されていること、PT 37 冒頭に「次に、死者［に対する／が辿るべき］清浄な神国への道の説示（de nas gshin lha yul gtshang sar lam bstan）」と記されていることを総合して、便宜的にこう名付けた。本作品の重要性に注目した Lalou は、いち早く内容を手短かに紹介し、その後に「中央アジア思想における死者の道」と題して要訳を発表した（Lalou 1938, 1949）。
Kapstein は “The Way of the Dead” と題して、全訳しているが、世界文学体系的な膨大な叢書の中での紹介なので、注解は一切ない（Kapstein 2008）。

[224] cha gnyIs（裏 2 葉 2 行）：mtha' gnyis に類する意味であると解した。

[225] pho skyab(/skyes) chen po：pho を 'phos と解し、PT 37 の skyes を採る。'phos skyes はこのままでは理解し難いが、『三毒調伏』（本書 26 頁）の「寿命が［ほかに］移って、身体を替える」（39 行：tshe phos lus rjes）および『生死法物語』（本書 35 頁）の「寿命が［ほかに］移って、身体を替えました」（PT 218, ga 葉表 4 行：tshe 'phos lus rjes）と同義と解し、大転生と訳した。

[226] phyogs（裏 4 葉 3 行）: “to turn, evidently attached to, to adhere to”（Jäschke, p. 353）の意味を採り、「従い」と訳した。

[227] yId kyI lam ma byed（裏 4 葉 3 行）と sems kyI srang ma dod（裏 4 葉 3–4 行）は、類似の表現による言い換えであろう。

[III. 輪廻]

また、寿命の尽きた汝よ、聞け。

三界の監獄であるこの［世］において、かりそめの身体を受けて生まれるいかなる者も、最後に死から解き放たれる者は一人もいない。

ある生から次の生へと流転する生死の道は、そのように惨めなものだと心に留めておけ。〔裏 4 葉 4 行 – 裏 5 葉 3 行〕

[IV. 悪趣に落ちない心得]

[IV-1. 地獄道]

この世界の 8 万由旬の下には、大奈落の地があり、［そこでは］鉄の大地が燃えている。その上では、燃える鉄の家屋の中で、大勢の力強い羅刹（ラクシャ）によって［衆生が］何十万回も煮られ、焼かれ、切断され、切り刻まれるなどしている。［衆生は］苦しみに耐えられず、至るところで大声で叫び、すすり泣いている。このような奈落という場所があるのだから、寿命の尽きた汝よ、その道に落ちないように大いに用心せよ。

万一、そこへ落ちるのが恐ければ、その大奈落から一切を救済する者[228]、［すなわち］聖観世音菩薩という方がいるので、その御名を心に留めておけ。そして、次の誓願の言葉とダラニを唱え、加護を願え。そうすれば、その悪なる地（＝大奈落）より解放されるだろう。

完全なる慈悲によって、最上の大菩提を習得した者、［それは］すべての誤りから離れた最上の教えを大梵天の［ように美しい］声でお説きになる者、［すなわち、その］御名を耳にすれ［ば］、苦しみも怒り[229]も消え去る唯一の守護者たる、かの観世音菩薩による加護をお願い申し上げます。〔裏 5 葉 3 行 – 裏 8 葉 2 行〕

オーム　フリ［ー］　フ［ー］ン　パドマ　プリヤ　スヴァ［ー］ハー[230]〔裏 8 葉 2 行〕

[IV-2. 餓鬼道]

寿命の尽きた汝よ、聞け。

また、この世界から 500 由旬の下には、餓鬼の世界というものが［ある。そこでは］こ

---

[228] chang kyur（裏 6 葉 4 行）:「会」、「群」、「団体」を意味する chang kyu に到格（同定）助辞（-r）がついた形、すなわち「団体として」「まとめて」を表す（『蔵漢』p. 782; Li and Coblin 1987, p. 288）。ここでは、「全員」「一切」「誰であろうとみな」を意味すると考えた。

[229] zhe mdzad（＝zhi mdzad, 裏 8 葉 1 行）：語義は明確ではないが、文脈上は先行する「苦しみ」stug sngal（=sdug bsngal）と並列関係にある名詞であると考えられるため、「怒り」zhe sdang に類する語であると考えた。

[230] 聖観世音菩薩のダラニであるが、どの経典に記してあるのか未詳。サンスクリット語では、oṁ hri huṁ padma priya svāhā（Lalou 1949, p. 44）。

の上ない飢えと寒さによって苦しむ衆生が、何十万年もの間、たった一滴の唾液が垂れるほどの［わずかな］食べ物の分け前もなく、身には衣服を纏わずに［いる］。空からは鉄の硬い雹が降り、10 億年の間、嘆き声をあげている。このような奈落という場所[231]があるのだから、そこへ行かないように寿命の尽きた汝よ、大いに注意せよ。

そこへ落ちるのが恐ければ、その餓鬼道［から］一切を救済する者、［すなわち］虚空蔵（Nam ka mdzod）大菩薩という方がいるので、その吉祥なる善師を心に留めておけ。そして、次の誓願の言葉とダラニの真髄を唱え、加護を願えば、かの苦しみの地（＝餓鬼道）より解放されるだろう。

福徳と知恵の蓄積によって吉祥なるお身体にお生まれになり、虚空蔵三昧の実践を習得した者、［それは］飢えと寒さと貧しさ［に苦しむ］餓鬼を救済する者、［すなわち］守護者たる虚空蔵［菩薩］による加護をお願い申し上げます。〔裏 8 葉 2 行 – 裏 11 葉 1 行〕

オーム　ガガナ　サンババ　ザホ　ダハサ[232]〔裏 11 葉 1 行〕

［IV-3. 畜生道］

寿命の尽きた汝よ、聞け。

大海と四大洲と大鉄囲山の間の場所などに、甚だ愚かで蒙昧な善悪の動物、［すなわち］畜生の世界があるのだから、その悪道にも落ちず、［そこへ］生まれないように大いに注意せよ。

万一、そこへ落ちるのが恐ければ、その畜生道［から］一切を救済する悪趣清浄菩薩という方がいるので、その吉祥なる善師を常に心に留めておけ。そして、次の誓願の言葉とダラニを唱え、加護を願えば、そこ（＝畜生道）から解放されるだろう。

真如の力を完成させたことにより、全世界を照らす知恵の灯によって、迷える畜生道から有情を解放する者、［すなわち］守護者たる悪趣清浄［菩薩］による加護をお願い申し上げます。〔裏 11 葉 1 行 – 裏 13 葉 1 行〕

ナマ　サルバ　ドゥルガデ　バリショ［ー］ダニ　ラザヤ　ダタ［ー］ガダヤ　アリハ［ー］ディ　サムヤク　サンブダヤ　ダッド　ヤタ［ー］　オーム　ショ［ー］ダニ　サルバ　パ［ー］パ　ビショ［ー］ダニ　シュ［ー］デ　ビシュッデ　サルバ　カルマ　ア［ー］バラナ　ビシュッデ　スヴァ［ー］ハー[233]〔裏 13 葉 1–3 行〕

---

[231] 文脈上は餓鬼道を意味するが、ここでは奈落という語によって広く苦しみの境地を指していると考えられる。

[232] 虚空蔵菩薩のダラニであるが、どの経典に記してあるのか未詳。サンスクリット語では、oṁ gagana sam va vajra hodahasa（Lalou 1949, p. 45）。

[233] このダラニは、『三毒調伏』［III. 三毒各論（2）：貪欲］に用いられているものと冒頭と末尾が一致しているが、中間部がやや長い。『一切悪趣清浄タントラ』の根本ダラニを縮めたものが幾分変形したものである（今枝 2006, p. 146, n. 148 参照）。

［V. 神国（＝兜率天）道とそこでの心得］

以上のようにして、三悪趣への扉は確実に閉ざされる。

仏、菩薩などあらゆる聖者の大慈悲と、真実の言葉（bka' bden pa）[234] の加護［の下で］、残された親族たち（nyen sdug phyi ma rnams）が三宝に帰依し、正しい勇敢さ（chu gang）[235] と誤りのない福徳の蓄積によって、［死者が］安らぎと幸せに満ちた正しい神国へ到る道（bde skyid phun gsum tshogs pa'i lha yul dam par 'gro ba'i lam）［は以下の通りである。］

この世界から北方に須弥山（Ri rab lhun po）という 4 種の宝珠からなる山の王があって、その上にある善法堂には帝釈天（Brgya byin）と 32 人の大臣［がいらっしゃり］、神と人の道を示す場所がある。そこでは、その神の王（＝帝釈天）が善男子たる汝に仏教の規範を説き、福徳の力を示してくれるだろう。〔裏 13 葉 3 行 – 裏 15 葉 4 行〕

善男子よ[236]、そこより須弥山の北方の頂には、楊柳宮（Lcang lo can）という［宮殿があり、そこには］世尊・金剛手（Phyag na rdo rje）菩薩が恐ろしい数多の眷属を従えていらっしゃる。あらゆる所望が思う通りに成就するように、善男子たる汝に灌頂を与えてくれるであろう。

善男子たる汝よ、金剛手菩薩の加護によって進め。〔裏 15 葉 4 行 – 裏 16 葉 4 行〕

［そうすれば］兜率天という天界（Dga' ldan lha'i gnas）があり、そこでは釈迦牟尼の教えの後継者（chos kyi rgyal tshab）[237] である聖者弥勒（Byams pa）という方が、眷属である菩薩、ヴァスミトラやセンゲ・バルナンなど、賢劫たる 996 菩薩たちと数多の天子と［ともに］宝珠無量宮（Rin po che'i gzhal myed khang）[238]［にいらっしゃる］。あふれる天界の宝

---

[234] bka' bden pa（裏 14 葉 1 行）：必ず実現する事が約束された仏の言葉。ここでは今までの誓願とダラニの言葉が実現することを言うものであろう。

[235] この箇所は写本間で相違があるが、PT 366 に従う。chu gang は、『葬儀置換』の［II］母方親族からの餞別品の置換の節で現れた用語であり、土着葬儀における動物の「勇敢さ」を指す。「正しい「勇敢さ」と誤りのない福徳の蓄積（yang dag pa'i chu gang dang ma nor pa'i bsod nams kyi tshogs）」とは、わかりにくい表現であるが、古代チベットの葬送儀礼の文脈に即して考えれば、動物（＝「勇敢さ」を具えたもの）を屠るという殺生を行わない、すなわち不殺生という善業による福徳を指しているであろう。
Lalou は、敦煌文書の 1 つ（番号が記されていないので未詳）に、大臣の功績を述べる箇所で「chu gang というキビを植えた（“Il a planté le millet *chu gang*”）」とあることから、「一種の効能のある植物（“une plante bénéfique”）」とみなしており、まったく異なった理解をしていた（Lalou 1949, p. 45, n. 2）。
Kapstein はこの箇所を「誤ることのない福徳の蓄積、すなわち真正のガンジス川に依拠して、彼らは幸せに休む（“Relying upon these unerring accumulations of merit, the authentic Ganges, they will rest happily.”）」と訳している（Kapstein 2008, p. 22）。chu gang を「ガンジス川」とみなすのは、文脈からしても不自然であり、「幸せに」というのは、後続の「善き神国」に係る形容であって、全体として誤訳である。

[236] これまでは、死者に対して「寿命の尽きた汝（tshe 'das pa khyod）よ」という呼びかけであったが、ここからは仏典と同じく「善男子（rigs kyi bu）よ」となっていることに留意。

[237] 弥勒菩薩は、釈迦牟尼の次にブッダとなることが約束された菩薩で、釈迦牟尼の滅後 56 億 7000 万年後に我々が住む閻浮洲に現れる（下生する）未来仏であることから、釈迦牟尼の後継者とみなされている。

[238] 『葬儀置換』に現れる「解脱神変無量宮」（本書 62 頁）と同一であろう。ただしここでは弥勒菩薩が住まう「兜率天という天界」、「正しい神国」と同定されている。

物と様々な音楽、無尽の教え[239]といった想像を越えたものなど、幸せの源（skyid pa'i rgyu rkyen）となるものが揃っている。その正しい神国（lha yul dam pa）で、多くの安楽（bde dgu）を謹んで享受せよ[240]。〔裏 16 葉 4 行 – 裏 18 葉 2 行〕

善男子よ、神の境遇を喜ぶだけで事足れりとしてはならない。自分自身とあらゆる衆生が遍く苦悩を超える（＝涅槃に到る）よう努めよ。福徳と知恵の蓄積の追求においては、もう充分であるという心を捨てよ。貪欲を断ち切れ。〔裏 18 葉 2–5 行〕

［VI. 仏教徒としての心得］

一切智者の知恵を探究せよ[241]。神通力の知恵で神変[242]できるようになれ。法界から気をそらすな。発菩提心を忘れるな。ブッダの神変と加護を［他の人々にも］悉く発揮せよ。〔裏 19 葉 1–4 行〕

『神国道説示』完。オーム。〔裏 19 葉 4 行〕

---

[239] 無尽の教えとは、常に説法を享受できる世界であることを意味している。

[240] 中国・日本仏教では、弥勒信仰といえばいわゆる「下生信仰」、すなわち弥勒菩薩の出現は 56 億 7000 万年後という遠い未来ではなく、現に差し迫ったことであり、それに備えなけらばならないという、週末論、救世主待望論的な性格が強く、キリストが再来し、直接統治するキリスト教における「千年王国」に通じる点がある。しかしここに見られるのは、もう 1 つの「上生信仰」、すなわち弥勒菩薩の座す兜率天に死後生まれることを願う信仰である。この仏国土往生の信仰は、中国・日本はもちろんチベットでも阿弥陀仏の極楽往生が主流となっており、兜率天往生は稀である。この意味でも、『死者神国道説示』は初期チベット仏教における弥勒信仰の貴重な例である。

[241] P.T 239 にのみ冒頭に de nas shIn とあるが、PT 37 と ITJ 151 にはないため、誤記と判断した。

[242] 写本間で様々に綴られるが、rnam par 'phrul ba であろう。*Mvp* 767 では、サンスクリット語の vikurvaṇa（「神変、幻化」）にあてられる語であるが、まったくのインド仏教的用語としてではなく、『神変比丘後世教示経』における「神変（'phrul）」（本書 7 頁 , 注 7）と同様に、仏教以前のチベット土着宗教における意味合いを巧みに掛け合わせた表現であろう。

8. 総括 ―作品の要点、特徴、意図―

以上、敦煌出土のチベット語仏教伝道文学 7 作品の全訳を提示した。写本の欠損などにより訳出できなかった箇所も多々あり、十分に理解しきれていない部分もあるが、これからの論考を進めるために必要な全体像は得られたと思う。

7 作品は文体、内容などからして 2 つのグループに分類することができる。

一）『神変比丘後世教示経』、『御高説宝樹』、『輪廻形態説示』、『三毒調伏』
二）『生死法物語』、『葬儀置換』、『死者神国道説示』

前者は 1 行 7 音節（『御高説宝樹』の冒頭部分のみは変則的に 9 音節）で書かれており、仏教の主要点をわかりやすく述べたものである。

後者のうち、『生死法物語』は文体的には前者と同じく 7 音節で書かれているが、『葬儀置換』と『死者神国道説示』は散文で書かれた論述調の作品である。この先でも詳しく述べるが、後者の 3 作品は写本的に、そして何よりも内容的に関連・連続したものとして読まれるべきであり、『生死法物語』三部作とみなすことができる[243]。

いずれの作品も著者は明記されていない。また著作・書写年代を確定できる要素もない。しかしながら敦煌の蔵経洞（17 窟）から発見された文書であることから、十一世紀初頭に石窟が封鎖される以前の著作であることは確実である。これ以上の時代特定はできないながら、当面の我々の論考にとっては充分であろう。

グループ 一）『神変比丘後世教示経』、『御高説宝樹』、『輪廻形態説示』、『三毒調伏』

最初に注目したいのは『神変比丘後世教示経』の表題である。ここで「神変」と訳したチベット語「テュル（'phrul）」は、訳注 7 で述べた通り、サンスクリット語からの翻訳仏典では rdzu 'phrul あるいは cho 'phrul といった複合語の形で、サンスクリット語 ṛddhi（*Mvp* 966–970 etc.）、vikurvaṇa（*Mvp* 767 etc.）あるいは prātihārya（*Mvp* 72, 231–234 etc.）を訳すのに用いられ、インド仏教の文脈における人間の能力を超えた神変力、神通力を意味している[244]。しかしテュルには、仏教が伝来する以前から存在していたチベット固有の意味があり、外来のインド的能力を訳出するにあたってこの言葉が当てはめられたにすぎない。

---

[243] 今枝 2006, pp. 108–113; 西田・今枝・熊谷 2019.

[244] 'phrul と同類語である sprul は、仏の三身（skt.: tri-kāya; tib.: sku gsum; *Mvp* 115）の内の化身（skt.: nirmāṇa-kāya; tib.: sprul sku; *Mvp* 118）を指す場合にも用いられる。しかしながら、この場合の化身は純粋に仏教教学上の用語であり、後にチベット仏教の最大の特徴となる社会・宗教制度上の化身とは本質的に異なるものであることには注意を要する。Schaik 2013（p. 234–235）は、'phrul gyi byig shu を「賢い僧侶（the Wise Monk）」と訳しているが、これではこの表現の真意を伝えているとは言えない。

仏教の影響がまったく ―少なくともあまり― 見られない敦煌文書や古代碑文などに現れるテュルは、神でありながら人間社会の君主として降下した古代チベットの皇帝であるツェンポ（賛普）の資質の 1 つであり、ツェンポは 'phrul gyi lha btsan po「神変の神たるツェンポ」（チベット語文と漢文が対照されている碑文などでは「聖神賛普」[245]）と称されていた。このテュルは、変幻能力といった身体的なことだけに限らず、人間を超えた知性をも表している[246]。

また同じく表題中の「比丘」は、すでに訳注 8 で記したように、PT 640 が唯一サンスクリット語 bhikṣu を dge slong と意訳しているほかは、すべての写本が byig (b)shu と音写している[247]。当然のことながら、dge slong というチベット語はインド仏教伝来以前には存在しておらず[248]、当初はサンスクリット語を音写するほかには術がなかったのであろうが、当然のこととして音写では意味が伝わらなかったことも事実である。しいて例えれば、キリスト教が日本に伝来した初期に、宣教に従事した神父のことを、それを意訳せずに、ポルトガル語 padre を音写した「伴天連（ばてれん）」と呼んだことに通じる。この言葉は、当時の日本人には全く不可解であったが、異国的な響きで、どこか神秘的であり、畏敬の念さえ抱かせたであろう。「比丘」も同じように機能したことは想像に難くなく、ましてやそれに「テュル（神変）」というチベット人には馴染みのある形容詞が冠せられて「テュル（神変）のビクシュ」となれば、なおさらであろう[249]。これを考慮すると『神変比丘後世教示経』という表題は、当時のチベット人の目には、畏怖の念を抱かせる効果的なものであったことが理解できる[250]。この権威づけのもと、造墓も 1000 年分の食料を副葬品として捧げる

---

[245] 例えば有名な唐蕃会盟碑。

[246] 今枝 2022a, pp. 9–16 参照。

[247] 漢訳仏典でも同様に、bhikṣu（パーリ語では bhikkhu）は比丘と音写されただけで、意訳はされなかった。漢訳仏典を継承した日本仏教もそうであることは言うまでもない。

[248] dge slong という用語に関して、『バシェー』は次のような興味深い話を伝えている。（fol. 14 v, l. 7）bod la dge slong gi ming yang ma mchis pa las dba' lha btsan ban dher phyung nas（fol. 15r, l. 1）ming yang dba' dpal dbyang su btags / “Whereas even the word Dge slong did not exist in Tibet, when Dba' Lha btsun became a Buddhist monk, his name too changed to Dba' Dpal dbyangs.”（Doney 2020, pp. 126–129）。『バシェー』には広略いくつもの写本が知られているが、それらに関しては Doney 2020, Chapter 1. The Testimony of Ba: Literature and Examples（pp. 3–23）参照。

[249] 『三毒調伏』で naraka が意訳されずに、na rag と音写されていることも同様の例と言える。日本語でも、「地獄」という訳語があるにもかかわらず、「奈落（ならく）」という音写が並行して用いられ、ある意味では後者の方が、意味がわからない不気味な音であるがゆえに、一層恐ろしいものとして響く面がある。

[250] Schaik 2013（p. 231）は、ITJ 1746 に関して、それが古い文書である証拠として、サンスクリット語の buddha が、後に定着することになる意訳の sangs rgyas ではなく、'bu' dha と音写されていることを挙げている。この場合には、写本の形態、字体などと合わせて、音写であることが、意訳語が定着する以前のものであることの根拠として挙げることは妥当と思われる。しかしながら、『神変比丘後世教示経』の場合、作品群全体としては byig (b)shu という音写が dge slong という意訳と並んで用いられており、音写をもって文書の古さの根拠とはならない。もっとも、byig (b)shu という音写が、必ずしもその響きの効果を狙った意図なものではなく、音写と意訳が併存し、併用され続けていたと考えられなくもない。

ことも無益であり、殺生はデ魔の為す行いであるため、慎まねばならないと説く。そして、善業だけが死後の道連れとして有益なものであり、それを説く神変比丘の教えに耳を傾ければ、死者は神［国］道（lha lam）を辿り、幸せ（skyid pa）になれると結んでいる。

作品の文体からは、表題に「経」、尾題には「説示」という言葉が用いられることからして、「仏」に代わって「神変比丘」が説いた経典という体裁となっており、一種の「偽経」とみなすことができるであろう。偽経は中国仏教には数多く存在するが、チベット仏教では存在せず、この作品は前伝期における非常に稀な例であるが、後伝期には伝わることがなく、後世編纂された大蔵経の仏説部であるカンギュルにも収録されていない[251]。

次の『御高説宝樹』は、誰が説いたものかは明記されていないが、「御高説（bka'）」と敬語表現が用いられていることからして、高位の人の教えとして権威づけされている。内容的には、死がいつ訪れるかもしれない人生の儚さを説いた上で、善業、殊に十善の重要性を強調し、その実践により死後、三悪趣に落ちないようにせよと説く、仏教的には極めて基本的かつ初歩的な教えを説いた作品である。同時に、外道のボンの占いに頼ったり、デュ魔、ゲク魔を敬わないようにと戒めている。

『輪廻形態説示』と『三毒調伏』も、著者・説者に関しては明記されず、輪廻の有様をより具体的に、そして悪趣に落ちる原因である三毒すなわち貪欲、瞋恚、愚痴をダラニによって滅することを説いた作品である。

この 3 作品は、仏教の基本的教えを初心者向けにわかりやすく説いたものである。しかし文体的には論書、注釈書といった論述調の自己完結型のものではなく、読み手に対する戒め、推奨であり、まさに伝道、改宗を目的としたものと言える。

以上のグループ一）の 4 作品の要点をひとまずまとめてみると次のようになる。

様々な生き物の中で、人間として生まれることは珍しく、貴重である。しかし人生は短かく儚い。死がいつ訪れるかわからず、誰ひとりとして死を免れられない。死期には親族も友人も、財産も権力さえも助けにはならず、一人で死後の旅路に向かわなければならない。死後の境遇に関しては、善趣と悪趣の 2 つがある。誰もが願うのは善趣に赴くことであり、避けたいのは耐え難い苦しみが待ち受ける悪趣である。そのどちらに赴くかを決めるのは、生前の行いの善し悪し（善業・悪業）である。それゆえに悪業の原因となる三毒（貪瞋痴（とんじんち））を克服し、十善に励むことが大切である。

ここで説かれることは、基本的には、十善、孝行といった道徳的な教えであり、当時のチベット人にも素直に受け入れられるものであった。輪廻の善趣・悪趣という考えはインド仏教固有のもので、未だ仏教徒ではなく、まったく異なる世界観を持っていた当時のチベット人には馴染みがなく理解できなかったと思われる。それゆえに、その詳細には立ち入らず、基本的なことが説かれているだけで、悪趣を避け、善趣に到ることができるとい

[251] もう一つの『生死法物語』も同じく「偽経」でチベット語カンギュルには収録されていないが、モンゴル語カンギュルの一写本には収録されていることが報告されている。詳しくは「12.『生死法物語』のモンゴル訳」（本書 107 頁）参照。

う輪廻の肯定的側面が前面に押し出されている[252]。こうして見ると、これら 4 作品は、1549 年から 2 年間日本に滞在したフランシスコ・ザビエル（1506–1552）をはじめとするイエズス会宣教師たちが、日本にキリスト教を布教するために用いたカトリック教会の教理書『ドチリナ・キリシタン』の、チベットにおける仏教版とも言うべきものである。

全体の特徴としては、以下の 3 点を挙げることができる。

1）ダラニ（真言）の重要性

三毒（貪瞋痴）を克服する手段としての具体的な実践、修行は何も説かれず、三毒の各々に対して次の 3 つのダラニが挙げられている。

1）貪　『一切悪趣清浄タントラ』の根本ダラニ
2）瞋　『大乗荘厳寶王経』の観音菩薩のダラニ
3）痴　『知恵流星』のダラニ

この内、『知恵流星』のダラニには観音菩薩（アヴァロキテーシュヴァラ）の名前の一部であるアバローキタと、その最も良く知られた六字真言（オーム　マニペメ　フーン）中のマニという言葉が含まれていることから、観音菩薩との関連が考えられる。数多くあるダラニの中から何故これらの 3 ダラニが選ばれたのか、またどういう理由から各々が三毒の内の 1 つの毒にあてられたのかは、仏教教義的観点からは興味深い問題であるが、本書の考察範囲を超えたものであり、今後の研究による解明に委ねることにしたい。

いずれにせよ、この 3 つのダラニを唱えること以外には、難しい修行などには一切触れず、仏教という外来の新宗教の初歩的で中核的な教え、考え方をわかりやすく、しかも魅力的に紹介している。

2）究極目的：神国での安らぎと幸せ

全体からすると、これらの作品の関心は、人が生きている間のことよりも、むしろ死後の境遇、死者のたどり着く先にあったと言える。ダラニは、死者が悪趣に落ちることなく、善趣に生まれるための手段として重要視されている。『神変比丘後世教示経』（185 行）は、「誰であろうとも、この教え（＝仏教）を守って実践すれば、神［国］道を得て幸せである」で終わっており、『三毒調伏』（47–48 行）にも「白い法（＝仏教）によって、親族を神国、

[252] Kapstein は、敦煌文書からは古代チベットにおいて仏教の業（karma）と輪廻（saṃsāra）の教義が積極的に説かれていたことが窺えると述べている（“the Dunhuang Tibetan documents provide striking evidence of the active promotion of the Buddhist teachings of karma and saṃsāra among the Tibetans during the last centuries of the first millenium.”: Kapstein 2000, p. 34）。Tucci も、前伝期においては業、十善、輪廻といった教えが強調されていたことを述べている（Tucci 1980, p. 8）。

すなわち安らかで幸せな国に遣れ」とあるように、究極目的は死後の「安らぎと幸せ」であり、それが享受できるのは神国すなわち仏国である[253]。この「安らぎと幸せに満ちた」「神国」が具体的に何なのかは、「二部　古代チベットの葬送儀礼とその変容」で述べることにする。

3）土着葬送儀礼での動物殺生批判

『三毒調伏』（39–46 行）には

> 「愛しい親族は寿命が［他へ］移って、身体を替える。生きている者（＝遺族）は誤ったこと（＝葬儀）をするな。死者のために罪を振り向けるな。［死者に］有益であれと願って害をなすな。［それは］闇の上に暗闇を重ね、無力な上に重荷を背負うことになる。誤った行為［である］殺生を行うことによって、［死んだ］親族を奈落に送り届けるな」

という一節が見られる。

ここでは、具体的には何が誤った葬儀なのかは特定されていない。しかし、仏教伝来以前から古代チベットで営まれていた葬儀においては、ボンやシェンと呼ばれる司祭者が重要な役割を果たしており、動物が必要とされていたことが他の敦煌文書からわかっている[254]。そうすると、ここで誤った葬儀として批判の対象になっているのは、『御高説宝樹』（69–77 行）で言及されているボン、すなわち「外道のボン」が関与する葬儀であったことは疑いの余地がないであろう。この批判、そしてそれに対する仏教の代替・置換は、続くグループ 二）の作品、就中『葬儀置換』で一層具体的に展開されることになる。

グループ 二）『生死法物語』、『葬儀置換』、『死者神国道説示』

まずは、この 3 作品の中で量的に最も大部であり、文芸技巧的にも手の込んだ『生死法物語』の概要を少し詳しく検討してみることにする。

1）『生死法物語』

―あらすじ―

物語は神々の国を舞台として展開する。長寿を誇る神々は、自らに死が訪れるとは思っていなかった。そこへ全く予期せずオバル（光炎）王が急逝し、息子のリンチェンは当惑し、悲嘆した。ところが、大神変（'phrul chen）ドゥタラは、

---

[253] これがまさしくグループ 二）の最後の『死者神国道説示』のテーマである。

[254] 最も知られたものとしては土着葬儀次第書である PT 1042。

「私は生死が存在するのは知っているが、何が有益なのかは知らない。生死の理を尋ねたければ、彼方に神々の主である三界神変（khams gsum 'phrul pa）という名の大神変力尊者が座すので、彼に質して、考え、理解せよ」

と諭した。そこでリンチェンは、父王を「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」に送り届けるための手段を求めて、三界神変尊者のところに赴いたが、その彼も

「その理は、私にはわからない。それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない」

と答えた。そこから二十数名の師を訪ね歩くリンチェンの長い巡礼が始まる。その最初が地下鬼神主（sa 'og lha 'dre rje）であり、次が虚空大力（bar snang dbang chen）、そして最後がシャーキャ・ムニという設定である。

ここで注目したいのは、最初の 3 師の名前に含まれる要素すなわち三界、地下、虚空である。仏教的文脈では三界は欲界、色界、無色界であるが、同じ三界でもチベット土着の文脈ではまったく異なった上下三区分、すなわち神々の住まう天界、神祇（lha 'dre）が住まう地下界、そして人間も含めた様々な生き物が住まう地上も含んだ虚空である[255]。この点を踏まえて物語を通読すると、リンチェンはチベット的世界観における全世界をめぐることになる。

しかしこの長い巡礼の旅でも、亡き父オバル王を「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」に送り届ける術を教えてくれる師には出会えず、リンチェンは最後にシャーキャ・ムニのもとに到る。このシャーキャ・ムニこそが、偉大なテュル（'phrul）を具えた師であり、他のいかなる師も「それは生死法である。生死物語は非常に深淵であり、私にはその理はわからない」としか答えることができなかった問題への解決策を授ける師として登場する。シャーキャ・ムニは、まずは死が避けられないものであることを説き、次いで世間で行われている葬送儀礼を列挙し、それらが誤りで無効であると主張する。そして最後に、「［死に］対して有益な法は、過去世の無数の仏たちが、現に明らかに説いている。［死に］対して有益な法、すなわち大ダラニ（＝仏頂尊勝ダラニ）を実践すれば、望むところに生まれることができる」と宣言し、その儀軌を要約すると同時に、その功徳を述べる。これが『生死法物語』のあらましである。

―仏典としての構成要素―

この物語を通読すれば即座に、幾つかのインド仏典が構成要素として用いられていることがわかる。仏典のチベット語への翻訳は、ティソン・デツェン（742 年生、756 年即位、800 年頃没）治世下に仏教が国教として採用され、サムエ寺院が建立されてから国家事業として行われた。主としてサンスクリット語（時としては中国語）から行われたが、9 世

[255] Stein 1993, p. 28 参照。

紀前半に編纂された『デンカルマ（*Ldan dkar ma*）目録』[256] には既に 736 点の経典名が記載されていることから、これがいかに大規模な事業であったかがわかる。その内、『生死法物語』の構成要素としてはっきりと同定できるものは以下の 3 点である。

a)『入法界品』

もっとも重要な素材は、『華厳経』[257] の一部を構成する『入法界品』[258] に展開される善財童子（skt.: Sudhana; tib.: Nor bzangs）の広大な求法巡礼記である[259]。このテーマが、古代チベットにおいてもよく知られていたことは、チベット初の仏教寺院であるサムエ寺の壁画に描かれていたことからも窺える[260]。『入法界品』の善財童子は、『生死法物語』では神子リンチェンに置き換えられ、大幅に縮小されつつ、見事にチベット化されている[261]。リンチェンが訪ねる二十数名の師が説く内容は、あまりに抜粋、凝縮されているために、ほとんど意味がなく、巡礼物語の潤色的な役割しか果たしていない[262]。しかしながら『生死法物語』を語り物として魅力的なものにするのには大いに役立っていることは間違いない。

---

[256] Lalou 1953 参照。前書きに記されている「辰（'brug）年」が 812 年なのか 824 年なのかについては、現在でも決着を見ていない（山口 1985a 参照）。また、続いて編纂された『パンタンマ（*'Phang thang ma*）目録』（731 点を収録）に関しては、Halkias 2004 や川越 2005 参照。さらに続いて『チンプマ（*Mchims phu ma*）目録』も編纂されたことが伝えられているが、この目録は少なくとも現時点では発見されていないので、散逸したものと思われる。

[257] 北京 761 番：skt.: *Avataṁsaka*; tib.: *Phal chen*; 大正 279 番（通称『八十華厳』。他にも異訳として、大正 278 番『六十華厳』がある。Lalou 1953, n° 17）。

[258] skt.: *Gaṇḍavyūha*; tib.: *Sdong po bkod pa*（Lalou 1953, n° 24）。日本でもよく知られているこの経典に関しては、梶山 2021（サンスクリット語からの全訳注）を参照。なお、Peter Alan Roberts による英訳が 84000 上に公表されている。

[259] チベット大蔵経に収録されている『入法界品』の文面と『生死法物語』に引用・抜粋された文面の間には、語彙、順序などにかなりの隔たりがあることから、『入法界品』にはいわゆる「異訳」があったのではないかということが、チベット語訳経史の観点から様々に論議される（Jong 1984; Steinkellner 1995 参照）。仏教学的には興味深い問題ではあるが、我々の課題には直接関係しないため、細部には立ち入らないことにする。

[260] 『バシェー』（Stein 1961, p. 37）には、以下のように記されている。
（l. 15）nang du mdo stug po brgyan pa'i rgyud ris dang nor bu bzang（l. 16）po dge ba'i bshes gnyen brgya rtsa bcu gnyis brten pa bris so /（中には『入法界品』のテキストと善財童子による 112 善知識巡りが描かれている）
経典名が *Stug po brgyan pa* となっているが、これは *Sdong po bkod pa* に他ならず、全知識の数が 112 と誇張されているものの、間違いなく善財童子の求法物語を表す壁画である。『入法界品』は、その最後で普賢菩薩が善財童子に対して説いた普賢菩薩行願讃（skt.: *Âryabhadracaryāpraṇidhāna*; tib.: *Bzang spyod smon lam*）がことに有名である（梶山 2011 下 , pp. 342–352）。敦煌文書中にこの経典のチベット伝来に関する伝承が見つかっていることからも、古代チベットで既にかなり流布していたものと思われる（Schaik and Doney 2007 参照）。また、スピティ谷に現存するタボ（Rta pho）寺院は、古代吐蕃王国の王家の末裔であるグゲ（Gu ge）国王イェシェ・ウー（Yes shes 'od）の代理としてリンチェン・サンポ（Rin chen bzang po）が 996 年に建立したとされるが、ここにも善財童子の求法物語が壁画として描かれていることから、長きに渡りこの経典が信奉されていたことがわかる（Steinkellner 1995 参照）。

[261] 詳しくは、今枝 2006（pp. 85–101）参照。

[262] 該当する部分を比較すると、散文の『入法界品』は北京版大蔵経では大判 195 葉の長さをもつが、韻文の『生死法物語』は小判 30 葉程に大幅に短縮されている。凝縮の度合いや両者の文体、内容の相違は、今枝 2006（pp. 93–101）に詳しい。

b)『較量寿命経』

またシャーキャ・ムニの教えの中で、神々の寿命の長さが様々述べられているが、これらは明らかに『較量寿命経』[263] や『阿毘達磨倶舎論』[264] に説かれるものである。この場合、『入法界品』の巡礼物語の場合のように翻案ではなく、多少の異動はあるが文面通りの引用である [265]。

c)『仏頂尊勝陀羅尼』

『生死法物語』では、シャーキャ・ムニは忌むべき葬送儀礼の列挙に続いて、仏頂尊勝ダラニ[266] による葬送儀軌を簡略に述べる。これは『仏頂尊勝陀羅尼』[267] に説かれる儀軌全体からのごく一部[268] の抜粋・凝縮である。

―物語の設定とそのモデル―

本作品はサンスクリット語からの翻訳という体裁をとっているが、様々な観点からして、チベット人による著述であり、いわば漢訳仏典における「偽経」に相当する。

物語は、主人公たる神子リンチェンが、急逝した父オバル（光炎）王を死後安らかなところに送り届ける方策を求めて求法巡礼に旅立ち、その最後に仏頂尊勝ダラニが説かれるという展開になっている。そこで、この設定のモデルとしては、物語の帰着点である仏頂尊勝ダラニが説かれている『仏頂尊勝陀羅尼』が第一の候補として考えられる。この経典の舞台は『生死法物語』と同じく神々の国で、主人公の善住（skt.: Supratiṣṭhita; tib.: Shin tu brtan pa）はリンチェンと同じく神子である。善住は夢の中で「汝は 7 日後に死に、そ

---

[263] 北京 973 番：*Tshe'i mtha'i mdo*; skt.: *Âyuṣparyanta*; 大正 759 番（Lalou 1953, n° 284）。なお、Bruno Galesek による英訳が 84000 上に公表されている。

[264] 北京 5590 番：*Mngon pa mdzod*; skt.: *Abhidharmakośa*; 大正 1560 番（Lalou 1953, n° 686–691）. ヴァスバンドゥ（世親）による部派仏教の教義体系をまとめたこの古典的論書の解説・和訳は桜部・上山 1969 参照。

[265] しかしながら、現在のチベット大蔵経に収録されているテキストと完全には一致しない。これは「異訳」の存在といった問題ではなく、敦煌写本全体にいえる特徴として理解される。

[266] サンスクリット語 dhāraṇī で、漢訳では一般に陀羅尼（だらに）と音写されるが、総持（そうじ）、能持（のうじ）などと訳される場合もある。チベット語では gzungs（*Mvp* 746）、gzungs sngags（*Mvp* 4239）と訳される。本書では、サンスクリット語のカタカナ表記ダラニを当て、経典名に漢訳を用いる場合に限って漢字音写「陀羅尼」を用いた。また日本の仏教用語では、ダラニと真言は区別して、真言はサンスクリット語の mantra（tib.: gsang sngags）に対応する。しかしながら、チベット語ではダラニにもマントラ（真言）にも、同じ sngags という言葉が用いられていることからもわかるように、両者は明確には区別されない。本書では観音菩薩の六字真言（yi ge drug pa）の場合のように、すでに熟語として定着している場合を除いては、すべてダラニとした。

[267] 北京 198 番：*Gtsug tor rnam rgyal gzungs*; skt.: *Uṣṇīṣavijayadhāraṇī*; 大正 971 番（Lalou 1953, n° 348）. 北京版には全部で 5 訳あるが、前伝期の訳はこの 1 点のみである。詳しくは今枝 2006（p. 143, n. 125）参照。なお、この『仏頂尊勝陀羅尼』のチベット語訳 5 点については、Catherine Dalton と Patrick Lambelet による英訳が 84000 上に公表されている。

[268] 北京 7 巻、168 頁 5 葉～ 168 頁 4 葉まで。

の後、様々な苦しみを味わうことになる」と告げられる[269]。この夢告に動転した善住神子は、インドラ神のもとに駆けつけ、救いを求める。しかしインドラ神は、自らはこの状況を打開する解決策を持たず、ブッダに向かって「善住神子に慈悲を垂れたまえ」と嘆願する。そこでブッダは善住神子に仏頂尊勝ダラニを授け、その功徳と儀軌を説いて、彼を救うという展開になっている。

両者共に仏頂尊勝ダラニが帰着点であることは共通しているが、『生死法物語』はリンチェンが死んだ父王のための求法物語であるのに対して、『仏頂尊勝陀羅尼』では 7 日後の死を夢告された善住が自らのために求法しており、物語の構成という点では本質的に異なっている。

次に物語の設定モデルとして思い浮かぶのは『仏頂尊勝陀羅尼』そのものではなく、「すべての悪趣を完全に清浄にする」という副題[270]を持つ『一切悪趣清浄タントラ』である。この仏典は『仏頂尊勝陀羅尼』がさらに発展し、密教（タントラ）化したもので、その根本ダラニが『三毒調伏』と『死者神国道説示』に用いられていることはすでにみた通りである。また関連する写本が敦煌文書中に相当数発見されていることから、チベットでかなり流布していたことが窺える[271]。このタントラの設定は、無垢宝珠光（skt.: Vimala-maṇi-prabha; tib.: Nor bu dri ma med pa'i 'od）という神が急逝し、三十三天から無間地獄に落ちることから始まる。まったく予期せぬこの事態に、インドラ神をはじめとする神々が、ブッダに向かって「彼はいかにしてこの一連の苦しみから救われるのか。いかにして、苦しみの累積から解き放たれるのか。尊者よ、彼を救いたまえ」と嘆願する。それに応じる形でブッダが説いたのが、『一切悪趣清浄タントラ』であり、これによって無垢宝珠光は無間地獄から救われる。

2 つの設定では、実際に死んだ 2 人の主人公が、死後の苦しみから解放されるという点が共通している。すなわち『生死法物語』では急逝したオバル（光炎）王を、死後安らかなところに送るために説かれるのが仏頂尊勝ダラニであり、『一切悪趣清浄タントラ』で

---

[269] 7 日後の死の夢告というテーマは、他の仏典にも見られる。例えば『仏頂無垢陀羅尼』（北京 206 番：*Gtsug tor dri med gzungs*（略題）；大正 1025 番（Lalou 1953, n° 355））では兜率天に住む神の 1 人である無垢宝珠心（skt.: Vimala-maṇi-hṛdaya; tib.: Nor bu snying po dri ma med pa）が 7 日後に死ぬとの夢告を受けて動揺し、インドラ神に救いを求める。そこでインドラ神が無垢宝珠心を連れてブッダのもとに赴くと、ブッダは延命に効果がある仏頂無垢ダラニを説くことで、この危機的状況から無垢宝珠心を救うのである。また同テーマは、所作タントラに属する他の経典、すなわち『無垢浄光大陀羅尼経』（北京 218 番：*'Od zer dri med gzungs*（略題）；大正 1024 番）中にも見られる（高田 1972, p. 6 参照）。これらはいずれも、延命に効果があるとされるダラニである。

[270] 『仏頂尊勝陀羅尼』の正式表題は、*'Phags pa ngan 'gro thams cad yongs su sbyong ba gtsug tor rnam par rgyal ba she bya ba'i gzungs*、『すべての悪趣を完全に清浄にする仏頂尊勝と名づける聖なるダラニ』。

[271] 今枝 2006（p. 146, n. 152）。Kapstein によれば、古代チベットにおいては大日如来／毘盧遮那仏信仰が主要な潮流であったが、その根拠となる経典の 1 つがこのタントラであった（Kapstein 2000, pp. 61–63）。『バシェー』には「吉祥大日如来悪趣清浄曼荼羅が建立された（dpal rnam par snang mdzad ngan song sbyong ba'i dkyil 'khor du bzhengs so）」とあり（Stein 1961, p. 37）、サムエ寺院においてもこのタントラに依拠した Sarvavid-Vairocana（tib. Kun rig）の曼荼羅が描かれていたことが知られている（田中 1987, pp. 117, 170 参照）。こうしたことから、このタントラが古代チベット仏教において重要な位置を占めていたことがわかる。

は同じく急逝し、無間地獄に落ちた無垢宝珠光がこのタントラの根本ダラニ[272]によって救われる。さらには、両主人公の名前すなわちオバル（光炎）王と無垢宝珠光に「光」という要素が共通している。Kapstein[273]も示唆しているように、これらの点は、単なる偶然の一致、共通点ではなく、『一切悪趣清浄タントラ』が『生死法物語』の構想の源、題材となったことを示唆していると考えることができるのではないだろうか。

―神子リンチェンとそのモデル―

『生死法物語』の主人公たるリンチェン（Rin chen）に関しては、『一切悪趣清浄タントラ』に登場する無垢宝珠光の名に「宝珠（skt.: maṇi; tib.: nor bu; 漢訳 : 摩尼）」という要素が含まれていることが注目される。なぜなら、rin chen は一般的にはサンスクリット語 ratna に該当するが、ratna も maṇi も共に「宝、貴重なもの」を意味する言葉であるため、*Mvp* などによってサンスクリット語・チベット語の対訳用語が決定される以前は、maṇi の訳語に rin chen があてられていたとしても不思議ではないからである。この推測が正しければ、リンチェンがこうしたインド仏典中の maṇi を含む人物名に発想を得て創案されたと考えることも決して不自然ではないだろう[274]。

---

[272] 今枝 2006（p. 146, n. 148）に全文が収録されている。

[273] Kapstein 2000, p. 206, n. 20; ibid., 2003, p. 764, n. 55.

[274] リンチェンという名前に関して、Stein は「『生死法物語』は『入法界品』の翻案であるが、後者の主人公である善財（skt.: Sudhana; tib.: Nor bzang(s); *Mvp*. 5500）の名前が、後者では Rin chen lags となっている」と指摘した上で、「今枝が Rin chen lags の［lags を省いて］Rin chen としているのは誤りである。lags を legs に改めれば、Rin chen legs となり、「Sudhana」の中国語訳である「善財」に合致する」と述べている（Stein 2010, p. 40）。それを受けて、Scherrer-Schaub（Stein 2010, p. 40, n. i）は、「［Rin chen lags ではなく Rin chen legs であり、］Rin chen legs は Nor bzang と同じく、サンスクリット語「Sudhana」の直訳である」と追注している。Kapstein は、おそらく Lag (/Phyag) na rdo rje（skt.: Ratnapāṇi, 金剛手）を念頭に置いて、Rin chen lag（skt.: Ratnapāṇi, “Jewel-in-hand”）が正しい形であると考えた。しかし Stein の考えにある程度の蓋然性を認め、その場合には Rin chen legs はサンスクリット語「Sudhana」からの訳ではなく、中国語訳「善財」からの重訳であろうとしている（Kapstein 2000, p. 206, n. 21）。
これらの同定は、『生死法物語』が『入法界品』の翻案であり、『入法界品』の主人公 Nor bzang が『生死法物語』の主人公 Rin chen のモデルであることを前提としているが、この前提は必ずしも妥当ではない。『生死法物語』を俯瞰した場合、この物語が『入法界品』の単なる翻案ではないことは明らかである。『入法界品』は、『生死法物語』の重要な構成要素であることは間違いないが、あくまでその 1 つにしかすぎない。『生死法物語』全体の構想は、神の子であるリンチェンが父オバル（光炎）王の急逝に直面し、その危機的状況に対する解決策を模索するというものであり、『入法界品』とは性質が異なる。また、既に Imaeda 2006（p. 84, 100）に述べたように、『生死法物語』は 1 行（偈）7 音節で書かれた物語であり、音節数の調整が必要とされたことを考慮すれば、Rin chen la（/lag/lags）の la（/lag/lags）は、そのため用いられた意味を持たない虚字的な音節であったと考えるのが妥当であろう。もしも Rin chen lags の lags を legs と訂正し、legs が Sudhana の「su」あるいは善財の「善」の訳語としての意味を担っていたとしたら、それを省略したり、lag「手」と記したりすることはあり得ず、Scherrer-Schaub が指摘するように（Rin chen）legs と書かれているべきであろうが、全写本中に rin chen legs と記された例はひとつもない。以上の理由から、物語の主人公の名は Rin chen と考えるのが妥当であろう。この先でみるように（10. 後伝期における残影）、後伝期の資料である『タクパ・リンタク』と『カチャン・ボンポ』における『生死法物語』への言及では、いずれも「リンチェン」とだけあって、「リンチェンレク」とはなっていないのも傍証になるであろう。

いずれにせよ、『生死法物語』全体の設定は、具体的にどの経典からとは特定し難いが、延命、悪趣清浄、葬儀といった事柄に関連したインド仏典からの巧みな翻案ということができる。

―仏頂尊勝ダラニの予告―

大変奇妙なことに、『生死法物語』では物語の帰着点となる肝心の仏頂尊勝ダラニそのものは、予告はされるが作品中には記されていない。それゆえに物語は完結していないと言わざるを得ない。表題に le'u「章」という言葉が含まれていることと合わせると、『生死法物語』はそれ単体で完結したものではなく、さらに大きな全体、すなわち『葬儀置換』と『死者神国道説示』とを合わせた三部作の冒頭「章」と考えるのが妥当であろう。この点はこの先詳述することにする。

―土着葬儀の批判―

仏頂尊勝ダラニを説く『仏頂尊勝陀羅尼』による葬送儀軌を簡略に述べる前に、「世間の誤った者たちはすべて、［死に対して］害となることを為しつつ、死に対して有益であらんと願っている」とあり、8 つの葬送が列挙されている。その中に、三鈷戟（さんこげき）、バラモンのダラニ、火神（＝アグニ）の法、水牛が言及されている。これらは、その出典は特定できないものの、インドでの葬儀[275] に関連したものであることは明らかである。しかし、最後の 2 項目に挙げられる「財産をすべて、屍のように地中に埋める」、「馬、山羊、羊をすべて死者のために屠（ほふ）る」という慣例は、チベット土着の葬儀に言及したものと思われる[276]。

こうした点を総合すると、『生死法物語』は複数のインド仏典に題材を求め、それらを翻案して物語に組み入れつつ、主眼は土着葬儀を批判し、それに代わるものとして仏頂尊勝ダラニを推奨することにあると看取できる。インド仏教においても、仏頂に関連したダラニを説く経典は、主として死者の罪業を浄め、悪趣に落ちないようにするためのものであり、葬礼の際に用いられていた[277]。この類に属する経典[278] のチベット語写本が敦煌文書の中にも数多く発見されていることから[279]、すでに前伝期においてかなり流布していたことが窺える[280]。

---

[275] Kane 1930–62 参照。

[276] 西田・今枝・熊谷 2019, p. 112.

[277] 田中 1987, pp. 61, 171.

[278] 例えば『仏頂白傘蓋陀羅尼』（北京 202–205 番：*Gtsug tor gdugs dkar*（略題）；skt.: *Uṣṇīṣa-sitātapatrā*; 大正 974 番 , 976 番 , 977 番）。なお、チベット語訳 4 点については、Samye Translations による英訳が 84000 上に公表されている。

[279] 今枝 2006, p. 143, n. 126.

[280] 仏頂尊勝ダラニは仏頂尊勝母尊（Gtsug tor rnam rgyal ma）として尊格化され、無量寿仏（Tshe dpag med）と白ターラー（Sgrol dkar）と並んで、現在でも長寿三尊（Tshe lha rnam gsum）として尊崇されている（田中 1987, p. 61）。ただし、葬制との結びつきはなく、もっぱら長寿を叶えるための尊格とみなされており、その点では、『仏頂尊勝陀羅尼』で 7 日後の死を夢告された善住が、このダラニによって死を免れたという仏典の目的に沿った形で祀られていると言える。

2)『葬儀置換』

『生死法物語』に続くこの作品は、『生死法物語』三部作全体の中では土着葬儀批判とその仏教的代替策推奨に特化したものと言える。全体は各々が「xx 置換」という小見出しで始まる六節に明確に分けられている。「xx」を列挙すると、[I] 遺体天幕（ring gur）、[II] 母方親族からの餞別品（dbon lob）、[III] 穀物（'bru stsang）、[IV] 葬儀の羊（skyibs lug）、[V]［葬儀の］馬（rta）、[VI] 親族からの餞別品たるヤク（gnyen sris g.yag）である。しかしながら古代葬儀に関する現時点での我々の知識は非常に乏しく、これら置換対象項目の詳細は残念ながらほとんどわかっていない。

全 6 節のタイトルには統一性があるが、各節の構成は非常に異なっている。1）廃止されるべき土着要素への言及、2）その代替として推奨される仏教要素、そして 3）仏教式葬儀の功徳としての遺族の繁栄、安寧が、各節の 3 つの主要構成要素であることはたしかであるが、すべての節にこの 3 要素が備わっているわけではなく、節によってはそのうちの 1 つあるいは 2 つが無い場合がある。大まかに図示すると以下のようになる。

節	土着要素	仏教要素	遺族の繁栄と安寧
[I] 遺体天幕	有	香とダラニ聖別	有
[II] 母方親族からの餞別品	有	誓願とダラニ聖別	無
[III] 餞別穀物	有	ダラニ聖別、食物布施	無
[IV] 葬儀の羊	有	香とダラニ聖別	有
[V]［葬儀の］馬	無	観音の化身馬王バラハ	有
[VI] 親族からの餞別品たるヤク	有	（記載なし）	無

本作品では、否定される土着葬儀の餞別品や死者に捧げる動物に関する具体的情報が欠けているばかりでなく、置き換える仏教要素、行為についても香やダラニ一般が推奨されるにすぎない。ヤクに関しては仏教要素はなんら提示されていないが、羊、馬、ヤクすべてに共通して推奨されていることは、不殺生（そして、命を救い、生かしておく、すなわち「放生」）であり、これこそが最大の目的であったと思われる。そもそも、この作品は、土着葬儀要素の各々を特定の仏教要素に置き換えるといった厳密な対応関係の置換を念頭に著作されたものではなく、土着の葬儀で死者に対して贈られていた高価な餞別品や殺生を伴ったであろう動物の利用を廃止し、仏教的な行為への置換を推奨することを主眼とした作品と理解すべきであろう。そういう意味では、葬儀の全体的枠組みを仏教化することが『葬儀置換』の意図するところであり、これを通して葬儀の背景となる死後の世界観そのものも仏教化することを目指していたと考えられる。また同時に、石川が指摘するように、死者への品に代わって仏教教団へ寄進することも暗に意図されていたであろう[281]。高

[281] 石川 2008, pp. 175–178.

価な捧げ物や動物の殺生を行わずとも、それらが目的とする効果は仏教的加護として得られ、功徳として遺族の繁栄と安寧までも得られると約束することによって、土着宗教の信者たちに大きな安心感を与えつつ、土着葬儀の仏教化を促した作品と理解できる。

ここで最も注目すべきは、［V］で土着葬儀の馬の代替として登場する馬王バラハである。バラハはインド仏教では観音菩薩の化身として崇められており、その物語はすでに初期仏典にも現れるが[282]、もっともよく知られているのは『大乗荘厳寶王経』に収録されているものである[283]。

この物語は、『生死法物語』において『入法界品』の善財童子の巡礼求法物語が果たす役割と同じく、全体からすれば無味乾燥な『葬儀置換』に一種の文芸作品的雰囲気を持たせている。この場合も、インド仏典からの文字通りの引用ではなく、巧みに脚色された一種の翻案であり、『生死法物語』でみたのと同様の工夫が施されていることがわかる。しかも、馬王バラハによって船乗りたちが救われたという話は前例として挙げられており、「同じように［我々も馬王バラハによって救われるのである］」と結ばれている点からは、この話が土着葬儀でその有効性の保証として語られる「由来譚」、「先例譚」と同じ役割を果たしていたことが想像できる[284]。古代葬儀において馬は、死者（の魂）の乗り物として機能していたが、その代替として仏教側が推奨するのが馬王バラハであり、『大乗荘厳寶王経』に説かれている船頭たちの救済譚は、土着の先例譚に対抗する仏教の救済先例譚と呼ぶに相応しいものである。

［VI］親族からの餞別品たるヤクに関しては、仏教的代替項目が記されていない。書写生の不注意による記し忘れと考えられなくもない。しかし、置換の最大の目的は、仏教要素を提案することではなく、葬儀の場における動物の殺生であることを考慮すれば、それを止めさせることで目的は達成できたといえる。そして、仏教的観点からすれば、殺生を慎むということそれ自体がすでに善業であり、二重の意味があると言える。これは［IV］葬儀の羊、［V］［葬儀の］馬にも同様に当てはまることである。

また内容とは別に注目されるのは、「死者某（gshin mying 'di zhe bya ba、表 1 葉 5 行など）」、「寿命の尽きた［死者］某（tshe 'das pa mying 'di zhe bya ba、表 5 葉 5 行）」という定型表現である。一例を挙げると、

> 死者某は、餓鬼に生まれようとも、いかなる餓鬼の敵によっても捕えられることなく、飢えと渇き［に苦しむ］一切の［餓鬼道の］衆生が守護されますように。〔表 2 葉 4 行 – 表 3 葉 1 行〕

---

[282] Stein 1970, p. 183, n. 42.

[283] 『三毒調伏』の［IV. 三毒各論（3）：瞋恚］の観音菩薩の六字真言が説かれているのも、この経典であることはすでに指摘したとおりである。

[284] 土着葬儀における「由来譚」「先例譚」については、本書「二部 第三章　古代葬送儀礼における動物利用由来譚と成功先例譚」にて論じる。

というように、一種の祈願文の中で用いられている。これは、後伝期の葬儀儀礼文書（『バルド・トェドル』）において「汝」と記されている箇所が実際には故人の名に置き換えられて読誦されることに類似しており、その先駆的な用例とみなすことができる点で大変興味深い[285]。そしてまた、「寿命の尽きた［死者］某」という定型表現は、次の『死者神国道説示』中の「寿命の尽きた汝（tshe 'das pa khyod）」という呼びかけにも通じるものでもある点を注記しておく。

3）『死者神国道説示』

最後の作品は、その表題から明らかなように、死者が三悪趣に落ちることなく、神国（lha yul）へ到るための道を示したものである。

本作品中では、死後に悪趣、すなわち地獄道、餓鬼道、畜生道の三道に落ちない手段として有効な次の 3 つのダラニが挙げられている。

1）地獄道　　観世音菩薩
2）餓鬼道　　虚空蔵菩薩
3）畜生道　　悪趣清浄菩薩

『三毒調伏』の 3 つのダラニの場合と同じく、何故この 3 つのダラニが選ばれ、三道の各々に当てはめられたのかは、教義上興味深い問題ではある。ましてや、悪趣清浄菩薩が畜生道だけではなく、三悪趣の全てから衆生を救う菩薩である以上、どうして他の 2 つの菩薩が必要なのか、明確ではない。こうした問題は、仏教教義史の観点からは重要であり、興味深いが、本書の考察範囲を超えたものであるため、本書では立ち入らないことにする。

いずれにせよ、死者は 3 つのダラニのおかげで三悪趣へ落ちることはなく、「安らかさと幸せに満ちた正しい神国（bde skyid phun gsum tshogs pa'i lha yul dam pa）」へと向かうことになる。これは既に『三毒調伏』、『生死法物語』、『葬儀置換』でみたように、古代チベットの死後の世界観で、死者が赴くべき理想の目的地に他ならない。死者は、まずはこの世界の北方に位置する須弥山の善法堂において、帝釈天から仏教の規範を学び、福徳の力を示してもらう。次に、須弥山の北方の頂にある楊柳宮で、金剛手菩薩から願い事が成就するように灌頂を授けてもらい、その加護によって弥勒菩薩の坐（ましま）す兜率天の無量宮へと進む。そこには、天界の宝物や妙なる音楽とともに、幸せの源である仏の説法が常に具わっているので、死者は「正しい神国（lha yul dam pa）」で多くの安楽を享受し、それを一切の衆生があまねく涅槃に到るために役立てるべきことが説かれる。ここでの「神国」の「神」は、既に『神変比丘後世教示経』の訳注で述べたように「仏」のことであるため、

[285] 本書「二部　古代チベットの葬送儀礼とその変容」で検討する。

『死者神国道説示』の究極の目的地は「仏国」ということになる。しかしそれは巧妙にも「安らかさと幸せに満ちた正しい神国」と形容、同定されている。すなわち、死者は、土着宗教で死者が赴くべきとされていた「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」に向かいながら、実は「仏国」に誘導されることになる。これは、『葬儀置換』に見られたような直接的置換・代替ではなく、土着宗教の要素そのままに、それを「横滑り」的に仏教要素に同定するという間接的で巧みな置換ということができるであろう。古代宗教の信者であったチベット人にとって、「安らかで幸せなところ」は馴染みがあり、そこに導かれることを誰もが願っていた。それゆえに伝道文学の作者は、その「安らかで幸せなところ」を糸口にチベット人読者（聴者）を引き寄せ、実際には彼らを「仏国」に誘導したのである。古代葬制の構造・目的をそのまま残しつつ、それを完全に仏教の枠組みの中に取り入れ、仏教的意味づけのある葬儀として仕立てているのは、一種の換骨奪胎と解せる。大乗仏教的な表現を用いれば、まさに「善巧方便（ぜんぎょうほうべん）」と言うことができる。

次に、文体に着目すると、この作品には大きな特徴がある。それは「寿命の尽きた汝よ、聞け（tshe 'das pa khyod nyon cig）」という、死者に第二人称で直接語りかける命令形の文体である[286]。既に指摘したように、『葬儀置換』では「死者某（gshin mying 'di zhe bya ba）」、「寿命の尽きた［死者］某（thse 'das pa mying 'di zhes bya ba）」という定型表現が、祈願文中に用いられていたが、両者は非常に類似した文体と言える。また、これは、単に文体の問題に留まらず、チベット仏教における葬送儀礼の変遷の核心に関わることであるため、この先詳しく吟味することにする。

以上グループ 二）の 3 作品を通読すると、次のような展開が見えてくる。まず『生死法物語』では、オバル王が急逝し、その息子リンチェンは亡き父王を「安らかで幸せなところ（bde skyid gnas）」に送り届けるための手段を求め、求法の旅に出る。次に『葬儀置換』では、古代土着葬儀は忌むべきものとして廃止し、その代わりに仏教葬儀が推奨される。そして最後の『死者神国道説示』では、『悪趣清浄タントラ』のダラニにより死者（すなわち急逝したオバル王）は悪趣に落ちることなく、「正しい神国」すなわち兜率天へと向かうことになる。したがって、これら 3 作品には、話が連続して展開するような布石が散りばめられており、最後に全ての布石が回収され、話が完結する仕組みになっていると言える。それゆえに、この三作品は『生死法物語』三部作として理解してはじめて、その作品相互間の繋がりが明らかになり、全体の意味付けができる[287]。この先、「11. 後伝期ボン教文献中の『生死法物語』三部作の残影」（本書 105–106 頁）で述べるように、『タクパ・リンタク』、『カチャン・ボンポ』といった 12 世紀から 14 世紀のボン教文献中に、

---

[286] Lalou が『死者神国道説示』に触れ、「チベットの『死者の書』と同じく、死者は死後の旅路で直接の話しかけによって誘導される（“comme dans le *Livre des Morts tibétain* (*bar do thos 'grol*), le trépassé est guide dans sa migration par un discours direct”）」と指摘しているのは、まさに慧眼である（Lalou 1949, p. 43）。3 年後に発表された PT 1042 の全訳（Lalou 1952, p. 354, n. 3）においても、同様の指摘を繰り返している。

[287] 詳しくは、今枝 2006, pp. 104–112; 西田・今枝・熊谷 2019, pp. 111–113 参照。

他の作品と並んで、これら 3 作品が列挙されていることも、これらを三部作とみなす傍証となるであろう。

一方で、文体や構成の違いを考慮すると、これらが当初から一人の著者によって明確な構想の下に三部作として著作されたと結論づけることには慎重にならざるを得ない。現段階においては、元来は独立して存在していた三作品が、「それから（de nas）」という繋ぎ文句でまとめ上げられたと考えておきたい。

この三部作の著作背景に関して、『タクパ・リンタク』が次のように指摘していることは注目される。すなわち、ボン教の葬儀には由来譚があり、それゆえに正当性、有効性が保証されているが、仏教にはそれがなく、葬儀の根拠がない。それゆえに仏教徒は、ボン教の葬儀由来譚を模倣した由来譚を著作し、仏教葬儀を正当化し、ボン教葬儀に対抗しようとした（本書 105–106 頁参照）。この指摘を踏まえて、改めてグループ 一）の 4 作品とグループ 二）の『生死法物語』三部作とを対比してみると、両者の間には明らかな違いがある。前者は仏教の主要教義の初歩的概説といえる性格のものであるが、後者は葬儀に照準を当てた物語性のある「語り物」であり、チベット古代の葬儀においてこの上ない重要性を持っていた由来譚の仏教版ということができるであろう。

まとめ

以上、7 点の仏教伝道文学作品を二グループに分けて概観してきたが、その全体から浮かび上がってくる特徴と問題点は次のように総括できる。

1）ダラニの重要性

これらの作品において最も重要な役割を果たすのはダラニである。尊格が判明しているものや特定できたものをまとめると、以下の通りである。

	『三毒調伏』	『死者神国道説示』	『生死法物語』
仏頂尊勝ダラニ	—	—	有（予告のみ）
悪趣清浄ダラニ	有（貪）	有（畜生道）	—
観世音菩薩	有（瞋）	有（地獄道）	—
知恵流星	有（痴）	—	—
虚空蔵菩薩	—	有（餓鬼道）	—

これ以外にも、『葬儀置換』では、土着葬儀の代替的要素として挙げられる 6 例中 4 例に、どのダラニとは明記されていないが、ダラニが推奨されていたことは上でみたとおりである。これらのうち、仏頂尊勝ダラニが説かれる『仏頂尊勝陀羅尼』は、その副題が「一切悪趣清浄」、すなわちすべての悪趣の清浄であることから、発展段階の相違はあるにせよ

『悪趣清浄タントラ』とは目的を同じくするものである。それゆえに仏頂尊勝ダラニと、『悪趣清浄タントラ』の根本ダラニには相互互換性があると言える。さらには仏頂尊勝ダラニ[288]は、ダラニとしては非常に長く、記憶して唱えるのが大変であるのに比して、『悪趣清浄タントラ』中の根本ダラニである悪趣清浄ダラニは、その十分の一以下の短かさで、容易に記憶でき、唱えるのに向いている。それゆえに、『生死法物語』で予告されている仏頂尊勝ダラニが、『死者神国道説示』では『悪趣清浄タントラ』の根本ダラニに置き換えられても、教義的にはまったく矛盾せず、より実際の運用に即している。それゆえ、『生死法物語』は『死者神国道説示』で説かれる『悪趣清浄タントラ』の根本ダラニによって完結しているとみなせる[289]。

これらの作品群では、『悪趣清浄タントラ』に説かれる根本ダラニと観世音菩薩のダラニが各々 2 回、虚空蔵菩薩と知恵流星のダラニが各々 1 回現れる。このうち、『悪趣清浄タントラ』の根本ダラニは、作品中に現れる形には若干の長短の差、語句の違いはあるが同一のものであるのに対して、観世音菩薩のダラニに関しては状況が異なるので、以下で詳しくみることにする。

2）観音菩薩とそのダラニ

ダラニの重要性を確認した上で、チベット仏教史の観点からも非常に興味深い点を指摘することができる。それは、『悪趣清浄タントラ』の根本ダラニの場合とは対照的に、本書でみた作品群では、観音菩薩に対しては単一ではなく、異なる複数のダラニが用いられているという点である。ダラニの 1 つは『三毒調伏』の「オーム　マニペメ　フーム　ミトラ　スヴァーハ［ー］」（後半の「ミトラ　スヴァーハー」を除けば、「六字真言（yi ge

---

[288] 干潟龍祥（1939, pp. 38–40）によれば、仏頂尊勝ダラニの全文は、以下の通りである。
Oṁ namo bhagavate sarvatrailokyapraviviśiṣṭhāya buddhāya te namaḥ tadyathā oṁ bhrūṁ bhrūṁ bhrūṁ śodhaya śodhaya viśodhaya viśodhaya asamasam antāvabhāsa spharaṇagatigahanasvabhābaviśuddhe abhiṣiṁcatumāṁ sarvatathāgata sugatavarava canāmṛtābhiṣekair mahāmudramantrapada(ir) āhara āhara āyuḥsandhāraṇī śodhaya śodhaya gaganasvabhābaviśuddhe uṣṇīṣavijayapariśuddhe sahasraraśmisaṁcodite sarvatathāgatāvalokini ṣaṭpāramitāparipūraṇi sarvatathāgatamāte daśabhūmipratiṣṭhite sarvatathāgatahṛdayādhiṣṭhānādhiṣṭhite mudre mudre mahāmudre vajrakāyasaṅghāṭanapariśuddhe sarvakarma āvaraṇavisuddhe pratinivartaya āyurviśuddhe sar vatathāgatasamayādhiṣṭhānādhiṣṭite oṁ muni muni mahāmuni vimuni vimuni mahāvimuni mati mati mahāmati (su)mati sumati ma(hāsumati) tathatābhūtakoṭipariśuddhe visphuṭabuddhiśuddhe he he jaya jaya vijaya vijaya smara smara sphara sphara sarvabuddhādhiṣṭhānādhiṣṭhite śuddhe śuddhe buddhe vajre vajre mahāvajre suvajre vajragarbhe jayagarbhe vijayagarbhe vajrajvaragarbhe vajrodbhave vajrasambhave vajre vajrini vajrambhavatu mama śarīraṁ sarvasattvānāṁ ca kāyapariśuddhir bhavatu me sadā sarvagatipariśuddhiś ca sarvatathāgataś ca mām samāśvāsayantu budhya budhya sidhya bodhaya bodhaya vibodhaya viboshya mocaya mocaya vimocaya vimocaya śodhaya śodhaya viśodhaya viśodhaya samantā(tpa)rimocaya samantaraśmipariśuddhe sarvatathāgatoh ṛdayādhiṣṭhānādhiṣṭhite mudre mudre mahāmudre mantrapade svāhā.

[289] 今枝 2006, pp. 111–113.

drug pa）」である）であり、もう 1 つは『死者神国道説示』の「オーム　フリ［ー］　フ［ー］ン　パドマ　プリヤ　スヴァ［ー］ハー」である。前者は三毒のうちの瞋に対して、後者は三悪趣のうちの地獄趣に対するものとして、各々他の 2 つのダラニと並列的に用いられている。すなわち、どちらも 3 つのダラニの中の 1 つという位置を占めるだけで、絶対的役割を果たしてはいない。さらには、『三毒調伏』の 3 つのダラニの内の 1 つである知恵流星のダラニ中には、アバローキタ、マハーマニという言葉があることから、これもまた観音菩薩と関連したダラニであろうと考えられる。こうしてみると、本書でみた仏教伝道文学作品群における観音菩薩の重要性は明らかである一方、そのダラニは複数存在していたことがわかる。『死者神国道説示』では、観音菩薩のダラニ ―それも「六字真言」ではない別のダラニ― が衆生を救うのは、三悪趣の内の 1 つである地獄趣からだけであり、他の二悪趣には別の菩薩のダラニが用いられている。すなわち、観音菩薩も「六字真言」も他の菩薩、他のダラニと並んで、相対的な役割を果たしているに過ぎない[290]。これは、後伝期になり、ダライ・ラマが観音菩薩の化身とみなされ、その六字真言「オーム　マニペメ　フーン」の六字の一字一字が、六趣の一趣ずつに配され、このダラニだけで六趣の全てから衆生を救うことができる全能のダラニとして機能するようになるのとは対照的である。観音菩薩と「六字真言」の地位、役割の変遷は、チベット仏教史の興味深い課題であり、今後の検証が待たれる[291]。

3）第二人称直接話法の文体

『死者神国道説示』の文体上の最大の特徴は、「寿命の尽きた汝よ、聞け（tshe 'das pa khyod nyon cig）」という、死者に直接語りかける命令形の斬新な文体である。既に指摘したように、『葬儀置換』では「寿命の尽きた［死者］某が…できますように（tshe 'das pa mying 'di zhes bya ba…nus par shog shig）」という祈願文であったが、『死者神国道説示』では「寿命の尽きた汝よ」と死者に対して直接に「聞け」という命令形で話しかける点が、本質的に異なっている。

『神変比丘後世教示経』［I］には「愛する家族が枕もとで泣いて、［死者の名を］一万回、一千回呼ぼうとも［死者には］聞こえない」、『御高説宝樹』［VI］にも「［死んでしまえば、後に残った者が死者の名前を］一万回、一千回呼ぼうとも［死者には］聞こえない」と記してある通り、寿命の尽きた者、すなわち死者には生きている者からの呼びかけが聞こえない以上、「聞け」と話しかけることはまったく意味のないことである。そもそも仏教本来の考え方からすれば、『神変比丘後世教示経』［I］に「［生前の］善［業］のみが道連れとなる」、『輪廻形態説示』［VI］に「善業のみが助けとなる」と述べられている通り、

[290] 西田・今枝・熊谷 2019, p. 108, n. 80 参照。
[291] 今枝 2022a, p. 69, n. 204 参照。

人間の死後の運命は死者が生前に行った善業・悪業によって事前に決定されている。したがって、こうした死者への呼びかけは、仏教の立場からすればあり得ないことで、我々の知る限りインド仏教の葬儀にはみられないものである[292]。

それゆえに、「汝よ」と第二人称で死者に直接語りかけ、「聞け」と命令するることの意義は、ただ単に文体の問題に留まらず、古代チベットの土着葬儀と深く関わる重要な問題となってくる。殊に、この文体は、後伝期に大いに流布し、チベット仏教を代表する作品となる『バルド・トェドル（*Bar do thos grol*）』（一般的に『チベットの死者の書』として知られる）と共通するものであり、両者の間にどのような関係があるのかは非常に興味深い。詳しくは、「二部　古代チベットの葬送儀礼とその変容」で論じることにする。

[292] 例外的に唯一可能なのは、初期仏教の教義からは逸脱するが、大乗仏教で説かれる「追善廻向」で、死者に代わって生き残った者が善業を積み、それを死者の死後の境遇を良くするために振り向ける（廻向する）ことである。しかし、この場合も、死者に直接話しかけるということはない。

9. 葬儀における動物利用に関する土着宗教と仏教の対立

チベット古代の土着宗教の信奉者たちにとって、葬儀は極めて重要な意味を持っていた。それは死者を動物の誘導によって死後の世界の目的地へと送り届ける重要な儀式であった。一方、仏教の教えでは、死は不可避であり、死後の境遇を決定するのは、あくまでも今生の行いである。したがって、死者に対して奢侈な埋葬品を捧げる葬儀は無益で無駄であるだけでなく、動物の殺生（srog bcos）は十不善の最たるものであって、仏教徒としては最も慎むべき行いであることは言うまでもない。それゆえに初期の仏教伝道者たちにとっては、殺生を止めさせることが最初の、そして最大の目的であったと思われる。しかし、ただ単に廃止を呼びかけるのではなく、殺生を犯さずとも、様々な尊格のダラニを唱えることによって、従来の葬儀の目的がより効果的に、より少ない経費で達成できるという点を前面に押し出した[293]。今までみてきた仏教伝道文学作品は、究極的にはこの一点に照準を合わせていたと言っても過言ではないであろう。

これに関して、従来注目されてこなかった ITJ 990 が新たな情報を提供してくれる。この写本は、冒頭・末尾ともに欠落した断片で、わずかに 14 行が残っているに過ぎない。この文書を初めて紹介した Schaik は、11–13 行の翻字テキストを提供し、翻訳した。その後 Dotson が、対象範囲を広げて、6–13 行の翻字テキストを提供し、翻訳を添えた。本書の課題にとって重要な 11–13 行について、以下に校訂テキストを提供し、次いで Schaik、Dotson 両氏の翻訳を和訳して紹介する。

> (11) kha cig na re / / lha 'thur ba'I gcugs lta zhig / / gzhan ma mchis kyang lha brjed pa la tha dad de / / sangs rgyas ni (12) ska ma chos su gsol / / bdag cag gI sgo lha dang / / yul lha ni srog chags kyIs gsol te / / brjod pa'I cho ga (13) myi 'thun bas / / myi dgyes shing 'thur bar 'gyur ro zhes mchi ba dag kyang mchis grangste / /

Schaik 訳：

> ある人曰く「神が機嫌を損ねた時、［その機嫌を直すのには］他に［方法］があったとしても、神への祈りが最善である。仏教徒は ska ma 教に祈る。我々は我々の門神と土地神を生きもの［を殺して］祈る。この祈りの儀礼間の摩擦ゆえに、不幸と騒乱が生じる」[294]

---

[293] 牛 2003（pp. 56–57）、石川 2008（pp. 178–179）参照。

[294] “Some say: “When the deity is disturbed even if there are other [methods], the invocation of the deity is the best. The Buddhist pray to *ska ma* religion. With our gate deities and local deities, we pray by [killing] living creatures. Because of the conflict between rituals of invocation, there will be unhappiness and disturbance.”” (Schaik 2013: p. 234).

Dotson 訳：

ある人曰く「神の機嫌を損ねさせる理由は、以下のことに尽きる。神を拝むのには、様々な方法がある。［あなた方は］ska ma chos によって、ブッダを拝む。我々は、我々の sgo lha と yul lha を生きた動物によって拝む。こうして実践される儀礼は不調和であり、それゆえに［神々は］喜ばず、機嫌を損ねる。」こう述べる者たちはいるのか［いないのか］[295]

ここで問題になっているのは、神々への礼拝儀礼の相違に関する「我々」と仏教徒の相違、対立である。ここで仏教徒と対比されている「我々」というのは、文脈からしてチベット土着宗教の信奉者であり、「あなた方」とは仏教徒であることは間違いない。そうするとこの文書は、今まで本書で扱ってきた仏教側からの伝道作品ではなく、むしろ土着宗教側に立って書かれたものであることがわかり、非常にユニークである。ここで争点となっているのは、一方は生きた動物を捧げ、もう一方は ska ma 教／ska ma chos を拝むという、両者の儀礼の対立である。Schaik、Dotson 両氏とも、ska ma は写本に綴られているままを残し、意味不明として翻訳はしていない。ただ Dotson は「カルマ（karma）の宗教か？」と注を打っていることからして、ska ma をサンスクリット語 karma「業」の音写と考えていることがわかる。しかし ska ma には、冒頭にサンスクリット語 karma にはない接頭字「s」があり、逆に karma の中央の「r」がないことから、この推定には無理がある。翻って、ska と ma の間のツェク（tsheg）を書き誤りであると見なして、ツェクを除いて一音節語 skam と読み替えれば、skam chos「乾法」となる。この熟語における「乾」の用法は、『三毒調伏』（94 行）に現れる skam lam「乾道」の「乾」と同じであるが、こうした用例は他に知られていないため、その意味が特定できない。しかし、時代的にも状況的にもまったく異なった文脈における用例から、これがその反意語である rlon「湿」と対比したものであることが推測できる。skam「乾」と rlon「湿」の対立はよく知られたもので、例えば湿度はこの対立する二語を合わせた skam rlon という熟語で表される。

[295] “Some say, “As for making the gods upset, it is none other than this: there are different ways to worship the gods. [You] worship Buddha with *ska ma chos*. We worship our *sgo lha* and *yul lha* with live animals. The rituals performed are not in accord, and so [the gods] become displeased and upset.” Are[n’t] there those who say this?” (Dotson 2016: p. 91).

文脈は全く異なるが、ブータンの税制に関する中世資料[296]には、税に 2 種類あることが記されており、1 つが skam khral であり、もう 1 つが rlon khral である。具体的には skam khral「乾税」とは金納税のことで、rlon khral「湿税」とは穀物、バター、布などの物納税のことである。この対比を、敦煌文書における葬儀という文脈での lam「道」、chos「法」に当てはめると、*rlon lam「湿道」とは動物の殺生（血）を伴う「湿った」道で、skam lam「乾道」とはそれを伴わない「乾いた」道であり、*rlon chos「湿法」とは動物の殺生を伴う「湿った」教えで、skam chos「乾法」とはそれを伴わない「乾いた」教えとなる。こうしてみると、ITJ 990 の当該箇所で問題になっているのは、儀礼が殺生を「伴う（「湿」）」のか、「伴わない（「乾」）」のかという点と理解できる。その中で仏教は後者、すなわち「乾」であり、その教えは「乾法」であり、それに従う行いは『三毒調伏』（94 行）の「乾道」である。

以上を踏まえると、ITJ 990 の当該箇所は次のように要約することができる。

> 神が機嫌を損ねる理由は、［何よりも］神々の祈り方に相違があることである。仏教［徒］は、［動物の殺生を伴わない］「乾法」で祈る［「乾道」である］。我々の門神と土地神は、動物［の殺生］で［すなわち湿法で］拝む［「湿道」である］。［こうして］祈る儀礼が調和しないので、［神々は］喜ばず、機嫌を損ねる。

チベット土着宗教側からすれば、新たに導入された外来宗教である仏教が、土着儀礼における動物の殺生の禁止を訴えるがゆえに儀礼に不調和が生じ、その結果として チベット土着の神々は喜ばず、様々な不幸と騒乱が生じるのだという主張になる。

---

[296] Aris 1986, p. 157–159. 原文 skam khral（p. 156）に対して、“dry tax”（p. 157）という訳語が当てられ、それに 84 と注が打ってある。ところが残念なことに、Aris 1986 の注は 73（p. 168）までしかなく、以下 100 までが欠落している。この資料は、元来 Michael Aris, *Bhutan. The Early History of a Himalayan Kingdom*（Warminster and New Delhi, 1979）の microfish supplement として出版されたもので、閲覧が困難であった。しかし、利用者から要望に応えて、Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 14 として刊行され、その過程の技術的なミスから、注 74 以降が欠落してしまったのであろう。microfish supplement にあたれば、該当箇所を閲覧できるであろうが、叶わなかった。p. 187 の Glossary には “*skam-khral* = lit. “dry tax” levied in cash, as opposed to *rlon-khral* (“wet tax”) levied in kind” とあるが、rlon khral の項目はない（今枝 2003, p. 70。本研究は、microfish supplement から直接プリントアウトしたものに依ったため、Wiener Studien の刊行物のそれとは異なっている）。

10. ティソン・デツェンの仏教採用の理由

ここで思い出されるのが、ティソン・デツェンが 8 世紀後半に仏教を国教として採用するに到った経緯である。これをよく物語る文書[297] がテンギュルに収録されているので、それを見てみることにしよう[298]。

「わたしは、師であるザホル（za hor）の大乗仏教比丘、カガサラナ（kha ga sa ra na）生まれのダルマ・シャーンティゴーサ（Darmaśāntighoṣa）[299]、世間一般ではアーチャルヤ・ボーディサットヴァ[300] の名で知られる仏の優れた御教えすべてに通暁し、戒律と知恵を具え、不断に精進されているお方から聞いた。

たとえばある人の言動がわからないのに、その人の度量を判断するというのは理にかなわない。人の言動がわかれば、その人に徳があるのか、欠点があるのかを判別することができ、どんな能力があるのかを知ることができる。それと同じように、ブッダも世間の神々[301] も、わたしは実際に目にしたことはないけれども、各々のツクラから生まれてくる（so so'i gtsug lag las byung ba）言動を目の当たりにすれば、スガタ（＝ブッダ）の教えが他のいかなるものとも違って、善く、広大であると、わたしには納得できた。

ブッダの教えをこのように褒め称えるのは、［ブッダが］わたし個人に慈しみがあるため、それを好きになって褒め称えるというのではない。世間の神々のツクラ（lha dag gi gtsug lag）を称賛しないのは、彼らがわたしに害をなしたため、嫌いになったというのでもない。

理性によって検証すれば［様々なツクラの間には］相違はあるが、生きものに対して命を見放す（＝殺める）（sems can la srog spang）[302] のはあるまじきこと（mi rung

---

[297] *Bka' yang dag pa'i tshad ma las mdo btus pa*（テンギュル，北京 5839 番，ngo 帙，fol. 64a–103b）。この文書は、Tucci 1958 が最初に注目して以来、Macdonald, *ET*（＝今枝 2022a）; Stein 1980 などで検討され、部分訳が発表されている。

[298] 今枝 2022a, pp. 47–51 参照。いくつかの点で、訳を改めた。

[299] シャーンタラクシタの名前については、Tucci（1958, p. 122, n. 2）参照。

[300] *Sba bzhed*（pp. 12, 16–18）では、シャーンタラクシタは a ca rya（skt.: ācārya の音写；tib.: slob dpon）の称号を持っている。しかし、後世資料の大半は、この称号はパドマサンバヴァに冠され、シャーンタラクシタに対しては mkhan po が冠されている。パドマサンバヴァとシャーンタラクシタは、ティソン・デツェンと併せて mkhan slob chos gsum（mkhan po, slob dpon, chos rgyal）の略称で呼ばれる。

[301] この文脈では、「世間の神々（'jig rten gyi lha rnams）」が古宗教の神々を指していることは疑いない。王は、この先述べるように、この神々のツクラを個人的な恨みから軽視しているのではない。「世間の神々」という表現は、ティソン・デツェン碑文に見られる「世間を超えた（＝出世間）宗教（'jig rten las 'das pa'i chos）」という仏教を指す表現（Macdonald *ET*, p. 348）との関連から理解する必要がある。

[302] この表現からは、古代宗教において人間の守護尊であるクラ（sku bla）神がしかるべき祭祀を怠った者の命を見放し（srog spang）、死に追いやることが想起される。詳しくは、今枝 2022a, pp. 35–40 参照。

ba）であり[303]、正しい教え（＝仏教）も併せて実践するべきである」[304]

以上からわかることは、ティソン・デツェンが仏教を採用した最大の理由は、古代の土着宗教が「生きものを殺めるというようなあるまじき行い」の上に立脚しており、仏教はそれを諌めていたことにある。ツェンポは神でありながら、人間世界の支配者として降臨したということが、古代チベットの王権の前提であり、そうした世界秩序、すなわちツクラの上に立脚するものであるがゆえに、ティソン・デツェンはそれ自体を否定することはまったく想定していない。ツェンポは自らの王権論の基盤である世界秩序はそのまま維持し、それと併せて「生きものを殺めるというあるまじき行い」だけを廃止しようとしたのである。

ティソン・デツェンは、

> 「世間の神と、資質と能力を具えた人は皆（'jig rten gyi lha dang mi la yon tan dang mthu yod pa kun）、はるか昔に彼らが三宝を敬った善根に由来するものである。それゆえに、すべてのツクラの真髄はブッダの教えである（gtsug lag go chog gi snying po ni sangs rgyas kyi chos so）」

と述べているように、仏教がすべてのツクラの真髄であるとみなしていたが、チベット古来の土着の教義と風習を全面的に否定したわけではなかった。世界における個人の位置づけ、地上での生の意義などに関して、両宗教の間には本質的な相違があったが、それらは副次的なものに過ぎなかった。両者の間で唯一融合和解が不可能であったのは生きものの殺生であった。古代チベット土着の葬儀においては、死者の道案内とみなされた動物の血生臭（ちなまぐさ）い儀礼が必要不可欠であった。ソンツェン・ガンポが、大臣バに対して、その墓に百頭の馬を生贄にすると約束していた風習も同様の必要性の上に立脚するものと考えられる[305]。

---

[303] Stein は、Tucci が「仏教が拒否する犠牲（Buddhism, which avoids sacrifices）」とし、Macdonald が「生きものの命を見放す（le fait d'abandonner la vie des etres）」としているのは不可能（impossible）として却け、「自らの命を棄てる（un etre vivant rejette sa vie）」とするが、むしろ Stein の解釈の方が不可能であろう（Stein 1980, p. 322, n. 11; Tucci 1958; *ET*, p. 368）。

[304] fol. 65a … bdag gi dge ba'i bshes gnyen du gyur pa las thos pa / dper na mi zhig sma (⇒ smra) ba yang med spyod pa yang med na de'i chod gzung du yang mi rig ste / smra ba dang spyod pa yod na yon tan dang ldan pa 'am / nyes pa dang ldan pa yang gdod bye brag dbyer rung / mthu ci yod pa yang shes par nus pa bzhin du sangs rgyas bcom ldan 'das dang 'jig rten gyi lha rnams kynag bdag gis mngon sum du ni ma mthong mos kyi de dag gis smras pa dang / spyod pa so so'i gtsug lag las byung ba mthong na bde bar gshegs pa'i bstgan pa ni gzhan gang dang yang mi 'dra bar bzang la rgya che ba nyid du bdag gis khong du chud do // sangs rgyas kyi bstan pa 'di skad du bstod pa yang bdag gi sgor byams pa'i phyir snying du sdug ste / bstod pa yang ma yin / 'jigs rten gyi lha dag gi gtsug lag la bsngags par mi smra ba yang de dag gis bdag la gnod pa byas pa'i phyir zhe sdang ba yang ma yin te / rigs (= rig) pas brtags na de ltar khyad zhugs kyi sems can la srog spang du mi rung ba dang 'dra bar dam pa'i chos kyang bzung zhing [bcad (/ bca')] bar bya'o //

[305] PT 1287, l. 265; *DTH*, p. 109, l. 21, p. 144, l. 25.

ティソン・デツェンが仏教を採用すると決めた時、葬儀における動物利用および殉死、殉葬の風習はどうしても容認できなくなり、土着宗教への批判は主としてこの点に向けられていたと言っても過言ではない。それゆえに仏教伝道文学の主目的の 1 つが、葬儀における動物殺生の置換であったのも当然の帰結である。

最古の仏典の 1 つである『スッタニパータ（*Suttanipāta*）』（312 偈）に

> 「動物の生贄という不正義は、古からの習慣として現在まで続いている。罪もない牛が殺され、司祭者は道から外れている」[306]

とあるように、ブッダがバラモン教に対して行った批判のうち、最も厳しく、中核的なものは動物の生け贄に向けられていた。そしてこの姿勢は、仏教のアジア各地への伝播を通じて当初から一貫したものであり、チベットもその例外ではないことがわかる。

現代においてもこの伝道活動は継続している。一例を挙げると、ブータン南部におけるネパール系ヒンドゥー教徒が仏教へ改宗する際、「サムツィ県ガレー村の住民は、儀礼における動物の生け贄廃止を誓約し、その証として大僧正ジェー・ケンポ（Rje mkhan po）に 9 匹の羊と屠殺用の刀を献上した」[307]。

さらに、インド・ヒマーチャル・プラデーシュ州ドランジのボン教[308] 新総本山メンリ

---

[306] 今枝 2022b, p. 122.

[307] *Kuensel*（ブータン政府系英字新聞）2004, December 25. 今枝 2006, p. 168, n. 158.

[308] 「ボン教」はさまざまな意味で用いられるが、その分類に関しては注 45（本書 15 頁）参照。伝統的なチベット社会、チベット人から、そして大半の外国人研究者から、仏教と異なった宗教であるかのようにみなされているボン教は、その教義、儀礼、組織、実践などを総体的に見れば、チベット仏教の正統からは逸脱しているとはいえ、その一派であることは明らかである（Snellgrove 1987, p. 503; quoted by Kvaerne and Martin 2023, p. 7 参照）。ルントク・テンペー・ニマ座主によれば、歴代ダライ・ラマは一度もボン教寺院を訪れたことはないが、インドに亡命後、ダライ・ラマ十四世がこの慣習を破り、初めて新総本山メンリ寺院を訪れた。その後で「今まで私はボン教の本当の姿を知らずに、誤解していた。実際に教義、修行体系、図像などを見てみると、ボン教こそがチベット民族の最も包括的な宗教であることに気付いた」と語ったとのことである。これ以降、ゲルク派、サキャ派、カギュ派、ニンマ派の 4 宗派で構成されていた亡命チベット政府の宗教会議にボン派が加わることになったことは、非常に興味深い（Kvaerne and Martin 2023 (Introduction, p. 2): “Bön is recongnized as the fifth religious tradition of Tibet by the Tibetan diaspora administration in India.”）。ニンマ派も含めて、チベット仏教各宗派は、仏教伝来以前からのチベット土着の要素を包括しながらも、それらを俗信としてしか扱わず、自らの教義・実践体系の中に位置づけていない。それとは対照的に、ボン教はそれらを九乗からなる教義・実践体系の下部に綿密に組み込み、純粋に仏教的要素をその上部に位置づけている点で、最も包括的と言えるであろう（Snellgrove 1967 参照）。
Bellezza は、現代のチベットの宗教をチベット仏教とユンドゥン・ボン教の 2 つに分け、より適切な名称が見つからないので、便宜的に「ラマ教」と呼ぶことにする、と述べているが、これには一理ある（Bellezza 2013, p. 5）。後伝期の伝統的分類では、仏教諸派は大きく新派（サルマ）と古派（ニンマ）に二分される。前者はさらにゲルク派、サキャ派、カギュ派に三分化されるが、後者はニンマ派と呼ばれて細分化されることはない。しかし古派（ニンマ）に新たにボン派を加え、ニンマ派とボン派に二分することによって、現在にまで継承されているチベット仏教の五大伝統をすべて包括することができるのではなかろうか。

（Sman ri gsar pa）寺院において、今枝自身が 1970 年代に当時の座主であった第三十三代座主ルントク・テンペー・ニマ（Lung rtogs bstan pa'i nyi ma: 1929–2017, 1969 年座主就任）から得た情報によれば、大僧正が、インド人ヒンドゥー教徒のボン教への改宗に際して、彼らに誓約させたのは、年中行事における動物供犠の廃止だけであり、それによって彼らをボン教の新たな信者として認めていた[309]。

2 つの事例の共通点は、少なくとも仏教入信に際しては、殺生の禁止、そしてそれに代わる仏教的儀式の導入が最重要課題ということであり、その他の法要、儀式、実践といった事柄は、副次的にしか扱わないことである。新たな仏教入信者は、生贄だけは即座に止めるが、年中行事などには従前の神々を祀り続ける。そして、こうしたいわゆる「外道」の神々、尊格は、徐々に仏教の八百万のパンテオンの中に何らかの役割と位置が与えられて受容され、最終的には仏教的儀礼で祀られることになるのであろう。

敦煌文書中の仏教伝道文学作品は、こうした長い活動の最初期の証人である。

[309] 今枝 2006, p. 168, n. 158.

11. 後伝期ボン教文献中の『生死法物語』三部作の残影

以上みてきた前伝期の仏教伝道文学作品は、すべて敦煌から出土・発見された写本として知られている。現在までに数十の写本が同定されたことから、チベット古代にはかなり流布していたことが想定される。しかし後伝期（phyi dar）になった後に、引用、言及された様子を留める写本は残っておらず、後世には継承されなかったとみなされてきた。ところが近年になって、この内の 1 つである『生死法物語』が意外にも後伝期に到っても知られていることが判明した。

後伝期に入り、チベット仏教にはいくつもの新しい宗派が創設され、発展し、現在に到っている。これら後伝期に創設されたサルマ（gsar ma＝新）派と総称される宗派に対して、自らの起源を前伝期に遡らせるニンマ（rnying ma＝古）派は、サルマ派にはないいくつかの特徴を持っている。その 1 つがテルマ（gter ma＝埋蔵法典）と称される膨大な聖典である。前伝期に活躍した開祖パドマサンバヴァ（skt.: Padmasambhava; tib.: Padma 'byung gnas）は将来のために数多くの経典を各地に埋蔵し、然るべき時が来れば、テルトン（gter ston＝埋蔵法典発掘僧）によって発掘され、世に広められると予言したという設定の下、テルマはニンマ派の重要な経典と考えられ、この宗派に特有の教義の根拠となっている[310]。

チベット土着の要素を継承し、それを仏教の枠の中に吸収・融合して発展していったボン教は、このテルトン、テルマという特異な伝統をニンマ派と共有し、ニンマ派に匹敵するテルマ叢書を築き上げた。その中で最も初期のものは、マ（Rma）氏出身の宗教者と関わりが強く、「タクチャン（*Bsgrags byang*）」あるいは「タクリン（*Bsgrags gling*）」と称される一群のテキストとして知られる[311]。その中で最も重要なものが『タクパ･リンタク（*Bsgrags pa gling grags*）』の略称で知られるもので、2023 年になって、Kvaerne と Martin により、5 写本の校訂テキストと全訳が刊行された（Kvaerne and Martin 2023）。これは、8 世紀のテンパ・ナムカ（Dran pa nam mkha'）によって埋蔵されたとされるテルマで、古代から 12 世紀までのチベット土着宗教と外来宗教である仏教との交渉に関する貴重な資料であるが、テルトンおよび発掘の年次は未詳である[312]。この中で、テンパ・ナムカは仏教徒に対して、「仏教には由来譚（byung khungs lo rgyus）がないので、死者の葬儀を行う術がな

---

[310] ボン教の典籍に関しては、長い間部分的にしか知られていなかったが、20 世紀末以降、膨大な典籍が刊行されることになり、その全貌がようやく明らかになってきた。叢書は、Ka（bka'、仏教の Kanjur/bka' 'gyur に相当）と Katen（bka' rten、仏教の Tenjur/bstan 'gyur に相当）に二分されている。詳しくは Martin, Kvaerne and Nagano 2003 および Karmay and Nagano 2001 を参照。

[311] Blondeau 1990, p. 42; Orofine 2016, p. 147; Kvaerne and Martin 2023, pp. x, 79 参照。これと類似したもので、時として混同されるものとして、仏教テルマにも用いられる「カチャン（*kha byang*）」と称されるカテゴリーがある。その中で最も知られたものが、後述する『カチャン・ボンポ（*Kha byang bon po*）』である。

[312] Kvaerne and Martin 2023, pp. 11–14 参照。

い」[313] と非難し、『馬とヤクの儀礼品（*Rta g.yag gi gtad yar*）』[314]、『神子リンチェンの死の語り（*Lha bu rin chen gyi shi rabs*）』、『欲界道説示（*'Dod khams su lam ston pa*）』[315] などはボンの由来譚の剽窃であると主張している[316]。この内『神子リンチェンの死の語り』は明らかに、本書で扱った敦煌文書『生死法物語』を指している[317]。『欲界道説示』は同じく『死者神国道説示』を揶揄したものであり、『馬とヤクの儀礼品』は馬、ヤク、羊と言った葬儀における動物利用の置換をテーマとした『葬儀置換』を指していると考えられる。すなわち、これら 3 つのタイトルは、敦煌文書中に発見された『生死法物語』三部作を指していると考えて間違いない。

また、『タクパ・リンタク』よりも少し後代のものと見なされる *Srid pa rgyud kyi kha byang rnam thar chen mo*（『カチャン・ボンポ（*Kha byang bon po*）』の略称で知られる）[318] にも、*Lhe'u gsas kyi gtad yar*[319]、*Lha bu rin chen gyi shi rab*[320]、*'Dod khams su lam ston pa*[321] という 3 つのタイトルが記されており、『タクパ・リンタク』に列挙されている『馬とヤクの儀礼品』、『神子リンチェンの死の語り』、『欲界道説示』と同一のものであろう。

以上のことから、敦煌から発見された前伝期の仏教伝道文学作品中、仏教の主要教義の初歩的概説である作品の主張は、その後の仏教伝道にも、当然のこととして継承されたであろうが、葬儀に照準を当てた『生死法物語』三部作もまた、後伝期になっても何らかの形で流布していた、少なくとも人々の記憶に残り続けていたことがわかる。

---

[313] Katen, no. 072-1, fol. 37b (p. 74)：byung khungs lo rgyus med pas shi ba'i dur thabs med（“If there is no account of the origin, there is no way of performing rituals for the dead.”）Kvaerne and Martin 2023, pp. 275 および 482; Dotson 2016, p. 104 参照。 Cf. Katen, no. 072-1, fol 37b (p. 74); Dotson 2016, p. 104.

[314] gtad yar を Dotson は “ritual loading”、Bellezza は “present for the deceased” と訳す（Dotson 2016, p. 104; Bellezza 2013, p. 67, n. 86,: p. 78, n. 100）。Kvaerne らは “Upward Sending” と訳し、“‘upward delivery’, a kind of funeral offering to help the deceased reach a higher plane” と注を打っている（Kvaerne and Martin 2023, p. 291, n. 1018）。

[315] Kvaerne and Martin 2023, p. 292: *The Path-guide to the Realm of Desire*.

[316] Katen, no. 072-1, fol. 41b (p. 82)：bangdhes bon la dpe blangs ste … bon rnams chos su ming brtags nas sgyur (“the monks took Bön as their model: … they transformed the (texts of) Bön, giving them names according to Ch'ös.”) Kvaerne and Maritin 2023, pp. 291, 497 および Dotson 2016, p. 104 参照。
仏教側がボンの葬儀を見本として仏教葬儀を著作したという表現は他の箇所にも見られる：chos kyi lung las sdur lugs ma byung bas / g.yung drung bon la dpe blangs nas（“As there are no funerary rites in the teaching of Ch'ös, you take Eternal Bön as your model,” Kvaerne and Martin 2023, p. 278, p. 484, cf. Katen, no. 072-1, fol 38a (p. 75)）。同様の主張は『カチャン・ボンポ（*Kha byang bon po*）』中にも散見する（p. 253, l. 9: bon la dpe blangs nas … ll. 16–17: bande rnams … bon la dpe blangs ste bon 'dur bsgyur cing bris so)。

[317] Kvaerne and Martin 2023, p. 291, n. 1019.

[318] Don grub and Gzhon nu 2010 中の 3 番目のテキストとして収録されている（pp. 190–360）。ケポ・ロデ・トクメ（Khod po Blo gros thog med）が 1310 年に発掘した者である（Don grub and Gzhon nu 2010, pp. 350, 353; Martin 2020, no. 101, pp. 100–101）。

[319] 『タクパ・リンタク』の *Rta g.yag* が、*Lhe'u gsas* に変わっている。
Don grub and Gzhon nu 2010, p. 253, l. 10.

[320] ibid., l. 10–11.

[321] ibid., l. 14.

12. 『生死法物語』のモンゴル語訳

つい最近になって、Kirill Alekseev 氏は、2021 年 3 月 16 日のオックスフォード大学での発表において、モンゴル語写本カンギュルの中には「現存するいかなるチベット語カンギュルにも収録されていないが、敦煌出土の古い作品である『生死法物語』が収録されている」[322] と報告した。このモンゴル語カンギュルの成立経緯や年代などの詳細は報告されていないが、様々な特徴から「現存しない、幾分古いチベット語叢書に依拠している」[323] ことが指摘されている。

チベット語仏典の初期モンゴル語訳は、モンゴル人がチベットを支配下に置いていた時代、すなわち中国の時代区分で言えば元朝（1271–1368）時代に行われたのものである。この当時のチベットには、大蔵経としてまとまった仏典叢書は存在せず、数多くの写本が雑然と散在していた。そうした状況下で、プトン（1290–1364）をはじめとするチベット人学僧がそれらを蒐集、検証して、正典としてのカンギュル（仏説部）とテンギュル（論疏部）の二部からなるチベット仏教独自の大蔵経編纂に従事した。その過程で、仏典としての正当性が確認できないテキスト ―中国仏教の「偽経」に相当する― は排除され、カンギュルとテンギュルには収録されなかった。ところがモンゴル人訳経者は、そうした作業を行わず、入手できたチベット語テキストをモンゴル語に訳出し、それが写本カンギュルに収録されたのではないかと推測される。この推測が正しければ、こうして訳出されたうちの 1 つがまさしくチベット選述の「偽経」に他ならない『生死法物語』であり、チベット本土では忘れ去られ、散逸してしまったものが、奇しくもモンゴル語訳され、写本カンギュル中に収録され、現在にまで伝わったことになる。

このモンゴル語写本カンギュルの成立過程、そしてモンゴル語訳『生死法物語』の詳細な研究が待たれるところである。

---

[322] University of Oxford Podcast, Faculty of Oriental Studies, Series: Tibetan Graduate Studies Seminar, 16/03/2021: “It also includes an early Tibetan text from Dunhuang called *The History of the Cycle of Birth and Death* (*skye shi 'khor lo'i lo rgyus*) absent in any of the extant Tibetan Kanjur collections.”

[323] ibid.: “These facts suggest that the Mongolian Kanjur was modelled after a somewhat archaic Tibetan collection that has not survived to the present day.”

【本論】

二部

古代チベットの葬送儀礼とその変容

第一章　古代チベットにおける仏教葬送儀礼の導入

「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」でみてきたとおり、初期の仏教伝道文学作品の主目的の 1 つは、土着の葬儀を廃止し、それに代わって仏教葬儀を導入することであった。しかし、チベット古代において、仏教葬儀は実際に導入されたのであろうか。

この点に関して、実証的な歴史資料は何もないが、ティソン・デツェン代の仏教導入に関する貴重な語り物資料である『バシェー（*Dba' bzhed*）』[324] の末尾に付け加えられた『［死者］供食物語（*Zas gtad kyi lo rgyus*）』[325] に興味深い話がある。「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」「11. 後伝期ボン教文献中の『生死法物語』三部作の残影」で述べたように、『タクパ・リンタク（*Bsgrags pa gling grags*）』の中で、テンパ・ナムカは仏教徒に対して、「仏教には由来譚（byung khungs lo rgyus）がないので、死者の葬儀を行う術がない」と非難していた。そうした中、この『供食物語』は『生死法物語』三部作と同じように、仏教葬儀の成功先例譚のようなものとして作られたのではないかと推測できる。『バシェー』には広略いくつもの写本が報告されているが、この物語が付加されているのはその内の 1 点だけである。この物語が『バシェー』本体とどういう関係にあり、何故それに付加されたのかはわからないが、元来はお互いに独立したものであり、直接結びつくものではなかったと考えられる[326]。

いずれにせよ『［死者］供食物語』は『バシェー』同様、純粋な意味での史実を記した文献ではなく、チベット仏教葬儀の起源に関する物語であり、『生死法物語』と同じく葬儀の「由来譚」、「先例譚」とみなしうるものである[327]。物語の後半に、ティソン・デツェンの葬儀を息子であるムネ・ツェンポ（Mu ne btsan po: ？～ 798 年頃）が執り行うことになり、次の様に述べている。

> 「それから僧たちは『無垢神子経（*Lha'i bu dri ma med pa'i mdo*）』［すなわち］『仏頂無垢陀羅尼（*Gtsug tor dri med kyi gzungs*）』に依拠して、葬儀（'dad shid）を白い法（dkar chos）として（＝仏教流に）営なんだ。その時、金剛界（rdo rje dbyings）の曼荼羅を建立し、神子（lha sras）ティソン［・デツェン］の葬儀（'dad）を行った」[328]

---

[324] Pasang and Diemberger 2000.

[325] Dotson 2016, p. 97: "*The Account of the Food-Provisionning* [*for the Dead*]"; 石川 2019,「供食の経緯」; Doney 2021, p. 157: "*The account of the food offering ritual.*"「供食」の「供」に相当する動詞 gtad に関して、Tucci は「神々といった恩寵を与えてくれる尊格に対する捧げ物には 'bul が、そうではない悪魔祓い的な意味での捧げ物には gtad が用いられると述べている（Tucci 1980, p. 172）」。しかし、これは後世の仏教的文脈での使い分けであって、この『供食物語』においては、それほど厳密な使い分けがされていたかどうかは不明である。

[326] Dotson 2016, pp. 97–99.

[327] Dotson 2016, pp. 97–99; 石川 2019, pp. 68(1)–67(2).

[328] fol. 31a: (l. 1) de nas ban de rnaMs kyis lha'i bu dri ma med pa'i mdo *gtsug tor dri med kyi gzungs* la brten nas 'dad shid dkar chos su mdzad do // de'i dus su rdo rje dbyings kyi (l. 2) dkyil 'khor bzhengs te lha sras khri srong gi 'dad btangs //（* で挟まれた部分は、行の上に小さく書かれている）

ティソン・デツェンの没年およびムネ・ツェンポを含む後継ツェンポの系譜、年次は錯綜しており、現在でも不確定な部分が多いが、『[死者] 供食物語』には重大な年代錯誤[329]が見られ、ティソン・デツェンの葬儀に関する記述を史実とみなすことはできない。しかしながら、この記述はチベットにおける仏教的葬儀の導入に関する重要な情報を提供していることは間違いない。

ここで言及される『無垢神子経』と『仏頂無垢陀羅尼』は 2 つの経典ではなく、同一の経典の前者は通称、後者が正式名である。書写生は本文中に通称を記してしまったがゆえに、行間に正式名を小さく追記したのであろう。通称は、『仏頂無垢陀羅尼』の中心人物である神子（lha'i bu）無垢宝珠心（Nor bu snying po dri ma med pa; 大正 1025 番では摩尼蔵無垢天子）に由来しており、そのタイトルに「陀羅尼」ではなく「経」を加えたものである。この『仏頂無垢陀羅尼』は、「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」（本書 85 頁、注 269）で『生死法物語』の舞台のモデル候補の 1 つとして言及したとおり、『仏頂尊勝陀羅尼』と同じく葬儀に関連した経典で、これに依拠して葬儀が営まれることには不思議はない。

『[死者] 供食物語』は、ティソン・デツェンの葬儀を述べた後、次のように終わっている。

> 「それから後になって[330]、『悪趣清浄［タントラ］（*Ngan song sbyong ba*）』に説かれている普明（skt.: sarvavid; tib.: kun rig）［マンダラ］[331] と九仏頂（skt.: navoṣṇīṣa; tib.: gtsug tor dgu）マンダラに依拠して、葬儀（shid）などが行なわれた。（中略）
> その時以後、すべての葬儀（shid）は仏法の流儀（chos lugs）で行なわれるようになった。ボンの流儀に従う愚か者たちは、多くの財を埋葬（gter du sbed pa）[332] した

---

[329] ムネ・ツェンポはティソン・デツェンよりも先に亡くなっているので、彼がティソン・デツェンの葬儀を行うことは、史実に反している（Dotson 2016, p. 98）。

[330] この箇所の記述には、時系列の錯誤があり、前後関係は文字通りには受け入れられない（Dotson 2007, p. 13, n. 48; Dotson 2016, pp. 97–98）。

[331] このマンダラは、サムエ寺に描かれていたことから、当時重要視されていたことがわかる（Kapstein 2000, pp. 61–63）。「普明」は Vairocana（「大日如来」、「毘盧遮那」）の一形態であり、衆生を悪趣から救う法要などの主尊となるもので、チベット仏教では極めて重要視された（Tucci 1980, pp. 35, 197）。これとは対照的に、日本の真言宗の伝統では、『悪趣清浄タントラ』は、『初会金剛頂経』とされる『真実摂経（*Tattvasaṃgraha*）』（大正 865 番 , 882 番 ; 北京 112 番 : *De kho na nyid bsdus pa*）（シャーンタラクシタ（Śāntarakṣita）著『真実綱要』はサンスクリット語では同名であるが、異なるものである）の釈タントラとみなされ、まったく注目されることなく、法要などもほとんど営まれることがない。近年になって、ようやく仏教学的観点から『悪趣清浄タントラ』が研究されるようになり、全訳が発表された（中島 2012）。

[332] この箇所での gter を、Dotson は後世の埋蔵宝典（gter ma）とみなしたが、石川が指摘するように、墓に埋める埋蔵物と解釈するのが妥当であろう（Dotson 2016, pp. 97–98; 石川 2019, p. 44 (25), n. 48）。『葬儀置換』でみたように、古代の葬儀では、様々な品物が埋葬品として墓に埋められた。帝国崩壊後、こうした墓は荒らされ、埋葬品が取り出された。これらの発掘品が、後伝期の宗教的文脈では埋蔵宝典（gter ma）のカテゴリーの一種である sa gter（土中から発掘されたもの）となったと考えられる。

と言われる。仏法の流儀に通じた方々は、そうした［葬儀］は費用が嵩み、益する（phan）ところが少ないとお考えになって、［仏教葬儀を広めるために］この［死者］供食の慣わし（phyag bzhes）をお創りになった、と伝えられている。『［死者］供食物語』完」[333]

ここに言及されている『悪趣清浄［タントラ］』は、すでに「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」で何度も言及した『一切悪趣清浄タントラ』[334] のことであり、普明マンダラと九仏頂マンダラとは、その中に説かれる 12 の曼荼羅の内の 2 つである[335]。

以上から、『［死者］供食物語』に述べられていることは字面通りには受け取れないものの、9 世紀初頭頃から『仏頂無垢陀羅尼』や『一切悪趣清浄タントラ』に依拠した仏教葬儀が何らかの形で導入されていたと推測できる。

仏教葬儀が導入されたと言っても、少なくとも吐蕃帝国期末期（9 世紀中頃）までは、ツェンポの葬儀が土着の流儀に従って行なわれたことは、チョンゲー谷に残る歴代ツェンポの墳墓の存在からも証左される。そうしてみると、帝国期に仏教葬儀が導入されたとしても、土着葬儀に完全にとって代わったのではなく、土着葬儀と並行して行われただけで、正式な葬儀としてはボン、シェンなどの司祭者が営む古来の土着葬儀が続けられたと考えるのが妥当であろう[336]。

---

333 (31b, l. 2) de nas phyis ngan song sbyong rgyud la brten nas / kun rig dang gtsug tor (l. 3) dgu'i dkyil 'khor la brten nas shid rnaMs byas so // … (l. 4) dus de nas shid rnaMs chos lugs su byed pa byung ste / de yang bon lugs glen pa dag nor (l. 5) longs spyod mang po gter du sbed pa yod skad // de ni god che la phan chung bar dgongs nas chos lugs mkhas pa dag gis zad gtad kyi phyag b zhes (l. 6) 'di mdzad skad do // zas gtad kyi lo rgyus rdzogs+ho //

334 このタントラの前伝期における流布については、羽田野 1987（pp. 34–38）参照。このタントラには、ティソン・デツェンの仏教導入に影響を与えた一人であるブッダグフヤ（Buddhaguhya）の著作になる注釈書も存在する（北京 3451 番 ; Lalou 1953, n° 324）。ブッダグフヤによるティソン・デツェン宛の書翰に対しては、長澤による和訳がある（長澤 1963）。また羽田野 1987（初出 1968）, pp. 31–46 も参照。

335 これら 2 つのマンダラに関しては、田中 1987, pp. 171–176; 1996, pp. 146–148 に簡略に触れられている。14 世紀初に著作された『デウ仏教史（*Lde'u chos 'byung*）』（Martin 2022, p. 686）によれば、レルパチェン（Ral pa can = Khri gtsug lde btsan、9 世紀前半）よって、悪趣清浄堂（Ngan song sbyong ba'i lha khang）が建立されたとあるので、この頃には『一切悪趣清浄タントラ』に依拠する法要がかなり広範に行われる様になったものと推測できる。

336 仏教は中央アジア、東アジアの広範囲に伝播したが、各国、各民族が仏教を採用した状況、理由、それに伴う変容は様々である。たとえば、中国南朝の梁の武帝（在位 502 ～ 549 年）の崇仏に関して、河上は次のように記している。

「武帝の崇仏政策は受菩薩戒に止まらなかった。天覧一六年（五一七）、菩薩戒を受ける前々年には、武帝は諸臣の強い反対を押し切って宗廟での犠牲を廃止していた。宗廟祭祀における犠牲の廃止が仏教思想に基づいていたことは言うまでもない。宗廟での祭祀と言う重事を、武帝は仏教思想に基づいて変化させてしまうのである」（河上 2011, p.106）

ティソン・デツェンの場合は、武帝の例とは本質的に異なっていることに注目する必要がある。

―唐蕃会盟の盟約儀式における仏教儀礼の導入―

帝国期における土着葬儀と仏教葬儀との併存関係は、唐と吐蕃との間で 706 年から 821–822 年の間に 7 回結ばれた会盟[337] における盟約儀式での土着儀礼と仏教儀礼の併存によっても傍証されるであろう。

この内 756 年（至徳元年）に長安で結ばれた会盟の盟約儀式の模様は『旧唐書』に次のように伝えられている。

> 「光宅寺という仏寺に赴き、チベット側は『3 種類の動物（牛、馬、羊）の血を啜（すす）る（＝唇に塗る）のが我々の流儀である』との理由で仏教寺院には赴かなかった。チベット側が『明日鴻臚寺[338] でチベットの流儀に則って血を唇に塗ることにしよう』と提案したので、それに従った」[339]

756 年といえばティソン・デツェンのツェンポ即位の年である。この時点で、チベット使節は盟約儀式のために光宅寺という仏寺に赴くことを拒否し、鴻臚寺という役所に赴くことを提案した。チベット側が光宅寺を拒否した理由として考えられるのは、仏寺という性格上そこでの儀式では血を啜ることが許されないであろうという判断である。そして、そうした制約を受けずにチベットの流儀に則って血を唇に塗ることができる役所を提案したのであろう。チベット資料はティソン・デツェン即位前後には、仏教導入に反対する勢力が強かったことを伝えているが、ここにもそれが反映されているのではなかろうか。

続いて 783 年（建中四年）に唐と吐蕃の境界地帯にあった清水で交わされた盟約に関しては、次のように記されている。

> 「中国側、チベット側双方で 3 種類の供犠獣を屠り、その血を器に入れ、それを唇に塗った。ところがチベット側は盟文を供犠獣と一緒に地中に埋めることはしなかった。盟約が交わされた後、チベット側は中国側に、会盟壇の西南隅にある仏を祀る天幕に赴くことを提案した」[340]

ここでまず注目されるのは、チベット側が盟文を供犠獣と一緒に地中に埋めなかったことである。これはチベット側が、中国側との協議の末に行った供犠獣を伴う盟約を無効とみなしていたことを意味するものであろう。

そして、チベット側は、あらためて仏前で盟約を誓うため、仏を祀る天幕に赴くことを

---

[337] Stein 1988a; Pan 1992; Imaeda 2000; 菅沼 2010; Iwao 2013 参照。

[338] 仏教寺院ではなく、周辺諸国からの使節の接待のための役所。

[339] 佐藤 1973（p. 145）。文面は *HAT*, *Concile* を参照して、適宜変更した。

[340] 佐藤 1973（pp. 164–167, 256–257）。『旧唐書』と『新唐書』の記述には若干の相違があるが、両者を総合した。

中国側に提案したのであろう。756 年の会盟では、仏教寺院に赴くことを拒んでいたチベット使節団は、27 年後の 783 年になると、中国側と合意した供犠獣を伴うプロトコールとしての盟約儀式を行うには行ったが、それを有効とは考えず、自らが有効と見なしていた仏教儀礼に則った盟約を行ったのであろう。ここには反仏から崇仏への決定的な方向転換が窺える。

最後に 822 年にラサで行われた会盟の盟約儀式をみることにしよう。この時の模様は、中国側参列者の 1 人である劉元鼎自身の報告が『新唐書』[341] に残っており、非常に貴重である。それを要約すると以下の通りである。

> 「中国使節団が到着すると、壇が設けてあり、その上の黄金の天幕中にツェンポ（＝ティツク・デツェン ; Khri gtsug lde btsan、通称レルパチェン ; Ral pa can、806 年生、在位 815 年、841 年没）が坐っていた。その右に仏教僧鉢掣逋（ペルチェンポ ; Dpal chen po）が立っており、他の大臣たちは壇下にいた。
> 会盟の儀式を司ったのはペルチェンポであり、チベット語の盟文を読み上げると、通訳が中国語に訳した。それが終わるとペルチェンポを除く会盟者全員が［供犠獣の］血を唇に塗った。
> 会盟が終わると、仏僧が経典を読誦する中で、会盟者一人一人が［壇上の］仏像の前に身を屈め、鬱金（うっこん）水（サフランの香りのする聖水）を口にした。その後で、お互いに祝福しながら壇を降りた」

会盟の儀式は、チベット側・中国側双方が合意した供犠獣を伴う伝統的な外交プロトコールに従うものであり[342]、ペルチェンポを除く会盟者全員が供犠獣の血を唇に塗った。それを司ったのは仏教僧ペルチェンポであったが、会盟の後には改めて仏教儀式が営まれた。これは『新唐書』の「国の政事はかならず僧侶が相談にあずかり、参加を待って決定する」[343] という記述とまさに付合する。

ここで最も注目されるのは、仏教儀式では盟文の代わりに経典が読誦され、血の代わりにサフランの香りのする聖水が用いられたことである。これはまさに『葬儀置換』で土着の葬送儀礼要素が、仏教的要素、なかんずくダラニによって代替されたのと軌を一にする仕掛けに他ならない。会盟という国家間の重要行事に関して、供犠獣の屠殺を必要とする儀式は廃止はされなかったが、前座的な位置づけに貶められ、その締めくくりとしては仏教儀式が営まれるようになった。土着要素は排斥こそされなかったが、その重要性は下がり、上位を占めるようになったのは仏教的要素である。すべてが仏教化されたのでは決してないが、仏教が確実に浸透し、容認、受容されていったことは間違いない[344]。

---

[341] 佐藤 1973（pp. 276–277）。
[342] Tucci 1980（p. 15）参照。
[343] 佐藤 1973（p. 210）。
[344] Dalton 2011（p. 220, n. 5）参照。

第二章　『バルド・トェドル』（14 世紀）

古代における葬儀の変遷に関する詳細はほとんどわかっていない。

9 世紀中頃に吐蕃帝国が崩壊し、その後混乱の 1–2 世紀が続いた後、11 世紀になってチベット史の中世（仏教史の後伝期）の幕が上がると、そこに現れるのは軍事国家吐蕃とは全く趣を異にする仏教国家チベットであった。

この過度期に関して、Kapstein は次のように述べている。

> 「10 世紀末期以後、チベットはインド仏教の新しい教え、密教の伝承の舞台となった。［それは］儀礼、瞑想、ヨーガなどであり、その中には死に関連したものも多くあった。こうした伝統が大量に導入された結果、それに応え、それを吸収するためにチベット人による葬送儀礼が生みだされた。そうした中で、14 世紀に著作された、いわゆる『チベットの死者の書』は最も有名なものである」[345]

> 「この著作（＝『チベット死者の書』）はニンマ派のものであるが、その伝承および実践は他の宗派、なかんずくカギュ派にもあまねく広がり、一種の文化現象となったことは広く知られている」[346]

著者（今枝）の経験からしてもカギュ派の一派であるドゥク派を国教とするブータンの葬儀は大抵このテキストに沿ったものである。またボン教の葬儀でもその類書が用いられていることは、Kvaerne [347] が報告しているとおりである[348]。

ここで『チベットの死者の書』として言及されているのは、いうまでもなく 14 世紀の

---

[345] Kapstein 2000, pp. 8–9.

[346] Kapstein 2000, p. 206, n. 32.

[347] この類書の詳細は Kvaerne の報告からはわからないが、カルマ・リンパの『バルド・トェドル』そのものではない（Kvaerne 1985, p. 11）。上述（本書 105 頁）したように、ボン教にはニンマ派同様にテルトン（埋蔵宝典発掘僧）の伝統があり、ボン教のテルトンによるテルマの中にも『バルド・トェドル』に倣った、ボン教版『死者の書』がある。Tucci が指摘しているように、多くのボン教経典と同じく、カルマ・リンパ版『バルド・トェドル』の一種の「剽窃」とも言えるものである（*TPS*, p. 716）。Tucci はまた「ボン教版とニンマ派版は同類のものであり、両者には共通の祖型が想定できる」と鋭く指摘している（Tucci 1980, p. 169）。

[348] チベット仏教各宗派にわたる総括的な研究がなされていないので、確定的なことは言えないが、少なくともゲルク派の葬送儀礼は『死者の書』に依拠して行われていない。平岡（2001）が訳出・紹介した『ゲルク派版 チベット死者の書』は 18 世紀にアムド（青海省）のクンブン寺のヤンチェン・ガロという学僧によって著作された論書であり、誤解を招きやすいが、カルマ・リンパのテルマ（埋蔵宝典）『死者の書』とは本質的に異なったものである。この本は平岡自身が述べているように、死、中有、生に関するものであるが、「ニンマ派版『死者の書』とは異なり、死ぬ前に学習することを絶対条件」にした「修道者むけのテキスト」（平岡 2001, p. 219）である。

ニンマ派テルトン（＝埋蔵宝典発掘僧）、カルマ・リンパ（Karma gling pa: 1326–1386）の発見したテルマである。チベット語での通称は『バルド・トェドル（*Bar do thos grol*）』、すなわち『バルド（bar do: 正式には bar ma do 'i srid pa; skt.: antarābhava; *Mvp* 7680; 中有）の間に（導師の指示を）聞くことによる救済』という表題から分かるように、死後、輪廻転生するまでの 49 日間における死者に対する教示が中心であるが、それ以外にも仏教の基本的な教義である輪廻、中有、六趣（'gro ba rigs drug）など多岐にわたる項目が展開されている。また、五仏（rgyal ba rigs lnga）[349]、寂静尊・忿怒尊（zhi khro）など、チベット密教に特徴的な要素も多く含まれている[350]。

『バルド・トェドル』は教義書的性格が強いが、これと相互補完的関係にあるのが儀軌書的性格の濃い『カリン・シト（*Kar gling zhi khro*）』すなわち『カルマ・リンパの寂静尊（*zhi*）・忿怒尊（*khro*）』である。後者に依拠した葬儀は、書名と同じく『カリン・シト』として知られ、現在でも非常に盛んである。『バルド・トェドル』は、チベットの『死者の書』として早くから西洋、日本で翻訳された[351]。一方、広汎な儀軌書である『カリン・シト』は、チベット仏教圏外には紹介されたことがなかったが、ようやく最近になってその内の重要な一部分が英訳された[352]。

『バルド・トェドル』には、輪廻転生、中有など仏教の基本的な教義が説かれている。しかし、不思議なことに、中有を転生する死者の特性は、初期の仏教教義ではあまり明確には定義されておらず、諸派間で見解が異なっていた。また、個人の生死をめぐる問題を重要視する者もいたが、こうした問題は異端視されることもあり、初期の多くの宗派で放置されたようである[353]。A. Bareau が要約したように、ヨーロッパの学者たちの意見を代表する *The Encyclopedia of Buddhism* は、バルドの理論とそれに関する思索は原始仏教の基本的な教えには沿わず、それと齟齬をきたすものであり、後期仏教学派に属するものとみな

---

[349] 大日如来とその化身である阿閦如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来。

[350] 今枝 2022a, p. 69, n. 202 参照。

[351] 『チベットの死者の書』は、チベット仏教圏のみならず世界的にも現在最も知られているチベット語作品であることに間違いないであろう。この作品をチベット仏教圏外に最初に紹介したのは Evans-Wentz であり、『チベットの死者の書 あるいは中有世界の死後体験』というタイトルで英訳の初版が 1927 年に発行された。その後、1933 年にフランス語、1935 年にドイツ語の翻訳が出版されたが、いずれもチベット語の原文ではなく、英語の翻訳に基づくものであった。ドイツ語版には C.G. Jung が「心理学的解説」を加え、その後の英語版の再版にも掲載されたことが、この作品の人気を後押ししたことは間違いない。1949 年には、偉大な仏教学者にしてチベット学者でもある G. Tucci が、学術的な序文と注を添えたイタリア語訳を出版した。こうして早くからヨーロッパの主要言語に翻訳されたことで、この作品は仏教の基本的な概念を西洋に普及させるのに大きな役割を果たした。現在でも、世界中で復刻版や新訳が継続的に出版されているのは、この作品への持続的な関心を反映しており、チベット仏教の「古典」として、確固たる地位を確立していると言える。日本で紹介されたのは、おおえまさのりによる Evans-Wentz の英訳からの重訳が発表された 1973 年のことで、チベット語からの最初の訳は川崎信定による『原典訳チベットの死者の書』である（川崎 1989）。

[352] Dorje 2006.

[353] 仏教学全般におけるこのテーマに関する最近の研究については、Cuevas 2003, ch. 3 を参照されたい。

している[354]。しかし、チベット仏教の形成に貢献したのは、まさにこの後期仏教諸派であり、『バルド・トェドル』は、彼らの思索とチベット土着の要素とを融合して構築された、チベット仏教独自の壮大な体系と言うことができる。

J. Bacot は、『バルド・トェドル』のフランス語訳の序文で、このチベット語作品の独創性を強調してこう述べている。

> 「チベットの『死者の書』は、輪廻転生のメカニズムという難題を見事に処理している。仏教の正統的典籍では、ガンダルヴァ（skt.: gandharva; tib.: dri za; 乾闥婆（けんだつば））[355]をデウス・エクス・マキナ[356]として登場させることにより何とか解決しているが、歯切れが悪いことは否めない。その点『バルド・トェドル』は、生まれ変わる子供の両親、性別までもを巧みな手法によって解決している」[357]

『バルド・トェドル』では、五仏（rgyal ba rigs lnga）と六ムニ（skt.: muni; tib.: thub pa; 牟尼）が共存しているが、この 2 セットの尊格の共存は、その起源において、内部矛盾ではないにせよ、調和させるのが難しいいくつかの論争点[358]を反映していると思われる。すなわち、輪廻に五趣があるのかあるいは六趣があるのかという問題は、初期の仏教諸派の間で長い間議論されたが、最終的な合意が得られなかった教義上の論点である。こうした状況下、五仏は五趣（'gro ba rigs lnga）、六ムニは六趣の救済主とみなされ、両者が同時に現れるということは、教義的観点からすると難しい問題をはらむ[359]。それゆえに、『バルド・トェドル』でこの問題がどう処理されているかは興味深い点と言える。

『バルド・トェドル』では、まず死の直後のチェニ・バルド（chos nyid bar do）と呼ばれる期間の最初の 5 日間に、五仏とその眷属たちが死者の幻影の中に次々と姿を現す、と

---

354 Demiéville *et al.*,『法寶義林』5, 1975, 559a.

355 輪廻転生において中有での霊的・肉体的存在と見なされるもの。

356 古代ギリシャの演劇において、劇の内容が錯綜してもつれた糸のように解決困難な局面に陥った時、絶対的な力を持つ存在が現れ、混乱した状況を解決することで物語を収束させるという手法を指す。

357 Bacot 1933, vii–viii.

358 この問題に関しては、今枝 2021 参照。

359 チベット仏教は最初期から説一切有部律を採用しており、この律に依るかぎり輪廻には五趣しかない。それゆえ、いわゆる輪廻図（sird pa'i 'khor lo）にも古くは五趣しか描かれなかったはずであり、著者（今枝）が目にしてきた壁画でもタンカ（軸装仏画）でも、古いものはすべて五趣である。この場合、輪廻からの救済ということを考えると、五仏の方が五趣と結びつきやすい。事実、そう結びつけたテキスト（例えば、*Zhi khro dgongs pa rang grol las / las bzhi sbyin sregs kyi dpe 'u ris las thog mar zhi ba'i dpe'u ris* はそのうちの 1 つである。今枝は、この写本（著者、年代未詳）をニューデリーの E. G. Smith の好意により閲覧することができた）もあるが、広くは流布しなかったと思われる。
厳密にいつからとは断定できないが、時代が降るにつれ六趣を描く輪廻図が現れてくるようになり、その場合は各趣に一人のムニが配置される。このことから、六趣輪廻図は観音菩薩の六字真言と関連があることは明らかで、六字真言の一字一字が六趣の一趣一趣に当てはめられたであろうと推測される。教学史、美術史の観点からの検証が待たれる。

説く。五仏の記述は、古典的な密教経典にすでに存在するよく知られたものであるが、この五仏はここでは輪廻の五趣とは直接関連づけられていない。

6 日目になると、六趣の六ムニが一堂に現れる。ここから『バルド・トェドル』は六趣という立場に立っていることが明らかとなる。そして、六ムニは観音菩薩の六字真言「オーム　マニペメ　フーム（Oṁ maṇi padme hūṁ）」の一字一字で表されており、六ムニのうちの各ムニが六趣の内の一趣の救済主となっている。これは、現在ダライ・ラマを観音菩薩の化身とするチベット仏教徒の間で最も広く浸透している考え方である[360]。

しかし、すでにみたように、この「オーム　マニペメ　フーム」というダラニは、前伝期仏教伝道文学中では他のダラニと並んで用いられるダラニの一種に過ぎなかった。例えば、『三毒調伏』では、亡くなった人を悪の道に走らせる三毒を調伏するために唱えられる 3 つのダラニの 1 つであり、「オーム　マニペメ　フーム」の六字が六趣から衆生を救うわけではない。観音菩薩の六字真言が、六趣の衆生すべてを救うという全能とも言えるような重要な役割を果たすようになったのは、11 世紀以降であろう[361]。

ここで、これまで研究者の間であまり注目されてこなかった『バルド・トェドル』の文体を検討することにしよう。1989 年にチベット語原典から日本語に翻訳した川崎信定は、その文体について「第二人称の呼びかけの多い本書のチベット文は口語的で新鮮に感じられた」と記している[362]。また R. A. F. Thurman も、全文を 2 つ、すなわち発掘者（著者）であるカルマ・リンパが読者に指示する部分と、儀式の導師が、死者、あるいはその途にある人に語りかける部分の 2 つに分けている[363]。Thurman はこの区別を文体の問題と結びつけてはいないが、実際のところこの 2 つは文体を基準として区別することができる。

第一のグループは、カルマ・リンパが葬儀の導師のために書いた指示集である。このグループに分類される指示は、論述調のスタイルが特徴で、例えば冒頭の 1 節には、次のような記述がみえる。

> 「遺体がない場合には、導師は死者の生前の寝床または坐所に座をかまえて、«このお導きは真理の力なり» と宣言し、死者の意識が召喚され、導師の前で聞いていると思いなして唱えられるべきである」[364]

---

[360] ボン教では、六ムニに対応するものとして六シェン（'dul ba'i gshen drug）があり、シェンの一人一人が六趣の各趣に当てはめられている。ただし、「六字真言」に該当するものはない（Kvaerne 1985, Plates XX, XXI）。興味深いのは、餓鬼趣のシェンとしてムチョ・デムドゥク（Mu cho ldem drug）が挙げられていることである。Bellezza によれば、彼はボン教の開祖とされるシェンラブ・ミボ（Gshen rab mi bo）から葬送儀礼に関する教えを直接授かり、それを埋蔵した。それらが発掘されたものが、ムチェ・トムドゥル（Mu cho'i khrom 'dur）と称される膨大なテルマ葬送儀礼文書である（Bellezza 2008, pp. 367, 389）。

[361] チベットにおける観音信仰の展開については、Kapstein 1992 および Schaik 2006 を参照されたい。

[362] 川崎 1989, p. 212.

[363] Thurman 1993.

[364] Evans-Wentz 1960 [1927], p. 87、川崎 1989, p. 8（訳文は適宜変更した。以下同じ）。

他の箇所は、指示が導師に向けられたものであることをより明確に示している。

「死に赴く者の体外へ吐く息が途絶える前から、その耳許で何遍となく説いて、彼の心にしっかりと刻みつけるようにさせるべきである」[365]

「もろもろの死の徴候(しるし)が次々にはっきりと顕れては、次々に終わろうとする、まさにその時に、以下のように発心(ほっしん)を促すべきである」[366]

第二のグループの指示は、導師が死期が迫った人や亡くなった人に与えるべき指示である。これは、第一のグループの指示とは対照的に、導師が死者に直接話しかける形式で書かれている。

「ああ、善い人（善男子(ぜんなんし)）〇〇よ、今こそ、汝が道を求める時が到来した」[367]

「ああ、善い人〇〇よ、今や死なるものが汝に訪れているのだ。今こそ、次のように発心すべきである」[368]

「ああ、善い人〇〇よ、心を惑わせることなく、全神経を傾けて聴け」[369]

「ああ、善い人〇〇よ、今や死と呼ばれるものが到来したのだ。汝はこの世から旅立つのだ」[370]

「ああ、善い人〇〇よ、チェニ・バルドの最初の五日間でどんな恐怖や恐れが襲ってきても、次の言葉を忘れてはならない、そしてその意味を心に刻み、前へ進め」[371]

このように、導師が死者に直接語りかけ、危険を伴う中有を通過する際の道案内をするのである。川崎は、こうした第二人称での呼びかけに口語的な新鮮さを感じたと述べているが、そこにそれ以上の意味は見出していない。このような直接的な呼びかけこそは、『バルド・トェドル』の最大の特徴であり、ここにその本質が現われている。これに関して、Bacot はフランス語訳の序文で、非常に鋭い指摘をしている。

---

[365] Ibid., 91; 川崎 1989, p. 14.
[366] Ibid., 94; 川崎 1989, p. 16.
[367] Ibid., 91; 川崎 1989, p.13.
[368] Ibid., 94; 川崎 1989, p. 16.
[369] Ibid., 102; 川崎 1989, p. 25.
[370] Ibid., 103; 川崎 1989, p. 26.
[371] Ibid., 103; 川崎 1989, p. 26.

「本書の起源は不明である。インドの原典をチベット風に翻案したものなのか、それとも 7 世紀以前に遡るチベットの伝統を仏教的に翻案したものなのか？そのいずれかはわからないが、『バルド・トェドル』は極東のアニミズムを基礎とした死に関する論考である」[372]

Bacot の「インドの原典をチベット風に翻案したものなのか」という問いかけに対して考えてみると、現在チベット仏教徒が行う葬送儀礼のうち、明らかにインド起源と言えるのは、『一切悪趣清浄タントラ』に基づくものである。このタントラの主尊は大日如来（＝毘盧遮那 ; skt.: Vairocana; tib.: Rnam par snang mdzad）であるが、激しい儀式（drag po）[373] の場合は阿閦仏（skt.: Akṣobhya; tib.: Mi 'khrugs pa）に置き換えられる。それゆえにこの葬儀は、その主尊の名前にちなんで「ミトゥクパ（Mi 'khrugs pa）」として親しまれている[374]。この命名法では、タントラの表題である『ンゲンソン・ジョンワ（*Ngan song sbyong ba*; 悪趣清浄）』と葬儀の名称である「ミトゥクパ」は、『バルド・トェドル』と「カリン・シト」と同じ関係にあり、前者が教義書的性格のものであるのに対して、後者はそれに基づく儀礼である。すでに敦煌文書には、このタントラに関連する文書が相当数あり、その中には間違いなく葬儀に関するものもあることから、古くよりこのタントラが葬儀に用いられていたことがわかる[375]。しかしこの葬儀では、『バルド・トェドル』による『カリン・シト』とは対照的に、導師は死者に直接話しかけることがない。その代わりに祈りを捧げ、来世でより良くなるように死者のために功徳を廻向するだけであり、両者の間には歴然とした違いがある。現在わかっている限りでは、インド仏教には導師が死者に直接語りかける葬送儀礼は存在しない。こうしてみると、『バルド・トェドル』を、インド起源の葬儀をチベット風に翻案したものとみなすのには無理があるように思われる。

そこで「7 世紀以前に遡るチベットの伝統を仏教的に翻案したものなのか？」という Bacot の問いかけを検証してみたい。しかしながら繰り返し述べているように、古代チベットの土着葬儀に関する我々の知識は、この問いかけに答えるのにはあまりにも乏しい。にもかかわらず、「一部」でみてきた初期仏教伝道文学作品中の『葬儀置換』と『死者神国道説示』に、その答えに繋がる 1 つの手がかりが見出せる。それは、他でもない死者に直接語りかけるという特有の文体である。

たとえば『葬儀置換』では、

---

[372] Bacot 1933, vii.

[373] 四種法（las bzhi）すなわち息災（zhi）、増益（rgyas）、敬愛（dbang）、降伏（drag）の内の降伏に当たる。Tucci（1980, p. 32）参照。

[374] マンダラの主尊として描かれる場合などは、「阿閦仏」という一般的な名称ではなく「普明（skt.: Sarvavid; tib.: Kun rig）となる。

[375] Imaeda 2007（n.17）を参照。Dalton and Schaik 2006（entry 318, 384, 420, 439, 440, 507, 579, 712）、そしてまた 8210/S.421 も参照。 Kapstein も、これらのテキストの 1 つ（IOL Tib J 318）を『一切悪趣清浄タントラ』との関連で研究している（Kapstein 2010, pp. 169–174）。

「死者某（gshin mying 'di zhe bya ba）が、餓鬼に生まれようとも、いかなる餓鬼の敵によっても捕えられることなく、飢えと渇き［に苦しむ］一切の［餓鬼道の］衆生が守護されますように」
「寿命の尽きた某（tshe 'das pa mying 'di zhe bya ba）が、たとえどこに生まれようとも、鞭を持つ魔物や煩悩という凶器などによって捕らえられることなく、死王（'chi bdag）のデュ魔をはじめとする三界のいかなる敵にも打ち勝ちますように」

という祈願文が用いられている。『死者神国道説示』でもまた、

「寿命の尽きた汝よ、聞け（tshe 'das pa khyod nyon cig）」

という直接話法の命令形が用いられている。この死者に対する命令形の文体は、まさしく『バルド・トェドル』おいて導師が死者に直接話しかける文体と同じものであり、非常に意味深長である。Tucci は、文体のことには触れずに、

「現在知られているチベットの『死者の書』には、相互に大きく異なる点がある様々な版があるが、どれも雑多な要素から構成されている。これらよりもずっとシンプルな版が敦煌文書（Lalou 1949 参照）の中に発見されている」[376]

と述べているが、Lalou（1949）が扱っている敦煌文書とは『死者神国道説示』に他ならない。Tucci は、実証的な裏付けができないままに、『バルド・トェドル』の祖型に当たるものを『死者神国道説示』の中に直感的に感じ取っていたのであろう。
ではもう一歩進めて、『死者神国道説示』における、死者への話しかけ、命令形は、どこに由来するものなのだろうか。Bacot が問う「7 世紀以前に遡るチベットの伝統」があるとした場合、それは一体何なのであろうか。インド仏教には存在しない第二人称での死者への語りかけは、どこから生まれたのであろうか。この問いに対する答えは、仏教伝来以前のチベット土着葬儀に求められるであろう。

[376] Tucci 1980, p. 270, n. 2.

第三章　古代土着葬送儀礼における動物利用の由来譚と成功先例譚[377]

古代チベットでは、羊、馬、ヤクなどの動物が葬儀に用いられていたことは、本書一部『葬儀置換』において、仏教徒が批判する従来の葬儀の描写からも看取できた。また、他の敦煌文書中にも、羊、馬、ゾモなどが葬儀で必要とされる様子を述べるものがあることからも、動物利用の存在は証左される。これらの文献の多くはラプ（rabs）と呼ばれる儀礼の由来譚や先例譚を書き留めたものであり、古代のチベットでは、葬儀や治療儀礼に先立ち、ラプを語ることが行われていたらしい[378]。儀礼の由来や成功の先例譚を引用することで、目下の儀礼の正当性と効果を保障することが意図されていたと考えられる。それゆえ、これらのラプは先例の効果を現在の儀礼に振り向ける次のような定型表現によって結ばれている。

> かつて有益であったなら、今も有益である。かつて福徳があったなら、今も福徳がある[379]。

ラプに述べられる由来や先例の大部分は神話的な要素によって構成され、未知の専門用語が頻出するため、全容を理解するのは難しい。しかし、話の展開には一定のパターンがみられることが分かってきた[380]。葬儀に関連する内容であれば、狩猟や落馬、結婚、競争／競走、魔物の影響などの原因によって人が突然死に至り、その遺族が葬儀を行う。多くの場合、治療や葬儀を得意とする儀礼執行者の指揮のもと、様々な設えによって構成される斎場が準備され、葬儀が行われる。この際、死者の伴として動物もまた、必要とされた。PT 1136 の第二部に収録される話では、北の荒野ヘドン（'brong、野生ヤク）の狩猟に出かけた弟がドンに殺されてしまう。そこで、兄が葬儀を出すことになるが、それに必要な弟の愛馬は、弟と共にドンに殺されていたため、兄は弟の死後の旅路の伴として相応しい優れた馬を探しに向かう。そうして捕獲した馬に対して次のように語りかける。

---

[377] 本書で何度も繰り返し述べている通り、古代チベットにおける土着葬儀に関して、現在、我々が入手できる資料はあまりにも断片的で、未だその詳細も全体像も明らかにはなっていない。その中で、西田・今枝・熊谷 2019 では、古代チベット人の死後の世界観について、先行研究をもとにアウトラインを描いた。それによれば、当時の人々が想定する世界観には、「生者の国」と「死者の国」の 2 つがあり、「死者の国」には「喜びと幸せの国」と「悲惨と苦しみの国」というさらに 2 つの国があった。そして、この世界観をもとに、「喜びと幸せの国」に死者を送り届けることが、葬儀の目的であったと結論づけた。この死後の世界観に関しては、Stein の研究以来、Macdonald や Blondeau、今枝もこれに従ってきたが、Bellezza が指摘する通り、現在では再検討の必要性に迫られている（Stein *ET*, Macdonald *ET*, Blondeau 1976, 今枝 2006, Bellezza 2013）。この点は、葬儀文献を扱う上では非常に重要な問題であるが、本書の目的には影響しないため、稿を改めて論じたい。

[378] Dotson 2016, pp.79–80; 2018, p. 275.

[379] gna' phan da yang phan gna' bsod da yang bsod（PT 1136, l. 60; PT 1068, ll. 59–60）。

[380] Dotson 2016, pp.78–89.

「［弟の］葬儀を出すため、墓を築くために［必要な］相棒がおりません。愛馬がおりません。ゆえに優れた家畜である汝が、ご武勇を峠で発揮なさるようお願いします。度量を浅瀬を渡［るのに披露］なさるようお願いいたします」[381]

この後、馬は兄弟の国へ向かい、セル・ガンゲと名付けられ、特別な飲食物と立派な装束を与えられる。葬儀にどう関与したのか、その詳細はわからないが、次のような結びの一文があることから、セル・ガンゲは託された役目を十分に果たしたようである。

ご武勇は峠で発揮され、度量は浅瀬を渡［るのに披露］された。利益［と］福徳があった[382]。

ここで言及される「ご武勇（chab gang）」は、『葬儀置換』の母方親族からの餞別品中で家畜を指すと考えた「勇気（chu gang）」の敬語形である。峠や浅瀬は、死後の旅路をゆく死者とその伴である動物が越えなければならない難所であり、上の例は、馬に対して怖気付くことなく死者とともに旅路を進むよう言いふくめたものである。「ご武勇（／勇気）」と「度量（yang ba）[383]」は、古代チベットクロニクル中でも、ツェンポの臣下を讃える文脈中に並んで言及されていることから[384]、主従関係において従者の具えるべき優れた特質を述べたものと考えられる。

上の例では、馬に対して勇敢さと度量を発揮するよう語りかけたのは喪主である兄であったが、ボンやシェンといった儀礼執行者がその役を担う場合もある。惨死した妹のために、兄が特別なゾモを捕えて葬儀を行う話では、斎場の設営に続いて次のような描写がある。

---

381 shid bgyir 'brang gzugsu / do ma ma mchis snying dags ma mchisna // pyugs spo ma khyod kyis chab gang lar bgyi 'tshal yang ba rab du spogs 'tshal（PT 1136, ll. 25–26; 石川 2018, p. 54）。

382 chab gang ni lar btab yang 'ba' [bab?] du spagste / phan te bsod do //（PT 1136, l. 29; 石川 2018, p. 54）。

383 yang ba を、石川は「yang po（軽い）」と解し、「軽快さ」と訳す（石川 2018, p. 54）。Dotson は、“breadth” と訳すが、次注に引用する古代チベットクロニクル中の yang ba に対しては、“expanse of his mind” という訳を付しており、おそらく「yangs pa（広い、広大な）」と解していると思われる（Dotson 2013, p. 290; 2023, p. 64））。確かに、石川の提示する「軽快さ」という理解は、馬の能力を述べる文脈に相応しい。しかし、クロニクルでは、大臣キュンポ・プンセーズツェの chu gang が「大きく（che）」、yang ba が「長い（ring）」ことが讃えられている。「長い」という形容詞は「軽快さ」のイメージとは結びつきにくいため、ここでは Dotson の解釈を支持し、yang ba を「度量」と訳した。日本語では「度量」は「大きい、広い」という形容詞で讃えるのが相応しいだろうが、チベット語の ring には「遠い」という意味も含まれることから、度量が広いことにも使われるものと解した。

384 btsan po 'i blon po 'i nang na // khyung po spung sad zu tse las glo ba nye ba sngon chad ma byung ngo // zu tse 'dzangs she na 'dzangs // dpa' zhe na dpa' 'o // chu gang che zhe na che // yang ba rIng zhe na ringoring ngo / /（PT 1287, ll. 316–317。ツェンポの大臣の中で、キュンポ・プンセーズツェより忠実なものは未だかつていない。ズツェは賢さについて［言えば］賢く、勇ましさについて［言えば］勇ましい。勇敢さが大きいかと［言えば］大きく、度量が広いかと［言えば］大変広いのである。）

父なるドゥルシェン・マダが詠じた。「スィン魔の血筋のゾモである汝も、これから先は、ご武勇は峠で発揮されよ。度量は浅瀬を渡る［のに披露］されよ」[385]

ドゥルシェン・マダは、葬儀の執行者として複数の文書にその名がみえるが、名前の一部に墓（dur）、シェン（shen ／ gshen）を含むことからも、葬儀や墓に関係する仕事を得意とする職能者シェンであったと思われる。儀礼執行者が、動物への語りかけを行う場合には、この例のように「詠じる（bsgyer ba＝dgyer ba）」という動詞が用いられていることは大変興味深い。実際の儀礼の場面では、節をつけた語りが詠唱されていたことが窺える。

動物に対して勇敢さと度量を発揮するよう説く上記の例は、葬儀関連文献に散見されることから、葬儀のラプにおける一種の定型表現であったと考えられるが、儀礼執行者が行う語りかけには、より詳細な以下のような内容もみえる。これは、彼よりも優れたボン、強力なセーはいないと言われるゴンツン・チャが[386]、死んだ自らの息子レウ・ヤンカジェの死後の伴となる動物に語りかける場面である。

ボンの誰かが詠じる［という］のは、ゴンツン・チャが［詠じるのである］。重要な葬儀の羊（＝キプルク・マルワ）[387] に任せて［次のように詠じるのである］。
「さぁ、これから先は、重要な葬儀の羊に任せよう。私の息子は有能であったが亡くなった。大切だったが崩れた。死んだ人を弔うならば、生きている［者が］歌を送る。崩れた人（＝死者）が恋しいならば、家畜の囲い［の中を］空にする。
さぁ、兄［馬］ダンギョクと弟［馬］イーギョクの 2 頭が峠の高みを越えるのならば、人と家畜がともに［越えるよう］重要な葬儀の羊が先導せよ。低い浅瀬を渡るのならば、人と家畜がともに［渡るよう］重要な葬儀の羊が先導せよ。
さぁ、これから先は、兄［馬］ダンギョクと弟［馬］イーギョク、［亡くなった息

---

385 pha / dur shen rma das bskyer na srin rab gyi mdzo mo khyod gyang / di ring 'pan chad na chab gang laru bgyi 'tshal yang ba rab du spogs 'tshal gyis /（PT 1068, ll.122–123）。

386 'gon tsun / pyva las / bon / bkhas gsas drag myede（PT 1134, ll. 81）。これに続いてゴンツン・チャは息子であるレウ・ヤンカジェを膝の上に乗せて 3 日 3 晩詠じたが（bu lhe'u yang ka rje ni pang du blangs te zhag gsuM / du bskyer）息子は死んだままであったと述べられている。ここで 3 日 3 晩「詠じた（bskyer）」のは、何らかの治療儀礼にまつわる節であろう。

387 skyibs lug mar ba: skyibs lug は『葬儀置換』IV において批判された葬儀に必要とされた羊であるが、ここでは mar ba という修飾語がついた名称で呼ばれている。Stein は説明なしに “mouton rituel” と訳しているが、文脈には合致している（Stein 1971, p. 496）。mar は一般的には「バター」「油」を指すが、それでは文脈に合わない。Bellezza は、smar/rmar（something very precious, auspicious or beneficial）と考え、死者にとって重要な役割を果たす羊には、バターを塗って区別したのではないかと推測している（Bellezza 2008, pp. 460, 502, n. 490）。本書でも smar/rmar の意を採り、死者と馬とが死後の旅路を順調に進む手助けをする葬儀の羊を指す専門用語と理解し、「重要な葬儀の羊」と訳した。

子］レウ・ヤンカジェの三者も、カラスの子の毛のような暗闇に投げ込まれるだろう。しかし、重要な葬儀の羊が導けば、レウ・ヤンカジェと兄［馬］ダンギョク、弟［馬］イーギョクの三者は、［ゴンツン・チャによって］定められた［通りに］空の 9 層にいらっしゃるツェンツン・ラ［神］［のもとへ到る］。［ゴンツン・チャによって］定められた［通りに］［ツェンツン・ラのいらっしゃる［所へ］、人と家畜がともに［到るのである］。[388]

この例では、葬儀の羊に対して馬の先導をする様に、人と馬がともに死後の旅路を進むための先導をする様に言い聞かせている[389]。これに続いて、同文献では、死者の伴となる動物たちに対して、より詳細な死後の旅路における指示を述べているが、それについては別稿にて紹介することにしたい。

---

[388] bon gang gis / ni / bgyerd / mgon tshun / phyva'is / skyibs / lug mar ba la / gtade / / da di ring pa (⇒ phan) 'chadu skyibs / lug / mar ba la gta do / nga 'i / bu / 'pan te ni grongs / sdug ste ni rlag / na / grongs myi bdur na / gson / mgur pras (⇒sprad) / rlag myi btsal na / pyugi ra stongs / da' / pu dang mgyogs / tang / nu yid mgyogs / gnyis / mtho la rkal gyang myi phyugs / mnyam / du / skyibs lug mar bas / drongs shig / dma rab 'bog gyang myi phyugs myi phyugs / mnyam / du skyibs lug mar bas drong shig /da di ring pan chadu / pu dang mgyogs / dang nu yid mgyogs / dang lhe'u yang ka rje dang gsum / yang / bya rog gu'i / spu dang mtshungs / smug rum / na bo ro / skyibs lug / mar / bas / bgris / na / lhe'u yang kha rje' / pu dang mgyogs / nu yid mgyogs / gsuM yang /// gnam / rim pha dgu'i / steng du btsan btshun lha' / dkos (⇒ skos) / na / bzhugs / gyang myi phyugs / mnyam / du dkos / na bzhugs / (PT 1134, ll.124–133; Stein *ET* pp. 495–496; Bellezza 2013, pp. 233–234).

[389] 死後の旅路における動物の役割は未詳な部分が多いが、羊が先導役を務め、馬とヤクが乗り物となっていたと思われる。

結論

前章でみたように、古代チベットの土着葬儀では、喪主や儀礼執行者から動物に対して、死後の旅路での心得が説かれていた。馬とゾモへの語りかけの例では、「汝（khyod）」という第二人称の代名詞を用いて、動物へ直接話法による依頼、命令が下されていた。他方、一部でみた『葬儀置換』、『死者神国道説示』では、死者に対して直接話法による語りかけが採られており、特に後者では、「寿命の尽きた汝よ（tshe 'das pa khyod）」と、やはり第二人称の代名詞によって呼びかけていた。

この共通性に着目するならば、仏教徒の著作である『葬儀置換』、『死者神国道説示』にみられた死者に対する直接的な語りかけという特有の文体、および伝統は、動物に対して直接語りかけるという古代の土着葬儀の伝統の延長線上に位置するものと考えられるのではないだろうか。土着宗教では、死者の死後の旅路の命運は、伴となる動物に託されていた。それゆえ、彼らに対して葬儀の場で直接語りかける必要があった。しかし、その代替案として提示された仏教の葬儀においては、死後の旅路は死者一人で進むものであり、その命運は生前の行いによって決まるものである。したがって、教義上は死者に語りかけるということはあり得ず、無益である。大乗仏教的観点から唯一可能なのは、死者に代わって善業を行い、その功徳を死者のよりよい転生のために廻向することである。しかしながら、動物に先導されて目的地に赴くことに安堵感を得ていた当時のチベット人にとって、何らの導きもなく死者を一人で死後の旅路に放り出すことは受け入れ難いことであったであろう。そこで一種の「方便」として仏教側が考案したのが、動物に与えていた指示を、死者（の魂）に直接与えるという葬送形式だったのではなかろうか。話しかける対象は動物ではなく死者となったが、語りかけという形態は継承され、チベット人にとってこの形態の継承は大きな安心感をもたらしたに相違ない。

カルマ・リンパの手になる『バルド・トェドル』に基づく葬送儀礼の最大の特徴は、死者に対する直接の話しかけによる死者の誘導である。これは、伝統的なインド仏教にはなく、他の仏教圏にも類をみないチベット独自の手法である。この形態の特殊性にいち早く注目した Bacot が、「本書の起源は不明である。インドの原典をチベット風に翻案したものなのか、それとも 7 世紀以前に遡るチベットの伝統を仏教的に翻案したものなのか？そのいずれかはわからない」と 2 つの可能性を指摘していたことは既にみた通りである（本書 122 頁）。この内、翻案の元となったと考えられるインドの原典は、現時点で我々の知り得る限り存在しない。翻って、敦煌チベット語文書には、死者に対してではなく、死者を誘導する動物に向かって話しかける事例がいくつも存在する。この二人称での直接話法と、『バルド・トェドル』におけるそれとは、話しかける対象こそ異なるが、文体としては酷似している。このことから、『バルド・トェドル』における死者への直接話しかけによる誘導は、古代チベット土着葬儀における動物への直接の話しかけに遡る可能性が極めて高い。現時点では、これが今後の研究を進める上で最も有益かつ実際的な観点か

ら我々が立てた作業仮設である[390]。この作業仮説の是認、否定には、今後のさらなる究明が必要である。

[390] Eternal Bön (g.yung drung bon) を定義するのに Kvaerne らが用いた用語に倣った（Kvaerne and Martin 2023, p. 6: “Although Eternal Bön was not from the start a well-defined religious movement, the term will be used for heuristic and pragmatic reasons”)。

む す び

本書の当初の目的は、敦煌チベット語文書中の「仏教伝道文学」7 作品の訳注であり、それが「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」にあたる。不備な点、不明な箇所は多々残っているが、この当初の目的がおおむね達成できた時点で、我々が注目したのが、『死者神国道説示』中の「寿命の尽きた汝（tshe 'das pa khyod）」という死者に対する第二人称での直接の話しかけであった。それゆえに、この文体の由来、祖型を考察することになり、それが「二部　古代チベットの葬送儀礼とその変容」となった。

ここでは、第一に、死者に対する第二人称での直接の話しかけが、仏教以前に行われていた土着葬儀において葬儀執行者が動物に対して与えていた訓示に遡る蓋然性が高いことが確認できた。仏教伝道者は、動物の殺生を伴う土着葬儀を廃止し、それに代わる仏教葬儀を提唱した。その際、語りかけるべき動物がなくなったにも関わらず、「語りかけ」という土着の伝統を、動物にではなく死者に直接語りかけるという形で非常に巧妙に継承した。

次には、この語りかけが現在チベット仏教で行われている葬儀の中で最も代表的な『バルド・トェドル』に基づく葬儀のなかにも継承されていることが確認できた。仏教教義からすれば、死者に語りかけ、誘導することによって輪廻転生に関わるということはあり得ないことであるが、現実にはこのあり得ないことがチベット仏教葬儀の最も大きな特徴となっている[391]。

仏教国としてのチベット、その最も代表的な葬儀の中に仏教とは本来相容れない土着要素に遡る形態が残存している。死者への語りかけという行為は、言ってみればチベットの「執拗低音（バッソ・オスティナート）」[392] であり、もともとは外来宗教であった仏教という音楽の主旋律の中に脈々と響き続けていると言えるであろう。これは、チベット宗教史 ―土着要素と外来仏教との融合生成― の本質を端的に示すものであり、今後のチベット宗教研究にとっての重要な視点を提供するものである。

---

[391] ロベール（2023, pp. 18, 27）が指摘しているように、相容れない教義をも包括する並はずれた適応能力が仏教の特質であり、それが多様な文化圏に伝播していった仏教の原動力でもある。

[392] Imaeda 1997 参照。

資料

校訂テキスト

0. はじめに

本書に訳文を収録した 7 作品のうち 2. 『御高説宝樹』、3. 『輪廻形態説示』、5. 『生死法物語』、6. 『葬儀置換』、7. 『死者神国道説示』の 5 作品に関しては、現在までに知られている全写本の影印あるいは校訂テキストおよび全訳注がすでに発表されており[393]、写本に関しては部分的には OTDO（https://otdo.aa-ken.jp/）や Bibliothèque nationale de France の Gallica（https://gallica.bnf.fr）上でも閲覧・検索できる。本書に初めて収録されるのは 1. 『神変比丘後世教示経』と 4. 『三毒調伏』の 2 作品だけである。

すでに発表されている校訂テキストには、数は少ないが訂正・付加すべき点もいくつかある上に、何よりも個々に異なる出版物に収録されており閲覧に不便であった。それゆえに本書には、全作品が通読できるように「一部　古代チベット仏教伝道文学 ―訳注と論考―」に訳注を収録したので、読者がそれを簡便に原文と照らし合わせることができるように、以下に体裁を整えて一括して再録することにした。

写本数、文体などを総覧すると、以下のようになる。

	写本数	文体	総数（行[394]）
1. 『神変比丘後世教示経』	6	7 音節	186 行
2. 『御高説宝樹』	1	7（9）音節	119 行
3. 『輪廻形態説示』	3	7 音節	168 行
4. 『三毒調伏』	4	7 音節	253 行
5. 『生死法物語』	8	7 音節	―――[395]
6. 『葬儀置換』	3	散文	―――
7. 『死者神国道説示』	4	散文	―――

校訂テキストの作成にあたっては、同一作品に複数の写本がある場合は、そのうちの 1 つを底本とし、他本との違いは脚注に記した。しかし、例外として、5.『生死法物語』に関しては、底本とした PT 218 のテキスト以外に、一部の対照可能な箇所についての全テキストを掲載した（注 131 参照）。また、韻文で書かれている『神変比丘後世教示経』、『御高説宝珠』、『輪廻形態説示』、『三毒調伏』、『生死法物語』の 5 作品については、1 行 7 音節ないし 1 行 9 音節の韻文の区切りを 1 行として扱い、通し番号を付した。訳文に引用したのも、この行番号である。

---

[393] 2. Karmay 1983、御牧 2014、3. 西田・今枝・熊谷 2020、5. 今枝 2006、6. Stein 1970、御牧 2014（IV 節のみ）、石川 2010、7. 西田・今枝・熊谷 2019。

[394] この行数は、写本上の行ではなく、7（/9）音節を 1 行として数えた校訂テキストとしての行である。

[395] 今枝 2006（pp. 19–26）に詳しく述べられているように、完本はなく、行数を数えることはできない。

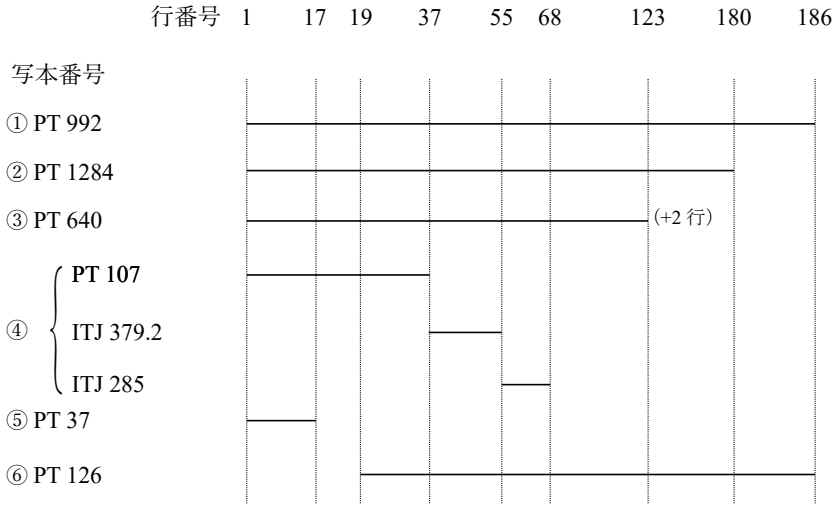
校訂方針および記号は、原則として Imaeda *et al.* 2007, xxxii–xxxiii と OTDO に従った。ただし、写本学的に原本に忠実な転写は OTDO などに譲り、本書では印刷された校訂・対照テキストとして読みやすくするために、文脈上誤入と考えられる箇所を削除するなどの変更を適宜取り入れ、shad（/）等の句読記号の数・位置も必ずしも原本通りには記さなかった。

敦煌チベット語文献中の綴りに関しては、有声音と無声音、有気音と無気音の交替・無差別（ことに pa と ba）や、添前字・添後字の交替・脱落などによって古典チベット語とは異なる綴りが散見される。しかしながら、古典語の正字綴りが比較的容易に推測できる場合には、煩雑さを避けて正字綴りを一々記さずに原文のままとした。ここに用いた校訂記号は以下の通りである。

[X]：校訂者が付加した段落分け
[---]：原文が判読不能な箇所
[xxx]：読みが確定できない箇所
[xxx / yyy]：読みが確定できず 2 つ以上の読みの候補がある箇所
{xxx}：校訂者により不要と判断された箇所
[*xxx]：原文にはないが校訂者により補足された箇所
yyy (⇒ xxx)：校訂者による読みを（　）内に提示した箇所
(end)：校訂者が注記した文献末尾
xxx：行間に書かれている箇所

1. 『神変比丘後世教示経』

本文献を収録する写本としては、これまでに 8 写本が知られている。そのうち、PT 107、ITJ 379.2、ITJ 285 の 3 写本は現状では個別に整理されているが、相互に接合するため、これらは元来、折本形式の同一写本を形成していたと考えられる。それゆえに、『神変比丘後世教示経』を収録する写本は全部で 6 点となる。このうち、元来 1 写本であった PT 107+ITJ 379.2+ITJ 285 と PT 640 は折本、PT 1284 と PT 126 は巻子本である。そして、残る 2 点は、本書で紹介する文献群に散見される正方形状の胡蝶装形式をとっており、PT 992 が上辺綴じの上下開きなのに対して、PT 37 は左辺綴じの左右開きとなっている。また、このうち、完本は PT 992 のみであり、写本に残存するテキストの関係は以下の通りである[396]。



以下の校訂テキストは、唯一の完本である PT 992（全 186 行）を底本とし、他の写本との異同は注に記した。行の通し番号、段落分けは著者による便宜上のものである。

[396] 各写本で本文献を収録する箇所は下記の通りである。
PT 37: 23r1-22v3; PT 107: v12-1-v13-6; PT 126: v1-v103; PT 640: r1-1-v5-4; PT 992: 10v1-14r3; PT 1284: r12-r79; ITJ 285: r1-r5; ITJ 379.2: r1-r6

1 (10v-1) $// 'phrul gi byig shu {mo} 'i bka' //

2 phyi ma'i myi rnams *la* brtsal pa'i mdo //[397]

［I］

3 myi rtag (10v-2) pa[398] bshad pa'[399] //

4 myi 'i lus[400] kyang myi rtag[401] ste //

5 bar bar yod la bar bar myed //[402]

6 lha'i chos[403] dang (10v-3) bka' na re //

7 myi 'i lus thob[404] shin tu dka' //

8 yul gi dbus su[405] skye ba[406] dkon //

9 myi 'i lus (10v-4) thob[407] tshe dus la //

10 lha la yid ches chos byas[408] na //

11 lha lam[409] bzang po[410] myur du[411] thob[412] //

12 log pa'i ngan[413] (10v-5) shes ma btang[414] na //

13 sdig lam gsum las thar myi myong[415] //

---

[397] 1–2 行で表題となるが、他の写本では以下の通りである。
PT 37: 'phrul gyi byig bshus // phyi ma myi la bstan pa'[i] mdo //
PT 107: 'phrul gyi byIg bshus // phyi ma 'I myi la bstan pa 'I mdo //
PT 640: 'phrul gyI dge slong gis bshad pa' // cI la yang mkhas zhIng snang [bas] // [---] dag pa'I phyI ma rnams stsal pa'I mdo //
PT 1284: 'phrul gI byIg shus myI phyI ma la bs[t]an ba'I md[o] //

[398] PT 640: par

[399] PT 1284: myI rtag [par] bstan pa //

[400] PT 107: myi lus

[401] PT 37: brtag

[402] PT 640: bar bar na yod kyang bar bar na myed //

[403] PT 37: tshig; PT 107: tshig

[404] PT 37: myi lus thob pa; PT 107: myi lus thob pa; PT 1284: myI lus thobs par

[405] PT 1284: dbur su

[406] PT 37: bar; PT 107: bar

[407] PT 37: thob pa'i; PT 107: myI lus thob pa'I; PT 1284: myI lus thob pa'I

[408] PT 1284: byan

[409] PT 922: lus; PT 37, PT 107, PT 640, PT 1284: lam

[410] PT 37, PT 107, 1284: por

[411] PT 640: smyur du

[412] PT 37: myur te thar; PT 107: myur te thard; PT 1284: myur du thar

[413] PT 992: nga; PT 37, PT 107: ngan

[414] PT 1284: btad

[415] PT 1284: 'ong

14 lho phyogs 'dzam gling dkyil (10v-6) 'khor na[416] //
15 sdig yul che ba 'khams 'di na //
16 gson gshin 'khor ba ring myi thogs[417] //[418] (10v-7)
17 btsan phyugs[419] gtam snyan[420] ci la phan //
18 nyon mongs[421] than khol[422] btsal bsogs[423] kyang //
19 tshe dang lus (10v-8) gi dgra dang gdon[424] //
20 tshe dus[425] ngan pa'i 'dod dga' la //
21 sdig pa[426] ngan dgu gtong myi phod //
22 tshe cig[427] (10v-9) btsan phyug mchog[428] du dzin[429] //
23 lha chos bzang po gcig myi spyod //
24 ma tshor bar du bdud[430] kyis (10v-10) khyer //[431]
25 gna' myi 'dzangs shing[432] che dgu yang //
26 tshe ring da ltar[433] gcig myi gnang[434] //
27 shi zin phan cad[435] (11r-1) sa phung yin[436] //
28 myi gcig[437] skyes pa'i tshe dus la //

---

416 他の写本では 14–15 行が 1 行にまとめられている。
PT 37: lho phyogs 'dzam glIng sdug yul na //; PT 107: lho phyogs 'dzam gling sdug yul na //; PT 640: [lho phyogs yem sdo?] sdIg yul na //; PT 1284: lho phyogs 'dzam glIng sdIg yul na//

417 PT 37: so sha 'khor ba ring myi thogs //; PT 107: so shI 'khor ba rIng myi thogs //; PT 640: gson shIn 'khor ba ring gcIg myI thos //

418 PT 640 では、18 行がこの位置で行間に挿入されており、PT 1284 にはこの 1 行がない。

419 PT 37: btsan phug（ここで終わり）; PT 1284: phyug

420 PT 992: snyen; PT 640: snyan; PT 1284: snyan

421 PT 640: nyos mos

422 PT 107: 'than kol

423 PT 107: bstsogs; PT 1284: bstsags

424 PT 107: dgra'i snon; PT 1284: dgra 'I snon
PT 126 の 1 行目は dang gdan から始まる。

425 PT 107, PT 640, PT 1284: lus

426 PT 107, PT 1284: sdIg cIng

427 PT 107, PT 640: gcig

428 PT 107: chog

429 PT 107, PT 126v, PT 640: 'dzin; PT 1284: 'dzIn

430 PT 640: 'dod

431 63 行と同じ。

432 PT 640: 'dzangs pa

433 PT 640: tshe rI da ltar

434 PT 107, PT 126: snang

435 PT 107: shi dgu [ku]n yang; PT 1284: shI dgu kun kyang

436 PT 640: shI dgu kun kyang sa pungs yIn //

437 PT 126 cig; PT 640: cIg

29 ring por myi thogs[438] de'u ri[439] myed //

30 khrel (11r-2) dang gzungs myed mna' yang za'[440] //

31 mtha' ma[441] yun du[442] legs myi spyod //[443]

32 gson dang bye ste dur du (11r-3) bskyal //

33 sdig byas[444] grogs po {rtag du}[445] 'dre dang srin[446] //

34 gtan kyi grogs ngan skyid myi myong //

35 dge sdig (11r-4) myi shes nyon re mongs //

36 nang nub myi dal phyug por[447] 'dod //

37 lhag par yod[448] kyang chog myi shes // (11r-5)

38 shi ba'i ri mo[449] kun la 'ong[450] //

39 shi zin[451] phan cad ci[452] myi shes[453] //

40 bsags[454] shing bdog pa[455] kun[456] dang bral // (11r-6)

41 phyi na ci lus bdag myi dran //

42 legs pa[457] 'ba' shig grogs su 'ongs[458] //

43 byas[459] bzhin bzang po[460] (11r-7) klu dang sman //

---

438 PT 640: thog pa

439 PT 107, PT 126, PT 640, PT 1284: re

440 PT 126: bza'; PT 640, 1284: za

441 PT 1284: mtha' dang

442 PT 107: mtha' dang yum du

443 他写本では、31 行と 32 行の間に、PT 992 にはない次の行が挿入されている。
PT 107, PT 126: tshe srog thung ba glog pas myur //; PT 640: tshe srog thung bas glog pas myur//; PT 1284: tshe srog thung ba glog tar myur //

444 PT 126: byes

445 PT 126, PT 640, PT 1284: rtag par

446 PT 107: sdug byas grogs po rtag par 'dre dang srIn

447 PT 107: byur du; PT 640: phyug du; PT 1284: phyag du

448 PT 107: lhag par [g]dog（ここで終わり）; ITJ 379.2: kyang chog myI shes（ここから始まる）

449 PT 126, PT 640, PT 1284: re mo

450 PT 922: kong; ITJ 379.2, PT 126, PT 640, PT 1284: 'ong

451 ITJ 379.2: shI phyir

452 ITJ 379.2: chI

453 PT 126: ci shes

454 PT 126: bsag; PT 640: bsaM; PT 1284: bsams

455 ITJ 379.2: 'dod pa; PT 640: 'dod pa

456 ITJ 379.2: 'un

457 ITJ 379.2: legs nyes; PT 126: leg pa; PT 640, PT 1284: legs nyes

458 PT 640: 'ong; PT 1284: 'ba' shIg su myI 'ong

459 PT 126, PT 1284: byad

460 PT 640: byad bzhIn po

44 myi sdug mtha' mar[461] skams[462] kyis myed //
45 go[463] zas bzang po za[464] bog[465] dar //
46 cir (11r-8) kyang[466] ma rung rdul du gyur[467] //
47 gshin cha bzang po[468] bgor myi phan //
48 kha zas bzang po[469] dur du bcugs[470] // (11r-9)
49 lo stong bar gi[471] rgyags[472] yin[473] kyang //
50 bza'[474] ba'i dbang myed yun du[475] lus //
51 bzang sdug[476] gnyis[477] (11r-10) shig dur gcig[478] kyang //
52 khog skam gnyis[479] shig dgar[480] myi dran[481] //
53 gnyen[482] sdug gnyis[483] shig (11v-1) sngas na ngu'[484] //
54 khri 'bod stong 'bod rnas[485] myi thos //
55 gson gshin[486] lam gnyis so sor[487] gyes // (11v-2)

---

461 ITJ 379.2: mtha' ma; PT 126: mthar mar; PT 640: tha mar; PT 1284: mtha' ma
462 PT 126v: skam
463 ITJ 379.2, PT 126: gos
464 PT 126: za'
465 ITJ 379.2: bug
466 ITJ 379.2: chir yang; PT 640: cI yang
467 ITJ 379.2: gyurd
468 ITJ 379.2, PT 1284: gshin cha gsar byIn; PT 640: gshIn ca gsar byed
469 ITJ 379.2, PT 640, PT 1284: sna tshogs
470 ITJ 379.2, PT 1284: bcug
471 PT 1284: bar du
472 ITJ 379.2: brgyas; PT 126, PT 1284: brgyags
473 PT 126, PT 640, PT 1284: yod
474 PT 126: za; PT 640: bza
475 PT 1284: yul du
476 PT 1284: snyug
477 ITJ 379.2: bzang sdug sdug gnyis
478 PT 126: dur bcug; ITJ 379.2: mtshan bcug; PT 640, PT 1284: mtshan gcIg
479 PT 126: gnyi
480 ITJ 379.2: dga'r
481 PT 640: tshor
482 PT 640: nye
483 PT 126: gnyi
484 ITJ 379.2: ngu; PT 640: sngas su ngu
485 ITJ 379.2: rna; PT 640: skad
486 PT 640: gson shIn
487 ITJ 379.2 はここで終わり、ITJ 285 は gyes から始まる。

56 shi ba[488] nyon mongs kun kyis brjod[489]//

57 gnyen dang mdza'[490] bshes phyi na tshol[491] //

58 khang khyim (11v-3) bzang po 'dug dbang myed[492] //[493]

59 lo brgya'[494] tshe yang 'dron po'i zhag //

60 gshin rje'i[495] sbron[496] 'ongs[497] (11v-4) so sor khyer[498] //

61 shar nub 'drul yang ngo myi shes //

62 sha gnyer[499] kun yang[500] byol myi btang[501] // (11v-5)

63 ma tshor bar du bdud kyis kher //[502]

64 legs pa[503] 'ba' shig grogs su 'ongs[504] //

65 gson gi tshe[505] na[506] (11v-6) btsan phyugs[507] bsgrun[508] //

66 shi ba'i 'og du legs nyes bsgrun[509] //

67 mthon man[510] kun yang[511] sdig (11v-7) yul gcig[512] //

---

488 PT 126: ba'i

489 PT 1284: brjed

490 PT 126: bdza'; PT 640: mdza

491 PT 640: phyI ma tshol

492 ITJ 285, PT 640: 'du[g] myI dbang; PT 1284: 'du[g] myI dbang

493 58 行と 59 行の間に、他の写本では次の 2 行が挿入されている。
ITJ 285: [---] bar du bdud gyis khyer // bzang sdug gnyIs shig 'dug myi dbang //; PT126: ma tshor bar du bdud kyis khyer // bzang sdug gnyi shig 'dug dbang myed //; PT 640: ma tshor bar du bdud kyIs khyer // bzang sdug gnyIs zhIg 'dug myI dbang //; PT 1284: ma tshor bar du bdud kyIs khyer // bzang sdug gnyIs shIg 'dug myI dbang //
このうち前の行は、綴りの違いを除けば 24 行、63 行と同一である。

494 ITJ 285: brgya'i; PT 640, PT 1284: brgya'I

495 ITJ 285, PT 640: rje

496 ITJ 285, PT 1284: sbran

497 PT 126: 'os

498 ITJ 285, PT 640, PT 1284: gyes

499 ITJ 126: shag nyer; PT 640: shar gnyer

500 ITJ 285: gyis; PT 126: 'is; PT 640, PT 1284: kyIs

501 PT 640: gtang

502 24 行と同じ。この行は、ITJ 285、PT 126、PT 640 ではここではなく、57 行の後に置かれている。

503 PT 640, PT 1284: legs nyes

504 PT 640: [g]rogsu 'ong

505 ITJ 285: gson pa'i tshe

506 ITJ 285, PT 1284: la

507 ITJ 285: phyug

508 PT 640: sgru; PT 1284: 'gran

509 PT 1284: sgrun

510 ITJ 285: mtho dman; PT 640, 1284: mthon dman

511 PT 640: gun kyang

512 PT 640: cIg

68 lha yul sgo[513] mor che chung mtshungs //[514]
69 legs dgu byas na[515] dpal du skye // (11v-8)
70 nyes dgu[516] byas na[517] byur du 'gyur[518] //[519]
71 'di gnyis gang bya zhib[520] du rtogs[521] //
72 shi ba yang dag thar (11v-9) ba myed //
73 bdud 'ongs nang[522] 'ongs[523] da gzod skrag //
74 lus srog gar sva[524] blo myi rnyed //
75 'gug (11v-10) cing svron (?) pa thar[525] du 'os[526] //
76 gshin rje'i mdun[527] du ci[528] skad bshags[529] //
77 dkar chag[530] bltags[531] (12r-1) na legs ma byas //
78 srin kyis bzungs shing[532] zangs su btsos[533] //[534]
79 sdig yul kun du khyab (12r-2) par khrid //
80 skyin dang[535] 'bab du[536] sdig[537] myi 'byang //

---

513 PT 126: sgro; PT 640: lha'I sgo
514 ITJ 285 はここで終わり。
515 PT 640: byams pa; PT 1284: byas pa
516 PT 126: rgu
517 PT 1284: byas pa
518 PT 1284: 'gyar
519 PT 126 では以下のように 2 行になっている。
nyes rgu byas na dpal du skye // nyes rgu byas na byus du gyur //
520 PT 640: zhIr
521 PT 126: brtogs
522 PT 126, PT 640, PT 1284: nad
523 PT 640: [rdus /rngus]; PT 1284: 'das
524 PT 126, 1284: sba
525 PT 126: sbron ba thad; PT 640: svron pa thad; PT 1284: sbran pa thad
526 PT 126: 'ongs
527 PT 126: bdun
528 PT 1284: rdzI
529 PT 126: bshag; PT 640: b[g]ags; PT 1284: cog
530 PT 640: sh[o]g
531 PT 1284: bltas
532 PT 640: bzung zhing
533 PT 126: brtsos
534 PT 1284 では 2 音節が脱落しており、srIn gIs zungs su btsos の 5 音節しかない。
535 PT 126: skyin 'dang; PT 1284: skyI 'dang
536 PT 1284: bar du
537 PT 640: sdI

81 shi[538] ba'i dus na[539] btsan nyen (⇒ gnyen) myed //

82 skye dgu kun (12r-3) yang gcig myi thar //

83 gson gi tshe na[540] legs ma byas //

84 shi ba'i 'og du gzhar[541] ma[542] rung // (12r-4)

［II］

85 'di dag gang bya zhib du rtogs[543] //

86 legs nyes myi shes[544] srog gcod dang[545] //

87 shing (⇒ sha) chang (12r-5) thung ba'i[546] tshul bshad pa'[547] //

88 bdag gi chung ma dgos myi brin[548] //

89 gzhan gi chung ma gser (12r-6) bas brin //

90 yang dag bden chos myi rtog cing[549] //

91 'phra[550] ma 'khrugs[551] ma mchog du[552] 'dzin // (12r-7)

92 sha chang[553] gral na ngan 'dzangs rtod[554] //

93 khyal ba'i smyon[555] tshigs[556] cher[557] du zer[558] //

94 lha nga[559] nang du sdig (12r-8) myi bshags[560] //

95 bde ba'i tshe na lha myi dran //

---

538 PT 126: 'chi

539 PT 1284: la

540 PT 1284: la

541 PT 126: bzhar

542 PT 640, PT 1284: myI

543 PT 126: brtogs

544 PT 640, PT 1284: legs myI shes

545 PT 126: gsod pa dang; PT 640: srog gcod pa

546 PT 126: chang thung ba'i

547 PT 1284: 'shad pa

548 PT 640, PT 1284: 'dzIn

549 PT 640: yang dag bden po rtog myi shes //; PT 1284: yang dag bden por rtog myI shes //

550 PT 126: phra

551 PT 126: khrugs; PT 640: khrugs; PT 1284: dkrugs

552 PT 640: mo gzungs su; PT 1284: ma gzungs su

553 PT 640: chang 'thung

554 PT 126: ngan 'dzang rtod; PT 640: nga che rtso; PT 1284: nga che ltod

555 PT 126: smyo; PT 640: smo; PT 1284: khyal pa smyo

556 PT 126: tshig

557 PT 126, PT 640, PT 1284: ched

558 PT 640, PT 1284: sems

559 PT 640, PT 1284: gang

560 PT 126: bshag

96 na ba'i tshe na[561] lha la ltos[562] //
97 sdig [rto][563] myi la (12r-9) lha myi 'go //
98 lha chos mthong[564] na dpyas su 'dzin //
99 sha chang mthong na srog dang sdo[565] //
100 lha chos byas[566] na 'on zhing rnigs[567] // (12r-10)
101 sgyu ma'i[568] don myed sdun[569] myi 'byin //
102 'phyo g.yem[570] byed pa[571] skyo myi (12r-11) shes //
103 myi 'i myi grangs phyugs dang 'dra[572] //
104 sdig yul kun du gsal[573] myi dgos[574] //[575] (12v-1)
105 gnag lug kun bsad zangs su btsos //
106 khra sgrigs[576] thogs shing ri lung sgra[577] //
107 gzhan la na tsha bdag (12v-2) myi tshor //
108 pags bshus[578] sha bshas[579] so sor za' //
109 bkres ltogs 'phar[580] spyang 'dre dang 'dra'[581] // (12v-3)

---

561 PT 640: na tsha che na; PT 1284: na tshabs che na
562 PT 1284: brtos
563 PT 126, 1284: to; PT 640: can
564 PT 126: thos; PT 640, 1284: byas
565 PT 126: srog kyang bsdo; PT 640: srog du ltos; PT 1284: srog du ltod
566 PT 126: byed; PT 640, 1284: mthong
567 PT 126: 'on zhing rnegs; PT 640: 'on rmugs byed; PT 1284: nyon zhIng brnags
568 PT 640: sgyu ma; PT 1284: sgyu ma
569 PT 126, 640, 1284: sun
570 PT 126: g.yam
571 PT 640: pho g.yem smyo la; PT 1284: 'phyo g.ye[m] smyo la
572 PT 126: myI 'i myi grangs phyug kyi chos; PT 640: myI [nI] myi chos phyugs gI chos //; PT 1284: myI 'I myI chos phyug kyI chos //
573 PT 126: btsal
574 PT 126: dgongs
575 PT 640 と PT 1284 では、行全体が異なっている。
PT 640: sdIg lam gsuM las thar myI myong //; PT 1284: sdIg lam gsum las thar myI myong //
PT 126 は、PT 992 とほぼ同じであるが、続けて PT 640 と PT 1284 と一致する sdig lam gsum las thar myi myong の 1 行が加わっている。
576 PT 640: sgIg
577 PT 126: rgyug; PT 640, 1284: dgra
578 PT 640: bzhus
579 PT 640: btsos
PT 1284 では、sha bshas の 2 音節が抜け落ちている。
580 PT 126: phar
581 PT 922: 'dre bkren 'phar spyang ltogs pa 'dra //; PT 126: 'dra; PT 640: bkres ltogs 'phar spyang 'dre dang 'dra //; PT 1284: kres bltogs phar spyang 'dre dang 'dra //

110 lha chos myi byed smyo zhing rgyug //

111 myi 'i myi grangs 'dre dang 'dra'[582] //[583]

112 sdig yul kun du mchi bar (12v-4) khrid //[584]

113 bdag gi lus la tshogs par[585] yod //

114 sems can[586] thams cad gson por 'drod[587] // (12v-5)

115 bsad[588] pa'i na tsha kun myi dga' //

116 srog la 'phangs pa[589] che chung myed[590] //

117 gzhan gyis bdag bsad (12v-6) sha //

118 bsos 'di ltar dga' myi dga' //[591]

119 de las soms te lha chos byos[592] //

120 chang thungs khyal[593] ba dug[594] dang mtshungs //

121 ci yang myi dran smyo ba 'i (⇒ ba'i) tshul // bzhin[595] //

122 'gyur stabs khyabs[596] [*zhing] tshigs[597] (12v-8) myi bden //[598]

123 mtshon dang ngag shor srog *gi* bdud //[599]

124 skyags[600] pa khar byung sla tsha bro //

125 nang par langs (12v-9) nas[601] nyams myi dga'[602] //

---

582 PT 126: mthungs

583 PT 640: myI dang myI 'dra 'dre dang mtshungs //; PT 1284: myI 'I myI grangs na 'dre dang mtshungs //

584 PT 126: kun du btsal myi dgos; PT 640: 'dre yul gungu btsal myI dgos; PT 1284: 'dre yul gud du btsal myI dgos

585 PT 640: tshang bar

586 PT 126, PT 640: shan

587 PT 126, PT 640, PT 1284: 'dod

588 PT 640: gsad

589 PT 640: [sp]os pa; PT 1284: phang par

590 PT 126: che cung mtshungs; PT 1284: che chung mtshungs

591 PT 126, PT 640 では 117–118 行が次の 1 行にまとめられている。
PT 126: gzhan 'is bdag bsad sha zos dka' myi dka' //; PT 640: gzhan gIs bdag bsad sha btsos 'dI ltar dga' myI dga' //
PT 1284 では、gzhan gyIs bdag bsad sha btsos 'di // lta dar ga 'myI dga' と 2 行に分かれているが、PT 992 とは分け方が異なる。

592 PT 640: gyis

593 PT 126: khyel; PT 640: nyal

594 PT 640: bdud

595 PT 640: cIr yang myI smyo [tshu]l bzhin //; PT 1284: cI yang myI dran smyo chung bzhIn //

596 PT 126: khyebs

597 PT 126: tshig

598 PT 640: gom stabs 'khyab[s] zhIng tshIg bden //; PT 1284: gom stabs 'khyam zhIng tshIg myI bden //

599 PT 640 は次の 2 行で終わっている。
s[d]ugs pa bar 'byu[ng] // tshong myI zIn // [---] tsong gtI mug de dang 'dra' //

600 PT 126: skyugs

601 PT 1284: glad na

602 PT 1284: bde

126 las gi bun byung nyon re mongs //
127 zas gi gron che so nam sto[603] (⇒ bsod nams stong) // (12v-10)
128 nam zhig sdig pa myi zad //[604]
129 yun du legs pa ci yod zhib du rtogs //[605]

［III］
130 ngan pa'i tshul bshad (13r-1) pa' //[606]
131 sha zos chang thung thab mo byed //
132 nyin mtshan dngan[607] byed bdag myi thsor //
133 'gram (13r-2) spu[608] skyes[609] su chos myi byed //
134 ngo[610] bzhin[611] bzang po gnyer mar 'gyur //
135 khong zhom skyibs (13r-3) dgu mnga' myi sdug //
136 myi mdongs[612] rna 'on bzang myi rigs //
137 mgo bdam[613] lag 'dar 'gro (13r-4) myi phod //
138 spyi cher[614] kha bug[615] brda'[616] myi phrad (⇒ phrod) //
139 sha zad pags rnyil skams[617] la thug //[618]
140 yar (13r-5) langs[619] mar 'dug 'gug[620] cing phye (⇒'gug cing byed) //
141 bu tsha 'i snying du phyir myi sdug //
142 bsam shing[621] myi rga rgyun[622] (13r-6) myi chad //

---

603 PT 126: stong
604 PT 1284: nam gcIg sdIg pa 'dIr ma zad //
605 128–129 行はひと続きに書かれており、韻律が崩れているが、ここでは 2 行に分けた。PT 126 では、nam zhig legs pa zhib du rtogs // と記されている。
606 PT 1284: ngan pa'I nI tshul bshad pa //
607 PT 126, PT 1284: ngan
608 PT 1284: spyu
609 PT 1284: skyas
610 PT 126: byed
611 PT 1284: bzhan
612 PT 126: dmyig mdoms; PT 1284: myIg 'dong
613 PT 126, PT 1284: 'dam
614 PT 126: char; PT 1284: cer
615 PT 126: bog; PT 1284: brag
616 PT 126, PT 1284: rda
617 PT 126: skam; PT 1284: sgams
618 PT 1284 では、この後の 140–146 行が欠落している。
619 PT 126: lang
620 PT 126: gog
621 PT 126: na'
622 PT 126: dgun

143 bdag shi skyi[623] (⇒ skye) 'bar gzhan[624] myi 'gro //

144 'dug pa'i lo grangs zad kyis myed // (13r-7)

145 da cungs[625] dngan[626] byed bdag myi tshor //

146 legs pa'i chos kyang 'das[627] la thug //

147 legs pa ma (13r-8) btang[628] da dung slobs //

［IV］

148 sri zhu'i mdo bshad pa' //

149 pha ma mthong na tshig pa[629] za' //

150 bu smad (13r-9) mthong na dga' bar 'jin[630] //[631]

151 pha ma btsal du[632] gzhar[633] myi rnyed //

152 bu smad btsal ba rnyed pa[634] sla //[635] (13r-10)

153 ma'i bu gsos shin du dka' //

154 thog ma chags nas[636] nyams myi bde //

155 ma byung bar du nyon re (13v-1) mongs //

156 zla ba tshang nas[637] bye brag 'byed[638] //

157 lug bsad sha gzhi (⇒ gzha') 'ol[639] dang[640] 'dra' // (13v-2)

158 g.yas g.yos kun kyang khrag kyis gang //

159 na tsha myi bzad shi la thug //

---

[623] PT 126: skyin

[624] PT 126: gzhar

[625] PT 126: cung

[626] PT 126: ngan

[627] PT 126: zad

[628] PT 126: mthang

[629] PT 1284: thong tshIg pa

[630] PT 126: 'dzin

[631] PT 1284 では、150–151 行が欠落している。

[632] PT 126: na

[633] PT 126: gzhan

[634] PT 1284: rnyed bar

[635] PT 126、PT 1284 には、この後に次の 2 行がある。
pha myed na ni myi skye 'o // ma myed na nI myi sos so //

[636] PT 1284: na

[637] PT 1284: na

[638] PT 126: phyed; PT 1284: bye

[639] PT 126: 'og; PT 1284 'al

[640] PT 1284: ka

160 gsher[641] grang mal na[642] ma (13v-3) bdag nyal //
161 skam dro mal na[643] bu sdug bsnyal[644] //
162 ma snyang[645] rtag du bu la chags //
163 skad[646] cig myi (13v-4) brjed[647] nyon re mongs //
164 skyes na chung ma'i ngag nyan cing //
165 shig *na* (⇒ shi na) 'di ltar byed //[648]
166 de ltar bu'i[649] sdig (13v-5) yul du //
167 phyin cing nam du yang mthar myi myong //[650]
168 de las[651] soms te[652] sri zhus[653] byos //

［V］
169 legs[654] (13v-6) nyes gyi ni[655] mdo bshad pa' //
170 legs pa myi shes bsod[656] du dga' //[657]
171 kun la ngan[658] byed[659] 'dre (13v-7) dang 'dra' //
172 byams shing[660] kun gsos[661] lha dang mtshungs //

---

641 PT 126: gshes
642 PT 126: du
643 PT 126: du
644 PT 1284: snyan
645 PT 126, PT 1284: snying
646 PT 126, PT 1284: ska
647 PT 126: bzod; PT 1284: brdzed
648 164–165 行は韻律が崩れており、ひと続きに書かれているが、ここでは 2 行に分けた。PT 1284 でも同様に、ひと続きに skyes na chung ma 'I ngag nyan cIng gshi na 'dI ltar myI dgar myed // と書かれている。PT 126 では、165 行の代わりに次の 2 行がある。
pha ma gshes na dmyig 'or byed // bu smad mthong na dga' bar 'dzin //
649 PT 126: de ltI'u bu'i
650 166–167 行は韻律が崩れており、ひと続きに書かれているが、ここでは 2 行に分けた。PT 1284 でも同様に、ひと続きに de lta bu nI sdag yul du phyIn cIng nam du yang thar myI myong と書かれている。
651 PT 1284: la
652 PT 126: som ste
653 PT 126: zhu; PT 1284: zhId
654 PT 126: leg
655 PT 1284 には ni はない。
656 PT 126: gsod
657 PT 1284: legs nyes myI shes shIng gson du dga' //
658 PT 126: dngan
659 PT 1284: byad
660 PT 126: gshing
661 PT 1284: gson

173 nal[662] g.yem rtsog[663] pa'i myi (13v-8) dag kun[664] //

174 nyes dgu spyod pa byur du 'gyur //[665]

175 lha mnol zhing ni 'dre dang 'dra'[666] // (13v-9)

176 myi g.yem[667] khong gtsang ya rabs bu //[668]

177 grogs po rtag du[669] lha dang 'grogs //

178 rkun phrogs[670] (13v-10) byed[671] pa kun gyi gcan //

179 rku bar myi sems[672] nyams snying bde[673] //[674]

180 rtsod par myi 'dod kun (14r-1) kyis bstod[675] //

181 khro[676] gtum zhe sdang mkhon[677] kyi tshang //

182 kun yang myi 'dum srid gi dkyor[678] //[679] (14r-2)

183 byams pa'i don 'di rtags la nyon //[680]

184 gang zhig don 'di bsrung spyod na //

185 lha lam thob cing skyid par mchi //[681]

186 'phrul gi byig shu'i bstan pa rdzogs s.ho ////[682] (end)

---

662 PT 1284: nyal

663 PT 1284: brtsag

664 PT 126, PT 1284: la

665 PT 126、PT 1284 ではこの行は欠落。

666 PT 126、PT 1284 では後半の 3 音節が byur du 'gyur となっており、174–175 行が混合していると思われる。

667 PT 126: g.yam

668 PT 126 には 176 行の後ろに次の行が挿入されている。
legs dgu spyod pa dpal du skyes //

669 PT 126: rtag par; PT 1284: rtag par

670 PT 126: phrog

671 PT 1284: byas

672 PT 126: bsam

673 PT 126 では後半 3 音節が kun kyis bstod となっており、PT 922 の 178–179 行の後半 3 音節が入れ替わった記述となっている。

674 PT 1284: rk[u] bar [myI] [b]sam kun zun

675 PT 126 では後半 3 音節が nyams snying bde、PT 1284 では nyal snyIng bde となっている。PT 922 の 179 行の後半 3 音節が入れ替わった記述となっている
PT 1284 はここで終わり。

676 PT 126: khrog

677 PT 126: 'khon

678 PT 126: gzhis

679 PT 126 ではこの後に次の 3 行があるが意味未詳のため訳出しない。
khong mnyen tshig 'jam leg kyi gnyen // mang po mdu ba legs kyi snon // rdzun cen phra ma srid kyi gdon /

680 PT 126: byams pa'i mdo myed 'khyam ba yin /

681 PT 126 には 184–185 行はない。

682 PT 126: 'phrul kyI byig shus phyi ma la bstan pa'I mdo rdzogs so //

2. 『御高説宝樹』

現在までに知られている写本は PT 972 のみであり、完本である。

［I］

1 (1r-1) ci ltar dbyar gi ljon shing bzang po la //
2 yal ga lo 'bras me tog 'dab rnams kyang //
3 grang lhags than drags dus kyi rlung byung bas //
4 de dag skad cig (1r-2) tsam gis myed pa ltar //
5 tshe 'dI myi rtag myur du 'gro dgos na' //
6 cis kyang myi zlog sgyu ma'i rang bzhin can //
7 'chi bdag sde chen rding la thug bzhin du // (1r-3)
8 sems can byis pa rgan dgon (⇒ rgon)[683] //
9 da dung ma tshor dung (⇒ 'dug) du re //
10 thog ma myed pa'i 'bad thag chad pa na //
11 'khor ba'i gcong rong myi bzad kha 'drIm (⇒ 'grim) bzhin //
12 de kun (1r-4) dag na sdug bsngal nad rnams kyang //
13 bsad nas lba (⇒ rba) klong der ni 'gro dgos na //
14 da dung ma tshor glen ba'i rang bzhin [can] //
15 dbyug pas brgyab kyang 'bad (1r-5) ba'i sems myed na' //
16 byol song pyugs kyi bu dang ci ma 'dra' //
17 bsam pa m[y]ed[684] pa'i nyal te gnyId log na //
18 'jig rten 'di yi bsod nams sgo ru (1v-1) nub //

---

[683] 御牧は「普通は 1 行 9 シラブルで書かれているが、この行のみ 13 シラブルで書かれている」として、8–9 行の 13 音節で 1 行とみなしている（御牧 2014, p. 108, n. 7）。しかしながら、この作品は冒頭部分の 28 行は 1 行 9 音節で書かれているが、29 行から 118 行までの 90 行は 1 行 7 音節で書かれていることから、全体としては他の作品と同じく 1 行 7 音節で書かれたものと理解できる。それゆえに、本書では 8 行は本来 7 音節であるべきものの 1 音節が欠けたもの、9 行は 7 音節が揃った形とみなした。御牧は自身の校訂テキストの 23 行（本書では 24、25 行の 2 行に分けた 11 音節）に関して、「普通は 1 行 9 シラブルで書かれているが、この行は 11 シラブルで書かれている」（ibid., p. 110, n. 17）と記している。しかし、11 音節の行が 1 行だけあると想定するよりは、本来 7 音節の行が 2 行あったものの内、1 行（本書の 24 行）からは 1 音節が、続く 1 行（本書の 25 行）からは 2 音節が欠け、この 2 行が合わさって 1 行となっているとみなした方がよいだろう（ibid., p. 110, n. 17）。こうした事例は、敦煌文書には多く見られる。

[684] 御牧 2014 では、med (*sic*!) とあり、「敦煌文書中 me に ya-btags が付いていない珍しいケース」と注が打ってある（御牧 2014, p. 110, n. 13）。しかし、写本はこの箇所の下部がかなり破損していることから、子音 ma の下には元来 ya-btags が書かれていたが、消えて見えなくなり、上に書かれていた母音記号 e だけが残ったと考えた方が妥当と判断し、m[y]ed とした。

19 sngun gi bsod nams ci bsags zad du nye //
20 bdag la bdag gis bzhen (⇒ gzhen) bskul ma btab na //
21 bdag la gzhen bskul 'debs pa su zhig 'ong // (1v-2)

［II］

22 dge ba'i las rnams phal cher spyad pa ni //
23 zhing rab zhing la sa bon btab pa bzhin //
24 dpyid na snang ba myed kyang //
25 lo 'bras ston na rtsa //
26 sdig pa'i las rnams (1v-3) phal cher spyad pa ni //
27 'phral du lus la mtshon ltar myi gcod kyang //
28 gang ltar 'gro ba'i sa phyogs de na sdod //
29 da ltar chos spyod khom ba'i tshe // (1v-4)
30 don mchog bdud rtsis las su byos //
31 dge spyod myel tshe dam du gyis //
32 mtho ris skyes pa'i lha dang myI //
33 yI dags byol song dmyal ba gsum //
34 gang [phyird] (1v-5) bdag la dbang yod na //
35 ci phyird bdag la gnod pa byed //
36 dug dang bdud rtsi gang yin ba //
37 bltas na gsal bar myi mngon nam //
38 blun po sems (2r-1) la sla snyam na //
39 bdud kyi zhags pas zin nas su //
40 ngan song gsum du khrid 'og du //
41 de nas 'gyod pas phan ba myed //

［III］

42 ci ltar dbang che gnyen mang (2r-2) yang //
43 shi ba'i dus na che chung myed //
44 de yi dus na dpa' sdar myed //
45 bdag nyid mal na nyal bzhin du //
46 gnyen bshes mang pos mtha' bskor yang // (2r-3)
47 srog gcod myi bzod sdug bsngal dag //
48 bdag nyid gcig pus myong bar 'gyur //
49 de bas gnyen dang bshes ci phan //

［IV］

50 'dzangs pa dam chos myi spyod na // (2r-4)
51 de ni spre'u gcam don myed yin //
52 mkhas pa tshul khrigs (⇒ khrims) myi srung na //
53 de ni gser pa lag stong yin //
54 phyugs la sbyin pa myi gtong na //
55 de ni gzhan gi (2r-5) gter srungs yin //
56 ha chang bsogs la ma zhen cig //
57 ha chang bsogs la zhen pa ni //
58 bsags pa gzhan gi nor du 'gyur //
59 sbrang mas 'bad de (2v-1) rtsi bsags kyang //
60 sbrang rtsi gzhan dag spyod par snang //
61 gar skyes su ni za shes na //
62 rang gi rtsol ba dor myi bya //
63 'bad pa myed par til dag la // (2v-2)
64 til mar thob par 'gyur ma yin //
65 dper na bra sran sa bon la //
66 'bras bu nas su ga la skye //
67 legs par spyad pa dpal du che //
68 nyes par spyad (2v-3) na byur du 'ong //
69 so so byis ba skye ba rnams //

［V］

70 mu stegs bon la yid ches ste //
71 las kyi don du mtshan ma spyod //
72 dper na sbur bu 'gro byed pa //
73 bal (2v-4) rdud (⇒ sdud) nang du shul drangs nas //
74 sug drug bskyod cing phyir phyir dam //
75 mo bon dag la srid ma ltos //
76 'dre srin dag la yar ma mchod //
77 bdud dang bgags (⇒ bgegs) (2v-5) la skyabs ma tshol //
78 sdug bsngal skyabs su lha chos bzang //
79 skye shi mngon du sangs rgyas che //
80 'phags pa'I dge' 'dun phan ston yin // (3r-1)
81 kye rigs kyi bu rnams dgongs su gsol //

82 yang dag bdud rtsi sman blun (⇒ blud) na //
83 log par lta ba'i dug ma 'thung //

［VI］
84 myi cig skyes pa'i tshe lus la // (3r-2)
85 bzang byas ngan byas mdun du thal //
86 che bsags chung bsags phyi na lus //
87 bus pa gzho[n] nu rtag snyam na' //
88 bus pa gzhon nu ga la rtags //
89 gsad (3r-3) sar khrid pa'i brtson bzhin du //
90 gom re bor zhin shi dang nge //
91 sang tsam 'chi yang sus shes kyis //
92 bde bar 'dug par myi rigs ste //
93 dI ring kho na bdud (⇒ 'dud) de (3r-4) bya //
94 sang shi gnangs shi su[s] shes kyis //
95 khri 'bod stong 'bod rnas myi thos //
96 bdud kyi zhags pas zin pa ni //
97 bdud ni ci la bsam ba chung // (3r-5)
98 bgrags (⇒ bgegs) ni ci yi bar tu 'jug //
99 gdon ni ci la rkyal ka byed //

［VII］
100 tshe cig bsags pa'i nor zas dang //
101 bu dang chung ma 'khor yul rnams //
102 bor te bdag (3v-1) ni 'gro dgos na' //
103 rtogs pa'I chos la srid yod na' //
104 ci tsam 'tsho ba'i nor (3r-2) bsags kyang //
105 'chi ba'i nang par gcig myi snang //
106 ci tsam 'tsho ba'i zas bsags kyang //
107 'chi ba'i nang par ltogs par 'gro //
108 ci tsam 'tsho ba'i gos bsag kyang //
109 'chi ba'i nang par gcer bur 'gro //
110 gnyen bshes mang (3r-3) pos mtha' bskor yang //
111 shi ba'i nang par gcig myi snang //
112 ldan ba'i khab khang sngun na khyerd //

［VIII］

113 blo ldan dpa' 'dzangs gang yang rung //

114 dge bcu rka (⇒ dka') yang (3r-4) ma gtang zhig //

115 lha dang myir skye sa bon yin //

116 myi dge bcu po sla mod kyi //

117 ngan song gsum po bzod glags myed //

118 de bas brtson te dge bcu spyod // (3r-5)

119 zhal nas gsungs pa'i ljon shin // rdzogs s+ho // (end)

3. 『輪廻形態説示』

本文献を収録するものとしては、これまでに 3 写本が確認されている[685]。このうち、PT 24 は唯一の完本であり、1 行 7 音節の韻文全 168 行から構成されている[686]。この写本は 29 葉からなる折本で、『輪廻形態説示』の他にも 5 作品を収録しているが、『輪廻形態説示』はその表面 24 葉から裏面 11 葉までに記されている。第 2 の写本である ITJ 316 もまた複数の作品を収録する折本で、全 58 葉が残存している。同写本の表面 44 葉から 56 葉にかけて、PT 24 の第 51 行から 168 行に相当する全 118 行が収められているが、前半の 50 行までは写本が欠損している。第 3 の写本 ITJ 335 は 4 葉のみが残る貝葉本であり、その冒頭に PT 24 の 164 行から 168 行に相当する 5 行が残されている。以下では、もっとも整った PT 24 を底本とし、必要に応じて他の 2 点と照合する。

1 (r24-1) $ // 'khor ba'I tshul bstan pa //

［I］

2 myI rtag 'khor ba'I khams 'dI na // (r24-2)
3 mtha' yas 'gro ba gnas pa kun //
4 glo bur 'phral la rang skyes zhIng //
5 tshe dang (r24-3) dus 'dIr zad pa myIn //
6 thog ma'I dus mtha' myed pa nas //
7 sems kyI rang bzhIn (r24-4) ye yod de //
8 cI ltar gru la *brten* bcas nas //
9 *pha rol gnas [su] 'gro ba ltar* //
10 lus nI sems kyI gru yIn te //
11 yun rIngs (r24-5) dus nas 'dron por (⇒'gron por) 'ongs //

［II］

12 sngun cad sdod pa myed *pa* ru //
13 las dang nyon mongs (r25-1) dug cen gyIs //

[685] ここにあげる 3 点以外にも、類似する内容を持つ ITJ 602 が知られている。この文書の前半部には、『心の輪廻の形態略説（sems 'khor ba'I tshul mdo tsam du bstand pa）』と題される文献が収録されており、これが輪廻を主題とする文献であることは間違いない。しかし、本書で扱う『輪廻形態説示』が輪廻の概念を平易に説明するものであるのに対して、ITJ 602 は、輪廻に関する諸説を引用しながら各説を理証と経証のそれぞれによって検証するなど、非常に高度な仏教知識を持つ読み手を対象とした内容の、いわば専門家向けの論書とみなせる文献である。したがって、ITJ 602 は本書では考察の対象とはせず、稿を改めて紹介することにする。

[686] ただし、作品表題は第 1 行の通り、5 音節である。

14 'khor ba'I btson ra khams sum na //
15 khrI mon sdug bsngal gnas (r25-2) rnams su //
16 nyam thag skyes shI kha brIms pa //
17 de bzhIn rmongs pa'I rnam shes (r25-3) 'dI //
18 rgyun chad myed par myI 'gyur te //
19 dkar nag bdag gyI las gyIs su // (r25-4)
20 mthon {man} dman skyId sdug gnas su 'gro //
21 de ltar skye shI'i *gnas* rnams su // (r25-5)
22 grangs myed phung po blangs pa nI //
23 sha dang rus pa rI rab tsam //
24 khrag dang chu ser (r26-1) rgya mtsho snyed //

［III］

25 'on kyang myI lus thob pa'r dka' //
26 yul gyI dbus su skye ba (r26-2) dkon //
27 rgya mtsho cher g.yengs g.ya' *shIng* gI //
28 bu gar ru sbal 'grIn (⇒ mgrIn) chud 'dra // (r26-3)
29 da ltar myI lus thob *pa* yang //
30 sngon cad bsod nams byas pa'I yon //

［IV］

31 de bzhIn (r26-4) yun du gnas 'dod kyang //
32 tshe dus sdod par myI rung te //
33 nyIn mtshan rtag (r26-5) du god gyur la //
34 snon ba gud nas myI 'ongs bas //
35 bdag lha 'chI bar mngon (r27-1) sum snang //
36 nyIn zhIng sa la mar bltas na //
37 grIb so chu 'bab yengs la 'das // (r27-2)
38 mtshan zhIng gnam la yar bltas na //
39 zla ba skar tshod gI na yol //
40 nyIn mtshan (r27-3) rje ba yengs la 'das //
41 dus bzhI 'khor ba sdod pa myed //
42 lo zla tshe dus shol (⇒ bshol) (r27-4) myI 'gyur //
43 de las brtags na / kun myI rtag //

［V］

44 myI cig skyes pa'I tshe dus (r27-5) kyang //
45 rIng por myI thog de'u re myed //
46 gzhon nu tshe yang skad cIg ste //
47 dbyar (r28-1) gyI men tog cI bzhIn du //
48 skad cIg bzang yang rI (⇒ rIng) myI thogs //
49 skye ba 'I mtha' (r28-2) nI 'chI bar 'gyur //
50 'du ba'I mtha' nI 'bral bar 'ong //
51 skyes bu lo brgya' (r28-3) thub pa yang //
52 mtshan gyI dus na nyal bas na //
53 brgya' phyed gnyId kyI dbang du (r28-4) song //
54 de yang dran myed shI dang 'dra //
55 lhag ma lnga bcu yod du zad //
56 de yang (r28-5) ra ro nyIn nyal dang //
57 sdug bsngal nyon mongs rnams kyIs bskal[687] //
58 lnga bcu phyed (r29-1) kyang der zad nas //
59 phyI nas[688] nyI shu lnga ru zad //
60 legs par dran ba de las myed // (r29-2)
61 lnga bcu myI thub cI shIg snyam //
62 brgya thub 'bum la gcIg myI 'byung //
63 da ltar (r29-3) myI lus thob pa'I tshe //
64 bdag nI thog ma ga las 'ongs //
65 tha ma gang du 'gro bar (r29-4) 'gyur //
66 myI rtag myed par 'gyur ba'I dus //
67 gdon myi za bar 'ong 'gyur (r29-5) na //
68 bdag gI yid nI cI phyir g.yengs[689] //
69 dI ring kho nar (⇒ na) myI 'chI zhes // (v2-1)
70 bde bar 'dug pa'I[690] myi rigs par //
71 de ltar bsam du bdag la 'os // (v2-2)

---

[687] ITJ 316: bskald
[688] ITJ 316: na
[689] ITJ 316: yId 'dI jI phyir yengs
[690] ITJ 316: par

［VI］

72 'chI bar 'gyur *ba'i* dus byung zhIng //

73 'jig rten gzhan du 'gro ba na //

74 lhan cIg (v2-3) skyes pa'I lus 'dI yang //

75 bor te grogs la myI phan na //

76 pha ma phu nu gnyen (v2-4) sdug dang //

77 mdza' bshes yul sa long spyod rnams //

78 grogs su myI phan (v2-5) cI zhIg smos //

79 dge ba 'ba' shig (⇒ zhig) grogs su 'gyur //

80 skye yang thog ma gcIg (v3-1) pu skye //

81 'chI yang de bzhIn gcIg pu 'chI //

82 btsan 'phyug[691] che ba'I sa thob kyang // (v3-2)

83 de tshe grogs su *'gyur* myI srid //

84 gos rnying bzhIn du phyI na lus //

85 de'i tshe na grogs (v3-3) 'gyur ba //

86 legs nyes 'ba' shIg (⇒ zhig) grogs su zad[692] //

［VII］

87 gang nas gang du (v3-4) 'gro ba 'I //

88 grIb ma bzhIn du rjes su 'brang //

89 gtI mug bsgrIbs pas (v3-5) bdag bsgrIbs te //

90 tshe dus phyI ma ma mthong zhes //

91 'phral gyI 'dod dgar (v4-1) sdIg ma byed //

92 gzhan gyI dge sdIg bdag la myIn //

93 bdag gIs gang byas (v4-2) 'ong du zad //

94 rmongs pa'I sems can de dag nI //

95 myI rtag chos la rtag (v4-3) snyams sems[693] //

96 myI bde nyams la bde ru 'dzIn //

97 myI gtsang lus la *gtsang* snyam (v4-4) ste //

98 phyIn cI log pa bzhI bslad[694] nas //

99 las kyI don du sdIg pa byed //[695] (v4-5)

---

[691] ITJ 316: phyug

[692] lITJ 316: legs nyes gnyis shig 'ong du zad

[693] ITJ 316: snyems byed

[694] ITJ 316: bslus

[695] ITJ 316 ではこの行が脱落している。

100 'khams gsum skye shI rgyud lnga ru //
101 bdag gIs byas pa'I dug gIs (v5-1) brlag //
102 de 'dre *'I*[696] chos la blos rtogs la //
103 da ltar chos thos spyod khom (v5-2) tshe //
104 don mchog bdud rtsI las su byos //
105 dge spyod myel tse dam du gyIs //
106 bla myed sangs rgyas lha dang myI // (v5-3)
107 byol song[697] yI dags dmyal ba dag // (v5-4)
108 gang bdam bdag la dbang yod na //
109 cI phyir bdag la gnod pa byed // (v5-5)
110 drug[698] dang bdud rtsI gang bdam ba' //
111 bltas na gsal bar myI mngon nam // (v6-1)
112 blun po byIs ba'I[699] blo can dag //
113 'phral gyI 'dod pas bslus *nas* su //
114 las gyI (v6-2) don du sdIg pa byed //
115 bdag gI nyams dang myI sbyor zhIng //
116 pha rol nyon (v6-3) mongs sdug myI tshor //
117 myI 'i lus su gnas mod kyI //
118 bsam ba yI dags byol (v6-4) song 'dra //
119 sdIg pa'I las kyIs spyod *pa* las //
120 mtho rIs gnas su ga la skye // (v6-5)
121 dper na bra sran *sa* bon las //
122 nas gyI 'bras bur myI 'gyur bzhIn //
123 blun po'I (v7-1) sems la *blan* snyam[700] ste //
124 bdud kyI zhags *pa*[701] zIn nas su //
125 ngan song gsum du[702] khrId (v7-2) 'og du //
126 de nas 'gyod pas 'phan ba myed //

[696] ITJ 316: dra'i
[697] ITJ 316: byol tshong
[698] ITJ 316: dug
[699] ITJ 316: bus ba'i
[700] ITJ 316: bla snyem ste
[701] ITJ 316: pas
[702] ITJ 316: gnas su

［VIII］

127 cI ltar dbang che gnyen mang (v7-3) yang //

128 'chI ba'I ra mda'r[703] gcIg myI phan //

129 shI ba'I gral du che chung myed / (v7-4)

130 tshe zad dus su dpa' sdar 'dra //

131 dge ba'I chos mchog ma gtogs par //

132 gang yang don du myI 'gyur bas // (v7-5)

133 mgo lus srog la ma 'phangs par // (v8-1)

134 rIn cen dge ba'I chos don sgrubs //

135 don myed las la ma brtson bar // (v8-2)

136 bdag la phan *ba* bdag gIs byos //

137 las gang gyIs nI 'khor bar 'gyur // (v8-3)

138 skye shI myed pa'I rgyu gang 'yIn //

139 shes rab blo yas[704] legs par rtogs // (v8-4)

［IX］

140 chos kun cI 'dra shes 'dod na //

141 dge ba'I bshes nyen (⇒ gnyen) btsal bar gyIs // (v8-5)

142 legs pa thams cad ston pa'I phyir //

143 dge ba'I bshes nyen pha dang 'dra // (v9-1)

144 nyes pa kun la skyob pa'I phyir //

145 dge ba'I bshes gnyen ma dang 'dra //

146 yang (v9-2) dag lam nI ston pa'I phyir //

147 dge ba'I bshes nyen lam mkhan 'dra //

148 legs (v9-3) pa thams cad skyed phyIr[705] //

149 dge ba'I bshes nyen dbyar dang 'dra // (v9-4)

150 nyon mongs 'dam las[706] 'byIn pa'I phyir //

151 dge [*ba'i] bshes nyen dpa' bo 'dra // (v9-5)

152 de bas dge ba'I bshes nyen las //

153 dam chos rIn cen mnyan par byos[707] // (v10-1)

---

[703] ITJ 316: ram mdam

[704] ITJ 316: yIn

[705] ITJ 316: bskyed pa'I phyIr

[706] ITJ 316: nas

[707] ITJ 316: mnan bar gyIs

［X］

154 nyon mongs nas kun gso ba'I phyir //

155 dam pa'I chos nI sman dang 'dra //

156 ma (v10-2) rIg mun nag sel pa'I phyir //

157 dam pa'I chos nI sgron ma 'dra //

158 skye shI (v10-3) sdug bsngal sel pa'I phyir //

159 dam pa'I chos nI bdud rtsI 'dra //

［XI］

160 myIr skyes (v10-4) chos dang phrad pa'I tshe //

161 'dI tshe chos lam ma bsgrubs na //

162 phyI nas myI (v10-5) lus rnyhed par dka' //

163 chos thos pa yang de bas dkon //

164 'khor ba'I (v11-1) 'dam du ma 'byIng bar //

165 shes rab nyI mas bsgrIbs *pa* spongs[708] //

166 tshul khrIms (v11-2) rgyan gyIs chas nas su[709] //

167 bla myed sangs rgyas grub par gyIs // (v11-3)

168 'khor ba'I tshul bstan pa rdzogs'ho // (end)

[708] ITJ 316: sbyongs

[709] ITJ 316: bcas na su

4. 『三毒調伏』

『三毒調伏』を収録する文書には、ITJ 420、ITJ 421、ITJ 720、PT 37 の 4 点があり、このうちの ITJ 420、ITJ 421 は完本であり、PT 37 は前半部を欠損している。形式としては ITJ 420、ITJ 421、PT 37 はいずれも正方形に近い胡蝶装形式をとっており、ITJ 420 が上辺綴じの上下開きなのに対して、ITJ 421、PT 37 は左辺綴じの左右開きとなっている[710]。以下では、ITJ 421 を底本とし、他の 3 写本との異同は注に記した。

1 (1r-1) /:/ dug gsum 'dul ba nI spyungs dang (1r-2) spyar (⇒ sbyangs) zhIn bya 'o //[711]

［I］

2 mtho rIs myI 'i 'jIg rten (1r-3) na //
3 lus kyI pad ma gzhon 'khungs (⇒'khrungs) ste[712] //
4 gzha['] (1r-4) gsang yun kyI chos snyam ru //
5 dag rgus drags (1r-5) pa'I rloms sems gyIs[713] //
6 lo dang zla ba 'das pa'I (1r-6) phyIr[714] //
7 gzhon nu 'I lus nI men tog sdug dgus mtses[715] (⇒ mdzes) // (1v-1)
8 sdug gzang kha tog mang po ste[716] //
9 sdus byas skyu ma'I (1v-2) lnga phung bzhIg //
10 ^e ma myI rtag slu ba'I chos[717] // (1v-3)
11 gzha[718] mtshon skyu ma yod las myed //
12 sprIn tshogs (1v-4) na pun[719] snang las thIm //
13 ngo mtshar rmad kyIs glub (1v-5) bar gyur[720] //
14 bden las rtsun (⇒ rdzun) gyI [sdun/sdan] byang ba'[721] //
15 'dI (1v-6) nI gtsug lag su 'I lugs //

---

[710] 各写本で本文献を収録する箇所は以下の通りである。
ITJ 420: 1r-1-9v-2; ITJ 421: 1r-1-13r-6; ITJ 720: r1-r28; PT 37: 1r-1-3v-6

[711] ITJ 420: $ // : // dug gsum 'dul ba ni // sbyangs dang sbyang bzhin bya ba //

[712] ITJ 420: lus kyis dpad ma gzhong 'khrung ste //

[713] ITJ 420: dag pa'i rloms sems skyes //

[714] ITJ 420: lo dang zla ba 'das pa'i phyir bzhin //

[715] ITJ 420: gzhon ni lus men tog sdugs pa skyes //

[716] ITJ 420: sdugs bzang kha dog mang [bri / bro] ste //

[717] ITJ 420: ^e ma myen dog bslus ba'i chos //

[718] ITJ 420: gzham

[719] ITJ 420: sprin mtshogs na bun

[720] ITJ 420: phon mtshan [rma]d kyis glug bur //

[721] ITJ 420: bden las r[ts]un du sun byung ba'i //

16 'dI ni chos tshul ga[ng] (1v-7) gyI[722] srang //
17 'dI ni dbang phyug su 'I mthu //
18 yId la[723] the (2r-1) tshom de [lta bu] //
19 gnyen shes byI mas 'dI rtags nas // (2r-2)
20 de 'I lo rgyus ma nor bas[724] //
21 'jIg rten skye bo rnams la myed // (2r-3)
22 lha 'I nang na lha mchod (⇒ mchog) ste //
23 thams cad mkhyen pa'I (2r-4) bcom ldan 'das //
24 de'I mgur nas legs par (2r-5) gsungs //
25 de 'I skye shI 'i chos tshul ste[725] //
26 skye shI 'i (2r-6) lo rgyus shIn du zab[726] //
27 gnam gyI lha bran thams shad dang // (2r-7)
28 lha ma yIn dang gnod sbyIn dang //
29 sbyIn klu dang nI myi rnams dang // (2v-1)
30 skye rgu[727] ma lus thams shad nI //
31 skye shI 'i chos la 'dran (2v-2) bar gnas //
32 de la bcom ba'I thas (⇒ thabs) yod ste[728] //
33 skye shi (2v-3) rtsa ba gtan bcad ste[729] //
34 g.yung drung lha'I srid blangs (2v-4) nas[730] //
35 chos kyI rgyal po sangs rgya[731] la //
36 skyabs btsal (2v-5) srId gyi phugs brtan ste //
37 thams shad mkhyen ba'I (2v-6) dpag yas su //
38 byang cub chen po 'I gnas su d[e]ng // (2v-7)
39 gnyen sdug tshe phos lus rjes nas //
40 gson po [rnams] (2v-8) gyIs gnyen (⇒ nyes) ma byas[732] //
41 gshIn gyi phyIr ni sdig (3r-1) ma sngo[733] //

---

722 ITJ 420: gyis
723 ITJ 420: nas
724 ITJ 420: de 'i lo brgyas ma bor ba'i //
725 ITJ 420: de 'i skyes zhin shi ba'i chos //; ITJ 720: de'i skye zhing shi ba'i chos //
726 ITJ 420: bzab
727 ITJ 420: skya dgu
728 ITJ 420: de la mcom bzhin thams yod ste //
729 ITJ 420: skye shi rtsa ba gtan bcas zhin //
730 ITJ 420: g.yung drung lha 'i srid blang na //
731 ITJ 420: rgyas
732 ITJ 420: gson po rnams gyis nyis ma byas //; ITJ 720: [---] rnams gyis nyes ma byas //
733 ITJ 420: gshin gi phyi du snyog ma bsngo //

42 phan bar 'dod pas gnod ma skrup (⇒ skrub)[734] //
43 mun nag (3r-2) sting[735] (⇒ steng) du mun ba[736] 'bab //
44 nyams chung steng du khur bu skur (3r-3) //
45 log ba'I lam[737] (⇒ las) dang srog gcod pas //
46 na rag (3r-4) gnas su nyen[738] ma skyal //
47 dgar po'I chos kyI gnyen (3r-5) long la[739] //
48 lha yul bde ba'i skyid yul du skyal[740] (⇒ skyol) //

［II］
49 ngan (3r-6) tsong gnas su blang[741] (⇒ ltung) ba'I phyir //
50 log pha'I sna 'dren (3r-7) dug gsum ste[742] //
51 'dod chags zhe stang[743] dug gsum (3r-8) rnams //
52 dug gyI rtsa ba chen po 'dIs //
53 sdIg yul (3v-1) g.yang sar chud par skrod[744] //
54 dug kyI phyi mo rgya mtsho 'dIs[745] // (3v-2)
55 sdug sngal chu po 'bab pa 'dra[746] //
56 nyon mongs gnod sbyIn / (3v-3) dbang gIs ni[747] //
57 myI rtag skyi ba'I (⇒ skye shi'i) dbang chen dang[748] //
58 grtI mug // (3v-4) bag myed rmongs [pa nI][749] //
59 mun nag thIbs por[750] bag la ya[l] (⇒ nyal) // (3v-5)
60 sdug sngal chos gyI lam skrubs (⇒ bsgrubs) zhIn[751] //

---

[734] ITJ 420: skru
[735] ITJ 420, ITJ 720: steng
[736] ITJ 420: mum pa; ITJ 720: mun ma
[737] ITJ 420: las
[738] ITJ 420, ITJ 720: gnyen
[739] ITJ 420: dkar pa'i chos kyis gnyen long la //
[740] ITJ 420: lha yul bde skyed yul du skyol //; ITJ 720: lha yul bde skyId yul du skyol //
[741] ITJ 420: ngan tsong gnas su ltung pa'i //
[742] ITJ 420: log pa'i rga 'drin dugs gsum / ste //; ITJ 720: log pa'I sna 'dren dug [suM] ste //
[743] ITJ 420, ITJ 720: sdang
[744] ITJ 720: g.yang sa chub par bsgrod
[745] ITJ 420: drug kyis phyi mo rgyam mtsho 'dis //
[746] ITJ 420: sdug snga chu bo 'i dab rgyal brug //; ITJ 720: [---] chu bo'I dab rgal brug //
[747] ITJ 420, ITJ 720: dbang 'di yis; ITJ 720: dbang 'dI yIs
[748] ITJ 420: myi rtag skye shi 'i dbab chen btang //; ITJ 720: [---]n btang //
[749] ITJ 420: gti mug bag myed rmongs pa'i //
[750] ITJ 420: thebs pa
[751] ITJ 720: [---]ug bsngal chos gyI lam bsgrubs zhIng //

61 'khor ba nyes / (3v-6) pa kun kyI gnas //
62 'dI ni dug gyI phyi mo[752] ste //
63 thIb thi[b][753] (3v-7) rmongs pas mdongs su nye //
64 phyIng phying 'dam du 'phyIngs (⇒ 'bying) (4r-1) su che[754] //
65 dug chen yun du ya nga bas //
66 zla ba shes rab 'od [chen] (4r-2) gyIs[755] //
67 myI shes rmongs ba'I mdongs bsal nas[756] //
68 mun (4r-3) nag thIbs por gnyI bzhin[757] (⇒ gnyi shar bzhin) //
69 bde pa'I (⇒ bden pa'i) ngag tshig[758] dam (4r-4) pa 'dIs //
70 nyon mongs nad rnams zhI bar[759] byed //
71 zha zha (4r-5) gnyen pos dang du (⇒ gtan du) zhI //
72 thIm thim chos gyIs gdan du (4r-6) thIm //
73 gtI mug pas myed rmongs pa bsal[760] //
74 rnam (4r-7) par dge ba'I lam las skral[761] (⇒ sgrol) //
75 'kham sum 'khor (4v-1) ba'I gting zab du //
76 myI shes dmus long mdoms su[762] (⇒ mdongs su nye) // (4v-2)
77 ngan tshongs gnas nI g.yang sa che[763] //
78 ma rIg glen (4v-3) ltar 'doms sla khad[764] (⇒ 'thom la khad) //
79 mun nag thIbs po ya re (4v-4) nga //
80 nad ngan rmongs pa tshabs re ce[765] //
81 dug chen (4v-5) thIbs por bab pa la[766] //
82 rten 'brel chos gyI skron (4v-6) ma (⇒ sgron me) 'dIs //

---

752 ITJ 420: phyi mye
753 ITJ 420: thim thim
754 ITJ 420: phying phying 'dab du 'byang du 'cha //
755 ITJ 420: zla ba shes rab 'dod ches gis //
756 ITJ 420: myi shes mdongs pa'i mdongs bsal gnas //
757 ITJ 420: mun nag thim por gnyen [shad / shang] bzhin //; ITJ 720: mun nag thIbs por gnyI shar bzhIn //
758 ITJ 420: ngang lus
759 ITJ 420: zhe bar
760 ITJ 420: gti mug rmongs pas sgra re 'dul //; ITJ 720: gtI mug rmongs pas sgra re bdul //
761 ITJ 420: sgrol
762 ITJ 420: mye shes dmus leng[s] mdongs su nye //
763 ITJ 420: ngan tsong nad gi g.yang sa du //
764 ITJ 420: ma rig glen ltar 'thom sla khad //
765 ITJ 420: nad ngan [rmongs /mongs] pas tshams ced ste //
766 ITJ 420: dug chen thibs pos 'di bas na //

83 se gol thabs cIg rtabs pas nI[767] // (4v-7)
84 mun nag thIbs po rtsa nas phyung //
85 myI shes rmongs (4v-8) pa gdan nIs (⇒ gtan nas) [blangs][768] //
86 'phrul gyI ye shes gnam[769] //
107 gtI mug 'bras cen rtsa nas mchom[770] //
108 shIg shig gnyen pos gtan du bshIg // (6r-2)
109 khrum khrum (6r-3) chos gyI (⇒ gyIs) mying nas // khrum[771] //
110 de 'I tshul du thabs mkhas (6r-4) nas //
111 ta le ye shes 'od re gsal //
112 bdud rmams (6r-5) skrIbs pa'I mun nag bsal[772] //
113 bden pa'I ngag tshig (6r-6) dam pa 'Is[773] //
114 gtI mug rnams nI rgyun[774] bcad ste // (6r-7)
115 skrIb pa'i mun nag yun du bsal //
116 rdzogs pa'I (6r-8) sangs rgyas thabs shad[775] mkhyen //
117 ye shes 'od (6v-1) cen mthas shad[776] (⇒ mtha' yas) gIs //
118 gtI mug rmongs pa'I mun (6v-2) pa bsal //
119 tshe phos gshIn gyi lam srol dag // (6v-3)
120 gang nas gang du 'go ba nI[777] //
121 snang gsal chos gI (6v-4) lam du skyur[778] //

---

767 ITJ 420: se gol thabs gcig gthogs tsam la //

768 ITJ 420: myi shes [dmongs / dpongs] / pa gtad nas blang //

769 ITJ 420: 'phrul gi ye shes gnam lcags gis //
86 行は ITJ 421 では 5 音節しかなく、書写に欠落があり、文脈上 7 音節で完結している ITJ 420 の方がふさわしい。また、ITJ 421 にはこの箇所で書写の順序に誤りがあり、本来は、86 行末尾の gnam には、106 行末尾（6r-1）の lcags gyis が連続しており、'phrul gyi ye shes gnam lcags gyis という 1 行 7 音節で完結していた（注 810 参照）。文脈からして 86 行と 87 行は連続しておらず、86 行に続くのは 107 行である。それゆえに 87–106 行と 107–141 行の前後を逆転し、全体として 1–86 行、107–141 行、87–106 行、142–253 行の順序とした。

770 ITJ 420: gzhog

771 ITJ 720: khrum khrum chos gi myi ngan bgrum //
108–109 行は 71–72 行と類似している。

772 ITJ 420: sangs rgyas bsgrib pa'i mun nag dag //

773 ITJ 420: bden ba'i ngang lus dam pa 'dis //
69 行と類似している。

774 ITJ 420: rgyan

775 ITJ 420: thams can

776 ITJ 420: mtha['] yas

777 ITJ 420: 'gro ba'i

778 ITJ 420: sngang gsal tshogs gi lam du skyar //

122 yang dag thar pa'I gnas su skral[779] (⇒ sgrol) // (6v-5)
123 bder gshags chos gyI byin rlabs gyIs[780] (⇒ dang) //
124 dad mos (6v-6) dmyIgs pa'i shugs drag[781] dang //
125 dge chos[782] lhun (7r-1) gyIs rtsa thon[783] gyIs //
126 myI shes rmongs pa'I gthing zab [mchog][784] (⇒ tshog) // (7r-2)
127 ma lus yun du gting nas blang //
128 rIg pa'i bden ba'i (7r-3) mthu stobs gyIs //
129 gtI mug rmongs pa zIl gyis (7r-4) gnan //
130 ye shes skar mda 'I byIn gyis rlabs[785] // (7r-5)
131 ^oM nya na ^a ba lo gyId te / sa man ta spa ra na / ra smyI ba ba sa ya / (7r-6) ma ha ma ne / du ru dur hId tha ya rdzal ni hum sva ha' // (7v-1)

［III］

132 $ // rnag khrag rtshog gyI phun (⇒ phung) po 'dI[786] //
133 myi gtshang (7v-2) tshogs ba'I phun (⇒ phung) po rnams[787] //
134 chags zhIn zhen (7v-3) pa'I srid pa[788] ste //
135 dug sum dug gyI phar ma ste[789] // (7v-4)
136 zang zIng gnas su chal bar khrId[790] //
137 myI tsang dul pa'I (7v-5) dngos po la //
138 zhes stang (⇒ sdang) skyes ba'I gnas ngan len // (7v-6)
139 na tsha'I sdug sngal grangs myed yang //
140 skye shI 'i (7v-7) chos lugs 'dI las 'byung //
141 de 'I rtsa ba ma bcad na[791] (8r-1) lugs bzang po yin[792] // (5r-1)

---

[779] ITJ 420: yang dag pa'i thar pa'i gnas su sgrol //
[780] ITJ 420: bder gshegs chos gyis byin labs dang //
[781] ITJ 420: drug
[782] ITJ 420: tshos
[783] ITJ 420: mthon
[784] ITJ 420: mye shes rmos nga pa'i gthong zab mtshog //
[785] ITJ 420: ye shes sgrad mda'i byin gi labs //
[786] ITJ 420: rnag khrag tshog gis phyung po 'dI dag //
[787] ITJ 420: myi gtsang tshogs / gi khrul 'khror la //
[788] ITJ 420: srid pa'i
[789] ITJ 420: dug gsum dug gi bar ma khyed //
[790] ITJ 420: tshang thing gnas su sbrul ltar khri //
[791] ITJ 420: de 'i rtsa ba ma btsad na //
ITJ 420 では、lugs bzang po yin はこの箇所にはなく、次行の gzhan phyi がこれに続く。
[792] lugs bzang po yin は、本来は、106 行の 'di ni chos に続くものである。

87 gzha['] phyIr[793] (⇒ gsang) yun du skyes shI len //[794]
88 'grol tar bde ba'i (5r-2) lam du skyal[795] //
89 'khrul pa'I 'dod chags chen pos (5r-3) nI[796] //
90 'dod sred snyoms pa'I las rnams gyIs[797] // (5r-4)
91 nur nur skyo mar byas la khad[798] //
92 stobs bzang byams (5r-5) pa'I bams[799] rtan gis //
93 'dod chags gnyen pa'I (5r-6) rdza (⇒ rtsa) mchad nas[800] //
94 skam lam dar (⇒ thar) pa'I gnas su (5r-7) phyIn //
95 'dI ni chos tsul pa 'zang po 'dis[801] // (5v-1)
96 nyon mongs chags ba'I dug 'dul 'o //
97 rmongs pa'I ['-o?] (5v-2) chags mtsho *ltar* rlob[802] (⇒ rlabs) //
98 log log phu nas 'brugs su[803] nye // (5v-3)
99 srId (⇒ sred) pa'i stobs cen rba dang klog[804] //
100 yeng yeng (⇒ g.yeng g.yeng) gzIngs[805] su (5v-4) 'khyer la khad //
101 chags pa'I dmu dug 'pab bar [-e][806] // (5v-5)
102 sred pa'I chu glung ya re nga[807] //
103 yang dag bden ba'I '[gr]u (5v-6) gzIngs gyis[808] //
104 chags pa'I skam ba'i mtsho rgal nas[809] // (5v-7)
105 rnams 'grol bden pa'I 'thang la phyin //

---

[793] ITJ 420: gzhan phyi
[794] ITJ 421 では、87–106 行が 141 行と 142 行の間に挿入されている。
[795] ITJ 420: lam la skyol
[796] ITJ 420: 'khrul pa'i 'dod chags mtshon ce drod //
[797] ITJ 420: 'dod srid snyom pa'i 'dod pa 'dis //
[798] ITJ 420 では、次の 3 行がこの箇所に確認できる。
mur mur skyo ma byas la khad // nyon mongs dug cen 'dI 'phyung nas // gnam mthar [dol /rol] pa'i phyin dang ni //
[799] ITJ 420: bsam
[800] ITJ 420: 'dod chags nyes pa'i rdzab rgyal nas //
[801] ITJ 420: 'di ni chos lugs bzang po 'dis //
[802] ITJ 420: rmongs pa'i 'dod chags mtsho ltar lob //
[803] ITJ 420: brung du
[804] ITJ 420: lba dang klong
[805] ITJ 420: gzeng
[806] ITJ 420: chags pa'i dmu du 'ga dam re che //
[807] ITJ 420: [srid] pa'i chu klung ya re nga //
[808] ITJ 420: yang dag bden pa'i dgra zin gyis //
[809] ITJ 420: chags pa'i skyil ba'i rgyam mtsho nas //

106 'dI ni chos (6r-1) lcags gyIs //[810]

142 'chags pa'I dug rnams (8r-2) zhI[811] 'gyur cIg //

143 'dzin pa'i 'dod chags tad pas nI[812] // (8r-3)

144 thang thang zIng zing drags nas nI[813] //

145 klag klag kun du klas (8r-4) su nye //

146 'kham sum 'khor ba'I gnas ngan che[814] //

147 nyon mongs (8r-5) srId pa'i bdud ste 'am[815] //

148 ye shes ral krI rnon pos nI[816] // (8r-6)

149 nyon mongs 'grang (⇒ drang) ba'I / ga 'og / zhags rtubs (⇒ gtubs) nas[817] //

150 'grol (8r-7) thar yangs pa'I gnas su phyin[818] //

151 dI ni chos lugs bzang (8r-8) po yIn[819] // (8v-1)

152 'tshe phos 'dod chags rdza nas phyung[820] //

153 lus rjes (8v-2) nyon mongs gtan nis (⇒ gtan nas)[821] blangs[822] //

154 de ltar nyon mongs (8v-3) nad chen gyIs[823] //

155 'de ltar sdug sngal khur lcI pas[824] // (8v-4)

156 de bzhIn gshas[825] pa bcom ldan 'das //

157 ye shes (8v-5) pyIn gyis rlabs po che[826] //

158 nyon mongs nad dang sdug sngar (8v-6) khar[827] //

159 sang sang 'khrus pa bzhIn du dag[828] //

---

[810] ITJ 420: 'di ni chos lugs bzang po 'dis //
ITJ 421 の 141 行後半の lugs bzang po yin は lcags gyIs に代わって、106 行のこの箇所に置かれるべきであり、lcags gyIs は 86 行の末尾 gnam に続き、本来は gnam lcags gyIs とあったと考えられる（注 769 参照）。

[811] ITJ 420: zhed

[812] ITJ 420: 'dzigs pa'i 'dod chags dag pa yis //

[813] ITJ 420: thang thang zing bzhin drangs ma khad //

[814] ITJ 420: 'kham sum 'khor ba'i gsang re rno //

[815] ITJ 420: nyon mongs srid pa'i dug re dam //

[816] ITJ 420: ye shes ral gi rnon po gis //

[817] ITJ 420: nyon mongs [drang] ba'i zhags rtubs nas //

[818] ITJ 420: grol thad yangs pa'i gnas su phyin //

[819] ITJ 420: de 'i chos lus bzang po yis //

[820] ITJ 420: tshe 'phos 'dod chags rtsa nas phyung //

[821] ITJ 420: gtan nas

[822] ITJ 420: lus brjes nyon mongs gtan nas bsal //

[823] ITJ 420: che ba

[824] ITJ 420: khrur bu lci

[825] ITJ 420: bshags

[826] ITJ 420: ye shes byin gis [blabs?] pa che //

[827] ITJ 420: khal

[828] ITJ 420: sang sang bkrus pa bzhin du dag //

160 sal (8v-7) sal 'dab pa de bzhIn byang[829] //
161 phun sum 'tshogs (9r-1) pa'I sangs rgyas sku //
162 dpye byad zang po rgyad dang ldan[830] // (9r-2)
163 sku 'I byin rlabs mtha yas bas[831] //
164 nyon mongs sdug (9r-3) pa'I nad gsos can[832] //
165 sdugs sngal srId pa'i khur pog (⇒ 'bog) (9r-4) ste[833] //
166 thams shad khyen pa'I dpag yas su[834] //
167 rnam (9r-5) par lhun po 'I dbyings su shog //
168 yang dag bden ba'I (9r-6) byIn / {rba}[835] / rlabs gyis[836] //
169 tshangs pa'I gsung sbyangs zab (9r-7) mo 'dIs[837] //
170 kal byI la skra 'i byangs[838] //
171 yang dag gsungs (9r-8) pa'I[839] (9v-1) byIn rlabs gyis //
172 srId (⇒ sred) pa'i chu glung skam ba dang[840] //
173 'dod pa'I (9v-2) dpa rlong (⇒ dba' klong) zhI bar shog[841] //
174 'phags pa ma lus thams cad gyIs[842] // (9v-3)
175 rto rje lta bu dIng 'dzin gyIs[843] //
176 nyon mongs rtsa nas phyung ba (9v-4) ltar //
177 de ltar sdug sngal thams shad 'dul //
178 nad ngan (9v-5) 'dod chags byIn gyis rlabs //
179 mtha myed skyu ma byIn gis (9v-6) rlabs[844] //
180 zha zha nyen po bag la zha //

---

[829] ITJ 420: sal sal 'dab de bzhin byang //
[830] ITJ 420: dpe byed bzang po brgyad dang ldan //
[831] ITJ 420: sku 'i byin labs tham yang bas //
[832] ITJ 420: nyon mongs chags pa'i nad gsos cang //
[833] ITJ 420: sdug sngal sid pa'i [khrur /khur] bu ste //
[834] ITJ 420: thams cad mkhyen pa'i dpags yas su //
[835] rba は書写生が rlabs を書くつもりで書き損ねたものがそのまま残ったと考えられるので、不要と判断した。
[836] ITJ 420: yang dag bden pa'i 'khrul myed par //
[837] ITJ 420: tshangs pa'i gsungs sbyang zab mo 'di //
[838] ITJ 420: ka la bying ka sgras sbyangs ba //
[839] ITJ 420: gyis
[840] ITJ 420: srid pa'i chu klung bsam ba dang //
[841] ITJ 420: 'dod pa dba 'long zhi bar shog //
[842] ITJ 420: 'phags pa'i ma lus thams shad gyis //
[843] ITJ 420: rdo rje ldu bu teng 'dzin gis //
[844] ITJ 420: tham myed sgru bar byin gis blab //

181 phyung phyu gnyen po (9v-7) rzda nas byung[845] //
182 gsang sngags chos[846] gyI rgyal po 'dIs // (10r-1)
183 chags pa'I dug chen phyogs[847] (⇒ byungs) nas phyung //
184 na ma sa rva dur ga tI / (10r-2) pa rI sho da na ra tsa ya / ta da ta 'ga ta ya / ^oM ba rI te sa rva ya ga (10r-3) sha 'bud ta ya / ^a ba ra na ya byI shud te sva ha' // (10r-4)

[IV]

185 $ // gzha['] gsang mtha 'khor nad che ba //
186 dug stong yun (10r-5) gyI dgar (⇒ dgra) che ba //
187 na rag dmyal pa'I bshal dag ste // (10r-6)
188 'greng dud gun gI bdud dang tshungs[848] //
189 dug stong chen po (10r-7) ma bcom na //
190 thor nI thor rIs gnam la snyogs ste[849] // (10v-1)
191 rtsa ba 'jIg rten sa la rkye[850] (⇒ skyol) //
192 lo ma dag nI dog la kram[851] // (10v-2)
193 'bras pu ngan tsong gnas su lhung //
194 de 'I nyen po 'dI (10v-3) lags ste //
195 ye shes ral gyI rnon pos nI[852] //
196 dug (10v-4) stong chen po rtsa nas gcad //
197 stong po nyId gi g.yang (10v-5) sa nas //
198 chem chem thum bu rgya dang stong[853] //
199 khrum (10v-6) khrum thum bum sam myI khab[854] //
200 zhes stang mye bzhIn (10v-7) 'bar bal (⇒ ba la)[855] //
201 lam lam gun du srag[856] du che // (11r-1)

---

[845] ITJ 420: phyung phyung gnyen po rtsa nas phyung //
[846] ITJ 420: gsang sngag ba
[847] ITJ 420: byungs
[848] ITJ 420: dgen 'dun kun gyis bdud dang mtshungs //; PT 37: 'gri[d] dug [k]un gi bdud dang mtshungs //
[849] ITJ 420: thor to mtho ris gna[m] la snyongs //; PT 37: thor [to] mtho ris gnam la snyongs //
[850] ITJ 420: skyol
[851] ITJ 420: lo ma dog yang ni dogs la sgrib //; PT 37: lam dog yang ni dogs ma sgo //
[852] ITJ 420: rnon po yi'; PT 37: rnon po sis //
[853] ITJ 420: chim chim thun bu rgya dang sting; PT 37: chem chem thun bu rtun dang sgong //
[854] ITJ 420: khrum khru rum bu 'bum dang khri; PT 37: khrum khrum dum bu 'khum dang khri
[855] ITJ 420: zhe stang 'bar la khad //; PT 37: zhe stang mye ru 'bar la khad //
[856] ITJ 420, PT 37: bsrags

202 ljIb ljIb kun du mched[857] du nye //
203 nyon mongs snyIng rtse (11r-2) rlabs chen gyIs[858] //
204 bsIl ba'i char dag nyur skyed nas[859] // (11r-3)
205 zhes stang tsha ba'I mye bur dag //
206 yal yal thar gIs (11r-4) byIngs pa dang //
207 mug mug gtan du zhI bar bya //
208 dI ni (11r-5) chos lugs zang po nI[860] //
209 zha sang (⇒ zhe sdang) sdug ba'I nad bsal (11r-6) ste[861] //
210 'grum (⇒ 'khrugs) ba'I gnod sems rtse (⇒ rtsa) zhIl nas[862] //
211 khro (11r-7) gdum rngam ba'I mtshon ca rnams[863] //
212 zhe stang khrug (11v-1) pa'I lag ca gtugs //
213 dmyal myal du bu 'khrI ru che[864] // (11v-2)
214 shag shag rtsa nas shags su nye //
215 rto rje[865] byams pa'I be (11v-3) con gIs[866] //
216 zhe stang rngam ba'I mtshon bcod ste // (11v-4)
217 khong khang rIl bur skong zhIn bzung[867] //
218 khrum khrum byams (11v-5) pa'I / {byams pa'I} stobs gyIs grum[868] //
219 de 'I chos lugs (11v-6) bzang po 'Is[869] //
220 zhe stang 'bar ba'I mtshon chom 'o[870] // (11v-7)
221 khro ba'I mad dugs dgra ru [gnad / gand] //
222 rngam ba'I di mug nad tu (11v-8) nye[871] //
223 myos myos 'phral du rgyal du nye[872] //

---

857 ITJ 420: mtshe
858 ITJ 420: nyon mongs pa'i snying rdze labs chen gis //; PT 37: nyoms pa'i s[ny]ing rje labs chen sa gyis //
859 ITJ 420: bsil ba'i char drag lung bskyed ste //; PT 37: bsil ba'i chang dug lung bskye de //
860 ITJ 420: de 'i chos lugs bzang po 'dis //; PT 37: de 'i chos lu[gs] bzang po 'des //
861 ITJ 420: zhe stang 'tsha ba'i nad bsal ste //; PT 37: zhe stang tha ba 'i nad bsal ste //
862 ITJ 420, PT 37: 'khrugs pa'i gnod sems rtsa zhil ste //
863 ITJ 420: khrog gtum rngam pa'i mtshon ca rno //; PT 37: khrog gtum rngam ba'i mchon ca rno //
864 ITJ 420: dmyal dmyal [dum] bu gtubs su che //; PT 37: dmyal dmyal dum bu gtugs su che //
865 ITJ 420: rdo rdze
866 PT 37: rdo rtse byams pa'i [b]e tsom gis //
867 ITJ 420: khrong khrong ril bud bsgo zhing bsgo //; PT 37: khong khong ril bud [bsgong] zhing [bsgom / bsnom] //
868 ITJ 420: khrum khrum byes pa'i sgobs gi bkrum //; PT 37: khrum khrum byams pa'i stobs gis [bgrum] //
869 PT 37: 'dis
870 ITJ 420: zhe stang tha ba'i mtshon gzhom 'o //; PT 37: zhe sdang [tha] ba'i mtshon bzhag 'o //
871 ITJ 420: rngam ba'i dmu dugs nad du che //; PT 37: [rngam] ba'i dugs nad du che //
872 ITJ 420, PT 37: myos myogs 'phrul du rgyal la khad //

224 thum thum gtan (12r-1) du grungs[873] su che[874] //

225 de 'I nyen po 'dI lags ste //

226 sman pa'I (12r-2) rgyal po sangs rgyas la //

227 skyabs gsol ge (⇒ dge) ba'I sems (12r-3) rtsags (⇒ tshogs) ste[875] //

228 chos gyI dud rtshi phun sum skyed[876] //

229 sman sngags (12r-4) su ldan 'dI shes pa[877] //

230 zhe stang gdug[878] ba'I dug (12r-5) bsal ste //

231 khro sems rngam ba'I nad bcom nas // (12r-6)

232 lam lam gnyen po rang rnams zhI[879] //

233 sems nyId rdud rtsI (12r-7) nyId du bya[880] //

234 de 'I chos lugs bzang po 'dIs[881] //

235 zhes stang (12r-8) rngam ba'I dug[882] 'dul'o //

236 'phags pa ma lus mtham (⇒ thams) (12v-1) shad kyIs[883] //

237 byams pa'I stobs bzang thu cen kyIs[884] // (12v-2)

238 zhes stang rtsa nas phyung[885] ba ltar //

239 bten ba'I de'i byin gyIs (12v-3) rlangs kyIs / ni[886] //

240 tshe phos zhe stang rtsa nas byung[887] // (12v-4)

241 lus rches rtsa brtan nas blang[888] //

242 thub ba te nyId [sya?]n ra (12v-5) zIgs[889] //

243 de 'I rnam thar rIg pa'i chog[890] //

244 chos (12v-6) gyI rgyal po don cen gyIs //

---

[873] ITJ 420, PT 37: grongs

[874] ITJ 420: tshe

[875] ITJ 420: skyabs gsol dge ba'i bsems brtsags te //; PT 37: sgyabs gsol dge ba'i bsems brtsags ste //

[876] ITJ 420: chos gis bdud brtsi mthu skyes tses //; PT 37: chos gyi bdud rtse thun skyad ste //

[877] ITJ 420, PT 37: sman sngags su ldan ba 'is //

[878] ITJ 420: gthum; PT 37: thun

[879] ITJ 420: lam lam gnyen por rang du dum //; PT 37: mal mal gnyen por rang du rub //

[880] ITJ 420: sems sems bdud rtsis yun du byung //; PT 37: sems sems dug rtsa yun bya[ng] //

[881] ITJ 420: de'i mchos lugs bzang po 'dis //; PT 37: de'i chos lugs bzang po 'des //

[882] ITJ 420: rdug

[883] ITJ 420, PT 37: 'phags pa ma lus thams shad kyis //

[884] ITJ 420: byams pa'i stobs mthu cen gyis //; PT 37: byams pa'i stobs bzang mthu cen kyis //

[885] PT 37: dbyung

[886] ITJ 420: bden ba'i de byin [blabs] kyis //; PT 37: bden ba'i byin brlabs gyis //

[887] ITJ 420: tshe 'phos zhe stang rtsa nam nas dbyung //; PT 37: tshe 'phos zhe stang rtsa nas phung //

[888] ITJ 420: lus rjes tha ba gtan nas bsal //; PT 37: lus rches tha ba gtan nas bsal //

[889] ITJ 420: thugs bdag nyid kyis spyan [ras] gzigs //; PT 37: thubs bdag nyid gyis spyan ra gzigs //

[890] ITJ 420: di'I rnams thar rigs pa'i mchogs //; PT 37: de 'i rnam thar rigs pa'i mchogs //

245 gnod sems khu zugs (12v-7) zIl gyis mnan[891] //

246 ^oM ma nI pad me huM myi tra sva ha'[892] // (13r-1)

［V］

247 thams shad dag la byams pa'I phyir[893] //

248 yId (13r-2) bzhIn rte[n] rtsod dzad ba'i phyir[894] //

249 bla myed gon chog sum (13r-3) pos nI[895] //

250 thu cen byIn gis rlabs pas nI[896] //

251 dug stong (13r-4) chen po rtan nas blangs[897] //

252 bla myed sangs rgyas (13r-5) 'phyag du 'phul[898] //

253 dug sum 'dul ba rtsogs[899] // (end)

[891] ITJ 420: gnod sems gru zugs ni zil byis mnan //; PT 37: gnod sems gru [z]ugs ni zil gyis mnan //

[892] ITJ 420: ^o'M ma ma ni pad me // hum mye //; PT 37: ^o'Mm ma ma ni pad me / hum myi //

[893] ITJ 420: thams shad la gdab par bya 'o //; PT 37: thams shad la gdab par bya 'o //

[894] ITJ 420: yid bzhin re rdzogs mdzad pa'i //; PT 37: bzhin rjogs mdzad pa'i //

[895] ITJ 420, PT 37: bla myed dkon mchogs gsum po yis //

[896] ITJ 420: mthu cen byin gyis [blrabs] nas su //; PT 37: mthu cen cen byin gyis brlabs nas su //

[897] ITJ 420: dugs stong stong gtan blangs //; PT 37: dugs sdong sdong gtan blangs na //

[898] ITJ 420, PT 37: bla myed sangs rgyas gnas su grub //

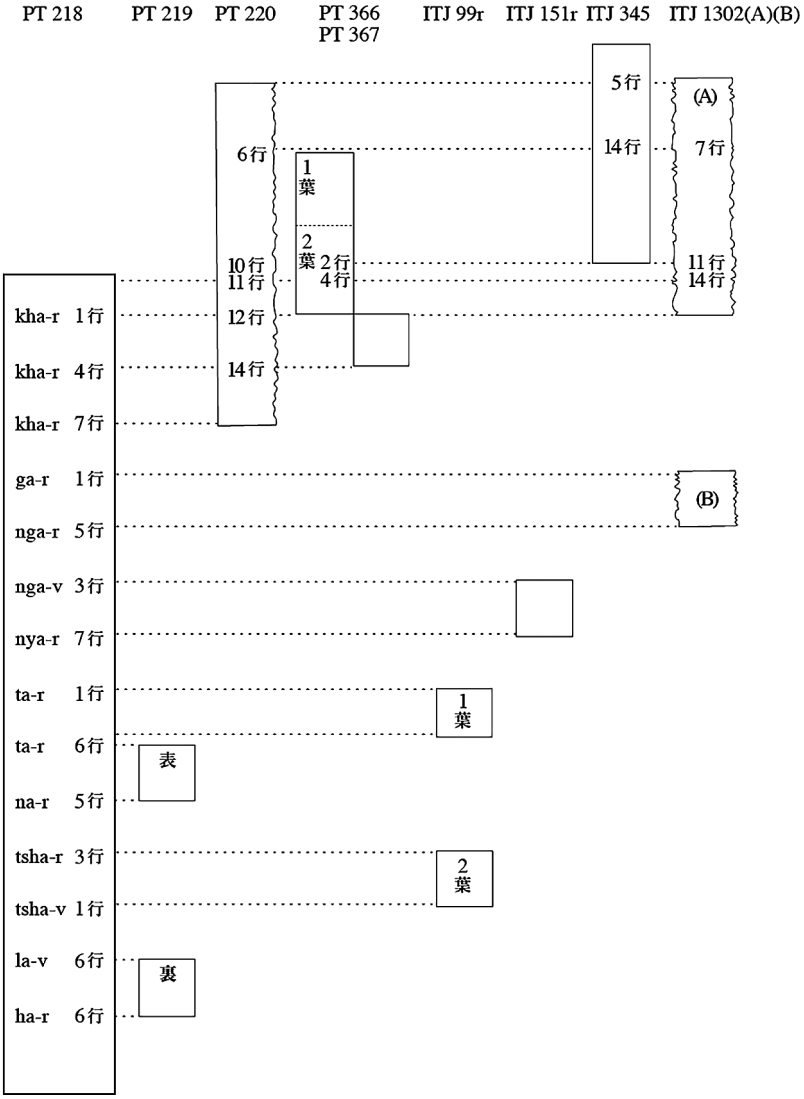
[899] ITJ 420: dug gsum 'dul ba rdzogs so //; PT 37: dug sum 'dul ba zhes bya ba rjogs so //

5. 『生死法物語』（部分）

本文献を収録する写本は、8 写本あるが、それらの詳細に関しては今枝（2006, pp. 19–31）を参照。写本相互の関係は、下図の通りである。

PT 218 は全部で 35 葉の貝葉本であり、冒頭の 1 葉（チベット文字による通し番号では ka）が欠落しているだけで、ほぼ完本である。訳注で説明したように、本文の大半は『入法界品』の主人公善財童子をリンチェンに置き換え、大幅に凝縮、翻案し、7 音節の韻文

文書間該当箇所一覧表



体で書かれた求法物語である。この部分（二章）は、文芸作品的には興味深いものであるが、本論稿にとってはあくまで副次的な意味しか持たないので、校訂テキストとしては冒頭部分 69 行（一章、諸本対照）と、末尾部分から 73 行（三章-II-1、II-3、II-4、参照の便のために 01 から 073 と通し番号を打った）を抜粋して以下に掲載する。

（A: ITJ 345、B: PT 220、C: ITJ 1302(A)、D: PT 366、E: PT 218、F: PT 367）

［1］冒頭部分

1 A: (v5) rgya gar skad du sang gra dar ma de //

2 A: bod skad du skye shi'i 'khor lo'I (v6) le'u bstan pa' //
B: (r1) bod skad du skye shi 'khor ba'i chos kyi yi ge le'u [---] (r2)
C: (r1) [---] dun te

3 A: lha bu rin chen lag cis dris pa'i
C: lha bu rin [---]

［一章-I］

4 A: gna' skal pa grangs (v7) myed pa'i snga nas //
B: pa grangs myed pha snga nas //

5 A: gzugs yod do chog lha rnams yod do 'chog
B: gzugs yod lha rnams yod do chog // [---]

6 A: kun yang (v8) tshe lo mangs pas //
C: (r2) [---]n kyang tshe lo mang // [---]

7 A: skye shi'i chos ni ma mthong ste //

8 A: de bzhin rtag du 'dug du re // (v9)
B: [---] (r3) 'dug du re //

9 A: de'i 'khams rje 'od 'bar rgyal //
B: de'i 'khams rje 'od 'bar rgyal //
C: [---] (r3) [---]l //

10 A: khams gyim gnas pa'i khang [---] (v10)
B: khang khyim gnam sa'i [---]
C: khams [---]m gnam sa'i [---]

11 A: khang pa de ni 'od tsam brtsegs //

12 A: 'od bzang 'bar ba lta myi bzod //

13 A: [---] (v11) na gnas so cog //
B: (r4) bla 'og gnyis na gnas so chog //
C: [---] (r4) bla [---] nyis na gnas [---]

14 A: de la mye long shin du snang //
B: de la mye long bzhin du snang //

15 A: nyis zla gnyis gyi skar skung spras // (v12)
B: gnyi zla [---]

16 A: yul bzang gnas bde bshad myi rdzogs //
C: [---] (r5) [---] nas b[---]shad myi rdzogs // [---]

17 A: kha zas nor kun bsams nas 'ong // (v13)
B: [---] (r5) kun bsams nas 'ong //

18 A: de dag kun kyang 'phrul gyis rdzas //
B: de dag kun kyang 'phrul kyi rdzas //

19 A: lus 'od gser 'od 'bar ba 'dra //
B: lus [---]
C: [---] (r6) [---] 'bar ba 'dra //

20 A: bu stong (v14) gnyen khri 'khor kun yang //

21 A: 'phrul stobs snang ba de dang 'dra //
B: [---] (r6) snang ba de dang 'dra' //

22 A: kun kyang de (v15) bzhin rtag du re //
B: kun kyang de bzhin 'dug du re //
C: [---] (r7) [---]n rtag du re //
D: (v1-1) kun kyang de bzhin rtag du re //

［一章-II］

23 A: re zhig 'khams de 'od 'bar rgyal //
B: re zhig [---]
C: re shig [---]
D: re shig khams de'i 'od 'bar rgyald //

24 A: tshe zad ltung ba'i dus (v16) bab ste //
D: [---] ba'i dus bab (v1-2) ste //

25 A: 'phrul stobs yon tan bshad pa myed //
B: [---] (r7) bshad pa myed //
C: [---] (r8) [---] myed
D: 'phrul stobs yon tan bshad pa myed //

26 A: lus 'od bzang po 'bar la (v17) yal //
B: lus 'od bzang po 'bar ba yal //
C: lus 'od bzang [---]
D: lus 'od 'bar ba bzang po yal //

27 A: smra zhing 'gul lbugs kun myi mkhyen //
B: smra shing 'gro [---]
D: smra zhing (v1-3) 'gro 'phrul kun myi mkhyen

28 A: kun kyang de'i mtshar snyam (v18) sem //
D: kun gyang 'di la mtshar snyam sems //

29 A: de la ci nongs ci chos shes //
B: [---] (r8) ci chos shes //
C: (r9) [---] ltar ji nongs [---] (r10)
D: 'di la ci nongs ci chos (v1-4) shes //

30 A: thams chad gcig gla gcig 'dri yang // (v19)
B: thams chad gcig la gcig 'dri yang //
D: thams chad gcig la gcig 'dri yang //

31 A: de'i chos don sus ma shes //
B: de'i cho [---]
D: de'i chos don sus ma shes //

32 A: bu stong gnyen khri 'khor kun yang //
C: [---] nyen [---] khor kun y[---] (r11)
D: bu stong (v1-5) gnyen khri 'khor kun kyang //

33 A: mye ngan rgya mtsho (v20) 'i nang du shugs //
B: [---] (r9) zhugs //
D: mya ngan rgya mtsho'i nang du zhugs //

34 A: lus brdabs lag brdabs mye ngan myed //
B: lus brdabs lag brdabs mya ngan byed //
D: lus brdabs lag brdabs (v2-1) mya ngan byed //

35 A: slar 'ong sngun bzhin yo[d] (v21) du re //
B: slar 'ongs sngon [---]
D: slar 'ongs sngon bzhin yod du re //

［一章-III］

36 A: lha'i nang na tshe ring ba' //
C: [---] lha'i nang [---] (r12)
D: lha'i nang na tshe ring ba //

37 A: 'phrul chen du ta ra zhis bya //
D: 'phrul chen du ta (v2-2) ra zhes bya //

38 A: de'i 'od 'bar [---] (end)
B: [---] (r10) 'bar gnas su 'ongs //
D: de ni 'od 'bar gnas su 'ongs //

39 B: de ni nor zhing 'khrul par bshad //
C: [---] [b]shad // (r12)
D: des nis nor cing 'khruld par bshad //

40 B: kye[---]
C: khyed kun [---] (r14)
D: khyed kun (v2-3) ma rig bslad pa yin //

41 D: de'i khams na yod do cog //

42 B: [---] (r11) khri dus bab nas //
D: bskal pa bdun khri dus 'das nas // (v2-4)

43 B: kun kyang de dang 'dra bar 'gyur //
D: kun kyang 'di dang 'dra bar 'gyurd //

44 B: de ni skye shi [---] (r12)
D: de ni skye shi chos shes bya //
E: (kha, r-1) chos zhes bya' //

45 D: de la ci phan bdag ma shes // (end)
E: de la ji byas phan myed ces //

46 E: de skad mang du bshad pa dang //
F: (r1) phan ba myed ces bshad pa dang //

47 B: 'bar rgyal gi bu rab ming //
C: 'bar gyal gyi bu [---] (end)
E: 'od 'bar rgyal gyi bu rabs mying //
F: 'od 'bar rgyal gi bu rab mying //

48 B: rin chen lag ces bya ba des // [---] (r13)
E: rin chen la[g] [---] (kha, r-2) bya ba des //
F: rin chen lag ches bya ba (r2) des //

49 E: shin du gus par mnyan brtags nas //
F: shin du gus par mnyan brtags nas //

50 E: de ni rab 'bar na bar shes //
F: de ni rab bya bden bar shes //

51 B: skye shi'I dus bab na //
E: de ltar ste shi dus bab na //
F: de ltar skye (r3) shi dus bab na //

52 B: de la ci bgyis phrad par rung //
E: de la ci bgyis slar mchis phral (kha, r-3) par rung //
F: de la cir bgyis slar mchir rung //

53 B: de la ci b[---]
E: de la ji bgyis bde zhing skyid par 'gyur //
F: de la ci dgyis bder gyur zhes // (r4)

54 E: 'phrul cen de la gus par dris //
F: 'phrul chern de la gus par dris //

55 B: [---] (r14) smras pa //
E: du ta ra 'is slar smras pa //
F: du ta ra 'is slar smras pa //

56 B: skye shi yod par 'tshal du bas //
E: skye shi yod par (kha, r-4) 'tshal pas na //
F: skye shi yod par 'tshal du (r5) bas //

57 B: de la ci phan bdag [---]
E: de la ji phan bdag ma 'tshal //
F: de la ci phan bdag ma 'tshald //

58 F: skye shi'i chos tshul dri bzhed na //

59 E: khams gsum 'phrul pa lha'i rje //
F: 'di nas dge ba (end)

60 B: [---] (r15) ba yin //
E: shin du 'phrul cen btsun ba yin //

61 B: de la dri zhing brtag rig ces //
E: de la (kha, r-5) dri zhing brtags rigs zhes //

62 B: shin du chub par bshad pa dang [---]
E: shin du chud par bshad pa dang //

63 B: lha bu rin cen lag de yang //

64 E: pha'i mya ngan sri zhu g.yos //

65 B: [---] (r16) sems //
E: bde skyid (kha, r-6) gnas la yongs myi sems //

66 B: skye shis chos brtags don gnyer snyams //
E: skye shis chos brtag don gnyer snyams //

67 B: 'phrul mang sna tshogs [---]
E: 'phrul mkhas sna tshogs khor dang bcas // (kha, v-1)

68 E: [---] sphrul la 'gro' //

69 B: [---] (r17) ye myed //
E: phyir 'ongs gnas dran yongs ye myed //

［2］末尾部分（すべて PT 218 より抜粋）

［三章-II-1］

01 (khna,v-5) khams gsum nang na skye so chog //
02 kun kyang she shing 'chI bar 'ong //
03 skye so chog ni las kyi dbang //

04 shI 'o chog kyang las kyis (khna,v-6) 'brang //
05 sky shI chos ni dus bab na' //
06 gnam sa rIm pa lha kun lhung //
07 sphrul cen mthu mang 'dug dbang myed //
08 khams gsum nang na (khna,v-7) 'du[g] go chog //
09 chung zad snga phyi yod du zad //
010 kun kyang 'chI bar 'gyur bas ste //
011 dmyal ba'I nang na 'dug pa nI //
012 ska[d] cig la yang du me [---] (gna,r-1)
013 de ltar snga phyir 'chi ba ni //
014 khams gsum 'khor ba'i chos yin yang //
015 tshe ring kun nI rtag du bsnyems //
016 mtha' ru myi shi gcig myed de //
⋮

［三章-II-3］
017 (ngna,r-5) 'jig rten sems can bslad pa kun //
018 gnod pa kun byas phan du re //
019 la la myer sregs chur mchongs (ngna,r-6) na' //
020 de ni phan bar 'gur zhes zer //
021 ma rig bslad pa'I la la'I ni //
022 ti shur steng po'i khal bkal na' //
023 shI bde la phan zhes zer // (ngna,r-7)
024 la las bram mdze'i sngags bsgrags na //
025 shi ba de la phan zhes zer //
026 la la mur rdug chos bshI la
027 de la mchod de yon phul na' // (ngna,v-1)
028 shi ba de la bde zhes zer //
029 la las ma 'gur ma'i chos nyams blangs te do spyad na' //
030 shi ba ded la phan zhes zer //
031 la las (ngna,v-2) mye lha chos spyoad na' //
032 shi ba de la phan zhes zer //
033 la las gson gyi nor rdzas kun //
034 ro dang 'dra bar se rar snas na //
035 sI ba de la phan zhes zer // (ngna,v-3)
036 log par bslus pa la la nI //

037 rta dan ma he ra lug kun //
038 gshin gyi phyi ru sro[g] bcad na' //
039 shi ba de la phan zhes zer //
040 de 'dra 'i chos ni bshad myI lang //
041 de na kun kyang log pa chos //
⋮

［三章-II-4］
042 (ngna,v-6) ma rIg log pa'I bslad pa'I rnams //
043 shi ba'i phyi[r] na phan du re ba'I phyir //
044 log pa'i chos byas thams cad kun //
045 kun (ngna,v-7) kyang myi phan gnod par mthong //
046 de nas lha bu rin cen gyis //
047 lus bsdebs phyag 'tshal thal sbyar nas //
⋮

048 (kma,r-2) shI 'o chog ni las kyi dbang //
049 las so chog ni sngon byas do // (kma,r-3)
050 las kyi dbang la bsgur ba nI //
051 gzhan la phan ba gcig kyang myed //
052 gnod pa bya pa snga phyi kun //
053 dge ba sna tshogs byang bar 'byung ste // (kma,r-4)
054 pha rol gsod pa byas pa kun //
055 myi gsod gso ba'i chos kyi dbyings //
056 log par byas pa spyad pa kun //
057 chos kyi sbyin bas rnam par sbyang // (kma,r-5)
058 'dod chag zhe sdang gdung ba kun //
059 sbying mthong chen pos pha rol 'byung //
060 lha 'dre dbang du gyur bas kun //
061 dkon mchog byin gyis rlabs (kma,r-6) gyis mnan //
062 de ltar dge ba'I chos spyad na //
063 shi ba de la phan pa 'ong //
064 yar te lha ru skye bar rung //
065 byang chub sems pa kun yang g.yo bar rung // (kma,r-7)
066 sdig go chog las thar bar rung //
067 de 'i yon tan bsahd myI lang //

068 de la phan par 'gyur ba'I chos //

069 'das pa'i sangs rgyas grang myed (kma,v-1) kyis //

070 mngon zhing gsal bar bshad zIn de //

071 de la phan ba'i chos byas na //

072 gzungs sngags chen po don spyad bas //

073 yid bzhin gnasu (kma,v-2) skye bar 'ong //

⋮

6. 『葬儀置換』

本文献に関しては、折本である PT 239 の表面に収録されるテキストが唯一の完本であり、本書の訳文もそれに依った。異本としては、ITJ 493 と ITJ 504 が知られており、前者は［I］遺体天幕（ring gur）の置換、後者は［IV］葬儀の羊（skyibs lug）の置換の前半部を収録している。文面的には相互の異同が大きく、対照させるには不便なため、ITJ 493、ITJ 504 のテキストは、参考のための付録として収録するに留める[900]。また PT 37（21 葉裏–22 葉裏）にも類似した文章があるが、異本とまでは言えず、要約・縮小版と位置付けられる。

PT 239

［I］(r1-1) $ // rIng gur bso ba' (⇒ bsngo ba') //

gnyen yId la gcags pa'I mye ngan // bsang ba'I phyIr / smrang dar bzos (r1-2) rgya khang dar khyIm las dpe blangs nas // dmyIg bzhag du byas pa' // shId[901] yo lang gI rgyen // sem shen re nag (r1-3) gyI rgyan // rIng gur bzang zhugs dog gyI rgyen dang bcas pa 'dI lta zhIg //

lha 'I yang (⇒ lha 'I yang lha) dkon mchog gsum la (r1-4) brten de // bzang rgya dar nor gyi dmyIg chud myI gsan (⇒ gson) sbyIn gdong don stsal du 'gyIs //

lha spos gtsang mas (r1-5) bsang // lha sngags gnyen pos (⇒ gnyan pos) bsngags pa'I yon gyIs // gshIn myIng 'dI zhes bgyI ba // {brgya} / (r2-1) rnam par grol ba 'phrul gI gzhal yas khang thob ste //

myIng 'dI bzhes 'gyI ba // brgya la / dmyal bar skyes (r2-2) na nI // zhe stang dmyal srungs gyI srin pos myI zung gcIng // dmyal gdub gsheg pa'I sems can thams cad (r2-3) 'phrul gyI gzhal myed khang chen por btsug cIng // dmyal ba'I sems can thams can la // skyabs byed nus par (r2-4) shog shIg //

gshIn myIng 'dI zhes bya ba // yI dags su skyes na nI // yI dag[s] thams cad gyI sgras (⇒ dgras) myI zung gcIng // (r2-5) yI dag[s] bkres skom gyi sems can thams cad la skyebs byed nus par shog shIg //[902]

myIng 'da zhes bya ba // dud 'gro glen rgugs (⇒ glen lkugs) gyI (r3-2) gnas su skyes na nI // dud 'gro 'i dgra tha[ms] [ca]d kyIs myI bzung cIng // 'gro ba thams cad gyI skyebs (⇒ la skyabs) byed nus (r3-3) par shog shIg //

gshIn myIng 'dI zhes bya ba // myIr skyes na nI // myI 'I dgra thams cad kyIs myI zug cIng // (r3-4)

---

900 既に、石川 2010 中に、PT 239、ITJ 493、ITJ 504 の 3 写本対照テキストおよび PT 239 と ITJ 504 の訳文が発表されている。

901 shId: gshId?

902 この後に、gshin mying 'dI zhe bya ba // yI dags su skyes na nI // yI dag thams cad gyI sgra // とあるが、直前に述べた文面を誤って繰り返し書写したものと判断し、削除した。

myI 'I 'jIg pa' thams cad las skyebs byed nus par shog shIg //

myIng 'dI zhes bya ba // lhar skyes na nI // (r3-5) lha ma yIn gI dgra thams cad kyIs myI zung cIng // lha 'I 'jIgs pa' thams cad las skyebs (⇒ skyabs) byed nus (r4-1) par shog shIg //

khams gsum gyI sems can thams cad sdug sngal gyI dgra thams cad kyIs myI zug[903] cIng // (r4-2) rnam par grol ba 'I gzhal myed khang chen por phyI (⇒ phyin) par shog shIg //

gnyen khor slad ma rnams kyang bkra shIs shIng rjes (r4-3) bzang bar gyur cIg //

［II］ dbon lob sngo ba' (⇒ bsngo ba')//

sngun gyI las mthun ba'I rgyu // yul cIg du skyes ste // shas bdags (⇒ shes bdag) / snag (r4-4) gyIs 'brel de // gnyen du gyur nas // dbyar gyI ldum bu dang 'dra bar bkod bkod pa las // tshe snga ma la srog gcod pa'I (r4-5) las byed pa'I lan gIs // tshe thung ba'I sad pa bab ste // myI rtag pa'I srIn gyis khyer nas gnyen sdug pa' rnams dang (r5-1) nI bral / de /

gnyen yId la gcags pa'I mtshan ma // chu gang dang khrel ltas gyIs nas mtshan ma // nor gyi dbyIg las phyung / (r5-2) phyugs du kyu nas drangs ste // chu gang khrel ltas su bsrId pa' // nor phugs nas bkod // phyugs khyu nas bkod ste // (r5-3) sbyIn ba gnyen srIs[904] su bdang pa' //

lha dkon mchog gsum la brten de // smon lam bzang po dang / lha sngags (r5-4) bzang pos bdab pa'I yon gyIs // 'tshI (⇒ tshe) 'das pa myIng 'dI zhes bgyI ba // gnyen byams pa'I ya lad dang // (r5-5) 'phrul gyI go ca thob ste //

tshI (⇒ tshe) 'das pa myIng 'dI zhes bya ba // gar skyes gar skyes gyang // lcag gshed gyI 'dre (r6-1) srIn dang // nyon mos (⇒ mongs) pa'I sgra cha sna tsogs gyIs myI zug cIng // 'chI bdag gyI bdud las rtsogs pa // khams (r6-2) gsum gI dgra thams cad las rgyal bar shog shIg /// /

［III］ 'phru sangs (⇒ 'bru stsang) bsnga pa' (⇒ bsngo ba')//

gnye (⇒ gnyen) sdug cI byams pa 'I dga' (r6-3) srIs dang // bu srIng brtse ba 'I sris dang // kha bzas gtsang mar bshams nas // lha sngags gnyan pos bdab ste // (r6-4) yI dag ltogs pa' rnams dang / sems can brel phongs thams cad la // sbyIn ba 'gyIs pa'I yon dan gyIs // (r6-5) myIng 'dI zhes bya ba // lha 'I zhal bzas dang // bdud rtsI btung ba 'I dbang thob cIng //

sems can la // sbyIn ba nam ka (r7-1) gang bar gdong zhIng // gshIn [mying] 'dI zhes bya ba dang // sems can thams cad deng nge 'dzan gyI bzas dang // lha 'I zhal (r7-2) bzas thams cad la stsogs pa las // long spyod sna tsogs dang ltan bar shog shIg //

phru sangs (⇒ 'bru stsang) las stsogs pas (⇒ pa) (r7-3) legs par sngo pas // bdag cag gnyen khor slad ma mchIs pa rnams dang // mtha' yas pa'i sems can thams cad // (r7-4) bde legs phun gsum tshogs par ldan bar gyur cIg //

---

[903] zug: zung?

[904] srIs: rIs?

［IV］ skyibs lug snga pa' (⇒ bsngo ba') //

myI nag po 'i gzhung // (r7-5) shId nag po 'i lugs // bon yas 'dod smrang // 'dre gsur 'dod gyI rabs las // myI bas (r8-1) nI lug 'dzangs la // myI bas kyang lug mthu che bar 'byung ba yang // sems can thams gyang sa (r8-2) so (⇒ so so) 'I las kyIs khrId pas // lug gyIs lam drang yang myI dgos // lug gyIs brag dral yang myI dgos / (r8-3) lug gyIs lam mkhan byed kyang myI nus // lug gyIs blo byed kyang myI nus / lag dum (⇒ rdum) gyIs mda' 'phen yang (r8-4) myI nus par //

ngon don la yid ches pas // lha chos dkar po 'i gzhung // myI dkar po 'i lugs shId dkar (r8-5) po 'i ches // lha chos dkar po la rden nas // lcags lag grang mo ni khong du ma bcug // khong khrag dron po (r9-1) nI phyir ma phyung / /don snyIng smad lnga nI spar gyIs ma bdab // don snyIng smad lnga nI spar gyIs ma bdab // g.yang bzhI nI phrag la ma gzar // rus pa (r9-2) dkar po nI gdun (⇒ gtun) la ma rdungs // sha dmar po ni bzangs (⇒ zangs) su ma btsos // mtho res (⇒ ris) myI 'I lug kyIs 'dre (r9-3) 'I lam ma byad // srIn gI las nI ma byas ste // dmIg gson myIg nI rIg rIg // rna gson rna nI dab dab (⇒ thab thab) // (r9-4) rus gson ru nI kyIl kyIl // zhIng spang snar po la nI spang rtsI (⇒ rtsa) yan du za zhIng bzhag pa ste //

lha spos gtsang (r9-5) mas nI bsangs // lha sngags gnyen pos pos bdab pa'I yon gyIs // myIng 'dI zhes bya ba // gar skyes gar (r10-1) skyes gyang // mtshon cha las bstsogs pa'I sdug sngal thams cad las thar ba dang // skye rgan ba'I sdug (r10-2) sngal myed pa'I g.yung drung gyI lus thob par shog shIg //

skyib lug legs par stad pas // gnyen dun (r10-3) slad ma rnams la // rjes (⇒ je) bzang zhIng bkra shIs par gyur cIg // /

［V］ rta sngos ba //

'dI lta ste / 'das pa'I (r10-4) dus na //

ngom (⇒ ngo) mtshar rmad du byung // sIng ka glIng gyI g.yul las // rgyam (⇒ rgya) mtsho dbus su nI // ded pon 'khor dang (r10-5) bcas pa gru gyI nang du bzhugs pa las // srIn gyI bo mo (⇒ bu mo) gnod spyIn 'jIg pas bzung // lcags mkhar (r11-1) 'bar ma nang du bcug nas // bza' bar bsham pa las // spyan ras gzIgs gyI dbang phyug thugs rje chen po (r11-2) dpe myed pas // bded pon 'jIgs pa skyabs myed de mthong nas // 'jIgs pa las skyeb cIng // sdug sngal (r11-3) las bsgrol ba'I phyIr // thabs gyI rta 'I rgyal por sprul pa nI // snyIng rje ltan ba cang shes pa la ho // mkha' (r11-4) la bya bzhIn chu bya dang 'dra //

'jIgs myed mthur ltan / yon dan phun sum tshogs // lcags mkhar dgu (r11-5) rIm du // gser gI byI ma (⇒ bye ma) la 'gre zhIng sprug ste // kun du sgra skad bkang pas // skyabs myed 'jIgs pa (r12-1) las thar par su 'dod pa // myI sngars brtan ba'I sems kyIs nga zhon na //

ded pon 'khor bcas (r12-2) sgra skad de thos nas // rab du dga' zhIng cang shes rta zhon de // rgya mtsho las rgal de 'jIgs pa de (r12-3) las thar // bla na myed pa'I byang cub sems bskyed nas // de (⇒

bde) skyId g.yung rtang[905] thar pa de bzhIn du // (r12-4)

dI rIng sang ltar myI bu las zad cing // bdag bdud kyis bzung nas // myI bu gzhon nas shI // rtsI dog snga (r12-5) na skams ste // // skyabs myed par gyur nas // // (r13-1) yun du phongs pa la zhon bar / don du bsam nas // do ma rus dang myIng / rnam[906] rta 'dI yang // rta mchog (r13-2) cang shes pa la ho bzhIn du // nam nam zha zha yun kyI phyugs gyI skal bar du bsngo 'o //

dkon mchog (r13-3) gsum gyI thugs rje dang // dge ba che chung cI spyad pa'I mthus gyIs // rta mchog khyod gyI yon dan 'dI (r13-4) rnam ste // dgongs pa don grub 'jIgs pa kun las bsgral //

cI ltar lus la spu nI grangs myed zhin (⇒ bzhin) / (r13-5) phyugs dang nor gyI skyId spyod ltan bar shog //

'jIgs pa 'i g.yul las mgyogs pa 'I shugs (r14-1) kyIs bsgral // rdzum (⇒ rdzu) 'phrul rkang bzhI ngan tsong kun bsgra (⇒ bsgral) de // phyogs bcu sangs rgyas yul na yId (r14-2) bzhIn phyIn // ma nor sgrib myed 'phrul gyI myIg gIs nI // 'phags pa'I rdzu 'phrul mthong ba grangs (r14-3) myed shog //

sangs rgyas 'phrul gyI rna ba thos myed pas // 'das pa'I gnyen sa bshes (⇒ gnyen bshes) kun dang phrad par shog // (r14-4)

khyed kyi sang sang gsal ba'I sgra snyan de // 'das pa'I gnyen sa bshes (⇒ gnyen bshes) kun dang phrad par shog // (r14-5) mdzes sdug mthul (⇒ mthu) rtsal phun sum tshogs pa des // bde skyid g.yung drung gnas su phyIn par shog // (r15-1)

de ltar smon lam rgya cher bdab pa'I byIn kyI rlabs kyIs // tshe 'das pa yang mtho ris thar pa'I gnas / (r15-2) thob par shog //

yon bdag slad ma rnams kyang // bkra shIs zhIng rjes bzang par gyur cIg //

［VI］ gnyen srIs (r15-3) g.yag sngos pa' //

thab nI ru rno / lus nI brjId bzang / 'brong stings chen 'dI lta zhIg // gshId (r15-4) nag po 'i 'dre 'i sna 'dren //

srIn gyI chos ngan pa rnams nI // chos ngan pa bzhIn du spangs // (r15-5) lus kyI drI ma bzhIn du bkrus dbyangs nas // (r16-1) lha chos dkar po 'i gzhung la // bkra shIs gyI rjes bzang po la brten nas // ngan par ma bsam // mda' (r16-2) nI ma 'phangs // mdung gyIs nI ma bdab // snyIng khrag dron mo ni khar ma phyung // don snyIng smad lnga nI spar (r16-3) gyIs ma brabs // lce dmar po ni mkhal du ma phyung ste // mkha' lung g.yang par rtsI dog bza' zhIng // (r16-4) gnyams dngar du bzhag pa dang //

phyugs las ngan pa ma byas pa 'I lan gyIs // gshIn myIng 'dI zhes (r17-1) bya ba la // gar skyes gar skyes kyang // thabs la mkhas pa'I ru rnon po dang // 'jIgs pa myed (r17-2) pa'I yag snyIng dpa' dang // bsod rnam chen pa yag lus sdug pa dang 'dra ba 'I go ca thob par (r17-3) shog shIg // (end)

---

[905] g.yung rtang: g.yung drung?

[906] rnam: gnam?

ITJ 493

（PT 239 の［I］（r1-1 から r4-3）に相当）

［I］(r1-1) [---] gcags pa 'i mye ngan bsang ba'i phyir (r1-2) [---]s dpe blangs nas dmyig pa nag du byas pa (r1-3) [---]n // ring dgun gi bsang ba dang bzhugs don gi (r1-4) [---]

lh[a][---] dkon gchog gsum la rten de / dpral rgyan dar ra (r1-5) gmyig // chud dmyi ne gnas byed 'd[o]d rtsal te bgyis //

lha spos gtsang mas (r1-6) bsang // lha sngags gnyan pos ne sngags pa'i yon gis // gshin myi 'di zhis bya ba // (r1-7) rnam par grol ba'i / phrul gi gzhal yas khang mthong bas bsam ste //

myi 'di zhes (r1-8) bya ba // rgya (⇒ brgya) la dmyal bar skyes na ne / zhe sdang dmya (⇒ dmyal) srung gis / srin po gis myi gzung cin (r1-9) dmyal gdub gshag pa'i sems shan tham shad phrul gi gzhal yas khang chen por // (r1-10) btsugs nas / dmyal ba'i sems shan thams shad la / / skyabs byed nus par shog shig /

(r1-11) gshin myi 'di shes bya ba // yi dags (⇒ yi dvags) su skyes *na* ne yi dvag (r1-12) gi sgra thams shad gis myi gzungs cin // yi dagg (⇒ dvags) bkres skom gi sems shan (r1-13) ne skyabs byed nus par shog shig //

gshin myi 'di shes bya ba / glen dkugs gi gnas su (r1-14) skyes na ne dud 'gro'i sgra thams shad gis myi gzung cin // 'gro ba thams shad gis (r1-15) skyabs byed nus par shog shig //

gshin myi 'di zhes bya ba myir skyes na ne myi 'i sgra thams (r1-16) shad gis myi gzung cin // myi 'jigs pa thams shad las myi'i skyabs byed nus par (r1-17) shog shig //

dshin (⇒ gshin) myi 'di zhes bya ba lhar skyes na ne / lha ma yin gi sgras myi gzungs (r1-18) cin // lha'i 'jigs pa thams shad la skyabs byed nus par shog shig //

(r1-19) khams gsum gi sem shan tham (⇒ thams) cad sdug sngal (⇒ bsngal) gis tham (⇒ thams) shad gis myi gzung cin // (r1-20) rnam par grol ba'i gzhal yas khang chen por phyin bar shog shig / /

ring dgu bsngos ba'i (r1-21) byin gis rlabs gis gnyen 'khor slad ma rnams kyang / bkra shis rjes bzang bar gyur cig //

(r1-22) / ^o // (ornamental mark) / / / hung / / (end)

ITJ 504 表面

（PT 239 表面の［IV］の冒頭（r7–3 から r9–3）に対応[907]）

(r1-1) gnyen 'khor slad ma rnams la yang / rjes bzang zhing / rab tu bkra' shis par gyur cig //

［V］skyibs lug bsngo ba / (r1-2) myi nag po'i gzhung / shid nag po'i lugs // bon dpags 'dod kyi smrang // 'dre gsur 'dod kyi rabs las // (r1-3) myi bas lug bzangs (⇒ mdzangs) ste // skyibs lug gi mar ba khyod la // bzang dgu se la bzar pa dang / mgyogs dgu' (r1-4) dkyus su brgyugs pa dang // bum ril mang du bsad pa dang // skyibs lug khyod la gtad kyis // deng phan cad / (r1-5) brag lam myed la yang lug // khyod kyis lam drongs shig // mtsho rab myed la yang lug khyod kyis (r2-1) rab drol cig // rmyig pas ni brag drol cig // sngur pas ni mtsho rngubs shig // ces 'byung ba yang // sems (r2-2) can thams cad las dge sdig gi dbang gis / 'gro' ba tsam du zad *pas* // lug gis lam drangs mkhan (r2-3) byed kyang myi nus // lug gis gnyer blang zhing // dkor pa byed kyang myi nus / rmyig pas brag dral *yang* myi nus // (r2-4) sngur pas mtsho' rngub kyang myi nus pas //[908] lha chos dkar pa'i gzhungs lha'i yang lha dkon mchog gsum la (r3-1) brten te // lcags grang m[o] n[i] khong du ma bcug // khrag [dran] pa ni phyir ru ma phyung // don snying ni spar gyis (r3-2) ma brabs // mgo dang lag tu ni ma phye // lhu dang tshigs su ni ma pral // sha dmar po ni zangs su mi ma tsos // (r3-3) rus pa dkar po ni / gtun la ma brdungs // g.yang bzhi ni phrag la ma bkal // mtho ris myi'i lugs kyis (r3-4) 'dre'i las ma byas // srin gyi las ma byas // myig gson myig ni rig rig // rna gson rna ni thab thab // ru … (end)

[907] Stein 1970, pp. 174–175; 石川 2010, pp. 69–74; 御牧 2014, pp. 104, 106.

[908] 写本では、ここに朱色の三段重ねの円が描かれている。おそらくこの後の箇所が重要であることを示したものと思われる。

7. 『死者神国道説示』

『死者新国道説示』を収録する写本としては、PT 239 裏面、PT 37、PT 367 裏面 + PT 366 表面、ITJ 151 裏面の 4 本が知られている[909]。このうち、PT 239 と PT 37 は完本、PT 367+PT 366 には［IV-3. 畜生道］の前半から［V. 神国道とそこでの心得］の半ばまで、ITJ 151 には［IV-2. 餓鬼道］の終わりから巻末までが残存している。なお、PT 239 と ITJ 151 は折本、PT 366 と PT 367 は共に折本の離れ、PT 37 は左端綴じの胡蝶装形式である。また、PT 239 表面には『葬儀置換』が、PT 367 表面 + PT 366 裏面、ITJ 151 表面には『生死法物語』が記されている。本書では、PT 239 裏面を底本とし、他の写本との異同は適宜脚注に記した。

［I］

(v1-1) $// de nas gshIn lam bstan ba'[910] //

bla na myed pa'I ye shes bsam gyIs myI khyab (v1-2) pa // lha 'I spyan rnam par dag pa dang ltan ba // sangs rgyas bcom ltan 'das thams (v1-3) cad dgongs su gsol //

sems can thams cad la // bu cIg bzhIn du snyoms par (v2-1) skyob pa'I byang cub sems pa // sems pa chen po rnams gongs su gsol//

yang dag (v2-2) pa'I shes rab dang khams gsum gI nyon mongs pa thams cad // rtsa nas bcom ste / cha gnyIs las (v2-3) rnams par grol ba'I gong (⇒ go) 'phang chen po rnyes (⇒ rnyed) pas // phags pa sgra bcom ba rnams dgongs (v2-4) su gsol //

［II］

tshe 'das pa khyod nyon cIg //

tshe 'das pa khyod[911] la 'jIg rten thams cad (v3-1) gyI // chos nyId glo bur myI rtag pa'I dus la bab ste[912] // 'dus byas kyI lnga phung rgyu ma zhIg ste // (v3-2)

'jIg rten 'dI nas // pha rol du 'gro ba'I pho skyab chen po 'debs pa'I dus la bab ste // (v3-3) gcIg pu[913] gnyIs su myed par // sa tsugs myed pa'i gnas su 'gro ba'I mgon dang skyabs su nI // (v3-4) sangs rgyas bcom ltan 'das dang // byang cub sems dpa' sems pa chen po dang // 'phags (v4-1) dpa' dgra

---

[909] 各写本で本文献が収録される箇所は次の通りである。
PT 37: 8v-4-17r-3; PT 239: v1-1-v19-4; PT 367: v1-5+PT 366: r1-1-r2-6; ITJ 151: v1-1-v6-1

[910] PT 37: de nas gshin lha yul gtshang sar lam bston

[911] PT 37: tshe dang ldan ba khyod

[912] PT 37: chos nyid glo bur gyi [sgyiu] ma sprin ldar myi rtags pa dus byas nas //

[913] PT 37: gchIgs nas

bcom ba las che ba' zhan[914] myed pas //

de las tshe 'das pa khyod[915] yId ma gol[916] // (v4-2) sems nI ma log[917] par// dus thams cad du dkon mchog gsum kyI yId la sbyos (⇒ sbyor) la // dkon (v4-3) mchog la rjes su phyogs la[918] // gzhan du rngos po ci la yang yId kyI lam ma byed cIg// sems (v4-4) kyI[919] srang ma dod[920] cig //

［III］

gzhan yang tshe 'das pa khyod[921] nyon cig //

khams gsum gI btson ra 'dIr (v5-1) sgyu ma 'I lus blangs ste[922] //skyes so cog thams cad nI // mthar shI ba las thar pa cIg kyang (v5-2) myed de //

de ltar skyes pa gcIg nas cIg du 'gro ba'I skye shI lam nyam nga pa[923] //de lta bu dag (v5-3) yod kyIs yId la dran bar byol[924] shIg //

［IV-1］

'dzam bu glIng 'dir dpag tsad brgyad khrI 'I 'og na / (v5-4) na rag chen po 'i gnas yod lcags gyIs gzhIng 'bar ba'I ste na (⇒ steng na)[925] // lcags kyi khang pa 'bar (v6-1) ba'I nang du / rag sha mthu bo che mang pos // 'bum grangs myed par[926] // btso zhIng bsrag (⇒ bsreg) pa dang[927] // (v6-2) gdub cIng dmyal ba[928] las stsogs de // stugs ngal myI bzad bar // kun du ʻod chen po 'bod cing[929] // (v6-3) smre sngags 'don pa'I na rag 'dI lta bu dag gi gnas yod kyis // tshe 'das pa khyod[930] lam der myI (v6-4) ltung pa'I bag cher byos la //

brgya la der ltung bar dogs na // na rag chen po de la chang kyur skyob pa // (v7-1) byang cub sems dpa' 'phags pa spyan ras zIgs kyI dbang po zhes bya ba[931] yod kyIs // (v7-2) de 'i mtshan dran

---

[914] PT 37: gzhan
[915] PT 37: tshe dang ldan ba khyod
[916] PT 37: 'grol
[917] PT 37: ldogs
[918] PT 37: dkon mchogs gsum la rjes su phyags pa las
[919] PT 37: kyis
[920] PT 37: gdod
[921] PT 37: tshe dang ldan ba khyod
[922] PT 37: sgyu nga ma'i lus byang ste
[923] PT 37: lam ngan pa nyam nga ba
[924] PT 37: byos
[925] PT 37: lcags kyi sa gzhi bdar ba'i sgring
[926] PT 37: lo khri phrags myed par
[927] PT 37: *bco zhin rags pa dang*
[928] PT 37: btubs cen dbyang ba
[929] PT 37: kun du 'od 'od 'bod pa'i
[930] PT 37: tshe dang ldan ba khyod
[931] PT 37: spyan ra gzigs kyi dbang phyugs ces bya ba

bar byas la[932] // gsol ba bdab pa'I tshig 'dI dang // sngags 'dI smros la[933] (v7-3) skyabs su gsol cIg dang // gnas ngan pa de las thar par 'gyur ro //

rnam par thugs rje sgo[934] (v7-4) nas // byang cub mchog brnyas pa // chos mchog[935] skyon bral tshangs pa chen po 'i dbyangs gsungs (v8-1) bas[936] // mtshan thos stug sngal zhe[937] mdzad phongs (⇒ spong) pa'I mgan gcIg pa'[938] // spyan ras gzIgs (v8-2) dbang de 'Is skyab du gsol //

^'oM hrI hung[939] pad ma prI ya svah'a //

［IV-2］

tshe 'das pa khyod[940] nyon cIg // (v8-3)

gzhan yang 'dzam bu glIng 'dI nas // dpag tshad lnga brgya 'I 'og na // yI dags kyI 'jIg rten zhes bya (v8-4) ba // lhag par bkres grang[941] gIs nyon mongs pa'I // sems can lo brgya stong du mar yang // mchIl (v9-1) ma dab pa gcIg tsam yang[942] bza' ba'I skal ba myed la[943] / lus kyI gos dang myI ltan zhIng[944] // nam (v9-2) ka la lcags gyI ser ba drag po 'bab pas // lo khri 'bum du[945] cho nge[946] sgra 'byIn ba 'dI lta bu 'I na rag (v9-3) kyI gnas yod kyis // der myI 'gro par tshe 'das pa khyod[947] bag cher byas la//

der ltung bar dogs na[948] // (v9-4) yI dags kyI lam de la chang kyur skyob par byad pa // byang cub sems dpa' chen po[949] nam ka mdzod (v10-1) ces bya ba yod kyIs // dge ba'I bshes nyen de dran bar byas la // gsol ba dab pa'I[950] tshig dang / (v10-2) sngags gyI snyIng po 'dI smros la[951] skyabs su gsol cIng // stug sngal gyI gnas de[952] las thar par 'gyur (v10-3) ro //

---

932 PT 37: drang bar byos la
933 PT 37: sngags kyis snying po smras ste
934 PT 37: thugs rje can gyi sgo
935 PT 37: thub chogs
936 PT 37: tshangs pa'i byang cub gsungs pa
937 PT 37: zhi
938 PT 37: mgon thigs pa
939 PT 37: hi
940 PT 37: tshe dang ldan ba khyod
941 PT 37: lhag par bkris sheng grang
942 PT 37: mchil ma'i thal ba tsam ba yang
943 PT 37: skal ba dang myi ldan la
944 PT 37: lus kyi gos kyang bgos myed do
945 PT 37: lo khri phrags du
946 PT 37: mchong nge
947 PT 37: tshe dang ldan ba' khyod
948 PT 37: brgya la der lhung du dogs na
949 PT 37: byang cubs sems pa sems pa chen po
950 PT 37: 'den ba'i
951 PT 37: smras te
952 PT 37: gnas ngan pa de

bsod nams ye shes tshogs las[953] / dpal gI sku 'khrungs ste // dIng nge 'dzIn nam ka mdzod la (v10-4) spyod pa'I mnga' rnye (⇒ rnyed) pa // bkres grang ba dang phongs pa'I yI dags sgrol mdzad pa // mgon po nam (v11-1) ka mdzod kyIs skyab du gsol[954] //

^'oM ga ga na sam ba ba dzra ho da ha sa[955] ///

［IV-3］

tshe 'das pa khyod[956] nyon (v11-2) cIg //

rgyam mtsho chen po dang / glIng chen po[957] bzhI dang / lcags kyI rI chen po 'I bar gyI gnas la[958] (v11-3) stsogs pa de dag na[959] // lhag par blun zheng rmugs pas (⇒ pa'i)[960] // legs nyes gyI dud 'gro[961] byol tsong[962] gI (v11-4) gnas[963] yod kyIs lam ngan pa der yang myI ltung skyeb bar[964] bag cher gyIs shIg //

brgya la der ltung (v12-1) bar[965] dogs na // byol tsong dud 'gro 'i lam der chang kyur skyob pa'I byang cub sems pa[966] ngan tsong spyong (v12-2) ba zhes bya ba yod kyis // de la dge ba'I bshes nyen la rtag par dran bar gyIs[967] la // gsol ba bdab (v12-3) pa 'I sngags kyI tshIg 'dI smros la[968] //skyabs su gsol[969] // de las thar par ‘gyur ro[970] //

---

953 PT 37: nam ka dbyings nas

954 PT 37: nam ka mdzod kyis bdan sa la bskyab du bsol; ITJ 151: mgon po nam mdzad kyis gshin la chang khyur bskyab tu gsol

955 PT 37: ^o'M na ma pad ma tso hi da / svahva

956 PT 37: tshe dang ltan ba 'khyod; ITJ 151: tshe dang ldan ba gshin khyod

957 PT 37: gling chen po が欠落。

958 PT 37: re chen po pa'i bar bar na; ITJ 151: ri chen po'i // bar bar gyi ri

959 PT 37: mun nag gyi gnas las bspogs pa; ITJ 151: mun nag gi gnas la stsogs pa de dag na

960 ITJ 151: blun zhing rmongs pas

961 PT 37: sems shan dud 'gro

962 ITJ 151: byol song

963 ITJ 151: skye gnas

964 PT 37: mye skye bar; ITJ 151: myI skye myi ltung ba'i

965 PT 37, ITJ 151: ltung du

966 PT 37: byang cub sems pa sems pa chen po

967 PT 37, PT 367+PT 366, ITJ 151: byos

968 PT 37: gsol ba gdab pa'i tshig 'di dang / sngags kyi snying po 'di bjod; PT 367+PT 366: gsol ba gdab pa'I 'tshig 'di dang gsang sngags gyi tshigs 'di smros la; ITJ 151: gsol ba gdab pa dang / sngags kyi snying po 'di smros la

969 PT 37: gsol cigs dang; PT 367+PT 366: gsol cig dang; ITJ 151: gsol cig

970 PT 37: byol tsong dud ['gro] 'i lam de las thar par 'gyur do; PT 367+PT 366, ITJ 151: gnas ngan pa de las thar bar gyur ro

de bzhIn nyId (v12-4) dang[971] mthar phyIn ba[972] // 'jIg rten kun du gsal[973] pa'I[974] ye shes sgron ma yIs // dud 'gro rmongs pa'I (v13-1) las[975] skye bo sgrol[976] mdzad pa' // mgon po ngan tsong spyong gyIs skyab du sol de[977] //

na ma sa rba[978] dur ga (v13-2) de // ba rI sho da nI //ra dza ya da tha ga da ya ^a rI ha dI //sam yag sam bu da ya // dad ya tha // ^'oM sho da nI (v13-3) sar ba pa pa byI sho dh anI // shud de byI shud de // sa rba kar ma ^a ba ra na byI shud de sva h'a ///

［V］

de ltar ngan tsong[979] gsuM (v13-4) gI sgo nges par bkag nas //

sangs rgyas dang byang cub sems dpa'[980] las stsogs pa // 'phags (v14-1) pa thams cad gyI thugs rje chen po[981] dang // bka' bden ba'I byin kyi rlabs kyis[982] // gnyen 'dun[983] phyI (v14-2) ma rnams kyIs // dkon mchog gsum la brten de // yang dag pa'I chu gang ma nor pa'I sod nams (v14-3) gyI tshogs[984] 'dI dag la // brten cIng bdeg nas[985] // bde skyId phun gsum tshogs pa'I lha yul dam par[986] (v14-4) 'gro baʼI lam nI //

'dzam bu glIng 'dI nas // byang phyogs na rI rab lhun po zhes bya ba // rI 'i rgyal po (v15-1) rIn po che sna bzhI las grub pa zhIg yod de // de'I steng na chos bzang lha'I 'dun sa[987] na // (v15-2) lha 'I

---

971 PT 367+PT 367: nyid gyi mnga' bdag; ITJ 151: nyid kyI mnga' dbang

972 PT 37 ではこの一節が欠落。

973 PT 367+PT 366: gstsal

974 PT 37: mun nag gsal ba'i byed pa'i

975 PT 37, PT 367+PT 366, ITJ 151: lam las

976 PT 367+PT 366: sgrom

977 PT 367+PT 366: gshin khyod la // chang [khya]r skyabs su gsol; ITJ 151: gshin la chang khyur bskyab tu gsol

978 PT 37: na ma sar ba dur bur te // pa res ho dan // tyad ya tha / ^o'Mm sho de ne / ser ba pa phyi sho da ne / byi sho da ni // sar ba kar ma ra ^a ba ra na byi shod de sva hva //; PT 367+PT 366: na ma sar ba tur ga ti pha ri sho dha na // ra dz'a y'a ta tha ga tha y'a ^a ri ha te sam myag sam bu'd dha ya tad thya ta ^om shod dha ne sar ba ba ba b'i shid dha ne sh'u dhe bi shud dhe sar ba kar ma ^a ba ra bi shud dhe sva h'a //; ITJ 151: na ma sar ba tu ga ti pa ri sho dha na // ra dza ya' // ta tha ga tha ya / ^a ri ha te sam myag sam ʻbhu dha ya / tad thya da / ^o'm sho dha ne / sho dha ni // sar ba pa pa bha shod dha ne / shud dhe bhi shud dhe / sa rba kar ma ^a bha ra ba shud dhe sva ha //

979 PT 367+PT 366: ngan song

980 PT 37: byang cub sems pa pa'i sems ba chen po

981 PT 37: 'phags pa thugs rce chen po

982 PT 37, PT 367+PT366, ITJ 151: dang

983 PT 367+PT 366, ITJ 151: gnyen sdug

984 PT 37: yang dag pa'I bsod nams kyis chung // gang kyi tshogs; ITJ 151: yang dag pa'i chu gang dang // ma nor pa'i bsod nams / kyi tshogs

985 PT 37: 'di dag gyis // brten bzhing bten nas; PT 367+PT 366: 'di dag gis bteg cing brten nas; ITJ 151: 'di dag gis // bteg cing brten nas

986 PT 37: pad par

987 ITJ 151: mdun tsa

dpang po brgya' byIn dang // blon po gsum cu rtsa gnyIs dang // lha dang myI dang srId pa'I ltang (v15-3) phye zhIng lam ston pa yod de[988] // der[989] lha'I rgyal po des // rIgs kyi bu khyod[990] la // chos kyI man (v15-4) ngag[991] ston cIng // bsod nams gyI mthu stongs par[992] gyur ro //

rIgs kyI bu[993] de nas // rI rab gyi (v16-1) byang phyogs gyI rtse[994] na // phob[995] brang lcang lo can zhes bya ba' // bcom ltan 'das dpal[996] phyag na (v16-2) rto rje khro bo mang po[997] khor dang // bcas pa bzhugs ste // 'dod pa thams cad[998] yId bzhIn du grub par // (v16-3) rIgs gyI bu khyod la[999] dbang bskur bar 'gyur ro //

de nas rIgs gyI bu khyod[1000] la // phyag na rto rje[1001] byIn (v16-4) gyI rlabs gyIs // song la dga' ltan[1002] lha 'I gnas na // sangs rgyas shag kyI[1003] thub pa // chos gyI (v17-1) rgyal tsab[1004] // 'pags pa byams pa zhes bya ba // 'khor byang cub sems dpa' ba su myI dra[1005] dang // (v17-2) seng 'ge bar snang[1006] la stsogs pa // bskal bzang po 'I[1007] byang cub sems dpa' / dgu brgya dgu bcu (v17-3) rtsa drug la stsogs pa dang // lha'I bu grangs myed pa dang // rIn po che'I gzhal myed khang gyI nang na // (v17-4) lha rdzas kyI lhab lhub[1008] dang // rol mo sna tshogs gyI long spyod dang ltan ba[1009] // bsam gyIs myI khyab pa las (v18-1) stsogs pa // skyId pa'I rgyu rkyen phun gsum tshogs pa[1010] // lha yul dam pa der // bde dgu[1011] la bag (v18-2) yod par spyod cig //

---

988 PT 37: lha dang myi srid kyis lam ston pa yod ste; PT 367+PT 366: lha dang myi 'i srid pa'I lam ston pa'I gnas yod de //; ITJ 151: lha dang myi 'i srid pa'i lam ston pa'I gnas yod de //

989 PT 37: de yang; PT 367+PT 366, ITJ 151: der yang

990 PT 367+PT 366: rigs gyi bu gshin la dgongs su gsol // gshin khyod; ITJ 151: rigs kyI bu gshin khyod

991 PT 367+PT 366: gnam ngag

992 PT 37: ston par; PT 367+PT366, ITJ 151: bstan par

993 PT 367+PT 366: rigs gyi bu khyod; ITJ 151: rigs kyI bu gshin khyod

994 PT 37: tsa

995 PT 37: phro; PT 367+PT 366, ITJ 151: pho

996 PT 37 では dpal が欠落。

997 PT 37, PT 367+PT 366, ITJ 151: po'i

998 ITJ 151: bsams dgu

999 ITJ 151: rigs kyi bu gshin khyod la

1000 ITJ 151: rigs kyi bu gshin khyod

1001 PT 37: dpal phyags na rto dze; ITJ 151: dpal phyag na rdo rje 'i

1002 PT 37: gsol ba dag

1003 PT 37, ITJ 151: kya

1004 ITJ 151: gyal mtshan

1005 ITJ 151: 'ba' su myi tra

1006 PT 37: ser nge rab sga[l?]

1007 PT 37, ITJ 151: bskal pa bzang po'i

1008 PT 37: lhab lhab

1009 PT 37: chos kyi long spyod, ITJ 151: chos kyi long spyod zad myi shes pa

1010 PT 37, ITJ 151: pa'i

1011 ITJ 151: gshin khyod bde dgu

rIgs kyI bu[1012] lha'I[1013] longs spyod // dga' ba 'ba' shIg gIs chog par[1014] ma 'dzIn[1015] // (v18-3) bdag dang sems can kun[1016] yongs su mye ngan las 'da'[1017] par byol (⇒ byos)[1018] la // bsod nams dang ye shes gyI (v18-4) tshogs btsal ba la // myI ngoms pa'I sems zhog shIg[1019] // 'dod chags dang bral bar yang thob (v18-5) par[1020] gyur[1021] shIg //

［VI］

{$ // de nas gshIn $ //}[1022] thams cad mkhyen pa'I ye shes kyang[1023] // mngon bar shes pa'I [---][1024] (v19-2) la yang rnam par sbrul[1025] bar gyIs shIg // chos gyI dbyIngs[1026] la yang ma g.yos shIg // byang cub gyI (v19-3) sems bskyed pa la yang ma gdang shIg // de bzhIn gshegs pa 'I rnam par[1027] 'phrul[1028] ba dang // byIn (v19-4) gyI rlabs kyIng[1029] yongs su[1030] rton cIg //

lha yul du lam bstan ba rdzogs so // ^'oM // (end)

[1012] ITJ 151: rigs kyi bu gshin khyod

[1013] PT 37 では lha'i は欠落。

[1014] PT 37: tshogs par

[1015] PT 37: ma 'dzin bar; ITJ 151: ma 'dzin par

[1016] PT 37: sems shan kun kyang

[1017] PT 37, ITJ 151: 'das

[1018] PT 37: bgyis; ITJ 151: gyis

[1019] PT 37: myi myangs pa'i pa sems shan bzhogs cog rna; ITJ 151: myi ngoms pa'i sems can zhog shig

[1020] ITJ 151 では thob par は欠落。

[1021] PT 37, ITJ 151: gyis

[1022] PT 239 にのみ、この箇所に $ // de nas gshIn $ // とあるが、誤入と思われるため校訂テキストからは削除した。

[1023] PT 37: ye shes kyis btsal bar bgyis shigs; ITJ 151: ye shes kyang btshal bar gyis shig

[1024] PT 37, ITJ 151: ye shes

[1025] PT 37: 'phrul; ITJ 151: 'phruld

[1026] PT 37: chos kyis dbyangs

[1027] ITJ 151 では rnam par は欠落。

[1028] PT 37: phyal; ITJ 151: sprul

[1029] PT 37: kyang; ITJ 151: kyis kyang

[1030] ITJ 151: shin khyod la yongs su

【附論】

本書本論の主題は、古代チベットにおける仏教伝来文学に関する文書史料の詳細な訳註と解説である。各文書史料は、仏教の教えを当時の一般のチベット人にもわかりやすく伝えることを目的としており、そのためにチベットにおける土着の宗教思想に寄り添う形で仏教が説かれている。それはとりも直さず当時のチベット人の間でこの土着の宗教観が広く受け入れられていたことを明瞭に示している[1]。

土着の信仰を有するチベット高原に外来宗教として参入した仏教は、その後にツェンポのティソン・デツェン時代に国教となり、そして 9 世紀前半のティツク・デツェン（レルパチェン）時代には仏僧が政治に参画する権力を握るまでに至ったことは、本論でも説明されたとおりである（本論 115 頁）。土着の宗教と仏教とが併存した状況は外国にも認識されており、例えば『新唐書』巻 216 上吐蕃伝上には次のようにある。

> 其の慣習は、死者の魂を重んじて巫者を尊び、山羊や羊につかえて大神とする。仏陀の法を喜び、呪法に習熟している。国の政事は、必ず僧侶が参加して決める[2]。
>
> （『新唐書』巻 216 上吐蕃伝上 p. 6072）

この記事から古代のチベットでは土着の信仰と仏教（浮屠法）が併存し、しかも仏教僧が政治にも関わっていたことがうかがえる。9 世紀のティツク・デツェン治下においてペルチェンポ・ヨンテンは宰相の 1 人として重用され（本論 115 頁）、また、チベットと唐との長慶会盟（821–822 年）の際にも会盟参加者として唐蕃会盟碑に記録が残る（唐蕃会盟碑北面 9 行目：[ba]n de chen po dpal chen po yon [tan]）[3]。長慶会盟に参加するために唐の使節としてラサへ向かった劉元鼎の目撃談にも、この僧が会盟の儀式に参加していたことが明記されていた[4]。

一方で、仏教の政治参画以降にも土着の信仰は権力基盤から排除されたわけではなく、むしろ国家儀式などの根幹部分に存在していたことはつとに指摘されてきたことである。そのような儀式の 1 つが盟誓であった。人々が約束をする際には、必ず供犠獣を屠り天地や神々を証人として呼ぶことが土着の信仰に基づき挙行され、それは基本的に古代チベッ

---

1 ボン教の伝統によると、古代チベット時代の土着の宗教は元々西の「タジク」（漢語の「大食」、イスラム教徒とその国家）からもたらされた信仰であり、後のボン教の祖先であるとされる。しかし一方で、古代チベット帝国はその成立時期から多民族集団によって構成された国家であったことも忘れてはならない。チベット高原の西側にはシャンシュン、東側には蘇毗、白蘭などの様々な言語や出自の集団がいたのであり、チベットの共通語となったチベット語は本来中央南チベットと西カムの人々の言語に過ぎなかった（Takeuchi 2013, p. 6）。そのような状況のもとチベット高原の様々な集団の間でどの程度この信仰が共有されていたのか、明確なことはまだわからない。

2 翻訳に関しては佐藤（1973, p. 210）の訳を参照し、一部変更した。原文は以下の通り：其俗、重鬼右巫、事原羝爲大神。喜浮屠法、習咒詛、國之政事、必以桑門参決。

3 唐蕃会盟碑については Li and Coblin 1987 参照。

4 『新唐書』巻 216 下吐蕃伝下（pp. 6102–6104）（佐藤 1973, pp. 274–279; 本論 115 頁）。

ト帝国一代を通じて変わらなかった。『旧唐書』には次のようにある。

> 其の臣下と 1 年に 1 度小盟し、羊・犬・猿を犠牲にするとき、先に其の足を折って殺し、それから腸を裂いて屠る。巫者に天・地・山・川・太陽・月・星の神に告げさせて言う。「もし心変わりし、悪事を考えて（盟に）背けば、神はこれを見通し、羊や犬と同じくなるだろう」。3 年に 1 度大盟し、夜に壇の上にて人々と供物を並べ、犬・馬・牛・驢馬を殺して犠牲とし、呪文を唱えて言う。「汝等みな心を同じくして、共に我れらが家を保て。おもうに、天神地祇とともに爾の心を知っている。この盟に負けば、汝の体は切り裂かされ、この犠牲と同じようになるだろう[5]。」
>
> （『旧唐書』巻 196 上吐蕃伝上 p. 5220）

盟には供犠獣が屠られ、そして巫者が「天地山川日月星辰」の神に告げて誓いを有効化したことがみてとれる。巫者は明らかに土着の信仰の担い手であり、供犠獣を屠り、そして自然の神々へ報告する役目を担っていた。盟誓の際には土着の信仰の司祭であるボンやシェンが立ち会ったのであろう。この神々を呼び報告することには具体的な意味があることが、唐蕃会盟碑西面（藏漢合璧）からわかる。

> チベット文：三宝・聖人たち・日月と星に対しても（彼らを）証人とみなして報告し[6]
>
> 漢文：三宝と諸々の賢聖、日・月・星は、証人となるように請い願う[7]。
>
> （唐蕃会盟碑西面 チベット語：ll. 61–63、漢語：l. 5）[8]

唐蕃会盟碑に記されるように、神々は証人（dpang、知証）として盟誓の場に呼び出されていたのであった[9]。

このような誓いの儀式と供犠獣を屠ることはチベットで広くおこなわれていたとみえ、開元 25（737）年、チベットと唐の国境が青海湖の東あたりにあったとき、チベットの守将である乞力徐と唐の河西節度使崔希逸が、境界の柵を取り去り、双方ともに奇襲攻撃を行わないことを取り決め、白犬を屠って誓いを結んだ。ところが、唐側が誓いを破ってチ

---

5 原文は以下の通り：與其臣下一年一小盟、刑羊狗獼猴、先折其足而殺之、繼裂其腸而屠之。令巫者告於天地山川日月星辰之神云：「若心遷變、懷奸反覆、神明鑒之、同於羊狗。」三年一大盟、夜於壇墠之上與眾陳設肴饌、殺犬馬牛驢以爲牲、咒曰：「爾等鹹須同心戮力、共保我家、惟天神地祇、共知爾誌。有負此盟、使爾身體屠裂、同於此牲」、訳は佐藤 1973（pp. 106–107）参照。

6 dkon mch[o]g gsum dang / / 'phags pa'I rnams [dang] gnyI zla dang gza skar la yang dpang du gsol te

7 三寶及諸賢聖、日月星辰、請爲知證。

8 Li and Coblin 1987, p. 40, 77, 80.

9 なお、唐蕃会盟碑では三宝、諸賢聖といった仏教の権威が証人に入っているが、この意味については後述する。

ベット側に奇襲攻撃を行ってしまったために、唐側の武将は白犬の祟りによって死んでしまったという[10]。

さて、この盟誓の際に供犠獣を屠ることはよく注目されており、本論（114–115 頁）においても考察されているところである。そして本論の中心課題である、古代チベットにおける仏教の受容という観点からすると、この供犠獣を屠る儀式は仏教によって置換された恰好の事例であった[11]。この犠牲の置換をめぐる議論とその意義については本論にゆずり、附論では、盟誓における証人について注目したい。先に引用した『旧唐書』では、誓いの際に司祭は「天地山川、日月星辰之神」へ報告したのであった。では、他の盟誓においてはどのような神が呼ばれているのであろうか。

784 年、チベットと唐との間に盟誓が結ばれた（建中会盟あるいは清水会盟）。その際に唐側が用意したとみられる盟文「与吐蕃会清水盟文」が『唐詔令集』に載る[12]。その盟文には

> 今二国の将軍・大臣たちは、辞を受けて集まり、身を清め、事を天地山川の神に告げる。神が降臨され、（我々が）過ちがないように[13]。
>
> （『唐詔令集』巻 129、p. 699）

とあり、誓いの内容を天地山川の神に告げたことがここからわかる。『旧唐書』巻 196 下吐蕃伝下（p. 5247）によると、この会盟のときには白羊、羝羊、犬が供犠獣として屠られ、その血を混ぜて啜ったとある。つまり、建中会盟においては供犠獣の血を啜り、天地山川の神に盟の内容を告げる、という方法でおこなわれたのである。

なお、Stein（1988a, pp. 120, 127）は供犠獣の血を啜って誓いをなす儀式をチベットの儀式でなく本来中国のものであったと結論づけ、Pang（1992, p. 145, fn. 91）もそれに賛同するが、Imaeda（2000, p. 91）が指摘する通り、現状の史料ではそこまで明言できるわけではなく、少なくとも両国に共通して存在した慣習とみるべきであろう。

さらに Stein（1988, p. 121）は、盟誓の際に天地山川の神へ告げるという例は、唐と新羅との間で 665 年に締結された盟誓にても確認できるとする。しかし、唐と新羅の間の盟誓について『冊府』巻 981 には「是に至り白馬を刑し、而して盟の先に神祇及川谷の神を

---

[10] 以上の話は『旧唐書』巻 196 吐蕃伝上（p. 5223）（佐藤 1973, pp. 138–139）、『新唐書』巻 216 吐蕃伝上（p. 6085–6086）（佐藤 1973, pp. 241–243）、『通鑑』巻 214 開元 25 年 2 月条（p. 6827）、同開元 26（738）年 3 月条（p. 6832）に載る。

[11] 本論 114–115 頁。

[12] また『旧唐書』巻 196 下吐蕃伝下（pp. 5247–48）（佐藤 1975, p. 166）にも載る。なおこの漢語盟文は雅文で記されているので、おそらく唐側で準備されたものなのであろう。『旧唐書』同箇所によると、チベット側の尚結賛は盟文を別途用意していたというから、チベット側にもチベット語盟文が存在していたとみられる。

[13] 今二國將相、受辭而會、齋戒將事、告天地山川之神。惟神照臨、無得愆墜。

祀り、而して復た血を歃る」とあるのみで、盟に先立ち神々を祀るとしかなく、チベットのように神々を盟の証人として呼ぶことと同一視することはできない[14]。

建中会盟では、両国立会の盟誓が終わった後に、チベット側の尚結賛は壇の西南の隅にしつらえた仏幄にて、香を焚いて誓いをなしたという。この点は本論でも詳述されているので附論では詳細を省略するが、ここで筆者が注意したいことは2点ある。1点目は、尚結賛が誓いの儀式をおこなった後で、再度仏前での儀式を別途おこなったということである[15]。そして2点目は、上述のとおり少なくとも「与吐蕃会清水盟文」に拠る限り、誓いについても、チベットの信仰に基づきおこなわれたということである。

この2点から考えるに、建中会盟における中核的な儀式は結局チベットの信仰、そしておそらく唐の信仰に基づき、おこなわれたのであろう。たしかに尚結賛により仏前での儀式は別途おこなわれたものの、それはあくまでも本来の盟誓が終了した後でおこなわれたものである。つまり、建中会盟の段階では、仏教の影響は盟誓そのものには及ばなかった、と考えたい。

なお、建中会盟において言及すべき史料がもう1点存在する。それは、貞元2（786）年の勅書「賜吐蕃宰相尚結賛書」であり、そこには次のような建中会盟への言及がある。

> 境界にて壇場を建てた。契約は至って明晰で、誓詞は至って厳重であり、皇天、后土、諸仏、百神に告げて、この盟に背くものがあれば、わざわいは其の国に及ぶ[16]。
>
> （『陸贄集』巻10「賜吐蕃宰相尚結賛書」、p. 309）

Demiéville（1952, p. 230）や Stein（1988a, p. 134）が指摘しているように、建中会盟の盟誓についてこの勅書では「皇天后土、諸佛百神に告げ」[17]と表現している。ここでいう「仏」が仏教の仏陀を意味するのであれば、建中会盟において誓いにも仏教の影響が及んでいたことになる。しかし、すでにみた「与吐蕃会清水盟文」にて「天地山川之神」とある以上、やはり盟誓本体に仏教の影響があったとは考えられない。そうすると、ここでいう諸仏とは、尚結賛が独自におこなった仏前の儀式での誓いのことを指すのではなかろうか。

---

[14] 高宗麟徳三年八月、（中略）、及令與新羅和好、至是刑白馬而盟先祀神祇及川谷神、而復歃血。（『宋本冊府元亀』巻981、2葉裏–3葉表 p. 3922）。cf.『冊府』巻981、4葉表–裏（p. 11525）。

[15] この点について本論114–115頁では、1回目におこなった盟約を無効とみなしたチベット側が、仏教に基づいた儀式をおこなったと考えている。実はこのとき、尚結賛は盟文を供犠獣とともに埋めなかった、と引用した『旧唐書』の直後に記載されている。もしこの行為に意味があるとすれば、尚結賛は盟約の実効性を損ねようとしたと考えられるのかもしれない。しかし、もしそうだとしてもそれは盟約の消極的な否定に過ぎないのであり、少なくとも盟誓の本体には仏教的な要素が入る余地はなかったのである。

[16] 乃於境上建立壇場、契約至明、誓詞至重、告于皇天后土、諸佛百神、有渝此盟、殃及其國。

[17] 「仏」について、Stein（1988a, p. 134, n. 25）は『陸宣公翰苑集』（版本は不明）を引用し、「物」が正しいとする。ただし、『文苑』巻469、8葉裏（p. 2395）は「仏」とし、董士恩刊本を底本に校訂された『陸贄集』でも「仏」とする。

以上のとおり、建中会盟は基本的にチベットの土着の信仰に基づき挙行されたのであった。ところが、そのおよそ 40 年後の長慶会盟（821–822 年）では、少し事情が変わる。821 年にまず唐の長安で儀式がおこなわれたのち、翌 822 年にはラサ付近にて再び儀式がおこなわれた。ツェンポの夏営地に設られた宮廷テントにて挙行された宴と盟誓には劉元鼎率いる唐の使節団とチベット側の僧鉢掣逋（ペルチェンポ）と大臣 10 余人が参加した。盟誓の際に供犠獣の血を啜る儀式が行われたが、鉢掣逋のみは血を啜らず、盟が終わった後で「浮屠を以て重ねて誓いを為し、鬱金水を引きて以て飲」んで、供犠獣の儀式の代わりとした（本論 115 頁）。

さて、長慶会盟が建中会盟と大きく異なるのは、供犠獣を屠り、血を啜るという最も重要な儀式に、盟の参加者の 1 人が参加しなかったというところにある。むろん僧侶であるから殺生には関わらないという理由は明白なのであるが、それが儀式本体の形を変え得るという説得力を持ったところに、当時のチベット宮廷における仏教の影響力の大きさを読み取ることができよう。

そして長慶会盟では、盟誓におけるもう 1 つの要素である、神へ告げる行為についても変更が加えられていた。長慶会盟の際の盟文の要約が唐蕃会盟碑北面にチベット語・漢語の両語で刻まれているので、関連する箇所をみてみよう。

> チベット文：三宝・聖人たち・日月と星に対しても（彼らを）証人とみなして報告し、約束事（tha tshig）の詳細も述べられ、供犠獣を殺して誓い（mna'）も投げられ（？）、盟誓の辞を準備した[18]。
> 漢文：三宝と諸々の賢聖、日・月・星は、証人となるように請い願う。このような盟約を、それぞれが誓い、犠牲を屠って盟をなし、この大いなる約束をする[19]。
> （唐蕃会盟碑西面 チベット語：ll. 61–66、漢語：l. 5）[20]

注目すべきは、建中会盟の証人として呼ばれる者たちが天地山川の自然神のみであったが、今回はそこに三宝と諸賢聖という仏教の要素が入り込んでいるところである。つまり、長慶会盟の時点では、供犠獣の儀式のみならず、盟誓自体にも仏教の影響力が及んでいたのである。

以上の考察をまとめよう。元来は土着の信仰に基づいておこなわれた会盟にも仏教は浸透していくのであるが、特に建中会盟（783 年）と長慶会盟（821–822 年）を比較した場合、前者は仏教的な儀式が別途おこなわれたものの、盟誓自体には仏教が入り込むことはなかった。それに対し、後者は供犠獣の血を啜る儀式が鬱金水を啜る儀式に置換されるとと

---

[18] dkon mch[o]g gsum dang / / 'phags pa'I rnams [dang] gnyI zla dang gza skar la yang dpang du gsol te / / tha tshIg gI rnams pas kyang bshad / / srog chags bsad de mna' yang bor nas / / gtsIgs bcas so / /

[19] 三寶及諸賢聖、日月星辰、請爲知證。如此盟約、各自契陳、刑牲爲盟、設此大約。

[20] Li and Coblin 1987, p. 40, 77, 80.

もに、誓いの証人として天地山川の神々のみならず、仏教に関連する者が呼び出された。後者の場合には盟誓の過程自体に仏教が入り込んでいることが確認できるのである。

建中会盟が実現した 783 年は、ティソン・デツェンが仏教に改宗した頃であり、長慶会盟の 821–822 年頃は、ティツク・デツェンの登位（815 年）から 7 ～ 8 年経った頃である。むろんティツク・デツェンの親仏教的姿勢が長慶会盟における仏教の介入を許した要因と考えられるが、それと同時に、チベットの宮廷において親仏教勢力が十分に伸長していたことを示している。

略号（主なもののみ）

『旧唐書』= 劉昫等『旧唐書』．北京：中華書局，1975 年.

『冊府』= 王欽若等『冊府元亀』．北京：中華書局，1960 年.

『新唐書』= 欧陽修等『新唐書』．北京：中華書局，1975 年.

『蔵漢』= 張怡孙・主編（1985）『蔵漢大辞典』．北京：民族出版社.

『宋冊府』= 王欽若等『宋本冊府元亀』．北京：中華書局，1989 年.

大正 = 大正新脩大藏経（全 85 巻）．東京：大正一切経刊行会，1924–1934 年.

『通鑑』= 司馬光『資治通鑑』．北京：中華書局，1956 年.

『唐詔令集』= 宋敏求『唐大詔令集』．北京：中華書局，2008 年.

『文苑』= 李昉等『文苑英華』．北京：中華書局，1966 年.

北京 = The Tibetan Tripitaka = 影印北京版西藏大藏經：Peking edition reprinted under the supervision of the Otani University, Kyoto（全 168 巻）．東京：鈴木学術財団，1955–1962 年.

『陸贄集』= 陸贄（撰）王素（點校）『陸贄集』（中國歷史文集叢刊）上下冊．北京：中華書局，2006 年.

AFL = Thomas, F. W. *Ancient Folk-literature from North-eastern Tibet.* Berlin: Akademie Verlag, 1957.

AOH = Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae.

BEFEO = Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient.

Choix = Macdonald, A. and Imaeda, Y. (eds.), *Choix de Documents de Touen-houang.* Paris: Bibliothèque nationale de France. 1978 (Tome I)–1979 (Tome II).

DTH = Bacot, J., Thomas, F. W., Toussaint, Ch., *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Guethner. 1940–1946.

ET = Macdonald, A. (ed.), *Etudes tibétaines dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*. Paris: J. Maisonneuve, 1971.

HAT = Pelliot, P., *Histoire ancienne du Tibet*. Paris. 1961.

ITJ = IOL Tib J（大英図書館所蔵スタインコレクション中のチベット語文書）

IsMEO = Istitutto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

JA = Journal Asiatique.

JAOS = Journal of the American Oriental Society.

Jäschke = Jäschke, Heinrich August, *A Tibetan-English Dictionary*. London: The Charge of the Secretary of State for India in Council, 1881.

JIABS = Journal of the International Association of Buddhist Studies.

JV = James Valby's Tibetan-English Dictionary, in The Tibetan & Himalayan Library, Tibetan to English Translation Tool (http://www.thlib.org/reference/dictionaries/tibetan-dictionary/translate.php)

Mvp = *Mahāvyutpatti*, 榊亮三郎『梵蔵漢和四譯対校翻訳名義大集』（2 巻）. 京都：真言宗京都大学, 1916 年（復刻版, 東京：鈴木学術財団, 1962 年）.

OTA = Dotson, 2009.

OTC = Dotson, 2013.

OTDO = Old Tibetan Documents Online (https://otdo.aa-ken.jp/).

PT = Pelliot tibétain（フランス国立図書館所蔵ペリオコレクション中のチベット語文書）

RY = Rangjung Yeshe Tibetan-English Dictionary (http://www.rywiki.tsadra.org).

RET = *Revue d'Etudes Tibétaines.*

TPS = Tucci, G., *Tibetan Painted Scrolls*. Rome: La Libreria dello Stato, 1949.

TTK = Tucci, G., *The Tombs of the Tibetan Kings.* Rome: IsMEO, 1950.

84000 = Translating the Words of the Buddha (https://84000.co/)

参考文献（主なもののみ）

Aris, Michael

1986 *Sources for the history of Bhutan*. (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 14) Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien.

Bacot, Jacques

1933 ⇒ Evans-Wentz, W. Y.

Bacot, J., F. W. Thomas, Ch. Toussaint

1940–1946 *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet* (= *DTH*). Paris: Librairie Orientaliste Paul Guethner.

Back, D. M.

1979 *Eine buddhistische Jenseitsreise: das sogenannte 'Totenbuch der Tibeter' aus philologischer Sicht*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Beckwith, Christopher I.

1987 *The Tibetan Empire in Central Asia*. Princeton: Princeton University Press.

Bellezza, John Vincent

1997 *Divine Dyads: Ancient Civilization in Tibet*. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.

2002a *Antiquities of Northern Tibet*. Delhi: Adroit.

2002b *Antiquities of Upper Tibet*. Delhi: Adroit.

2005 *Calling Down the Gods: Spirit-Mediums, Sacred Mountains and Related Bon Textual Trtaditions in Upper Tibet*. Leiden: E. J. Brill.

2008 *Zhang Zhung. Foundation of Civilization in Tibet. A Historical and Ethnoarchaeological Study of the Monuments, Rock Art, Texts, and Oral Tradition of the Ancient Tibetan Upland.* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

2010 Gshen-rab Myi-bo: His life and times according to Tibet's earliest literary sources. *RET*, 19, 31–118.

2013 *Death and Beyond in Ancient Tibet. Archaic Concepts and Practices in a Thousand-Year-Old Illuminated Funerary Manuscript and Old Tibetan Funerary Documents of Gathang Bumpa and Dunhuang.* Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

2014 *The Dawn of Tibet: The Ancient Civilisation on the Roof of the World.* Lanham (Maryland): Rowman and Littlefield.

Blezer, Henk

1997 *Kar gling Źi khro. A Tantric Buddhist Concept*. Leiden: Research School CNWS.

2008 sTon pa Gshen rab: Six Marriages and Many More Funerals. *RET*, 15, 421–479.

2010 Two Conquests of Zhang zhung and the Many Lig-Kings of Bon: A Structural Analysis of the *Bon ma nub pa'i gtan tshigs*. In: Chayet, A., Scherrer-Schaub, Ch., Robin, F., and Achar, J. L. (eds.), *Edition, éditions*, *l'écrit au Tibet, évolution et devenir*. München: Indus Verlag, 19–63.

2011 It All Happened at Myi Yul Skyi Mthing: A Crutial Nexus of Narratives Pointing at the Heartland of Bon? In: McKay, Alex and Balikei-Denjongpa, Anna (eds.), *Buddhist Himalaya: Studies in Religion, History and Culture (: proceedings of the Golden Jubilee Conference of the Namgyal Institute of Tibetology, Gangtok, 2008)*. 3 vols. Gangtok: Namgyal Institute of Tibetology, vol. 1, 157–178.

Blondeau, A.M.

1976 Les religions du Tibet. In: *Histoire des religions*, III. Paris: Encyclopédie de la Pléiade, 239–247.

1981 Identification de la tradition appelée *bsGrags-pa Bon-lugs*. In: Skorupski, Tadeusz (ed.), *Indo-Tibetan Studies: Papers in Honour and Appreciation of Professor David L. Snellgrove's Contibution to Indo-Tibetan Studies*. (Buddhica Britannica, Series continua 2) Tring: The Institute of Buddhist Studies, 37–54.

Brauen, M.

1978 A Bon-po Death Ceremony. In: Brauen, M. and Kvaerne, P. (eds.), *Tibetan Studies*, 53–63.

Brauen, M. and Kvaerne, P. (eds.)

1978a *Tibetan Studies, presented at the International Seminar of Young Tibetologists*. Zurich: Völkerkundemuseum der Universität Zürich.

1978b A Tibetan Death Ceremony. *Temenos*, 14, 9–24.

Chang, Garma C. C. (tr.)

1962 *The Hundred Thousand Songs of Milarepa*. 2 vols. Hyde Park, New York: University Books.

Coblin, W. South

1990 A reexamination of the second edict of Khri-srong-lde-btsan. In: Epstein, L. and Sherburne, R. F. (eds.), *Reflections of Tibetan Culture: Essays in Memory of Turnell V. Wylie*. Lewiston, NY: Edwin Mellen, 165–185.

1991 A Study of the Old Tibetan *Shangshu* paraphrase, Parts I, II. *JAOS*, 111(2), 303–332; 111(3), 523–539.

Chu Junjie 褚俊傑

1989 「吐蕃本教喪葬儀軌研究」（上・下），『中国蔵学』1989(3), 15–34; 1989(4), 49, 118–134.（再録『敦煌古蔵文文献論文集』．上海：上海古籍出版社，下冊，750–791）.

1990 「論苯教喪葬儀軌的仏教化」，『西蔵研究』1900(1), 45–69.（再録『敦煌古蔵文文献論文集』．上海：上海古籍出版社，下冊，723–749）.

1991 A Study of Bon-po Funeral Ritual in Ancient Tibet: Deciphering the Pelliot Tibetan Mss. 1042. In: Hu, Tan（胡担）(ed.), *Theses in Tibetology in China*. Vol. 1, 91–151.

Cornu, P. (tr.)

2009 *Le Livre des morts tibétain: La Grande Libération par l'écoute dans les états intermédiaires*. Paris: Buchet/Chastel.

Cuevas, B. J.

2003 *The Hidden History of The Tibetan Book of the Dead*. New York: Oxford University Press.

Dalton, Jacob P.

2011 *The Taming of the Demons: Violence and Liberation in Tibetan Buddhism*. New Haven & London: Yale University Press.

Dalton, Jacob P. and Schaik, Sam van

2006 *Tibetan Tantric Manuscripts from Dunhuang: A Descriptive Catalogue of the Stein Collection at the British Library*. Brill's Tibetan Studies Library 12. Leiden: Brill.

Demiéville, P., Lévi, S., and Takakusu, J. (eds.)

1929– Hōbōgirin『法寶義林』. Tokyo: Maison Franco-Japonaise.

1952 *Le concile de Lhasa: Une controverse sur le quiétisme entre Bouddhistes de l'Inde et de la Chine au VIIIe siècle de l'ère chrétienne.* Paris: Imprimerie nationale de France.

Denis, Lewis (ed.)

2021 *Bringing Buddhism to Tibet. History and Narrative in the* Dba' bzhed *Manuscript*. (https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/9783110715309/html) (Beyond Boundaries, vol. 10). Berlin/Boston: de Gruyter.

Don grub lha rgyal and gzhon nu nor bzang (eds.)

2010 *Bon gyi lo rgyus yig cha phyogs sgrig*. Lha sa: Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang.

Dorje, G. (tr.)

2006 *The Tibetan Book of the Dead.* Coleman, Graham with Thupten Jinpa (eds.), with an 'Introductory Commentary' by His Holiness The Dalai Lama. New York: Viking.

Dotson, Brandon

2007 "Emperor" Mu rug btsan po and the *'Phang thang ma Catalogue*. *Journal of the International Association of Tibetan Studies*, no. 3, 1–25.

2008 Complementarity and opposition in early Tibetan ritual. *JAOS*, 128.1, 41–67.

2009a *The Old Tibetan Annals. An Annotated Translation of Tibet's First History* (= *OTA*). With an Annotated Cartographical Documentation by Guntram Hazod. Österreichische Akademie der Wissenschaften. Philosophisch-Historische Klasse Denkschriften, 381. Band. Verōffentlichungen zur Sozialanthropologie, Nr. 12. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

2009b The "Nephew-Uncle" Relationship in the International Diplomacy of the Tibetan Empire (7th–9th centuries). In: Dotson, Brandon, *et al.* (eds.), *Contemporary Visions in Tibetan Studies*. Chicago: Serindia Publications, 61–85.

2011 Sources for the *Old Tibetan Chronicle*: A fragment from the non-extant pothi. In: Imaeda, Y., Kapstein, M. T., and Takeuchi, T. (eds.), *New Studies of the Old Tibetan Documents:*

Philology, History and Religion. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 223–238.

2013a *The Victory Banquet. The* Old Tibetan Chronicle *and the Rise of Tibetan Historical Narrative* (= *OTC*). (Submitted as a Habilitationsschrift to the Institut für Indologie und Tibetologie, Ludwig-Maxmillians-Universität München)（未刊）.

2013b The Princess and the Yak: The Hunt as Narrative Trope and Historical Reality in Early Tibet. In: Dotson, B., Iwao, K., and Takeuchi, T. (eds.), *Scribes, Texts, and Rituals in early Tibet and Dunhuang. PIATS XI, Vancouver, 2010*. Wiesbaden: Reichent Verlag, 61–85.

2013c The Unhappy Bride and Her Lament. *Journal of the International Association for Bon Research*, 1, 199–225.

2016 The Dead and Their Stories: Preliminary Remarks on the Place of Narrative in Tibetan Religion. *Zentralasiatische Studien*, 45, 77–112.

2018 The Horse and the Grass-Grazing Man: Domestication, Food and Alterrity in Early Tibetan Cosmologies of the Land of the Dead. *History of Religions*, 57.3, 270–287.

2022 How to read like a dead horse listens: audience and affect in the "Tale of the Separation of Horse and Kiang". *Journal of Tibetan Literature*, vo. 1, Issue 1, 47–73.

Evans-Wentz, W. Y.

1960 [1927] *The Tibetan Book of the Dead, or the After-Death Experiences of the Bardo Plane, according to Lama Kazi Dawa-Samdup's English Rendering*. London/New York: Oxford Galaxy Books.

1928 *Tibet's great yogi, Milarepa. A biography from the Tibetan: being the Jetstih-kahbum, or biographical history of Jetstih-Milarepa according to the late Läma Kazi Dawa-Samdup's English rendering*. London: Oxford University Press.

1933 *Bardo Thödol. Le livre des morts tibétain ou les expériences d'aprés la mort dans le plan du Bardo suivant la version anglaise du Lama Kazi Dawa Samdup*. (Tr. by M. La Fuente, with a preface by J. Bacot). Paris: A. Maisonneuve.

1935 *Das Tibetische Totenbuch. Aus der englischen Fassung des Lama Kazi Dawa Samdup*. (Tr. by L. Göpert-March). Zürich/Leipzig: Rascher.

Filliozat, J.

1971 Le complexe d'oedipe dans un tantra bouddhique. In *ET*, 142–148.

Fujieda, Akira 藤枝晃

1957 「スタイン蒐集中の『仏頂尊勝陀羅尼』」，神田博士還暦記念会（編）『神田博士還暦記念書誌学論集』．東京：平凡社，403–421.

Gyu, Reito 牛黎涛（Niu Li tao）

2003 「チベット族の葬送習俗について ―吐蕃時代を中心に」,『佛教文化学会紀要』第 12 号，53–70.

2007 「チベットにおける葬送風習の変遷」,『大正大学総合仏教研究所年報』第 29 号，99–109（逆頁）.

Haarh, Erik

1969 *The Yar-luṅ Dynasty. A study with particular regard to the contribution by myths and legends to the history of Ancient Tibet and the origin and nature of its kings*. København: G.E.C. Gad's Forlag.

Halkias, Georgios T.

2004 Tibetan Buddhism Registered: A Catalogue from the Imperial Court of 'Phang Thang. *The Eastern Buddhist*, vol. XXXVI, nos. 1 and 2, 46–105.

Hatano, Hakuyu 羽田野伯猷

1987 『チベット・インド学集成』（第二巻チベット編 II）．京都：法蔵館.

Hazod, Guntram

2003 The Kyichu Region in the Period of the Tibetan Empire: A Historico-Geographical Note. In: McKay, Alex (ed.), *Tibet and Her Neighbours. A History*. London: Edition Hansjörg Mayer, 29–40.

2007 The Grave on the "Cool Plain": on the Identification of "Tibet's First Tomb" in Nga-ra-thang of 'Phyong-po. In: Kellner, B. *et al.* (eds.), *Pramāṇakīrtiḥ : papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 70, 1. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 259–283.

2009 An Annotated Cartographical Documentation. In: Dotson, *OTA*, 161–232.

2018 Territory, Kinship and the Grave in Early Tibet. On the identification of the elite tombs in the burial mould landscape of Central Tibet. In: Hazod, Guntram and Shen, Weirong (eds.), *Tibetan Genealogies. Stdies in Memoriam of Guge Tsering Gyalpo (1961–2015)*. Beijing: China Tibetology Publishing House, 5–106.

2019 The Graves of the Chief Ministers of the Tibetan Empire: Mapping Chapter Two of the *Old Tibetan Chronicle* in the Light of the Evidence of the Tibetan Tumulus Tradition. *RET*, no. 47, 5–159.

Heller, Amy

2006 Archeology of Funeral Rituals as Revealed by Tibetan Tombs of the 8th to 9th Century. In: Compareti, M., Raffetta, P., and Scarcia, G. (eds.), *Ēran ud Anērān. Studies Presented to Boris Il'ic Marsak on the Occasion of His 70th Birthday*. Venice: Cafoscarina, 261–274.

Hikata, Ryusho 干潟龍祥

1939 「仏頂尊勝陀羅尼経諸伝の研究」,『密教研究』68 巻, 34–72.

Hiraoka, Koichi (tr.) 平岡宏一（訳）

2001 『ゲルク派版 チベット死者の書』. 東京：学研プラス.（改訂新版, 2023）

Hoshi, Izumi 星泉, Ebihara, Shiho 海老原志穂, Nantaijia 南太加, Bessho, Yusuke 別所裕介（編）

2020 『チベット牧畜辞典』. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 .

Imaeda, Yoshiro 今枝由郎

1979 Note préliminaire sur la formule *Oṁ maṇi padme hûṁ* parmi les manuscrits tibétains de Touen-Houang. In: Soymié, Michel (ed.) *Contributions aux études sur Touen-Houang*. Geneve/Paris: Librarie Droz, 71–76.

1980 L'identification de l'original chinois du Pelliot tibétain 1291—traduction tibétaine du *Zhanguoce*. *AOH*, XXXIV, 1(3), 53–68.

1981 *Histoire du cycle de la naissance et de la mort: Etude d'un texte tibétain de Touen-Houang*. Genève/Paris: Librarie Droz.

1985 「中国・インド古典 ―書経・戦国策・ラーマーヤナー―」,『講座敦煌』VII 巻. 東京：大東出版社, 557–573.

1997 「お宮とお寺 ―と教会― のある風景」,『現代日本文化論』7 巻. 河合隼雄・養老孟司（編）『体験としての異文化』東京：岩波書店, 99–123.

2000 Rituel des traités de paix sino-tibétains du VIIIe au IXe siècle. In: J.-P. Drège (ed.), *La Sérinde, terre d'échanges: Art, religion, commerce du Ier au Xe siècle*. Paris: Documentation française, 87–98.

2006 『敦煌出土チベット文「生死法物語」の研究』. 東京：大東出版社.

2007 The History of the *Cycle of Birth and Death*: A Tibetan Narrative from Dunhuang. In: Kapstein, M., and Dotson, B., (eds.), *Contributions to the Cultural History of Early Tibet*. Leiden/Boston: Brill, 105–181.

2008 The provenance and character of the Dunhuang manuscripts. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 66, 81–102.

2010 The *Bar do thos grol*: Tibetan conversion to Buddhism or Tibetanisation of Buddhism. In: Kapstein, M. T. and Schaik, S. V. (eds.), *Esoteric Buddhism at Dunhuang*. Leiden: Brill, 143–158.

2019 ⇒ Nishida, Ai

2020 ⇒ Nishida, Ai

2021 「業，廻向，菩薩，無我，輪廻 ―仏教主要教義間の自家撞着」，『チベット仏教求法僧能海寛と宇内一統宗教 ―明治の国粋とグローバリズム―』．東京：同成社，339–347.

2022a 『古代チベットの王権論とソンツェン・ガンポの宗教 アリアンヌ・マクドナルド』（要訳）（協力：西田愛）．京都：京都大学人文科学研究所.

2022b 『スッタニパータ　ブッダの言葉』（訳）東京：光文社古典新訳文庫.

Imaeda, Yoshiro, Kapstein, Matthew T., and Takeuchi, Tsuguhito (eds.)

2007 *Tibetan Documents from Dunhuang*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Inui, Hitoshi 乾仁志

1989 「仏説大乗観想曼拏羅浄諸悪趣経典について」,『印度學仏教學研究』第37巻第2號, 191–196.

Ishikawa, Iwao 石川巌

2000 「古代チベットにおける霊神祭儀の物語 ―敦煌文書 PT 126 第二部の分析―」，『中央大学アジア史研究』24, 169–186.

2001 「古代チベットにおける霊神祭儀の物語（翻訳編）」，『東方』16, 145–158.

2007 「敦煌出土チベット語豫言書『衰退期』の宗教史的意義」，『東方学』第 113 輯，102–187（逆頁）.

2008 「古代チベットにおける古代ボン教とその変容」，島根県立大学北東アジア地域研究センター（編）『北東アジア研究』別冊第 1 号，173–185.

2009 「敦煌出土チベット語文献 P.T.239 表の主題と著作者に関する覚書」，『東方』第 25 号，118–130.

2010 「敦煌チベット語文献 P.T.239 表訳注 ―古代チベットにおける前仏教的葬儀とその仏教化に関する一証言―」，沈衛榮（主編）『西域歴史言語研究集刊』第三輯．北京：科学出版社，55–74.

2012 A Note on the Theme and the Author of PT 239 Recto. In: Hill, N. (ed.) *Mediveval Tibeto-Burman Languages* IV. Leiden: Brill, 399–410.

2017 「ブランドン・ダットソンの古代チベット研究」，『東方』第 32 号，147–162.

2018 「マミテツンポとマミデツンポ ―古代チベット土着宗教儀礼説話に見る分身の神話―」，篠田知和基（編）『分身の神話・その他』．千葉：楽浪書院，49–58.
2019 「古代チベット葬制史考」，『中央大学アジア史研究』43, 68–44（逆頁）.
2021 Smra myi ste btsun po and Rma myi de btsun po: A Trial Translation of an Indigenous Tibetan Funeral Narrative, The First Part of PT 1136. *RET*, no. 60, 144–160.
2022 「ギムポ・ニャチクの花嫁 ―古代チベット土着宗教儀礼説話への招待―」，木村武史（編）『性愛と暴力の神話学』．東京：晶文社，100–127.

Ishikawa, Mie 石川美恵
1993 『Sgra sbyor bam po gnyis pa 二巻本訳語釈 ―和訳と注解―』Studia Tibetica No. 28. Materials for Tibetan-Mongolian dictionaries, vol. 3. 東京：東洋文庫.

Iwao, Kazushi 岩尾一史
2013 Reconsidering the Sino-Tibetan Treaty Inscription. *Journal of Research Institute* (Kobe University of Foreign Studies), 49, 19–28.

Iwao, Kazushi 岩尾一史 and Ikeda, Takumi 池田巧 (eds.)
2021 『チベットの歴史と社会』（上下）．京都：臨川書店.

Jong, J. W. de
1984 Le *Gaṇḍavyūha* et le loi de la naissance et de la mort. In: Chr. Lindtne (ed.), *Indiske Studier 5: Miscellasnia buddhica*, 7–24.

Kajiyama, Yuichi 梶山雄一（他訳）
2021 『梵文和訳 華厳経入法界品』（上中下）．東京：岩波書店.

Kane, P. V.
1930–62 *History of Dharmaśāstra*. 5 vols. Poona.

Kapstein, Matthew T.
1992 Remarks on the *Maṇi-bka'-'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet. In: Davidson, R. M. and Goodman, S. D. (eds.), *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*. Albany: State University of New York Press, 79–93.
2000 *The Tibetan Assimilation of Buddhism*. Oxford/New York: Oxford University Press.
2003 The Indian Literary Identity in Tibet. In: Pollock, Sheldon (ed.), *Literary Cultures in History. Reconstructions from South Asia*. Berkeley/Los Angeles/London: University of

California Press, 747–802.
2008 The Way of the Dead. In: D. Damrosch and D. L. Pike (eds.), *The Longman Anthology of World Literature*. (vol. B). New York: Pearson Longman, 20–22.
2010 Between Na rak and a Hard Place: Evil Rebirth and the Violation of Vows in Early Rnying ma pa Sources and their Dunhuang Antecedents. In: Kapstein, M. T. and Schaik, S. V. (eds.), *Esoteric Buddhism at Dunhuang*. Leiden: Brill, 159–199.

Karmay, Samten G.
1983 [1998] Un témoignage sur le bon face au bouddhisme à l'époque des rois tibétains. In: Steinkellner, E. and Tauscher, H. (eds.), *Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy* (*Proceedings of the Csoma de Kőrös Symposium held at Velm-Vienna, Austria, 13–19 September 1981*, vol. 2). 89–106. [Eng. version: Early Evidence for the Existence of Bon as a Religion in the Royal Period. In: Karmay 1998, 157–168] .
1998 *The Arrow and the Spindle: Studies in History, Myths, Rituals and Beliefs in Tibet*. Kathmandu: Mandala Book Point.
2009 A New Discovery of Ancient Bon Manuscripts from a Buddhist "stūpa" in Southern Tibet. *East and West*, 59, 1/4, 55–84.

Karmay, Samten G. and Nagano, Yasuhiko (eds.)
2001 *A Catalogue of the New Collection of Bonpo Katen Texts*. (2 vols.) Senri Ethnological Reports 24–25, Bon Studies 4–5. Osaka: National Museum of Ethnology.

Kawagoe, Eishin 川越英真
2005 「『パンタン目録』の研究」,『日本西蔵學會々報』51, 115–131.

Kawakami, Mayuko 河上麻由子
2011 『古代アジア世界の対外交渉と仏教』. 東京：山川出版社.

Kawasaki, Shinjo 川崎信定
1989 『原典訳チベットの死者の書』. 東京：筑摩書房.

Kuijp, Leonald W. J. van der
1991 A Recent Contribution on the History of the Tibetan Empire (review article). *JAOS*, 111(1), 94–107.
1992 Notes Apropos of the Transmission of the *Sarvadurgatipariśodhana-tantra* in Tibet. *Studien zur Indologie und Iranistik*, 26, 109–125.

Kvaerne, Per

1985 *Tibet Bon Religion: A Death Ritual of the Tibetan Bonpos.* (Iconography of Religions, Section XII: East and Central Asia, fascicle thirteen) Leiden: E. J. Brill.

Kvaerne, Per and Martin, Dan

2023 *Drenpa's Proclamation. The Rise and Decline of the Bön Religion in Tibet*. Vajra Academic Vol. III. Kathmandu: Vajra Books.

Lalou, Marcelle

1936 Notes à propos d'une amulette de Touen-houang: les litanies de Tārā et la Sitātapatrādhāraṇī. *Melanges chinois et bouddhiques*, IV, 135–149.

1938 A Tun-huang Prelude to the Karaṇḍavyūha. *Indian Historical Quarterly*, XIV, 198–200.

1939-61 *Inventaire des manuscrits tibétaines de Touen-houang conservés à la Bibliothèque Nationale (Fonds Pelliot tibétain)*. I, II, III. Paris: Bibliothèque Nationale.

1949 Les chemin du mort dans les croyances de Haute-Asie. *Revue de l'histoire des religions*, tome 135, no. 1, 42–48.

1952 Rituel bon po des funérailles royales. *JA*, CCXL, 339–361.

1953a Tibétain ancien bod/bon. *JA*, CCXLI, 275–276.

1953b Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan. Contribution à la bibliographie du Kanǰur et du Tnaǰur. *JA*, CCXLI, 313–353.

1958 Fiefs, poisons et guérisseurs. *JA*, CCXLVI, 157–201.

1965 Catalogues des principautés du Tibet ancien. *JA*, CCLIII, 189–215.

Lamothe, M. J. (tr.)

1986–1993 *Milarépa: Les Cent Mille Chants*. 3 vols. Paris: Fayard.

Lauf, D. I.

1994 [1977] *Geheimlehren tibetischer Totenbücher: Jenseitswelten und Wandlung nach dem Tode: ein west-östlicher Vergleich mit psychologischem Kommentar*. Braunschweig: Aurum Verlag. [English translation: *Secret Doctrines of the Tibetan Books of the Dead.* (Tr. by G. Parkes). Boulder/London: Shambhala, 1977].

La Vallée Poussin, L. de

1971 *L'Abhidharmakośa de Vasubandhu*. Brussels: Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises, 6 vols.

Li, Fang-Kuei and Coblin, W. S.
1987 *A Study of Early Tibetan Inscriptions* (Special publications 91) Taipei: Academia Sinica.

Lopez, D. S., Jr.
1998 *Prisoners of Shangri-la: Tibetan Buddhism and the West*. Chicago/London: The University of Chicago Press.

Macdonald, Ariane
1971 Une lecture des Pelliot tibétain 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290. Essai sur la formation et l'emploi des mythes politiques dans la religion royale de Sroṅ-bcan sgam-po. In: *ET*, 190–391.
1991 麦克唐納『敦煌吐蕃歴史文書孝釈』（耿昇・王堯訳）. 西寧：青海人民出版社.
⇒ 今枝 2022a

Macdonald, Ariane and Imaeda, Yoshiro (eds.)
1978-79 *Choix de Documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale complétés par quelques manuscrits de l'India Office et du Britsish Museum* (= *Choix*). Paris: Bibliothèque Nationale. 2 tomes.

Martin, Dan (tr.)
2022 *A History of Buddhism in India and Tibet. An Expanded Version of the Dharma's Origins Made by the Learned Scholar Deyu*. (The Library of Tibetan Classics, vo. 32). Somerville (USA): Wisdom Publications.

Maritin, Dan in collaboration with Bentor, Yael
2020 *Tibetan Histories*. *A Bibliography* (subject to constant revision). (https://www.bdrc.io/wp-content/uploads/2020/12/martin-Tibetan-Histories-A-Bibliography-revised-ed.-20201028.pdf).

Martin, Dan, Kvaerne, Per and Nagano, Yasuhiko (eds.)
2003 *A Catalogue of the Bon Kanjur*. Senri Ethnological Reports 40, Bon Studies 8. Osaka: National Museum of Ethnology.

Mathieu, Christine and Ho, Cindy M. (eds.)
2011 *Quentin Roosevelt's China: Ancestral Realms of the Naxi*. New York: Amoldsche.

Mimaki, Katsumi 御牧克己
2014　『西蔵仏教宗義研究 第十巻 ―トゥカン「一切宗義」「ボン教の章」―』．東京：東洋文庫.

Mori, Shoji 森章司
1987　『仏教比喩例語辞典』．東京：東京堂出版.

Nakashima, Konomi 中島小乃美
2012　『『一切悪趣清浄儀軌』の研究 ―Buddhaguhya の註釈を中心に―』（『金剛頂経』系密教原典研究叢刊；2）．浦安（千葉）：起心書房.

Nagasawa, Jitsudou 長澤実導
1963　「ブッダグヒヤのチベットへの書翰 ―チソンデツェン王入信当時の一資料」，『岩井博士古稀記念典籍論集』．東京：岩井博士古稀記念事業会，410–417.

Nebesky-Wojkowitz, R. D.
1956　*Oracles and Demons of Tibet. The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*. The Hague: Mouton.

Nishida, Ai 西田愛，Imaeda, Yoshiro 今枝由郎，Kumagai, Seiji 熊谷誠慈
2019　「古代チベット人の死後の世界観と葬送儀礼の仏教化 ―敦煌出土『生死法物語』『置換』『神国道説示』三部作の研究―」，『神戸外大論叢』第 70 巻第 1 号，87–130.
2020　「敦煌出土チベット文『輪廻形態説示』―古代チベットにおける初期仏教伝道文学―」，『日仏東洋学会通信』第 43 号，1–18.

Oe, Masanori おおえまさのり
1973　『チベットの死者の書』．東京：講談社.

Orosz, Gergely
2003　Folk religion in the ritual manuscripts of anicent Tibet. In: Kelényi, B. (ed.), *Demons and Protectors: Folk Religon in Tibetan and Mongolian Buddhism.* Budapest: Ferenc Hopp Museum of Eastern Asiatic Art, 19–26.

Orofino, Giacomella
2016　The Myth of Rudra's Subjugation accrording to the *Bsgrags pa gling grags*. Some

Observations on the Beginning of a Historical Tradition. *Rivista degli Studi Orientali*, nuova serie, LXXXIX, 147–153.

Pang Yihong 潘以红

1992 The Sino-Tibetan Treaties in the Tang Dynasty. *T'oung Pao*, LXXVIII, 116–161.

Pasang Wangdu (Pa tshab Pa sangs dbang 'dus, 巴桑旺堆) and Langru Norbu Tsering (Glang ru Nor bu Tshe ring, 罗布次仁)

2007 *Gtam shul dga' thang 'bum pa che nas gsar rnyed byung ba'i bon gyi gna' dpe bdams bsgrigs*. Lhasa: Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang.

Pasang Wangdu and Diemberger, Hildegard

2000 *Dba' Bzhed: The Royal Narrative Concerning the Bringing of the Buddha's Doctrine to Tibet*. (Philosophisch-Historische Klasse, Denkschriften, 291. Band. Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens Nr. 37). Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Pommaret, Françoise

1989 *Les revenants de l'au-delà dans le monde tibétain*. Paris: Éditions du CNRS.

Prats, R.

1996 *El libro de los muertos tibetano*. Madrid: Editiones Siruela.

Ramble, Charles

2013 Foreword. In: Bellezza 2013, 1–2.

Robert, Jean-Noël ロベール，ジャン＝ノエル

2023 『仏教の歴史 いかにして世界宗教となったか』（今枝由郎訳）．東京：講談社選書メティエ.

Rock, J. F.

1952 *The Na-khi Nāga cult and related ceremonies*. Serie Orientale Roma, 4 (1, 2). Rome: IsMEO.

1955 The Zhi-ma Funeral Ceremony of the Na-khi of the Southwest China: Described and Translated from Na-khi Manuscripts. *Anthropos*, 9, i–xvi, 1–230.

Sakai, Shinten 酒井真典

1969　「八幅輪曼荼羅について」，『密教文化』87 巻，5–18.

Sakurai, Munenobu 桜井宗信

2006　「Mañjuśrīmitra の説く死者儀礼」，『密教学研究』第 38 号，1–14.

2007　「文殊具密流の伝える死者儀礼」，『加藤精一博士古稀記念論文集 真言密教と日本文化』（下）．東京：ノンブル社，159–181.

2011　「Bu ston の示す死者儀礼（1）―*dPal mchog rDo rje sems dpa'i sgo nas tha ma'i dus la bab pa rnams rjes su 'dzin pa'i cho ga* を中心に―」，『日本西藏学会々報』第 57 号，1–16.

Sales, A. de

1994　Magar songs, Naxi pictoriograms and Dunhuang texts. In: Kvaerne, Per. (ed.) *Tibetan Studies*. Oslo: The Institute for Comparatives Research in Human Culture, 682–695.

Sato, Hisashi 佐藤長

1973　『吐蕃伝（旧唐書・新唐書）』，『騎馬民族史 3 正史北狄伝』東洋文庫 228．東京：平凡社.

Schaik, Sam van

2006　The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In: Davidoson, D. and Wedemeyer, C. (eds.), *Tibetan Buddhist Literature and Praxis* (*Proceedings of the Tenth Seminar of the IATS*, 2003, vol. 4). Leiden: : Brill, 55–72.

2007　Oral Teachings and Written Texts: Transmission and Transformation in Dunhuang. In: Kapstein, M. and Dotson, B. (eds.), *Contributions to the Cultural History of Early Tibet*. Leiden: Brill, 183–208.

2011　A New Look at the Tibetan Invention of Writing. In: Imaeda, Y., Kapstein, M., and Takeuchi, T. (eds.), *New Studies of the Old Tibetan Documents: Philology, History and Religion* (OTDO Monograph Series, vol. III). Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 45–96.

2013　The Naming of Tibetan Religion: Bon and Chos in the Tibetan Imperial Period. *Jornal of the International Association for Bon Research*, vol. 1 Inaugural Issue, 227–257.

2015　Review of Bellezza 2014. *The Silk Road* 13, 169–171.

Schaik, Sam van, and Doney, Lewis

2007　The Prayer, the Priest and the Tsenpo: An Early Narrative from Dunhuang. *JIABS*, 30(1–2),

175–217.

Scherrer-Schaub, Cristina A.

1992 Sa-cu: Qu'y a t-il au programme de la classe de philologie bouddhique? In: Ihara, Shore and Yamaguchi, Zuiho (eds.), *Tibetan Studies. Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies*. Narita: Naritasan Shinshoji, Vol. I, 209–220.

2002 Enacting Words. A Diplomatic Analysis of the Imperial Decrees (*bkas bcad*) and their Application in the *sGra sbyor bam po gñis pa* Tradition. *JIABS*, vol. 25, 1–2, 263–340.

Skorupski, Tadeusz

1983 *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra: Elimination of All Evil Destinies*. *Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction, English Translation and Notes*. Delhi: Motilal Banarsidass.

1985 The Cremation Ceremony According to the Byang-Gter Tradition. *Kailash. A Journal of Himalayan Studies*, vol. 9, no. 4, 361–376.

Snellgrove, David

1967 *The Nine Ways of Bon*. London: Oxford University Press.

1987 *Indo-Tibetan Buddhism: Indian Buddhists and their Tibetan successors*. London: Serindia.

Snellgrove, David and Richardson, Hugh

1968 *A Cultural History of Tibet*. London: George Weidenfeld and Nicolson Ltd. (paperback 1980. Boulder: Prajñā Press)

1998 D. スネルグローヴ・H. リチャードソン『チベット文化史』（奥山直司訳）. 東京：春秋社.

Sørensen, Per K.

2009 Foreword. In: *OTA*, 1–2.

Sørensen, Per K. and Hazod, G.

2005 *Thundering Falcon: An Inquiry into the History and Cult of Khra-'brug Tibet's First Bddhist Temple*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Stein, R. A.

1951 Mi-ñag et Si-hia. Géographie historique et légendes ancestrales. *BEFEO*, 44, fasc. 1, 223–265.

1958 Les K'iang des marches sino-tibétaines, example de continuité de la tradition. *Annuaire*

de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes, Ve section, 1957–58, 3–15.

1959a *Recherches sur l'épopée et le barde au Tibet*. Paris: Bibliothèque de l'Institut des Hautes Etudes Chinoises, XIII.

1959b *Les tribus anciennes des marches sino-tibétaines; légendes, classifications et histoire.* Paris: Bibliothèque de l'Institut des Hautes Etudes Chinoises, XV (Reprint: 1961. Paris: Presses Universitaires de France).

1961 *Une chronique ancienne de bSam-yas: sBa-bžad*. Paris: L'Institut des Hautes Etudes Chinoises.

1962a *La civilisation tibétaine*. Paris: Dunod.（日本語訳：1971b）.

1970 Un document ancien relatif aux rites funéraires des bon-po tibétains. *JA*, CCLVII, 155–185.

1971a Du récit au rituel dans les manuscrits tibétains de Touen-houang. In: *ET*, 479–547.

1971b R. スタン『チベットの文化』（山口瑞鳳・定方晟訳）. 東京：岩波書店.

1972 *Tibetan Civilisation*. (tr. of *La civilisation tibétaine* by J. E. Stepleton Driver). London: Faber and Faber.

1973 Un ensemble sémantique tibétain: créer et procréer, être et devenir, vivre, nourrir et guérir. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 36, no. 2, 412–423.

1980 Une mention du manichéisme dans le choix du bouddhisme comme religion d'Etat par le roi Khri-sroṅ lde-btsan. In: *Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Etienne Lamotte*. Louvain-La-Neuve: L'Institut Orientaliste de Louvain, 329–338.

1983–1992 Tibetica Antiqua I: Les deux vocabulaires des traductions indo-tibétaines et sino-tibétaines dans les manuscrits de Touen-Houang. *BEFEO,* LXXII (1983), 149–236; II: L'usage de métaphores pour des distinctions honorifiques à l'époque des rois tibétains. *BEFEO*, LXXIII (1984), 257–272; III: À propos du mot gcug-lag et de la religion indigène. *BEFEO*, LXXIV (1985), 83–133; IV: La tradition relative au début du bouddhisme au Tibet. *BEFEO*, LXXV (1986), 169–196; V: La religion indigène et les bon-po dans le manuscrits de Touen-houang. *BEFEO*, LXXVII (1988), 27–56; VI: Maximes confucianistes dans deux manuscrits de Touen-houang. *BEFEO*, IXXX (1992), 9–17.

1987 *La civilisation tibétaine. Edition définitive*. Paris: L'Asiathèque.（日本語訳：1993）

1988a Les serments des traités sino-tibétains (VIIIe-Xe siècle). *T'oung Pao*, LXXIV, 119–138.

1988b La mythologie hindouïste au Tibet. In: Gnoli, G. and Lanciotti, L. (eds.) *Orientalia Iosephi Tucci memoriae dicata*. Rome: IsMEO, 1407–1426.

1993 R. スタン『チベットの文化（決定版）』（山口瑞鳳・定方晟訳）. 東京：岩波書店.

2010 *Rolf Stein's Tibetica Antiqua with Additional Materials*. (Tr. and ed. by McKeown, A. P.) (Brill's Tibetan Studies Library, Volume 24). Leiden: Brill.

Steinkellner, Ernst

1995 *Sudhana's Miraculous Journey in the Temple of Ta pho: The Inscriptional Text of the Gaṇḍavyūhasūtra Edited with Introductory Remarks*. Serie Orientale Roma, v. 76. Roma: IsMEO.

Strudholme, Alexander

2002 *The Origins of* Oṃ maṇipadme hūṃ. *A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. New York: State University of New York Press.

Suganuma, Aigo 菅沼愛語

2010 「唐・吐蕃会盟の歴史的背景とその意義」,『日本西藏学会々報』56, 29–43.

Takahashi, Hisao 高橋尚夫

1984a 「Sarvadurgatipariśodhanatantra（二）―梵文テキストと和訳」, 大正大学真言学智山研究室（編）『那須政隆博士米寿記念 仏教思想論集』. 成田：成田山新勝寺, 46–77.

1984b 「Sarvadurgatipariśodhanatantra（三）―校訂と和訳」,『豊山学報』28・29, 1(467)–39(430).

1985a 「Sarvadurgatipariśodhanatantra（一）―梵文テキストと和訳」, 壬生台舜博士頌寿記念論文集刊行会（編）『壬生台舜博士頌寿記念論文集 仏教の歴史と思想』. 東京：大蔵出版, 123(960)–147(936).

1985b 「Sarvadurgatipariśodhanatantra（四）―校訂と和訳」,『豊山学報』31, 1(226)–33(194).

1986 「Sarvadurgatipariśodhanatantra（五）―校訂と和訳」,『豊山学報』31, 1(118)–17(102).

Takata, Ninkaku 高田仁覚

1971 「チベットにおける密教経典の分類 その一 所作タントラ」,『密教文化』100 号, 1–45.

Takeuchi, Tsuguhito 武内紹人

1985 A passage from the *Shih chi* in the *Old Tibetan Chronicle*. In: Azis, B. and Kapstein, M. (eds.), *Soundings in Tibetan Civilization*. New Delhi: Manohar, 288–299.

2013 Formation and Transformation of Old Tibetan. *Journal of Research Institute* (Kobe University of Foreign Studies), 49, 3–17.

Tanaka, Kimiaki 田中公明

1987 『曼荼羅イコノロジー』. 東京：平河出版社.

1996　『インド・チベット曼荼羅の研究』．京都：法蔵館.

Tanemura, Ryugen 種村隆元
2004　「インド密教の葬儀 —Śunyasamādhivajra 作 *Mṛtasugatiniyojana* について—」，『死生学研究』秋号，26–47.

Thomas, F. W.
1957　*Ancient Folk-literature from North-eastern Tibet* (= *AFL*). Berlin: Akademie Verlag.

Thurman, R. A. F. (tr.)
1993　*The Tibetan Book of the Dead*. New York: Bantam.

Trungpa, C., and Freemantle, F. (tr.)
1975　*The Tibetan Book of the Dead: The Great Liberation through Hearing in the Bardo*. Berkeley: Shambhala.

Tucci, Giuseppe
1947　The Validity of Tibetan Historical Tradition. In: *India Antiqua* (A volume of Oriental Studies Presented to Jean Philippe Vogel). Leiden: E. J. Brill, 309–322.
1949　*Tibetan Painted Scrolls* (= *TPS*). Rome: La Libreria dello Stato.
1950　*The Tombs of the Tibetan Kings* (= *TTK*). Rome: IsMEO.
1958　*Minor Buddhist Texts*. Part II. Rome: IsMEO.
1972 [1949].　*Il Libro tibetano dei Morti*. Turin: Unione Tipografico-Editrice.
1980　*The Religions of Tibet* (tr. from German by G. Samuel). London: Routledge & Kegan Paul Ltd.

Ujike, Akio 氏家昭夫
1975　「悪趣清浄マンダラとその観想」，『密教学研究』第 7 号，27–41.

van der Kuijp　⇒ Kuijp

van Schaik　⇒ Schaik

Walter, Michael
2009　*Buddhism and Empire: The Political and Religious Culture of Early Tibet*. Leiden: Brill.

Wang Yao 王堯，Chen Jian 陳践
1986　『吐蕃簡牘総録』．北京：文物出版社.

Yamaguchi, Zuiho 山口瑞鳳
1985a　「『デンカルマ』八二四年成立説」，『成田山仏教研究所紀要』9, 1–16.
1985b　「ボン教文献」，山口瑞鳳（編著）『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』．東京：大東出版社，545–555.
1987–1983　『チベット』（上下）．東京：東京大学出版会.

索　　引

チベット語

［本文中では、原則として初出の場合に限りローマ字転写したが、その他の場合はカタカナ表記、訳語を用いた］

Kar gling zhi khro　118, 122
Karma gling pa　117, 118, 120, 129
Kun rig　85, 112, 113, 122
klu　8, 9, 25
dkar (po'i) chos　7, 26, 80, 111
Bka' yang dag pa'i tshad ma las mdo btus pa　101
ska ma　97, 98
skam chos　28, 98, 99
skam lam　28, 98, 99
skyin dang　10
skyibs lug　61, 66, 88, 127, 128
skye shi('i) chos　25, 33
skye shi('i) lo rgyus　25
Skye shi('i) lo rgyus　4, 7, 11, 13, 26, 33–59, 77, 79, 81–87, 90, 91, 92, 93, 105, 106, 107, 111, 112, 135
Kha byang bon po　86, 91, 105, 106
Khri gtsug lde btsan　⇒　Ral pa can
Khri srong lde btsan　63, 82, 101, 102, 103, 111, 112, 113, 114, 212, 217
mkhan (pa)　65, 70
mkhan sprus bsangs　65, 70
'Khor ba'I tshul bstan pa　19–23, 77, 79, 94
Gu ge　83
Dga' ldan　74, 75, 85, 90, 91
dga' sris　65
dge bcu　17, 79
dge slong　7, 43, 53, 54, 78
bgegs　8, 15, 16
Mgon btsun phyva　127, 128
'gro ba rigs lnga　62, 94, 118, 119, 120
'gro ba rigs drug　62, 94, 118, 119, 120
rgyal ba rigs lnga　118, 119, 120
Sgra sbyor bam po gnyis pa　17
Bsgrags pa gling grags　86, 91, 92, 105, 106, 111
Ngan song sbyong ba　29, 73, 90
Ngan song sbyong ba　29, 73, 80, 85, 86, 91, 93, 112, 113, 122
Mngon pa mdzod　84
(b)sngo (ba)　61
Bsngo ba　4, 26, 61–70, 74, 77, 81, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 94, 106, 112, 115, 122, 125, 126, 127, 129, 135
sngags　62, 66, 84, 102
chab(/chu) gang　63, 64, 74, 126, 127
chos　7, 13, 16, 25, 26, 27, 28, 30, 47, 56, 58, 74, 97, 98, 99, 101, 102, 106, 111, 112, 113, 119
chos kyi yi ge　33, 180
Chos dbyangs　59
chos (gi) lam　23, 27, 163
Mchims phu ma　83
'chi bdag　13, 64, 123, 151
Rje mkhan po　103
gnyen sris　63, 64, 70
Ta zig　207
gtad　111
gter ston　105, 117, 118

gter ma 105, 112, 117, 118, 120
rta 3, 58, 63, 64, 68, 69, 87, 88, 89, 102, 106, 114, 125, 126, 127, 128, 129, 208, 209, 210
Rta pho 83
Rta g.yag gi gtad yar 106
Bstan 'dzin rgya mtsho 3, 103
thugs gur 61, 63
thub pa drug 119, 120
mtho ris 25, 26, 59, 69
dam pa'i chos 14, 22, 46, 102
Dug gsum 'dul ba 4, 7, 12, 17, 19, 25–31, 35 55, 71, 73, 77, 78, 79, 80, 81, 85, 89, 90, 92, 93, 94, 98, 99, 120, 135
dur 9, 106, 120, 127
Dran pa nam mkha' 105, 111
g(/')dod gyi rabs 67
g(/')dod smrang 67
gdon 8, 16
bdud 8, 9, 14, 15, 16, 22, 27, 30, 64
bde skyid (gnas) 26, 35, 59, 82, 91
bde skyid g.yung drung gnas 26, 69, 194
bde ba'i skyid yul 26
bde ba'i gnas 26, 59
mdo 7, 20, 33, 83, 84, 101, 111
'dad shid 111
'Dod khams su lam ston pa 106
'dre 8, 10, 11, 15, 25, 64, 67, 70, 79
Ldan kar ma 29, 83
Lde'u chos 'byung 113
sdig lam gsum 8
Sdong po bkod pa 54, 83, 84, 89
na rag 26, 78
Nam ka mdzod 73, 90, 92
nor bu 83, 86
Nor bu snying po dri ma med pa 85, 112
Nor bu dri ma med pa'i 'od 85, 86
Nor bzang(s) 35, 83, 86
gnam rta 69
gnod byin 25
Rnam par snang mdzad 85, 112, 122
Pa la ho 68, 69, 88, 89
Padma 'byung gnas 101, 105
Dpal chen po 115, 207, 211
Spyan ras gzigs 28, 30, 31, 62, 68, 72, 80, 84, 88, 89, 90, 92, 93, 94, 119, 120
sprul 77
sprus sangs 65
phan 8, 9, 15, 26, 34, 57, 58, 113, 125, 126, 128
phyva ⇒ Mgon btsun phyva
phru stsang 65
'Phang thang ma 83
'phru sangs 61, 65
'phrul 7, 27, 34, 35, 36, 41, 42, 45, 49, 53, 54, 56, 62, 69, 75, 77, 81, 82
'phrul gyi lha 78
'phrul gi go cha 64
'phrul gi gzhal yas khang 62, 191
'Phrul gyi byig shus phyi ma'i myi la bsgan pai'i mdo 4, 7–13, 16, 27, 35, 62, 75, 77, 78, 80, 90, 94, 135
bar (ma) do ('i srid pa) 118
Bar do thos grol 90, 91, 95, 117, 118, 119, 120, 121, 122, 123, 129, 131
bon (po) 7, 15, 61, 79, 81, 105, 106, 112, 113, 126, 127, 208
Bon i, 7, 15, 61, 64, 66, 91, 92, 103, 104, 105, 106, 111, 117, 120, 207
bon yas 66
byang chub chen po 25
Byams pa 74, 75, 90
byig (b)shu 7, 78
byung khungs lo rgyus 105, 106, 111
Dba' bzhed 78, 83, 85, 111

dbon lob 61, 63, 88
'bru stsang 65, 88
'brong 70, 125
'Brong gnyen lde ru 63
mi dge bcu 17
Mi 'khrugs pa 122
mu stegs bon 15
Mu ne btsan po 111, 112
mo bon 15
myi ma yin 56
sman 8, 9
Sman ri gsar pa 103, 104
smrang dar 61
gtsug (lag) 25, 101, 102
Gtsug tor dgu 112
Gtsug tor dri med gzungs 85, 111, 112, 113
Gtsug tor gdugs dkar 87
Gtsug tor rnam rgyal ma 87
Gtsug tor rnam rgyal gzungs 58, 82, 84, 85, 87, 92, 93
Gtsug tor rnam rgyal gzungs 84, 85, 87, 92, 112
tshe thar 70, 88
Tshe lha rnam gsum 87
tshe 'phos lus rjes 26
Tshe'i mtha'i mdo 84
tshogs 61
mdzo mo 125, 126, 129
Zhal nas gsungs pa'i ljon shin 4, 9, 13–17, 22, 55, 57, 77, 79, 81, 94, 135
gzhal yas (myed) khang 62, 74, 90
Za ma tog bkod pa 31, 68, 80, 89
Zas gtad kyi lo rgyus 111, 112, 113
gzungs (sngags) 84
Bzang spyod smon lam 83
'Od bar 26, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 81, 82, 84, 85, 86, 91
'Od zer dri med gzungs 85
yang pa(/ba) 70, 126
yi ge drug pa 62, 80, 84, 119, 120
Ye shes skar mda'i snying po 28, 80, 92, 93, 94
Ye shes 'od 83
g.yag 88, 89, 106
G.yung drung Bon 15, 103, 106, 130
g.yung drung lha'i srid 25
rabs 67, 106, 125, 127
Ral pa can 113, 115, 207, 212
Rin chen (lags) 86
Rin chen bzang po 83
ring gur 61, 63, 88
lam mkhan 22, 67
lam drang 67
lug 3, 10, 11, 58, 61, 62, 66, 67, 68, 70, 87, 88, 89, 103, 106, 112, 113, 114, 125, 127, 128
Lung rtogs bstan pa'i nyi ma 103, 104
(g)shid 70
Shin tu brtan pa 84, 85, 87
gshin 8, 9, 13, 27, 70, 71, 89, 91, 123
gshin gyi lam srol 27
gshin rje 9, 13
gshin lam 9, 71
Gshin lha yul du lam bstan pa 4, 8, 26, 29, 61, 62, 71–75, 77, 81, 85, 87, 90, 91, 92, 93, 94, 106, 122, 123, 129, 131, 135
gshen 81, 113, 120, 126, 127, 208
se (gru bzhi) 66
sangs rgyas 15, 69, 78, 97, 102
sem shen 62
sri zhu 11, 35
srid pa'i 'khor lo 119
srin (po) 8, 9, 15, 62, 63, 64, 67, 70, 127
sris 63, 64, 65, 70

srog gcod 10, 26, 63
srog spang 101, 102
gsang sngags 84
gson 8, 9, 57, 128
gson gshin 8, 9
bsangs 65, 70
Bsam yas 82, 83, 85, 112
lha 8, 25, 26, 33, 41, 62, 65, 66, 97, 98, 101, 102
lha('i) chos 7, 8, 10, 15
lha 'dre 25, 36, 58, 82
Lha'i bu dri ma med pa'i mdo 111, 112
Lha bu rin chen gyi shi rabs 106
lha bran 25
lha ma yin 25
lha lam 8, 12, 79
lha yul 9, 25, 26, 71, 74, 75, 90
lha'i gnas 74
Oṁ maṇi padme hūṁ 31, 68, 80, 89, 93, 94, 119, 120

サンスクリット語

Akṣobhya ⇒ Mi 'khrugs pa
antarabhava ⇒ bar (ma) do ('i srid pa)
Abhidharmakośa ⇒ *Mngon pa mdzod*
Āyuṣparyanta ⇒ *Tshe'i mtha'i mdo*
Uṣṇīṣa-sitātapatrā ⇒ *Gtsug tor gdugs dkar*
Uṣṇiṣavijayadhāraṇi ⇒ *Gtsug tor rnam rgyal gzungs*
ṛddhi ⇒ 'phrul
Kāraṇḍavyūha ⇒ *Za ma tog bkod pa*
gaṇa ⇒ tshogs
Gaṇḍavyūha ⇒ *Sdong po bkod pa*
dhāraṇi ⇒ gzungs (sngags)
nāga ⇒ klu
Padmasambhava ⇒ Padma 'byung gnas
prātihārya ⇒ 'phrul
Buddhaguhya 113
Bhadracaryāpraṇidhāna ⇒ *Bzang spyod smon lam*
bhikṣu ⇒ byig (b)shu, dge slong
mantra ⇒ gsang sngags
maṇi ⇒ nor bu
yama ⇒ gshin rje
ratna ⇒ rin chen
Vairocana ⇒ Rnam par snang mdzad
vikurvaṇa ⇒ 'phrul
Vimala-maṇi-hṛdaya ⇒ Nor bu snying po dri ma med pa
Śāntarakṣita 101
Sarvadurgatipariśodhana-tantra ⇒ *Ngan song sbyong ba*
Sarvavid ⇒ Kun rig
Suttanipāta 103
sūtra ⇒ mdo
Sudhana ⇒ Nor bzang(s)
Supratiṣṭhita ⇒ Shin tu brtan pa

中国語・日本語

悪趣清浄菩薩　⇒　Ngan song sbyong ba
『阿毘達磨倶舎論』　⇒　*Mngon pa mdzod*
イェシェ・ウー　⇒　Ye shes 'od
『一切悪趣清浄タントラ』　⇒　*Ngan song sbyong ba*
鬱金水　115, 211
馬　⇒　rta
『馬とヤクの儀礼品』　⇒　*Rta g.yag gi gtad yar*
オバル（光炎）王　⇒　'Od bar
『カチャン・ボンポ』　⇒　*Kha byang bon po*
『カリン・シト』　⇒　*Kar gling zhi khro*
カルマ・リンパ　⇒　Karma gling pa
観世音菩薩　⇒　Spyan ras gzigs
偽経　79, 84, 107
乞力除　208
『供食物語』　⇒　*Zas gtad kyi lo rgyus*
供犠獣　114, 207, 208, 209, 210, 211
グゲ　⇒　Gu ge
『旧唐書』　114, 208, 209, 210, 213
九仏頂　⇒　*Gtsug tor dgu*
建中会盟　114, 209, 210, 211, 212
孝　⇒　sri zhu
『較量寿命経』　⇒　*Tshe'i mtha'i mdo*
虚空蔵菩薩　⇒　Nam ka bdzod
『御高説宝樹』　⇒　*Zhal nas gsungs pa'i ljon shin*
五趣　⇒　'gro ba rigs lnga
五仏　⇒　rgyal ba rigs lnga
崔希逸　208
『冊府元亀』（『冊府』）　209, 210, 213
サムエ寺院　⇒　Bsam yas
『三毒調伏』　⇒　*Dug gsum 'dul ba*
ジェー・ケンポ　⇒　Rje mkhan po
シェン　⇒　gshen
『死者神国道説示』　⇒　*Gshin lha yul du lam bstan pa*
『資治通鑑』（『通鑑』）　209, 213
『死者の書』　⇒　*Bar do thos grol*
執拗低音（バッソ・オスティナート）　131
シャーンタラクシタ　⇒　Śāntarakṣita
シャンシュン　207
十善　⇒　dge bcu
尚結賛　209, 210
『生死法物語』　⇒　*Skye shi lo rgyus*
『書経』　11
シンジェ　⇒　gshin rje
『神子リンチェンの死の語り』　⇒　*Lha bu rin chen gyi shi rabs*
『新唐書』　63, 114, 115, 207, 209, 213
神変　⇒　'phrul
『神変比丘後世教示経』　⇒　*'Phrul gyi byig shus phyi ma'i myi la bsgan pai'i mdo*
スィン魔　⇒　srin
『スッタニパータ』　⇒　*Suttanipāta*
セ　⇒　se
青海湖　208
聖神賛普　78
清水会盟　⇒　建中会盟
聖別　61, 63, 65, 66, 88
善財童子　⇒　Nor bzangs
善住　⇒　Shin tu brtan pa
先例譚　67, 89, 111, 125
『葬儀置換』　⇒　*Bsngo ba*
『宋本冊府元亀』（『宋冊府』）　210, 213
蘇毗　207
ゾモ　⇒　mdzo mo
大食　⇒　Ta zig
『大乗観想漫拏羅浄諸悪趣経』　29
『大乗荘厳寶王経』　⇒　*Za ma tog bkod pa*
大日如来　⇒　Rnam par snang mdzad
『タクパ・リンタク』　⇒　*Bsgrags pa gling grags*
タジク　⇒　Ta zig

タボ寺院　⇒　Rta pho
ダライ・ラマ十四世　⇒　Bstan 'dzin rgya mtsho
チェ　⇒　*chos*
『知恵流星』　⇒　*Ye shes skar mda'i snying po*
長慶会盟　115, 207, 211, 212
『チンプマ目録』　⇒　*Mchims phu ma*
ツォ　⇒　tshogs
デ魔　⇒　'dre
ティソン・デツェン　⇒　Khri srong lde btsan
ティツク・デツェン　⇒　Ral pa can
『デウ仏教史』　⇒　*Lde'u chos 'byung*
デュ魔　⇒　bdud
テュル　⇒　'phrul
テルトン　⇒　gter ston
テルマ　⇒　gter ma
『デンカルマ目録』　⇒　*Ldan kar ma*
テンジン・ギャツォ　⇒　Bstan 'dzin rgya mtsho
テンパ・ナムカ　⇒　Dran pa nam mkha'
トゥクグル　⇒　thugs gur
『唐書』　⇒　『旧唐書』『新唐書』
『唐大詔令集』（『唐詔令集』）　209, 213
唐蕃会盟碑　78, 207, 208, 211
兜率天　⇒　Dga' ldan
『ドチリナ・キリシタン』　80
度量　⇒　yang ba
ドン　⇒　'brong
ドン魔　⇒　gdon
敦煌　i, 3, 4, 7, 11, 20, 33, 63, 64, 66, 74, 77, 78, 80, 81, 83, 84, 85, 87, 99, 104, 105, 106, 107, 122, 123, 125, 129, 131
ドンニェン・デル　⇒　'Brong gnyen lde ru
ニガヨモギ　⇒　mkhan (pa)
『二巻本訳語釈』　⇒　*Sgra sbyor bam po gnyis pa*
二人称直接話法　91, 94, 95, 121, 123, 129
『入法界品』　⇒　*Sdong po bkod pa*
『バシェー』　⇒　*Dba' bzhed*
バッソ・オスティナート　⇒　執拗低音
伴天連　78
鉢掣逋　⇒　Dpal chen po
パドマサンバヴァ　⇒　Padma 'byung gnas
バラハ馬王　⇒　Pa la ho
バルド　⇒　bar do
『バルド・トェドル』　⇒　*Bar do thos grol*
『パンタンマ目録』　⇒　*'Phang thang ma*
羊　⇒　lug
白蘭　207
毘盧遮那　⇒　Rnam par snang mdzad
普賢菩薩行願讃　⇒　*Bzang spyod smon lam*
仏頂尊勝母尊　⇒　Gtsug tor rnam rgyal ma
仏頂尊勝ダラニ　⇒　Gtsug tor rnam rgyal gzungs
『仏頂尊勝陀羅尼』　⇒　*Gtsug tor rnam rgyal gzungs*
『仏頂無垢陀羅尼』　⇒　*Gtsug tor dri med gzungs*
『仏頂白傘蓋陀羅尼』　⇒　*Gtsug tor gdugs dkar*
武帝　113
普明　⇒　Kun rig
フランシスコ・ザビエル　80
『文苑英華』（『文苑』）　213
ペルチェンポ・ヨンテン　⇒　Dpal chen po
放生　⇒　tshe thar
ボン　⇒　bon
弥勒菩薩　⇒　Byams pa
『無垢浄光大陀羅尼経』　⇒　*'Od zer dri med gzungs*
無垢宝珠光　⇒　Nor bu dri ma med pa'i 'od
無垢宝珠心　⇒　Nor bu snying po dri ma med pa
夢告　84, 85, 87
ムネ・ツェンポ　⇒　Mu ne btsan po
メン魔　⇒　sman
モンゴル語カンギュル　79, 107
勇気　⇒　chab (/chu) gang

由来譚　⇒　g(/')dod smrang, byung khungs lo rgyus, rabs
ユンドゥン・ボン　⇒　G.yung drung Bon
『欲界道説示』　⇒　*'Dod khams su lam ston pa*
ラサ　115, 207, 211
ラプ　⇒　rabs
『陸贄集』　210, 213
『陸宣公翰苑集』　210
劉元鼎　115, 207, 211
リンチェン・サンポ　⇒　Rin chen bzang po
リングル　⇒　ring gur
『輪廻形態説示』　⇒　*'Khor ba'I tshul bstan pa*
ル魔　⇒　klu
ルントク・テンペー・ニマ　⇒　Lung rtogs bstan pa'i nyi ma
レルパチェン　⇒　Ral pa can
六字真言　⇒　yi ge drug pa, Oṁ maṇi padme hūṁ
六趣　⇒　'gro ba rigs drug
六ムニ　⇒　thub pa drug

古代チベット仏教伝道文学と葬儀の変容

中央アジア出土チベット語文献研究　第３巻

2024 年 3 月 11 日　初　版　　非売品

編著者　今　枝　由　郎
西　田　　愛
岩　尾　一　史

発行者　東京都文京区本駒込２丁目28番21号
公益財団法人　東　洋　文　庫
畔　柳　信　雄

印刷者　京都府京都市上京区下立売小川東入ル
中 西 印 刷 株 式 会 社

発行所　東京都文京区本駒込２丁目28番21号
公益財団法人　東　洋　文　庫

本書は公益財団法人東洋文庫に対する 2023 年度文部科学省特定奨励費補助金の一部により刊行されたものである。

ISBN 978-4-8097-0317-1